

## **Oracle® Hyperion Enterprise Performance Management System**

インストールおよび構成ガイド

リリース 11.1.1.4

EPM System インストールおよび構成ガイド, 11.1.1.4

Copyright © 2008, 2011, Oracle and/or its affiliates. All rights reserved.

著者: EPM 情報開発チーム

Oracle および Java は Oracle Corporation およびその関連企業の登録商標です。その他の名称は、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

このソフトウェアおよび関連ドキュメントの使用と開示は、ライセンス契約の制約条件に従うものとし、知的財産に関する法律により保護されています。ライセンス契約で明示的に許諾されている場合もしくは法律によって認められている場合を除き、形式、手段に関係なく、いかなる部分も使用、複写、複製、翻訳、放送、修正、ライセンス供与、送信、配布、発表、実行、公開または表示することはできません。このソフトウェアのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイルは互換性のために法律によって規定されている場合を除き、禁止されています。

ここに記載された情報は予告なしに変更される場合があります。また、誤りが無いことの保証はいたしかねます。誤りを見つけた場合は、オラクル社までご連絡ください。

このソフトウェアまたは関連ドキュメントを、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供する場合は、次の通知が適用されます。

#### U.S. GOVERNMENT RIGHTS:

Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, the use, duplication, disclosure, modification, and adaptation shall be subject to the restrictions and license terms set forth in the applicable Government contract, and, to the extent applicable by the terms of the Government contract, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software License (December 2007). Oracle America, Inc., 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このソフトウェアもしくはハードウェアは様々な情報管理アプリケーションでの一般的な使用のために開発されたものです。このソフトウェアもしくはハードウェアは、危険が伴うアプリケーション（人的傷害を発生させる可能性があるアプリケーションを含む）への用途を目的として開発されていません。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用する際、安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性（redundancy）、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用了ことに起因して損害が発生しても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

このソフトウェアまたはハードウェア、そしてドキュメントは、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセス、あるいはそれらに関する情報を提供することがあります。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスに関して一切の責任を負わず、いかなる保証もいたしません。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセスまたは使用によって損失、費用、あるいは損害が発生しても一切の責任を負いかねます。

---

# 目次

---

ドキュメントのアクセシビリティについて .....	11
<b>第 1 章 EPM System 製品のインストールについて .....</b>	<b>13</b>
EPM System 製品について .....	13
必要な知識 .....	13
サポートされているこのリリースへのパス .....	14
EPM System 製品のインストール・チェックリスト .....	14
分散環境での EPM System 製品のインストール .....	16
Hyperion ホームのディレクトリについて .....	16
インストール・ドキュメント・ロードマップ .....	17
<b>第 2 章 インストールの準備 .....</b>	<b>19</b>
インストール・ファイルのダウンロード .....	19
層およびインストール・アセンブリごとのコンポーネントのインストー ル .....	21
Foundation Services .....	21
Essbase .....	26
Reporting and Analysis .....	33
Financial Performance Management アプリケーション .....	36
データ管理 .....	41
ファイル・コンテンツのダウンロード .....	43
<b>第 3 章 EPM System 製品のインストール .....</b>	<b>47</b>
インストールの順序 .....	47
インストールの前提条件 .....	48
インストールと構成でサポートされる文字 .....	49
EPM System 製品のインストール .....	49
ようこそ .....	52
宛先 .....	52
インストール・タイプ .....	53
製品の選択 .....	54
確認 .....	57
進行状況 .....	58
要約 .....	58

サイレント・インストールの実行 .....	58
保存した選択項目のロード .....	60
応答ファイルの変更 .....	60
EPM System クライアントのインストール .....	61
Smart View のインストール .....	61
Spreadsheet Add-in のインストール .....	62
Essbase サーバーの追加インスタンスのインストール .....	63
Windows Server 2008 または Windows Server 2008 R2 へのオペレーティング・システム のアップグレード .....	64
手順 1: ソース・マシンのデータおよびバイナリのバックアップ .....	64
手順 2: マシンを Windows Server 2008 または Windows Server 2008 R2 に再イ メージ化します。 .....	65
手順 3: EPM System の配置用のマシンの準備 .....	65
手順 4: 配置の修復および EPM System の再起動 .....	66
<b>第 4 章 EPM System 製品の構成</b> .....	67
EPM System コンフィグレータについて .....	67
Shared Services レジストリについて .....	68
初期必要条件を満たす .....	68
構成順序 .....	69
シングル・マシン環境での製品の構成 .....	71
分散環境での製品の構成 .....	71
SSL 使用可能環境での製品の構成 .....	71
製品構成タスクの要約 .....	71
EPM System コンフィグレータの使用方法 .....	74
タスクの選択 .....	76
Shared Services とレジストリ・データベースの構成 .....	77
個別にライセンスされている製品のオプションを使用可能にする .....	79
EPM System の共通設定 .....	80
データベース構成 .....	81
アプリケーション・サーバーへの配置 .....	83
アプリケーション・サーバーの配置: Oracle Application Server .....	85
アプリケーション・サーバーの配置: Oracle   BEA WebLogic .....	86
アプリケーション・サーバーの配置: WebSphere .....	88
アプリケーション・サーバーの配置: Embedded Java コンテナ .....	90
クラスタ設定 .....	91
EPM Workspace 固有のタスク .....	92
Performance Management Architect 固有のタスク(オプション) .....	95
Essbase 固有のタスク .....	98
Planning 固有のタスク(オプション) .....	101

Financial Management 固有のタスク .....	103
Reporting and Analysis 固有のタスク .....	111
Strategic Finance 固有のタスク .....	112
FDM 固有の構成タスク .....	113
サイレント構成の実行 .....	113
Shared Services をインストールしない Shared Services レジストリの設定 .....	114
構成中の処理 .....	115
構成のトラブルシューティング .....	115
<b>第 5 章 EPM System 製品の開始と停止 .....</b>	<b>117</b>
単一スクリプトを使用したサービスの開始 .....	117
サービスおよびプロセスの要約リスト .....	118
サービスおよびプロセス .....	119
リポジトリのデータベース .....	119
企業ユーザー・ディレクトリ .....	119
Shared Services OpenLDAP または Oracle Internet Directory .....	119
Shared Services アプリケーション・サーバー .....	120
EPM Workspace エージェント(CMC エージェント) .....	121
EPM Workspace UI(CMC UI) .....	122
EPM Workspace Web サーバー .....	122
Performance Management Architect サービス .....	123
Essbase サーバー .....	125
Administration Services アプリケーション・サーバー .....	126
Integration Services サーバー .....	127
Essbase Studio サーバー .....	127
Provider Services アプリケーション・サーバー .....	128
Reporting and Analysis のサービスおよびプロセス .....	129
その他のサービスまたはプロセス .....	130
EPM Workspace アプリケーション・サーバー .....	138
クライアントの起動 .....	138
<b>第 6 章 インストールの検証 .....</b>	<b>141</b>
EPM System 診断について .....	141
前提条件 .....	141
EPM System 診断の使用方法 .....	141
Foundation Services 診断 .....	142
Essbase 診断 .....	144
Reporting and Analysis 診断 .....	145
Financial Performance Management アプリケーション診断 .....	146
データ管理診断 .....	147

<b>第 7 章 構成後のタスクの実行</b>	149
一般的な構成後のタスク	149
JVM メモリー割当ての増大	150
Shared Services 構成後のタスク	150
Performance Management Architect 構成後のタスク	150
EPM Workspace 構成後のタスク	151
Essbase 構成後のタスク	151
64 ビット AIX でのユーザー制限の設定	152
Integration Services 構成後のタスク	152
Administration Services 構成後のタスク	153
Provider Services 構成後のタスク	154
Essbase Studio 構成後のタスク	154
Essbase Studio カタログの更新	154
Reporting and Analysis 構成後のタスク	155
Financial Reporting 印刷サーバーの準備	156
Financial Reporting および Web Analysis の Web アプリケーション・サーバー・コンポーネント用の X11 の構成(UNIX)	157
SAP Data Source Access および認証の構成	157
英語以外の文字に備えた Financial Reporting および Web Analysis の環境変数の設定(UNIX)	158
Production Reporting の環境変数の設定(UNIX)	159
Interactive Reporting での印刷の準備(UNIX)	160
フォントの構成(UNIX)	160
Financial Reporting 構成 - Provider Services ドライバを使用可能にする	161
実行可能ファイルの再作成(Production Reporting のみ)(UNIX)	162
Planning 構成後のタスク	162
オフライン・プランニングの構成	163
(UNIX)英語以外の環境で使用する Planning ロケールの構成	163
Financial Management 構成後のタスク	164
IIS 5.0 分離モードの設定の構成(オプション)	164
Strategic Finance 構成後のタスク	165
Performance Scorecard 構成後のタスク	165
FDM 構成後のタスク	166
ERP Integrator 構成後のタスク	166
Microsoft SQL Server とともに使用するための ERP Integrator の準備	167
Data Relationship Management 構成後のタスク	167
<b>第 8 章 EPM System 製品の再構成</b>	169
SSL の再構成	169
別の Web アプリケーション・サーバー・タイプへの再配置	170

Embedded Java コンテナまたは WebSphere から WebLogic Server への再配置 .....	170
Oracle Application Server から WebLogic Server へのアプリケーションの再配置 .....	171
リポジトリ・パスワードの変更 .....	171
Shared Services とレジストリ・リポジトリのパスワードの変更 .....	171
EPM System 製品のリポジトリのパスワードの変更 .....	172
Planning アプリケーション・リポジトリのパスワードの変更 .....	172
Performance Management Architect インタフェース・データソース・パスワードの変更 .....	172
FDM リポジトリ・パスワードの変更 .....	173
Data Relationship Management リポジトリ・パスワードの変更 .....	173
ポートの再構成 .....	174
<b>第 9 章 配置シナリオ .....</b>	<b>175</b>
分散環境の考慮事項 .....	175
Financial Management 配置へのサーバーの追加 .....	176
<b>第 10 章 EPM System のアンインストール .....</b>	<b>177</b>
EPM System 製品のアンインストール .....	177
サイレント・アンインストールの実行 .....	179
<b>第 11 章 ライセンス準拠 .....</b>	<b>181</b>
ライセンス準拠を確実にする .....	181
製品機能のアクティブ化と非アクティブ化 .....	181
使用状況の監査 .....	181
<b>付録 A. インストール中の処理 .....</b>	<b>183</b>
Shared Services のインストール中の処理 .....	183
Foundation ディレクトリにインストールされるファイル .....	184
HYPERION_HOME ディレクトリにインストールされる共通ファイル ...	184
EPM Workspace のインストール中の処理 .....	186
EPM Workspace のディレクトリにインストールされるファイル .....	187
Performance Management Architect のインストール中の処理 .....	187
Performance Management Architect ディレクトリにインストールされるファイル .....	188
Calculation Manager のインストール中の処理 .....	188
Calculation Manager のディレクトリにインストールされるファイル .....	188
Smart View のインストール中の処理 .....	189
Smart View のディレクトリにインストールされるファイル .....	189
Essbase のインストール中の処理 .....	189
Essbase サーバー・ディレクトリにインストールされるファイル .....	190

Essbase クライアントのディレクトリにインストールされるファイル . . . .	191
Essbase Studio のインストール中の処理 . . . . .	191
Essbase Studio のディレクトリにインストールされるファイル . . . . .	192
Integration Services のインストール中の処理 . . . . .	192
Integration Services ディレクトリにインストールされるファイル . . . . .	193
Administration Services のインストール中の処理 . . . . .	194
Administration Services のディレクトリにインストールされるファイル . . .	195
Provider Services のインストール中の処理 . . . . .	196
Provider Services のディレクトリにインストールされるファイル . . . . .	196
Smart Search Command Line Utility のインストール中に行われる処理 . . . . .	196
Smart Search Command Line Utility ディレクトリにインストールされるファ イル . . . . .	197
Reporting and Analysis のインストール中の処理 . . . . .	197
Reporting and Analysis ディレクトリにインストールされるファイル . . . .	197
Planning のインストール中の処理 . . . . .	198
Planning のディレクトリにインストールされるファイル . . . . .	198
Financial Management のインストール中の処理 . . . . .	198
Financial Management ディレクトリにインストールされるファイル . . . .	199
Performance Scorecard のインストール中の処理 . . . . .	200
Performance Scorecard ディレクトリにインストールされるファイル . . . .	200
Strategic Finance のインストール中の処理 . . . . .	200
Strategic Finance ディレクトリにインストールされるファイル . . . . .	200
Profitability and Cost Management のインストールの内容 . . . . .	201
Profitability and Cost Management ディレクトリにインストールされるファ イル . . . . .	201
FDM のインストール中の処理 . . . . .	201
FDM のディレクトリにインストールされるファイル . . . . .	202
Data Relationship Management のインストール中の処理 . . . . .	202
<b>付録 B. Essbase 製品のオプションの手動構成 . . . . .</b>	<b>203</b>
Essbase サーバー環境の手動による構成(UNIX) . . . . .	203
hyperionenv.doc でのパラメータの指定 . . . . .	204
ESS_JVM_OPTION および ESS_CSS_JVM_OPTION の変更 . . . . .	205
JvmModuleLocation の変更(UNIX) . . . . .	207
Integration Services のオプションの手動構成(UNIX) . . . . .	209
Administration Services のオプションの手動構成(UNIX) . . . . .	210
Provider Services のオプションの手動構成(UNIX) . . . . .	211
Essbase サーバー環境の手動による構成(Windows) . . . . .	211
Essbase サーバーに対する手動での環境更新 . . . . .	212
JVMMODULELOCATION の設定(Windows) . . . . .	212



64 ビット Windows プラットフォーム上での 32 ビット・ランタイム・クライアントの構成 .....	213
Integration Services のオプションの手動構成(Windows) .....	214
Administration Services のオプションの手動構成(Windows) .....	214
Essbase Studio のオプションの手動構成(Windows) .....	214
Provider Services のオプションの手動構成(Windows) .....	215
<b>付録 C. Essbase 32 ビットおよび 64 ビットの互換性</b> .....	217
Essbase と 32 ビットおよび 64 ビットのクライアントおよびサーバーとの互換性 .....	217
32 ビットおよび 64 ビットのプラットフォームでの Essbase API の互換性 ....	218
<b>付録 D. JDBC URL 属性</b> .....	221
<b>付録 E. Financial Management のデータベース情報</b> .....	223
データベース接続のプール .....	223
例 1 .....	224
例 2 .....	225
UDL ファイルの暗号化 .....	225
<b>付録 F. Financial Reporting と Web Analysis に対して X 仮想フレーム・バッファを使用可能にする</b> .....	227
AIX 5L の Xvfb を使用可能にする .....	227
Solaris 9 の Xvfb を使用可能にする .....	228
Solaris 10 の Xvfb を使用可能にする .....	228
Oracle Enterprise Linux/Red Hat Enterprise Linux の Xvfb を使用可能にする ....	228
HP-UX の Xvfb を使用可能にする .....	229
DISPLAY 変数の設定 .....	230
<b>索引</b> .....	231



---

# ドキュメントのアクセシビリティについて

---

Oracle のアクセシビリティについての詳細情報は、Oracle Accessibility Program の Web サイト <http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=docacc> を参照してください。

## Access to Oracle Support

Oracle サポート・サービスでは、My Oracle Support を通して電子支援サービスを提供しています。詳細情報は <http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=info> か、聴覚に障害のあるお客様は <http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=trs> を参照してください。



# 1

## EPM System製品のインストールについて

### この章の内容

EPM System 製品について .....	13
必要な知識.....	13
サポートされているこのリリースへのパス .....	14
EPM System 製品のインストール・チェックリスト .....	14
分散環境での EPM System 製品のインストール .....	16
Hyperion ホームのディレクトリについて .....	16
インストール・ドキュメント・ロードマップ .....	17

## EPM System 製品について

Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System 製品は、財務管理アプリケーションのモジュール式スイートと、レポートおよび分析の最も総合的なビジネス・インテリジェンス機能を統合するための、総合的な Enterprise Performance Management システムを形成できます。EPM System 製品の主要なコンポーネントは次のとおりです:

- Oracle Hyperion(R) Foundation Services
- Oracle Essbase
- Oracle Hyperion Reporting and Analysis
- Oracle Hyperion Financial Performance Management アプリケーション
- Oracle データ管理

各製品ファミリの製品とコンポーネントについては、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストール概要』を参照してください。

## 必要な知識

このガイドは、EPM System 製品をインストール、構成および管理する管理者用です。次の知識があることを前提としています:

- セキュリティおよびサーバーの管理スキル
- Windows 管理または UNIX/Linux 管理あるいはその両方のスキル
- Web アプリケーション・サーバー管理スキル

- Oracle Internet Directory、LDAP、Microsoft Active Directory などの認証プロバイダを含む組織のセキュリティ・インフラストラクチャおよび SSL の使用に関する十分な理解
- 組織のデータベース環境とサーバー環境に関する十分な理解
- 所属組織のネットワーク環境やポート使用状況に関する深い知識

## サポートされているこのリリースへのパス

リリース 11.1.1.4 は、リリース 11.1.1.0、11.1.1.1、11.1.1.2 または 11.1.1.3 のメンテナンス・リリースです。より以前のリリースから開始する場合、最初に 11.1.1.x リリースにアップグレードしてください。この場合、最初に暫定リリースにアップグレードし、次に 11.1.1.x にアップグレードする必要がある場合があります。

11.1.1.x になったら、EPM System Installer で「メンテナンス・リリースの適用」オプションを選択します。

リリース 11.1.1.x からまだ開始していない場合、リリース 11.1.1.4 も完全なインストールを提供します。

EPM System リリース 9.3.3 から開始する場合、推奨アップグレード・パスは、リリース 11.1.2.1+へのアップグレードです。

Essbase と Shared Services のセキュリティ同期は、Essbase リリース 9.3 (リリース 9.3.1.4.1 以降)で削除されました。ただし、Essbase と Shared Services リリース 11.1.1.3 では、セキュリティ情報が現在も同期されています。このため、Essbase リリース 9.3.1.4.1、9.3.1.5、9.3.1.6 または 9.3.1.7 を使用している場合、リリース 11.1.1.3 にアップグレードできません。したがって、推奨アップグレード・パスとして、まず、すべての製品をリリース 9.3.3 にアップグレードし、次にすべての製品をリリース 11.1.2.1+にアップグレードすることをお勧めします。

## EPM System 製品のインストール・チェックリスト

Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System Installer, Fusion Edition のコンポーネントは、次の 3 つの層にインストールされます:

- クライアント層
- サービス層
- Web 層: Java アプリケーション・サーバー層と Web サーバー層が含まれる

さらに、EPM System 製品を構成するときは、データ層にデータベースを設定します。

EPM System 製品のアーキテクチャの詳細は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストール概要』を参照してください。

EPM System のインストールは、このワークフローに従います。ワークフローの各部分は、次の表に示されているガイドに説明されています。

タスク	リファレンス
インストールをプランニングします。	『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストール概要』のインストール・プランニングのチェックリスト
インストール・ファイルを準備する。	<a href="#">第 2 章「インストールの準備」</a>
システム要件と前提条件を満たす。	Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System の認証マトリックス( <a href="http://www.oracle.com/technology/products/bi/hyperion-supported-platforms.html">http://www.oracle.com/technology/products/bi/hyperion-supported-platforms.html</a> )のシステム要件と『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストール概要』の「インストールのプランニング・チェックリスト」
EPM System 製品をインストールする。	<a href="#">第 3 章「EPM System 製品のインストール」</a> <b>ヒント：</b> 開始する前に、実行するインストール・タイプを決定します： <ul style="list-style-type: none"> <li>● 新規インストール</li> <li>● メンテナンス・リリースのインストール</li> <li>● 再インストール</li> </ul> 各インストール・タイプの詳細は、 <a href="#">53 ページの「インストール・タイプ」</a> を参照してください。
EPM System 製品を構成する。	<a href="#">第 4 章「EPM System 製品の構成」</a> <b>注：</b> 分散環境では、Oracle Hyperion(R) Shared Services を最初に構成します。他の製品を正常に構成するには、Shared Services がインストールおよび構成され、実行中である必要があります。 <b>注：</b> SSL が使用可能な環境で、Shared Services を最初に構成し、「通信用 SSL の使用可能化」を選択します。次に、SSL 用 Shared Services を設定し、他の EPM System 製品を構成する前に、Shared Services を SSL モードで実行します。
(オプション)Java Web アプリケーションを Web アプリケーション・サーバーに自動的に配置しなかった場合は、手動で配置する。	Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System マニュアル配置ガイド
EPM System サービスが開始されていることを確認する。	<a href="#">第 5 章「EPM System 製品の開始と停止」</a>
Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System 診断を使用して、インストールを検証する。	<a href="#">第 6 章「インストールの検証」</a>
使用する製品に必要な構成後のタスクを実行する。	<a href="#">第 7 章「構成後のタスクの実行」</a>
外部認証とユーザーのプロビジョニングを使用可能にする。	Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System セキュリティ管理ガイド
(オプション) Shared Services および SSL 用のユーザー・ディレクトリを使用可能にし、SSL 用にインストールされた製品を使用可能にする。	Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System SSL 構成ガイド

**ヒント：** インストール、構成および検証中は、システムを作成または変更するために使用するすべてのユーザー名とパスワード(およびそれらが関連付けられているアプリケーションとその目的を含む)のリストを保持します。

## 分散環境での EPM System 製品のインストール

EPM System 製品は、一般に分散環境にインストールされます。必要なコンピュータ数は、次のようないくつかの要因によって異なります：

- アプリケーションのサイズ
- ユーザー数
- 複数のユーザーによる同時使用の頻度
- 高可用性に関する組織の要件
- 組織のセキュリティ要件

EPM System インストーラによって、分散コンピュータ環境でのコンポーネントのインストール・タスクが簡素化されます。いずれのコンピュータにも必要なコンポーネントをインストール、構成および検証できます。そのマシンのコンポーネントのインストール、構成および検証を行うと、別のマシンで処理を繰り返せます。分散インストールのプランニングの詳細は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストール概要』および『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System 高可用性ガイド』の EPM System 製品の配置に関する項を参照してください。

分散環境の各マシンに必要なアセンブリの詳細は、[第 2 章「インストールの準備」](#)を参照してください。

Shared Services は配置内の 1 台のマシンにのみインストールします。

**注：** 複数の環境(開発、テスト、本番など)にインストールする場合は、Foundation Services 製品を各環境にインストールします。

## Hyperion ホームのディレクトリについて

Hyperion ホームのディレクトリの場所は、コンピュータへの最初の製品インストール中に定義されます。そのコンピュータでの後続のインストールでは、前に定義された場所が使用されます。

すべての EPM System 製品は、Hyperion ホーム・ディレクトリの下ディレクトリにインストールされます。また、製品で使用する共通の内部コンポーネントおよびサードパーティ製コンポーネントは、Hyperion ホーム・ディレクトリにインストールされます。マシンにインストールするすべての製品のための十分なディスク・スペースがインストール場所に確保されるように、インストール場所は注意深く選択してください。この場所は変更できません。

Hyperion ホームのディレクトリの場所は、Windows の場合、HYPERION\_HOME というシステム環境変数で定義され、UNIX の場合、EPM System 製品をインストール



しているユーザーの home ディレクトリの `.hyperion.'hostname'` になります。デフォルトの場所は、`C:/Hyperion (Windows)` または `$HOME/hyperion (UNIX)` です。Hyperion ホーム・ディレクトリの場所は、このドキュメントでは `HYPERION_HOME` と参照されます。

**注：** EPM System Installer が `HYPERION_HOME` の値を変更するために必要なアクセス権を確保するために、同じユーザー・アカウントを使用してすべての EPM System アプリケーションをインストールする必要があります。

`HYPERION_HOME` にインストールする共通ファイルについては、[184 ページの「Foundation ディレクトリにインストールされるファイル」](#) を参照してください。

## インストール・ドキュメント・ロードマップ

EPM System インストール・ドキュメントは、Oracle(R) Technology Network の [Oracle Documentation Library \(http://www.oracle.com/technology/documentation/epm.html\)](http://www.oracle.com/technology/documentation/epm.html) にあります。システム要件は、<http://www.oracle.com/technology/products/bi/hyperion-supported-platforms.html> の Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System 認証マトリックスにあります。

表 1 に、基本的なインストール・タスクの実行手順に関するドキュメントを示します。

表 1 必須ドキュメント

タスク	関連ドキュメント
システムの要件の適合	Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System の認証マトリックス( <a href="http://www.oracle.com/technology/products/bi/hyperion-supported-platforms.html">http://www.oracle.com/technology/products/bi/hyperion-supported-platforms.html</a> )
インストールのプランニング	『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストール概要』
<ul style="list-style-type: none"><li>● EPM System 製品のインストールと構成</li><li>● EPM System 製品の自動配置</li><li>● EPM System 製品の開始</li><li>● インストールの検証</li></ul>	『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストールおよび構成ガイド』
EPM System の保護およびユーザーのプロビジョニング	Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System セキュリティ管理ガイド

表 2 に、追加のインストール・タスクを行う必要がある場合の参考ドキュメントを示します。

表 2 オプション・ドキュメント

タスク	関連ドキュメント
EPM System 製品の手動配置	Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System マニュアル配置ガイド

タスク	関連ドキュメント
インストールのトラブルシューティング	Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストールおよび構成トラブルシューティング・ガイド
製品およびアプリケーション・データのバックアップの作成	Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System バックアップおよびリカバリ・ガイド
環境間の移行	Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ライフサイクル管理ガイド
SSL を使用可能にする	Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System SSL 構成ガイド
EPM System アプリケーションの高可用性のためのクラスタリング	Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System 高可用性ガイド

## この章の内容

インストール・ファイルのダウンロード.....	19
層およびインストール・アセンブリごとのコンポーネントのインストール .....	21

## インストール・ファイルのダウンロード

► インストール・ファイルをダウンロードするには:

**1 EPM System ファイルを保管するディレクトリを作成します。**

ファイルは、共有ドライブ、または配置内の各マシンにダウンロードできます。ネットワーク・ドライブからインストールする場合、このドライブをマッピングします。この手順では、このディレクトリは `/download_location` と記載します。

**ヒント：** ファイルを共有ドライブにダウンロードすることをお勧めします。

**2 Oracle(R) E-Delivery (<http://edelivery.oracle.com/>)サイトの「Oracle Enterprise Performance Management System」ページから次のファイルを `/download_location` にダウンロードします:**

- EPM System Installer (Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System Installer, Fusion Edition Release 11.1.1.4.0)。
- 購入した製品の ZIP ファイル。ZIP ファイルには、インストール・アセンブリ (EPM System Installer 製品用のプラグイン・インストール・ファイル) が含まれます。

[Oracle\(R\) E-Delivery](#) のメディア・パック Readme を読み、購入した製品に基づいて、ダウンロードする ZIP ファイルを確認します。(メディア・パック Readme を参照するには、メディア・パックを選択してから Readme をクリックします。)

**3 EPM System Installer を `/download_location` に解凍します。**

いずれかのファイルがすでに存在していることを知らせるメッセージが表示されたら、「はい」をクリックして、ファイルを上書きします。

**4 インストール・アセンブリを同じディレクトリ(`/download_location`)に解凍します。**

いずれかのファイルまたは共通コンポーネントがすでに存在していることを知らせるメッセージが表示されたら、「はい」をクリックして、ファイルを上書きします。

アセンブリは、/assemblies ディレクトリに解凍されます。ファイルを配置内の複数のマシンにダウンロードした場合、各マシンで、そのマシンにインストールする製品または製品コンポーネントのアセンブリのみを解凍する必要があります。製品コンポーネントにどのアセンブリを使用するかについては、[21 ページの「層およびインストール・アセンブリごとのコンポーネントのインストール」](#)を参照してください。

ファイルを1箇所にまとめてダウンロードした場合、次の共通ファイルを解凍してください。配置の複数のマシンにファイルをダウンロードした場合は、その配置の各マシンで、次の共通ファイルを解凍します：

- Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System Installer, Fusion Edition Release 11.1.1.4.0
- Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Servicesリリース11.1.1.4.0パート1/4
- Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Servicesリリース11.1.1.4.0パート2/4
- Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Servicesリリース11.1.1.4.0パート3/4
- Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Servicesリリース11.1.1.4.0パート4/4

**注：** 環境内の各マシンで EPM-FoundationServices ZIP ファイルが必要であっても、Shared Services は1台のマシンにのみインストールしてください。

- 5 /assemblies ディレクトリには、このマシンにインストールする各製品のサブディレクトリを含める必要があります。/assemblies ディレクトリが次のようになっていることを確認してください：

```
assemblies/  
  
product  
/  
  
version  
/  
    assembly.dat
```

**注：** ProductRef.inf が/assemblies ディレクトリ内にある場合があります。残っていても問題を引き起こすことはありません。

EPM System Installer は、製品のアセンブリ・ファイルをダウンロードして正しい場所に解凍している場合のみ、その製品をインストールできます。

# 層およびインストール・アセンブリごとのコンポーネントのインストール

この項の情報は、ダウンロードする ZIP ファイルと、EPM System 製品コンポーネントに必要なアセンブリのプランニングに役立ててください。

**ヒント：** ZIP ファイルを共有ドライブにダウンロードすることをお勧めします。この推奨に従う場合は、次の表を使用して各製品コンポーネントに必要な ZIP ファイルを調べる必要はありません。

次の項では、「コンポーネントを個別に選択」オプションを指定してインストールした場合に、各層(クライアント、Web、サービス)のインストールに使用可能なコンポーネントとサービスについて、製品ごとに説明します。

「コンポーネントを層ごとに選択」オプションを指定してインストールした場合、インストールされるコンポーネントとサービスはほとんど同じです。

次のコンポーネントを使用できるのは、インストール時に「コンポーネントを個別に選択」を選択する場合のみです：

- Oracle Essbase 製品の 32 ビットおよび 64 ビットの選択  
「コンポーネントを層ごとに選択」を選択すると、EPM System Installer は、64 ビットのみのプラットフォームを除き、すべてのプラットフォームに 32 ビットをインストールします。
- Oracle Hyperion(R) SQR(R) Production Reporting Remote
- Oracle Hyperion Strategic Finance, Fusion Edition Reader クラアント
- Strategic Finance と Financial Management サービスの統合
- Strategic Finance と Enterprise サービスの統合
- FDM サーバー Financial Management アダプタ

次の表に、各コンポーネントをインストールするために必要な ZIP ファイルとインストール・アセンブリを示します。

## Foundation Services

次の表に、Foundation Services 製品の各層にインストールされるコンポーネントと、そのコンポーネントのインストールに必要な ZIP ファイルとインストール・アセンブリを示します。

**注：** commonComponents アセンブリは、すべての製品に必要です。tools および productCommonComponents アセンブリは、すべてのサーバーおよび Web アプリケーションに必要です。これらのアセンブリは、Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Services リリース11.1.1.4.0パート1/4 および Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Servicesリリース11.1.1.4.0パート2/4 にあります。

クライアント層	Web 層	サービス層
<b>Shared Services</b>		
	<p><b>コンポーネント:</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● Shared Services Web アプリケーション</li> <li>● OpenLDAP サービス (productCommonComponents アセンブリと一緒にインストールされる)</li> <li>● HRAM (Windows のみ、sharedServices アセンブリと一緒に自動的にインストールされる)</li> </ul> <p><b>必須アセンブリ:</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● commonComponents</li> <li>● productCommonComponents</li> <li>● tools</li> <li>● sharedServices</li> </ul> <p><b>必須ダウンロード・ファイル:</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Services リリース11.1.1.4.0パート1/4</li> <li>● Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Services リリース11.1.1.4.0パート2/4</li> <li>● Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Services リリース11.1.1.4.0パート4/4</li> </ul>	

クライアント層	Web 層	サービス層
<b>Oracle Enterprise Performance Management Workspace, Fusion Edition</b>		
	<p><b>コンポーネント:</b></p> <p>Workspace Web アプリケーションとポータル</p> <p><b>必須アセンブリ:</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● commonComponents</li> <li>● productCommonComponents</li> <li>● tools</li> <li>● biplus_workspace_webapp</li> <li>● workspace_configlibs</li> <li>● biplus_portlets_webapp</li> </ul> <p><b>必須ダウンロード・ファイル:</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Services リリース11.1.1.4.0パート1/4</li> <li>● Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Services リリース11.1.1.4.0パート2/4</li> <li>● Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Services リリース11.1.1.4.0パート3/4</li> </ul>	<p><b>コンポーネント:</b></p> <p>Workspace サービスおよび共通ライブラリ</p> <p><b>必須アセンブリ:</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● commonComponents</li> <li>● productCommonComponents</li> <li>● tools</li> <li>● productCommonComponents</li> <li>● biplus_core_services</li> <li>● workspace_configlibs</li> <li>● biplus_migration_utility</li> </ul> <p><b>必須ダウンロード・ファイル:</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Services リリース11.1.1.4.0パート1/4</li> <li>● Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Services リリース11.1.1.4.0パート2/4</li> <li>● Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Services リリース11.1.1.4.0パート3/4</li> </ul>

クライアント層	Web 層	サービス層
<b>Oracle Hyperion EPM Architect, Fusion Edition</b>		
<b>コンポーネント:</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>● Performance Management Architect バッチ・クライアント</li> <li>● Performance Management Architect ファイル・ジェネレータ (Windows のみ)</li> </ul> <b>必須アセンブリ:</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>● commonComponents</li> <li>● bpm_architect_batch_client</li> <li>● bpm_architect_generator</li> <li>● productCommonComponents</li> </ul> <b>必須ダウンロード・ファイル:</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>● Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Services リリース 11.1.1.4.0 パート 1/4</li> <li>● Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Services リリース 11.1.1.4.0 パート 2/4</li> <li>● Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Architect, Fusion Edition リリース 11.1.1.4.0</li> </ul>	<b>コンポーネント:</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>● Performance Management Architect Web アプリケーション</li> <li>● Performance Management Architect データ・シンクロナイザ・サービス</li> </ul> <b>必須アセンブリ:</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>● commonComponents</li> <li>● productCommonComponents</li> <li>● tools</li> <li>● bpm_architect_webapp</li> <li>● bpm_architect_datasync</li> </ul> <b>必須ダウンロード・ファイル:</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>● Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Services リリース 11.1.1.4.0 パート 1/4</li> <li>● Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Services リリース 11.1.1.4.0 パート 2/4</li> <li>● Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Architect, Fusion Edition リリース 11.1.1.4.0</li> </ul>	<b>コンポーネント:</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>● Performance Management Architect 次元サーバー・サービス (Windows のみ)</li> </ul> <b>必須アセンブリ:</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>● commonComponents</li> <li>● productCommonComponents</li> <li>● tools</li> <li>● bpm_architect_services</li> </ul> <b>必須ダウンロード・ファイル:</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>● Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Services リリース 11.1.1.4.0 パート 1/4</li> <li>● Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Services リリース 11.1.1.4.0 パート 2/4</li> <li>● Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Architect, Fusion Edition リリース 11.1.1.4.0</li> </ul>



クライアント層	Web 層	サービス層
<b>Hyperion Calculation Manager</b>		
	<p><b>コンポーネント:</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● Calculation Manager Web アプリケーション</li> </ul> <p><b>必須アセンブリ:</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● commonComponents</li> <li>● productCommonComponents</li> <li>● tools</li> <li>● calc</li> </ul> <p><b>必須ダウンロード・ファイル:</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Services リリース11.1.1.4.0パート1/4</li> <li>● Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Services リリース11.1.1.4.0パート2/4</li> <li>● Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Services リリース11.1.1.4.0パート3/4</li> </ul>	

クライアント層	Web 層	サービス層
<b>共通(すべての製品のインストール)</b>		
<b>コンポーネント:</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>● Oracle Hyperion Planning, Fusion Edition ADM ドライバ (自動インストール)</li> </ul>		<b>コンポーネント:</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>● HYPERION_HOME/common ディレクトリの入力</li> </ul> <b>必須アセンブリ:</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>● commonComponents (すべてのコンポーネントのインストールに必要な)</li> <li>● productCommonComponents<sup>1</sup></li> <li>● tools (すべてのサーバーおよび Web 層のコンポーネントのインストールに必要な)</li> <li>● essbaseProductCommonComponents</li> </ul> <b>必須ダウンロード・ファイル:</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>● Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Servicesリリース11.1.1.4.0パート1/4</li> <li>● Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Servicesリリース11.1.1.4.0パート2/4</li> </ul>

<sup>1</sup> 次のいずれかを選択すると、構成と監視コンソールが productCommonComponents アセンブリと一緒にインストールされます: Shared Services Web 層、EPM Workspace Web 層、EPM Workspace サービス層、Oracle Hyperion Financial Reporting, Fusion Edition クライアント層、Financial Reporting Web 層、Financial Reporting サービス層、Oracle Hyperion(R) Web Analysis Web 層。

## Essbase

次の表に、Essbase 製品の各層にインストールされるコンポーネントと、そのコンポーネントのインストールに必要な ZIP ファイルとインストール・アセンブリを示します。

**注:** commonComponents アセンブリは、すべての製品に必要です。tools および productCommonComponents アセンブリは、すべてのサーバーおよび Web アプリケーションに必要です。これらのアセンブリは、Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Servicesリリース11.1.1.4.0パート1/4 および Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Servicesリリース11.1.1.4.0パート2/4 にあります。

クライアント層	Web 層	サービス層
<b>Essbase</b>		
<p><b>コンポーネント:</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● Essbase Client 32 ビット</li> <li>● Essbase Client 64 ビット</li> </ul> <p>(Essbase API および Spreadsheet Add-in が含まれます。Spreadsheet Add-in は、32 ビットのインストールで、Microsoft Excel がマシンにインストールされている場合にのみインストールされることに注意してください)</p> <p><b>必須アセンブリ:</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● commonComponents</li> <li>● essbase_client</li> <li>● essbaseAddins</li> </ul> <p><b>必須ダウンロード・ファイル:</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Servicesリリース11.1.1.4.0パート1/4</li> <li>● Oracle Essbaseクライアント・リリース11.1.1.4.0</li> </ul>		<p><b>コンポーネント:</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● Essbase サービス・サーバー 32 ビット</li> <li>● Essbase サービス・サーバー 64 ビット</li> </ul> <p><b>必須アセンブリ:</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● commonComponents</li> <li>● productCommonComponents</li> <li>● tools</li> <li>● essbase_services (32 ビットおよび 64 ビット)</li> <li>● essbaseProductCommonComponents</li> <li>● essbaseAddins</li> </ul> <p><b>必須ダウンロード・ファイル:</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Servicesリリース11.1.1.4.0パート1/4</li> <li>● Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Servicesリリース11.1.1.4.0パート2/4</li> <li>● Oracle Essbaseクライアント・リリース11.1.1.4.0</li> <li>● Oracle Essbaseサーバー・リリース11.1.1.4.0</li> </ul>

クライアント層	Web 層	サービス層
<b>Oracle Essbase Administration Services</b>		
<p><b>コンポーネント:</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● Essbase Administration Services クライアント (Windows のみ)</li> </ul> <p><b>必須アセンブリ:</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● commonComponents</li> <li>● essbase_administration_services_client</li> <li>● essbaseAddins</li> </ul> <p><b>必須ダウンロード・ファイル:</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Servicesリリース11.1.1.43.0/パート1/4</li> <li>● Oracle Essbaseクライアント・リリース11.1.1.4.0</li> </ul>	<p><b>コンポーネント:</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● Administration Services32 ビット Web アプリケーション</li> <li>● Administration Services64 ビット Web アプリケーション</li> <li>● Oracle Hyperion(R) Business Rules (自動インストール)</li> </ul> <p><b>必須アセンブリ:</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● commonComponents</li> <li>● productCommonComponents</li> <li>● tools</li> <li>● essbase_administration_services_webapp</li> <li>● essbaseAddins</li> </ul> <p><b>必須ダウンロード・ファイル:</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Servicesリリース11.1.1.4.0/パート1/4</li> <li>● Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Servicesリリース11.1.1.4.0/パート2/4</li> <li>● Oracle Essbaseクライアント・リリース11.1.1.4.0</li> <li>● Oracle Essbaseサーバー・リリース11.1.1.4.0</li> </ul>	

クライアント層	Web 層	サービス層
<b>Oracle Essbase Integration Services</b>		
<b>コンポーネント:</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>● Essbase Integration Services クライアント(Windows のみ)</li> </ul> <b>必須アセンブリ:</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>● commonComponents</li> <li>● essbase_integration_services</li> <li>● essbaseAddins</li> </ul> <b>必須ダウンロード・ファイル:</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>● Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Servicesリリース11.1.1.4.0パート1/4</li> <li>● Oracle Essbaseクライアント・リリース11.1.1.4.0</li> <li>● Oracle Essbaseサーバー・リリース11.1.1.4.0</li> </ul>		<b>コンポーネント:</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>● Essbase Integration Services 32 ビット</li> <li>● Essbase Integration Services 64 ビット</li> </ul> <b>必須アセンブリ:</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>● commonComponents</li> <li>● productCommonComponents</li> <li>● tools</li> <li>● essbase_integration_services</li> <li>● essbaseAddins</li> </ul> <b>必須ダウンロード・ファイル:</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>● Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Servicesリリース11.1.1.4.0パート1/4</li> <li>● Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Servicesリリース11.1.1.4.0パート2/4</li> <li>● Oracle Essbaseクライアント・リリース11.1.1.4.0</li> <li>● Oracle Essbaseサーバー・リリース11.1.1.4.0</li> </ul>

クライアント層	Web 層	サービス層
<b>Oracle Hyperion Provider Services</b>		
	<p><b>コンポーネント:</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● Provider Services Web アプリケーション</li> </ul> <p><b>必須アセンブリ:</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● commonComponents</li> <li>● productCommonComponents</li> <li>● tools</li> <li>● analytic_services_provider_webapp</li> <li>● essbaseAddins</li> </ul> <p><b>必須ダウンロード・ファイル:</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Services リリース11.1.1.4.0パート1/4</li> <li>● Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Services リリース11.1.1.4.0パート2/4</li> <li>● Oracle Hyperion Provider Servicesリリース11.1.1.4.0</li> <li>● Oracle Essbaseクライアント・リリース11.1.1.4.0</li> </ul>	

クライアント層	Web 層	サービス層
<b>Oracle Essbase Studio</b>		
<b>コンポーネント:</b> Essbase Studio クライアント (Windows のみ) <b>必須アセンブリ:</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>● commonComponents</li> <li>● essbase_studio</li> <li>● essbaseAddins</li> </ul> <b>必須ダウンロード・ファイル:</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>● Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Servicesリリース11.1.1.4.0パート1/4</li> <li>● Oracle Essbaseクライアント・リリース11.1.1.4.0</li> </ul>		<b>コンポーネント:</b> Essbase Studio サーバー <b>必須アセンブリ:</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>● commonComponents</li> <li>● productCommonComponents</li> <li>● tools</li> <li>● essbase_studio_services</li> <li>● essbaseAddins</li> </ul> <b>必須ダウンロード・ファイル:</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>● Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Servicesリリース11.1.1.4.0パート1/4</li> <li>● Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Servicesリリース11.1.1.4.0パート2/4</li> <li>● Oracle Essbaseクライアント・リリース11.1.1.4.0</li> <li>● Oracle Essbaseサーバー・リリース11.1.1.4.0</li> </ul>

クライアント層	Web 層	サービス層
<b>Oracle Hyperion Smart Search Command Line Utility</b>		
	<p><b>コンポーネント:</b></p> <p>Smart Search Command Line Utility Web アプリケーション</p> <p><b>必須アセンブリ:</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● commonComponents</li> <li>● productCommonComponents</li> <li>● tools</li> <li>● essbase_smartsearch_webapp</li> <li>● essbaseAddins</li> </ul> <p><b>必須ダウンロード・ファイル:</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Services リリース11.1.1.4.0/パート1/4</li> <li>● Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Services リリース11.1.1.4.0/パート2/4</li> <li>● Oracle Essbaseクライアント・リリース11.1.1.4.0</li> <li>● Oracle Essbaseサーバー・リリース11.1.1.4.0</li> </ul>	
<b>Oracle Hyperion Smart View for Office, Fusion Edition</b>		
<p><b>コンポーネント:</b></p> <p>Smart View および Oracle Essbase Visual Explorer クライアント(Windows のみ)</p> <p><b>必須アセンブリ:</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● commonComponents</li> <li>● svchve_client</li> </ul> <p><b>必須ダウンロード・ファイル:</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Servicesリリース11.1.1.4.0/パート1/4</li> <li>● Oracle Essbaseクライアント・リリース11.1.1.4.0</li> </ul>		



## Reporting and Analysis

次の表に、Reporting and Analysis 製品の各層にインストールされるコンポーネントと、そのコンポーネントのインストールに必要な ZIP ファイルとインストール・アセンブリを示します。

**注：** commonComponents アセンブリは、すべての製品に必要です。tools および productCommonComponents アセンブリは、すべてのサーバーおよび Web アプリケーションに必要です。これらのアセンブリは、Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Services リリース11.1.1.4.0パート1/4 および Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Servicesリリース11.1.1.4.0パート2/4 にあります。

クライアント層	Web 層	サービス層
<b>Oracle Hyperion(R) Interactive Reporting</b>		
<b>コンポーネント:</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>Interactive Reporting Studio クライアント (Windows のみ)</li> <li>Interactive Reporting Dashboard Development Services (Windows のみ)</li> </ul> <b>必須アセンブリ:</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>commonComponents</li> <li>productCommonComponents (Interactive Reporting Dashboard Development Services のみ)</li> <li>biplus_interactive_reporting_client</li> <li>biplus_dds</li> <li>essbaseProductCommonComponents</li> </ul> <b>必須ダウンロード・ファイル:</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Services リリース11.1.1.4.0パート1/4</li> <li>Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Services リリース11.1.1.4.0パート2/4</li> <li>Hyperion Interactive Reportingリリース11.1.1.4.0</li> </ul>		<b>コンポーネント:</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>Interactive Reporting Services</li> </ul> <b>必須アセンブリ:</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>commonComponents</li> <li>productCommonComponents</li> <li>tools</li> <li>biplus_interactive_reporting_services</li> <li>biplus_core_services</li> <li>biplus_configlibs</li> </ul> <b>必須ダウンロード・ファイル:</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Services リリース11.1.1.4.0パート1/4</li> <li>Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Services リリース11.1.1.4.0パート2/4</li> <li>Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Services リリース11.1.1.4.0パート3/4</li> <li>Hyperion Interactive Reportingリリース11.1.1.4.0</li> </ul>

クライアント層	Web 層	サービス層
<b>Financial Reporting</b>		
<p><b>コンポーネント:</b></p> <p>Financial Reporting Studio クライアント(Windows のみ)</p> <p><b>必須アセンブリ:</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● commonComponents</li> <li>● productCommonComponents</li> <li>● tools</li> <li>● biplus_financial_reporting_client</li> <li>● biplus_configlibs</li> <li>● biplus_financial_reporting_common</li> <li>● essbaseProductCommonComponents</li> <li>● hfm_client (Financial Reporting と Oracle Hyperion Financial Management, Fusion Edition を使用している場合)</li> <li>● hfm_common (Financial Management のコンポーネントに必要)</li> </ul> <p><b>必須ダウンロード・ファイル:</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Services リリース11.1.1.4.0パート1/4</li> <li>● Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Services リリース11.1.1.4.0パート2/4</li> <li>● Oracle Hyperion Financial Reporting, Fusion Editionリリース11.1.1.4.0</li> <li>● Oracle Hyperion Financial Management, Fusion Edition リリース11.1.1.4.0</li> </ul>	<p><b>コンポーネント:</b></p> <p>Financial Reporting Web アプリケーション</p> <p><b>必須アセンブリ:</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● commonComponents</li> <li>● productCommonComponents</li> <li>● tools</li> <li>● biplus_financial_reporting_webapp</li> <li>● biplus_configlibs</li> <li>● biplus_financial_reporting_common</li> <li>● essbaseProductCommonComponents</li> <li>● hfm_client (Financial Reporting と Financial Management を使用している場合)</li> <li>● hfm_common (Financial Management のコンポーネントに必要)</li> </ul> <p><b>必須ダウンロード・ファイル:</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Services リリース11.1.1.4.0パート1/4</li> <li>● Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Services リリース11.1.1.4.0パート2/4</li> <li>● Oracle Hyperion Financial Reporting, Fusion Editionリリース11.1.1.4.0</li> <li>● Oracle Hyperion Financial Management, Fusion Edition リリース11.1.1.4.0</li> </ul>	<p><b>コンポーネント:</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● Financial Reporting レポート・サーバー・サービス</li> <li>● Financial Reporting 印刷サーバー・サービス(Windows のみ)</li> <li>● Financial Reporting スケジューラ・サーバー・サービス</li> </ul> <p><b>必須アセンブリ:</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● commonComponents</li> <li>● productCommonComponents</li> <li>● tools</li> <li>● biplus_financial_reporting_services</li> <li>● biplus_configlibs</li> <li>● biplus_financial_reporting_common</li> <li>● essbaseProductCommonComponents</li> <li>● hfm_client (Financial Reporting と Financial Management を使用している場合)</li> <li>● hfm_common (Financial Management のコンポーネントに必要)</li> </ul> <p><b>必須ダウンロード・ファイル:</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Services リリース11.1.1.4.0パート1/4</li> <li>● Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Services リリース11.1.1.4.0パート2/4</li> <li>● Oracle Hyperion Financial Reporting, Fusion Editionリリース11.1.1.4.0</li> <li>● Oracle Hyperion Financial Management, Fusion Edition リリース11.1.1.4.0</li> </ul>

クライアント層	Web 層	サービス層
<b>Production Reporting</b>		
<p><b>コンポーネント:</b></p> <p>(クライアント層のすべてのコンポーネントは Windows のみ)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● SQR Production Reporting Studio</li> <li>● SQR Production Reporting Activator</li> <li>● SQR Production Reporting Remote</li> <li>● SQR Production Reporting Viewer</li> </ul> <p><b>必須アセンブリ:</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● commonComponents</li> <li>● biplus_product_reporting_client</li> <li>● biplus_product_reporting_common</li> </ul> <p><b>必須ダウンロード・ファイル:</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Services リリース11.1.1.4.0パート1/4</li> <li>● Hyperion SQR Production Reporting リリース11.1.1.4.0</li> </ul>		<p><b>コンポーネント:</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● SQR Production Reporting DB2 エンジン</li> <li>● SQR Production Reporting DDO エンジン</li> <li>● SQR Production Reporting Informix エンジン</li> <li>● SQR Production Reporting ODBC エンジン</li> <li>● SQR Production Reporting Oracle エンジン</li> <li>● SQR Production Reporting Sybase エンジン</li> <li>● SQR Production Reporting Teradata エンジン (UNIX のみ)</li> </ul> <p><b>必須アセンブリ:</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● commonComponents</li> <li>● productCommonComponents</li> <li>● tools</li> <li>● biplus_product_reporting_services</li> <li>● biplus_product_reporting_common</li> <li>● essbaseProductCommonComponents</li> </ul> <p><b>必須ダウンロード・ファイル:</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Services リリース11.1.1.4.0パート1/4</li> <li>● Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Services リリース11.1.1.4.0パート2/4</li> <li>● Hyperion SQR Production Reporting リリース11.1.1.4.0</li> </ul>

クライアント層	Web 層	サービス層
<b>Web Analysis</b>		
	<p><b>コンポーネント:</b></p> <p>Web Analysis Web アプリケーション</p> <p><b>必須アセンブリ:</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● commonComponents</li> <li>● productCommonComponents</li> <li>● tools</li> <li>● biplus_webanalysis_webapp</li> <li>● biplus_configlibs</li> <li>● essbaseProductCommonComponents</li> <li>● hfm_client (Web Analysis と Financial Management を使用している場合)</li> <li>● hfm_common (Financial Management のコンポーネントに必要)</li> </ul> <p><b>必須ダウンロード・ファイル:</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Services リリース11.1.1.4.0パート1/4</li> <li>● Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Services リリース11.1.1.4.0パート2/4</li> <li>● Hyperion Web Analysisリリース11.1.1.4.0</li> <li>● Oracle Hyperion Financial Management, Fusion Edition リリース11.1.1.4.0</li> </ul>	

## Financial Performance Management アプリケーション

次の表に、Financial Performance Management アプリケーション製品の各層にインストールされるコンポーネントと、そのコンポーネントのインストールに必要な ZIP ファイルとインストール・アセンブリを示します。

**注：** commonComponents アセンブリは、すべての製品に必要です。tools および productCommonComponents アセンブリは、すべてのサーバーおよび Web アプリケーションに必要です。これらのアセンブリは、Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Services リリース11.1.1.4.0パート1/4 および Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Servicesリリース11.1.1.4.0パート2/4 にあります。

クライアント層	Web 層	サービス層
<b>Planning</b>		
<b>コンポーネント:</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>● Planning オフライン・クライアント</li> </ul> <b>必須アセンブリ:</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>● commonComponents</li> <li>● offlinePlanning</li> </ul> <b>必須ダウンロード・ファイル:</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>● Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Services リリース11.1.1.4.0パート1/4</li> <li>● Oracle Hyperion Planning, Fusion Editionリリース11.1.1.4.0</li> </ul>	<b>コンポーネント:</b> <p>Planning Web アプリケーション</p> <b>必須アセンブリ:</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>● commonComponents</li> <li>● planning</li> <li>● productCommonComponents</li> <li>● tools</li> <li>● rmi</li> <li>● essbaseProductCommonComponents</li> <li>● essbase_services</li> </ul> <b>必須ダウンロード・ファイル:</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>● Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Services リリース11.1.1.4.0パート1/4</li> <li>● Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Services リリース11.1.1.4.0パート2/4</li> <li>● Oracle Hyperion Planning, Fusion Editionリリース11.1.1.4.0</li> <li>● Oracle Essbaseサーバー・リリース11.1.1.4.0</li> </ul>	

クライアント層	Web 層	サービス層
<b>Financial Management (すべてのコンポーネントが Windows のみ)</b>		
<b>コンポーネント:</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>Financial Management クライアント</li> <li>Financial Management サンプル・アプリケーション</li> <li>Financial Management ADM ドライバ</li> </ul> <b>必須アセンブリ:</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>commonComponents</li> <li>hfm_client</li> <li>hfm_common</li> </ul> <b>必須ダウンロード・ファイル:</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Services リリース11.1.1.4.0パート1/4</li> <li>Oracle Hyperion Financial Management, Fusion Edition リリース11.1.1.4.0</li> </ul>	<b>コンポーネント:</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>Financial Management Web アプリケーション</li> <li>Financial Management Smart View プロバイダ</li> </ul> <b>必須アセンブリ:</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>commonComponents</li> <li>productCommonComponents</li> <li>tools</li> <li>hfm_webapp</li> <li>hfm_common</li> </ul> <b>必須ダウンロード・ファイル:</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Services リリース11.1.1.4.0パート1/4</li> <li>Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Services リリース11.1.1.4.0パート2/4</li> <li>Oracle Hyperion Financial Management, Fusion Edition リリース11.1.1.4.0</li> </ul>	<b>コンポーネント:</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>Financial Management アプリケーション・サーバー</li> </ul> <b>必須アセンブリ:</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>commonComponents</li> <li>productCommonComponents</li> <li>tools</li> <li>hfm_services</li> <li>hfm_common</li> </ul> <b>必須ダウンロード・ファイル:</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Services リリース11.1.1.4.0パート1/4</li> <li>Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Services リリース11.1.1.4.0パート2/4</li> <li>Oracle Hyperion Financial Management, Fusion Edition リリース11.1.1.4.0</li> </ul>

クライアント層	Web 層	サービス層
<b>Oracle Hyperion Performance Scorecard, Fusion Edition</b>		
	<p><b>コンポーネント:</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● Performance Scorecard Web Reports Web アプリケーション</li> <li>● Performance Scorecard Alerter Web アプリケーション</li> <li>● Performance Scorecard ETL Web アプリケーション Web アプリケーション</li> </ul> <p><b>必須アセンブリ:</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● commonComponents</li> <li>● productCommonComponents</li> <li>● tools</li> <li>● hps_webapp</li> <li>● essbaseProductCommonComponents</li> </ul> <p><b>必須ダウンロード・ファイル:</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Services リリース11.1.1.4.0パート1/4</li> <li>● Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Services リリース11.1.1.4.0パート2/4</li> <li>● Oracle Hyperion Performance Scorecard, Fusion Editionリリース11.1.1.4.0</li> </ul>	

クライアント層	Web 層	サービス層
<b>Strategic Finance (すべてのコンポーネントが Windows のみ)</b>		
<b>コンポーネント:</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>● Strategic Finance クライアント</li> <li>● Strategic Finance のリーダー・クライアント</li> <li>● Strategic Finance と Financial Management (クライアント)の統合<sup>1</sup></li> <li>● Strategic Finance と Enterprise (クライアント)の統合<sup>2</sup></li> </ul> <b>必須アセンブリ:</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>● commonComponents</li> <li>● productCommonComponents (Strategic Finance と Financial Management の統合のみ)</li> <li>● tools (Strategic Finance と Financial Management の統合のみ)</li> <li>● hsf_client</li> <li>● hsf_reader_client</li> <li>● essbaseProductCommonComponents (Strategic Finance クライアントおよび Strategic Finance は Financial Management とのみ統合)</li> </ul> <b>必須ダウンロード・ファイル:</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>● Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Services リリース11.1.1.4.0パート1/4</li> <li>● Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Services リリース11.1.1.4.0パート2/4</li> <li>● Oracle Hyperion Strategic Finance, Fusion Editionリリース11.1.1.4.0</li> </ul>	<b>コンポーネント:</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>● Strategic Finance Web サービス</li> </ul> <b>必須アセンブリ:</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>● commonComponents</li> <li>● productCommonComponents</li> <li>● tools</li> <li>● hsf_server</li> </ul> <b>必須ダウンロード・ファイル:</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>● Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Services リリース11.1.1.4.0パート1/4</li> <li>● Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Services リリース11.1.1.4.0パート2/4</li> <li>● Oracle Hyperion Strategic Finance, Fusion Editionリリース11.1.1.4.0</li> </ul>	<b>コンポーネント:</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>● Strategic Finance サービス</li> <li>● Strategic Finance と Financial Management (サービス)の統合<sup>3</sup></li> <li>● Strategic Finance と Enterprise (サービス)の統合<sup>4</sup></li> </ul> <p><b>注:</b> Strategic Finance と Essbase および Planning の統合は、自動的にインストールされます。</p> <b>必須アセンブリ:</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>● commonComponents</li> <li>● productCommonComponents</li> <li>● tools</li> <li>● hsf_server</li> <li>● essbaseProductCommonComponents (Strategic Finance サービスおよび Strategic Finance と Financial Management サービスの統合の場合にのみ必要)</li> </ul> <b>必須ダウンロード・ファイル:</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>● Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Services リリース11.1.1.4.0パート1/4</li> <li>● Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Services リリース11.1.1.4.0パート2/4</li> <li>● Oracle Hyperion Strategic Finance, Fusion Editionリリース11.1.1.4.0</li> </ul>



クライアント層	Web 層	サービス層
<b>Oracle Hyperion Profitability and Cost Management, Fusion Edition</b>		
	<p><b>コンポーネント:</b></p> <p>収益性 Web アプリケーション</p> <p><b>必須アセンブリ:</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● commonComponents</li> <li>● productCommonComponents</li> <li>● tools</li> <li>● hpm</li> <li>● essbaseProductCommonComponents</li> </ul> <p><b>必須ダウンロード・ファイル:</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Services リリース11.1.1.4.0パート1/4</li> <li>● Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Services リリース11.1.1.4.0パート2/4</li> <li>● Oracle Hyperion Profitability and Cost Management, Fusion Edition リリース11.1.1.4.0</li> </ul>	

<sup>1</sup>Financial Management クライアントもインストールする必要があります。

<sup>2</sup>Enterprise クライアントを最初にインストールする必要があります。

<sup>3</sup>Financial Management クライアントもインストールする必要があります。

<sup>4</sup>Enterprise クライアントを最初にインストールする必要があります。

## データ管理

次の表に、Data Management 製品の各層にインストールされるコンポーネントと、そのコンポーネントのインストールに必要な ZIP ファイルとインストール・アセンブリを示します。

**注：** commonComponents アセンブリは、すべての製品に必要です。tools および productCommonComponents アセンブリは、すべてのサーバーおよび Web アプリケーションに必要です。これらのアセンブリは、Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Services リリース11.1.1.4.0パート1/4 および Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Services リリース11.1.1.4.0パート2/4 にあります。

クライアント層	Web 層	サービス層
<b>Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Fusion Edition (すべてのコンポーネントが Windows のみ)</b>		
<b>コンポーネント:</b> FDM ワークベンチ・クライアント <b>必須アセンブリ:</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>commonComponents</li> <li>productCommonComponents</li> <li>fdm</li> </ul> <b>必須ダウンロード・ファイル:</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Servicesリリース11.1.1.4.0パート1/4</li> <li>Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Servicesリリース11.1.1.4.0パート2/4</li> <li>Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Fusion Editionリリース11.1.1.4.0</li> </ul>	<b>コンポーネント:</b> FDM Web アプリケーション <b>必須アセンブリ:</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>commonComponents</li> <li>productCommonComponents</li> <li>tools</li> <li>fdm</li> </ul> <b>必須ダウンロード・ファイル:</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Servicesリリース11.1.1.4.0パート1/4</li> <li>Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Servicesリリース11.1.1.4.0パート2/4</li> <li>Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Fusion Editionリリース11.1.1.4.0</li> </ul>	<b>コンポーネント:</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>FDM ロード・バランサ</li> <li>FDM タスク・マネージャ</li> <li>FDM サーバー</li> </ul> <b>必須アセンブリ:</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>commonComponents</li> <li>productCommonComponents</li> <li>tools</li> <li>fdm</li> </ul> <b>必須ダウンロード・ファイル:</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Servicesリリース11.1.1.4.0パート1/4</li> <li>Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Servicesリリース11.1.1.4.0パート2/4</li> <li>Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Fusion Editionリリース11.1.1.4.0</li> </ul> <p>使用するためのライセンスを購入済のアダプタについては、必要なアダプタをダウンロードします:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>Oracle Hyperion Financial Data Quality Management Adapter Suite, Fusion Edition リリース 11.1.1.4.0</li> <li>Oracle Hyperion Financial Data Quality Management Source Adapter for SAP リリース 11.1.1.4.0</li> <li>Oracle Hyperion Financial Data Quality Management Adapter for Financial Management, Fusion Edition</li> </ul>

クライアント層	Web 層	サービス層
Oracle Hyperion Financial Data Quality Management ERP Integration Adapter for Oracle Applications		
	<p><b>コンポーネント:</b></p> <p>Performance Management インテグレータ Web アプリケーション</p> <p><b>必須アセンブリ:</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● commonComponents</li> <li>● productCommonComponents</li> <li>● tools</li> <li>● aif</li> <li>● essbaseProductCommonComponents</li> </ul> <p><b>必須ダウンロード・ファイル:</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Servicesリリース11.1.1.4.0パート1/4</li> <li>● Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Servicesリリース11.1.1.4.0パート2/4</li> <li>● Oracle Hyperion Financial Data Quality Management ERP Integration Adapter for Oracle Applicationsリリース11.1.1.4.0</li> </ul>	

## ファイル・コンテンツのダウンロード

次の表は、E-Delivery での各ダウンロード・ファイルの内容を示しています。必要に応じて、この表を EPM System のインストールのプランニングに役立ててください。

**ヒント:** 各ダウンロード・ファイルの ZIP ファイル名を確認するには、E-Delivery を参照してください。

**表 3** ファイル・コンテンツのダウンロード

ZIP ファイル名	アセンブリ
Oracle Hyperion Provider Services リリース 11.1.1.4.0	<ul style="list-style-type: none"> <li>● analytic_provider_services_webapp</li> <li>● essbaseAddins</li> </ul>
Oracle Hyperion Profitability and Cost Management, Fusion Edition リリース 11.1.1.4.0	<ul style="list-style-type: none"> <li>● hpm</li> </ul>

ZIP ファイル名	アセンブリ
Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Architect, Fusion Edition リリース 11.1.1.4.0	<ul style="list-style-type: none"> <li>● bpm_architect_batch_client</li> <li>● bpm_architect_datasync</li> <li>● bpm_architect_generator</li> <li>● bpm_architect_services</li> <li>● bpm_architect_webapp</li> </ul>
Oracle Hyperion Financial Reporting, Fusion Edition リリース 11.1.1.4.0	<ul style="list-style-type: none"> <li>● biplus_configlibs</li> <li>● biplus_financial_reporting_client</li> <li>● biplus_financial_reporting_common</li> <li>● biplus_financial_reporting_services</li> <li>● biplus_financial_reporting_webapp</li> </ul>
Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Services リリース 11.1.1.4.0 パート 1/4	<ul style="list-style-type: none"> <li>● commonComponents</li> </ul>
Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Services リリース 11.1.1.4.0 パート 2/4	<ul style="list-style-type: none"> <li>● essbaseProductCommonComponents</li> <li>● productCommonComponents</li> <li>● tools</li> </ul>
Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Services リリース 11.1.1.4.0 パート 3/4	<ul style="list-style-type: none"> <li>● biplus_core_services</li> <li>● biplus_migration_utility</li> <li>● biplus_portlets_webapp</li> <li>● biplus_workspace_webapp</li> <li>● workspace_configlibs</li> <li>● calc</li> </ul>
Hyperion Enterprise Performance Management System Foundation Services リリース 11.1.1.4.0 パート 4/4	<ul style="list-style-type: none"> <li>● sharedServices</li> <li>● svc_client</li> </ul>
Hyperion Interactive Reporting リリース 11.1.1.4.0	<ul style="list-style-type: none"> <li>● biplus_configlibs</li> <li>● biplus_dds</li> <li>● biplus_interactive_reporting_client</li> <li>● biplus_interactive_reporting_services</li> </ul>
Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System Installer, Fusion Edition リリース 11.1.1.4.0	<ul style="list-style-type: none"> <li>● N/A。EPM System Installer が含まれます</li> </ul>
Oracle Essbase クライアント・リリース 11.1.1.4.0	<ul style="list-style-type: none"> <li>● essbase_administration_services_client</li> <li>● essbase_client</li> <li>● essbase_studio</li> <li>● essbaseAddins</li> <li>● svchve_client</li> </ul>

ZIP ファイル名	アセンブリ
Oracle Essbase サーバー・リリース 11.1.1.4.0	<ul style="list-style-type: none"> <li>● essbase_administration_services_webapp</li> <li>● essbase_integration_services</li> <li>● essbase_services</li> <li>● essbase_smartsearch_webapp</li> <li>● essbase_studio_services</li> <li>● essbaseAddins</li> </ul>
Oracle Essbase Spreadsheet Add-in リリース 11.1.2.1.0 for Microsoft Windows	N/A。Spreadsheet Add-in インストーラが含まれます。
Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Fusion Edition リリース 11.1.1.4.0	<ul style="list-style-type: none"> <li>● fdm</li> </ul>
Oracle Hyperion Financial Data Quality Management Adapter Suite, Fusion Edition リリース 11.1.1.4.0	<ul style="list-style-type: none"> <li>● N/A</li> </ul>
Oracle Hyperion Financial Data Quality Management Source Adapter for SAP リリース 11.1.1.4.0	<ul style="list-style-type: none"> <li>● N/A</li> </ul>
Oracle Hyperion Financial Data Quality Management Adapter for Financial Management, Fusion Edition	<ul style="list-style-type: none"> <li>● N/A</li> </ul>
Oracle Hyperion Financial Data Quality Management ERP Integration Adapter for Oracle Applications リリース 11.1.1.4.0	<ul style="list-style-type: none"> <li>● aif</li> </ul>
Oracle Hyperion Financial Management, Fusion Edition リリース 11.1.1.4.0	<ul style="list-style-type: none"> <li>● hfm_client</li> <li>● hfm_common</li> <li>● hfm_services</li> <li>● hfm_webapp</li> </ul>
Oracle Hyperion Performance Scorecard, Fusion Edition リリース 11.1.1.4.0	<ul style="list-style-type: none"> <li>● hps_webapp</li> </ul>
Oracle Hyperion Strategic Finance, Fusion Edition リリース 11.1.1.4.0	<ul style="list-style-type: none"> <li>● hsf_client</li> <li>● hsf_reader_client</li> <li>● hsf_server</li> </ul>
Oracle Hyperion Planning, Fusion Edition リリース 11.1.1.4.0	<ul style="list-style-type: none"> <li>● offlinePlanning</li> <li>● planning</li> <li>● rmi</li> </ul>
Hyperion SQR Production Reporting リリース 11.1.1.4.0	<ul style="list-style-type: none"> <li>● biplus_product_reporting_client</li> <li>● biplus_product_reporting_common</li> <li>● biplus_product_reporting_services</li> </ul>
Oracle Hyperion Smart View for Office, Fusion Edition リリース 11.1.1.4.0	<ul style="list-style-type: none"> <li>● N/A。Smart View インストーラが含まれます。</li> </ul>
Hyperion Web Analysis リリース 11.1.1.4.0	<ul style="list-style-type: none"> <li>● biplus_configlibs</li> <li>● biplus_webanalysis_webapp</li> </ul>



## この章の内容

インストールの順序 .....	47
インストールと構成でサポートされる文字 .....	49
EPM System 製品のインストール .....	49
サイレント・インストールの実行 .....	58
EPM System クライアントのインストール .....	61
Essbase サーバーの追加インスタンスのインストール .....	63
Windows Server 2008 または Windows Server 2008 R2 へのオペレーティング・システムのアップグレード .....	64

## インストールの順序

EPM System Installer を使用すると、複数の製品を 1 つのマシンに一度にインストール、構成および配置できます。EPM System Installer は、コンポーネントを正しい順序でインストールするため、マシンに一度にインストールする製品をいくつかでも選択できます。

製品をインストールする前に、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストール概要』の「インストールのプランニング・チェックリスト」を参照し、Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System の認証マトリックス(<http://www.oracle.com/technology/products/bi/hyperion-supported-platforms.html>)でシステム要件を確認します。

Oracle(R) E-Delivery のメディア・パック Readme を読んで、各自の環境に対して必須または任意の製品を確認してください。

スタンドアロン実行ファイルを使用して Smart View をインストールすることもできます。『Oracle Hyperion Smart View for Office ユーザー・ガイド』と『Oracle Hyperion Smart View for Office Readme』を参照してください。

**注：** Essbase をスタンドアロン・モードでインストールする場合(Shared Services を使用しない)場合、Shared Services のインストールをスキップできます。ただし、Oracle Hyperion Shared Services レジストリ・データベースを構成する必要があります。Shared Services をインストールせずに、Shared Services レジストリ・データベースを構成するには、114 ページの「[Shared Services をインストールしない Shared Services レジストリの設定](#)」を参照してください。

次の EPM System 製品は、EPM System Installer を使用してインストールおよび構成されません:

- Oracle Hyperion(R) Data Integration Management  
Data Integration Management をインストールする場合は、『Hyperion Data Integration Management Installation Guide』を参照してください。
- Data Integration Management Adapter  
Data Integration Management Adapter をインストールする場合は、『Hyperion Data Integration Management Installation Guide』を参照してください。
- Oracle Hyperion Data Relationship Management, Fusion Edition  
Data Relationship Management をインストールする場合は、『Oracle Hyperion Data Relationship Management Installation Guide』を参照してください。

## インストールの前提条件

次のインストールの前提条件に注意してください。

- EPM System リリース 11.1.1.0、11.1.1.1、11.1.1.2 または 11.1.1.3 から EPM System リリース 11.1.1.4 に移行するためにメンテナンス・リリースを適用する場合、または EPM System 製品を再インストールする場合は、最初に EPM System 製品のすべてのサービスを停止する必要があります。
- Windows 2008 にインストールしている場合、インストールする前に UAC を無効にします。(64 ページの「[Windows Server 2008 または Windows Server 2008 R2 へのオペレーティング・システムのアップグレード](#)」を参照してください。)
- Enterprise と Strategic Finance をインストールして統合する場合は、最初に Enterprise クライアントをインストールする必要があります。
- UNIX 環境で SSL を使用する場合は、EPM System をインストールおよび構成する前に、SSL をサポートする Apache 2.2.8 バイナリをダウンロードし、インストールします。EPM Workspace の構成中、デフォルトの EPM System インストールのかわりに、SSL 対応 Apache のインストールを選択します。[92 ページの「EPM Workspace Web サーバーの構成」](#)を参照してください。
- Redhat または Oracle Enterprise Linux 環境で Planning を使用し、簡体字中国語を使用する場合は、次のいずれかの方法で `LANG=zh_CN.utf8` ではなく、`LANG=zh_CN.GB18030` を指定する必要があります:
  - Planning をインストールして構成する前に、OS システム・ロケール変数で指定する(まだこの変数を設定していない場合)
  - Planning をインストールして構成した後、`setCustomParamsHyperionPlanning.sh` で指定する



# インストールと構成でサポートされる文字

EPM System Installer および Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System コンフィグレータを使用したインストールと構成でサポートされる文字は次のとおりです。

表 4 インストールと構成でサポートされる文字

フィールド	サポートされる文字	禁止されている文字
PATH	英数字、ダッシュ(-)、アンダースコア(_)、ピリオド(.)およびチルダ(~)。チルダは Microsoft Windows でのみサポートされています。	その他すべて
ホスト名	英数字、ダッシュ(-)およびドット(.)	その他すべて
ユーザー名	禁止されている文字を除く、英語以外の文字(拡張文字と 2 バイト文字)を含む英数字	+ . * / # [ ] { } ( ) ; : , @ ! "
クラスタ、データベース名および DSN 名などの他の一般的なフィールド	禁止されている文字を除く、英語以外の文字(拡張文字と 2 バイト文字)を含む英数字	+ . - * ¥ / # [ ] { } ( ) ; : , @ ! "

## EPM System 製品のインストール

EPM System は、グラフィカル・ユーザー・インタフェースを使用するか、コンソール・モード・インタフェースを使用するか、またはサイレント・モードのインストール応答ファイルを使用して対話なしに実行するかのいずれかの方法でインストールできます。

EPM System 製品をインストールする場合は、実行するインストールのタイプを選択します:

- 新規インストール
- メンテナンス・リリースの適用
- このリリースを再インストール

各タイプのインストールに対して、EPM System 製品を層ごとにインストールするか、または個々のコンポーネントごとにインストールするかを選択できます。

- 選択した製品のすべての製品コンポーネントを層(クライアント、Web アプリケーションおよびサービス)ごとにインストールするには「コンポーネントを層ごとに選択」を選択します。インストールの場所およびインストールする製品を指定するオプションもあります。
- 各製品コンポーネントについてインストールするサービスとコンポーネントを詳細に制御するには、「コンポーネントを個別に選択」を選択します。

層ごとに EPM System 製品をインストールことをお勧めします。 [付録 A 「インストール中の処理」](#) を参照してください。

**注：** Windows マシンで、EPM System Installer および EPM System コンフィグレータを管理者として実行します。すべての EPM System 製品に対して同じユーザーとして、インストールおよび構成を行ってください。Windows 2008 を使用している場合、UAC を無効にしてインストールしてください([64 ページの「Windows Server 2008 または Windows Server 2008 R2 へのオペレーティング・システムのアップグレード」](#)を参照)。

**注：** UNIX マシンで、root ユーザーを使用してインストールおよび構成を行わないでください。すべての EPM System 製品に対して同じユーザーとして、インストールおよび構成を行ってください。Oracle Application Server を使用している場合、Oracle Application Server をインストールする際に使用した同じユーザーを使用して、EPM System 製品をインストールおよび構成する必要があります。他に Oracle 製品をインストール済の場合、EPM System 製品をインストールするユーザーは、その他の Oracle 製品をインストールしたユーザーと同じグループに属している必要があります。たとえば、両方のユーザーは oinstall に属している必要があります。EPM System 製品をアップグレードしている場合、前のリリースでコンポーネントをインストールする際に複数のユーザーを使用していたとしても、この要件に従う必要があります。

► EPM System 製品をインストールするには:

#### 1 方法を選択します:

- (Windows) EPM System Installer ファイルを抽出したルート・ディレクトリで installTool.cmd をダブルクリックします。
- (Windows) Windows コンソールで、EPM System Installer ファイルを抽出したルート・ディレクトリに移動し、installTool.cmd -console と入力します。
- サイレント・インストールの応答ファイルを作成します。[58 ページの「サイレント・インストールの実行」](#)を参照してください。
- (UNIX) EPM System Installer ファイルを抽出したルート・ディレクトリに移動し、./installTool.sh と入力します。
- (UNIX) EPM System Installer ファイルを抽出したルート・ディレクトリに移動し、./installTool.sh -console と入力します。

EPM System Installer では、起動中にいくつかの初期チェックが実行されます。コマンド・プロンプト・ウィンドウに、Windows 2008 システムで User Account Control (UAC) が有効になっているというメッセージが表示された場合は、UAC を無効にして再起動してから、EPM System Installer を再起動します。

EPM System Installer が起動します。

**ヒント：** EPM System Installer の最初のページは、EPM System Installer ・ ウィンドウから離れたり、初期状態のウィンドウの位置を変更したりすると、他のウィンドウの背後に隠れて開く場合があります。ウィザードの最初のページに切り替えるには、[Alt]を押しながら[Tab]を押します。

## 2 言語を選択します。

EPM System Installer 全体を通して、選択した言語でのインストールにコンポーネントが利用できない場合、コンポーネントはアスタリスク(\*)が付いて網掛けで表示されます。

## 3 EPM System Installer の各ページを確認して完了し、「次へ」をクリックして次のページに移動します。

次の表に、EPM System Installer の各ページの詳細情報を参照できるリンクを示します。

**表 5** EPM System Installer のページ

ページ	参照
ようこそ	<a href="#">52 ページの「ようこそ」</a>
宛先	<a href="#">52 ページの「宛先」</a>
インストール・タイプ	<a href="#">53 ページの「インストール・タイプ」</a>
製品の選択	<a href="#">54 ページの「製品の選択」</a>
確認	<a href="#">57 ページの「確認」</a>
進行状況	<a href="#">58 ページの「進行状況」</a>
要約	<a href="#">58 ページの「要約」</a>

## 4 インストールが完了したら、「構成」をクリックして EPM System コンフィグレータを使用して製品を構成するか、または「終了」をクリックして EPM System Installer を閉じます。

Hyperion 製品の構成の詳細は、[第 4 章「EPM System 製品の構成」](#)を参照してください。

製品をインストールし、構成した後、[第 5 章「EPM System 製品の開始と停止」](#)の説明に従いサービス開始します。その後、EPM System 診断を使用して、インストールが成功し、コンポーネントが通信中であることを検証できます。[第 6 章「インストールの検証」](#)を参照してください。

## ようこそ

- ▶ インストールを続行する前に、前提条件を十分に確認してください。システムが EPM System Installer を実行するための前提条件を満たしていることを確認したら、「次へ」をクリックしてインストールを続行します。

EPM System Installer は、ユーザー・システムのオペレーティング・システムがサポートされているかどうか、インストールを実行するための最小メモリ要件を満たしているかどうか、およびインストールを実行しているユーザーに管理権限があるかどうかを確認します。また、EPM System Installer は、コンピュータのホスト名の検出を試みます。コンピュータの構成方法によっては、コンピュータのホスト名が IP アドレスに解決される場合があります。マシンのホスト名が IP アドレスに解決される場合、EPM System Installer によって、警告が表示されます。この問題を解決し、IP アドレスではなくホスト名を指定してから続行することをお勧めします。

チェック・マークは、システムが EPM System Installer の前提条件を満たしていることを示します。前提条件項目のいずれかにチェック・マークが表示されていない状態で続行を選択した場合、インストールが成功しない場合があります。

**ヒント：** hosts ファイルを使用してホスト名を解決している場合、ホスト名は、hosts ファイル内の最初のエントリに解決されます。分散環境で通信の問題を予防するには、完全修飾名が Shared Services レジストリに保管されるように、hosts ファイルの最初のエントリがマシンの完全修飾ドメイン名になるようにしてください。

## 宛先

- ▶ インストール先の場所を指定するか、またはその場所に移動して選択し、「次へ」をクリックします。

このマシンに EPM System 製品を再インストールする場合、インストール内容に製品を追加する場合、またはメンテナンス・リリースを適用する場合は、Hyperion ホーム・ディレクトリの既存の場所がデフォルトのインストール先として記載され、変更はできません。

---

**注意** 宛先のパスに半角スペースを含められません。たとえば、c:\Program Files は使用できません(ショート・パス表記を使用する場合を除く)。

---

指定する宛先が、Hyperion ホーム・ディレクトリになります。[16 ページの「Hyperion ホームのディレクトリについて」](#)を参照してください。このマシンにインストールする予定のすべての製品をインストールするために必要なディスク・スペースが十分であることを確認してください。環境内の各マシンに対して、インストール先および Hyperion ホーム・ディレクトリを選択します。

ディスク容量の要件は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストール概要』を参照してください。

**注：** 前に EPM System Installer を使用し、インストールの選択内容をファイルに保存している場合は、選択内容をロードしてインストールの宛先と製品を事前に移入できます。同じマシンに同じ製品をインストールする場合、この方法は便利です。「ロード」をクリックして、保存済の選択内容のファイルに移動し、「開く」をクリックします。

## インストール・タイプ

- ▶ インストール・タイプを選択し、「次へ」をクリックします。インストール・タイプがこのマシンに適用不可の場合、このオプションは使用できません。

次のインストール・タイプから選択します:

- **新規インストール**

このコンピュータに初めて EPM System 製品をインストールするか、または Essbase サーバーの追加インスタンスをインストールしている場合は、このオプションを選択します。

Essbase サーバーの追加インスタンスをインストールする場合、その後のインストールでは Essbase のインストール・ディレクトリに `-n` が追加されます。

[63 ページの「Essbase サーバーの追加インスタンスのインストール」](#)を参照してください。

最初にインストールしなかったコンポーネントを追加でインストールする場合は、このオプションを選択します。

「新規インストール」オプションが使用できない場合、EPM System 製品の前のバージョンが不適切に削除されている可能性があります。マシン上の `vpd.properties` (通常、Windows の場合 `/windows` ディレクトリ、UNIX の場合 `$HOME` にあります)を検索し、名前を変更します。この他のトラブルシューティングのヒントとして、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストールおよび構成トラブルシューティング・ガイド』を参照してください。

- **メンテナンス・リリースの適用**

リリース 11.1.1.x をすでにインストールしている場合は、このオプションを選択します。このリリースは、リリース 11.1.1.x のメンテナンス・リリースを提供します。

メンテナンス・リリースを適用している場合は、まずすべての EPM System サービスを停止する必要があります。

メンテナンス・リリースを一部の製品のみに適用する場合は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストール概要』のリリースの互換性に関する説明を参照してください。

- **このリリースを再インストール**

既存のインストールを修復する場合など、この EPM System 製品のこのバージョンをすでにインストールし、それを再インストールする必要がある場合は、このオプションを選択します。

EPM System 製品を再インストールする場合は、まずすべての EPM System サービスを停止する必要があります。

Essbase サーバーの複数のインスタンスをインストールしている場合、再インストールできるのは最初のインスタンスのみです。Essbase サーバーの後続インスタンスを再インストールする必要がある場合、最初のインスタンスを先にアンインストールしてください。

**注：** 1つのセッションに複数のインストール・タイプを混在させることはできません。たとえば、1つの製品の新規インストールを実行すると同時に、別の製品の再インストールを実行することはできません。

インストールの各タイプに対して、次のいずれかのオプションを選択できます：

- 選択した製品のすべてのコンポーネントを層ごとにインストールする場合、「コンポーネントを層ごとに選択」を選択します。インストールの場所およびインストールする製品を指定するオプションもあります。インストールをカスタマイズする場合を除き、この方法が最も簡素な推奨される方法です。

Essbase の複数のインスタンスがインストールされている場合、再インストールできるのは最初のインスタンスのみです。

- 各製品コンポーネントにインストールするサービスとコンポーネントをさらに細かく制御する場合は、「コンポーネントを個別に選択」を選択します。

各タイプのインストールでインストールされる内容については、[付録 A 「インストール中の処理」](#)を参照してください。「コンポーネントを個別に選択」を選択した場合のみ使用可能になるコンポーネントもあります。

## 製品の選択

- ▶ 「コンポーネントを層ごとに選択」を選択した場合は、1つ以上の層およびインストールする製品とコンポーネントを選択し、「次へ」をクリックします。「コンポーネントを個別に選択」を選択した場合、インストールする製品および製品のコンポーネントを選択し、「次へ」をクリックします。

各層にインストールされる内容については、[21 ページの「層およびインストール・アセンブリごとのコンポーネントのインストール」](#)を参照してください。

一般的に、どのコンピュータにも任意のコンポーネントを組み合わせてインストールできます。製品の選択について、次の点に注意してください：

- アセンブリが正しい場所にダウンロードされており、選択したコンポーネントが、インストール先のプラットフォームでサポートされている場合のみ、製品をインストールできます。製品が、「製品の選択」ページで使用不可の場合、アセンブリが正しい場所にあることを確認してください。[第 2 章 「インストールの準備」](#)を参照してください。トラブルシューティングのヒントについては、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストールおよび構成トラブルシューティング・ガイド』を参照してください



- 製品のコンポーネントを選択すると、その情報およびステータスが画面の下部に表示されます。インストールに **Microsoft Internet Information Server (IIS)**が必要で、それがインストールされていない場合は、画面の下部に警告が表示され、IIS をインストールするまで先に進めません。サポートされていないプラットフォームにインストールしようとする、警告が表示されます。
- インストールできるのは、**Smart View クライアント**または **Visual Explorer** 付きの **Smart View クライアント**で、同時に両方はインストールできません。
- 「新規インストール」を選択し、製品のこのリリースをすでにインストールしている場合、Essbase を除く製品は「製品の選択」ページに表示されません。(複数の Essbase インスタンスをインストールできます。63 ページの「[Essbase サーバーの追加インスタンスのインストール](#)」を参照してください。)
- コンポーネントが選択されていても使用できない場合があります(選択解除はできません)。これは、選択された別のコンポーネントに必要なコンポーネントです。
- 64 ビット・コンポーネントがすでにインストールされている 64 ビット・システムに 32 ビット・コンポーネントをインストールできません。32 ビット・コンポーネントを別のシステムにインストールするか、すべての 32 ビット・コンポーネントを 32 ビット・システムにインストールする必要があります。特に、FDM (32 ビット)および Strategic Finance (32 ビット)は、Financial Management (64 ビット)および Performance Management Architect (64 ビット)が配置されているコンピュータには配置できません。32 ビット・プラットフォームでは、すべての EPM System 製品が共存できます。

図 1 コンポーネントを層ごとに選択

Select the products: [Hide Unavailable Products](#)

Products	<input checked="" type="checkbox"/> Client	<input checked="" type="checkbox"/> Web Appl	<input checked="" type="checkbox"/> Services
Foundation			
Shared Services		<input checked="" type="checkbox"/>	
Workspace		<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
Smart View Client	<input checked="" type="checkbox"/>		
Performance Management Architect	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
Calculation Manager		<input checked="" type="checkbox"/>	
Planning	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	
Financial Management	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
Strategic Finance	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
Essbase	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
Smart View with Visual Explorer Client	<input type="checkbox"/>		
Interactive Reporting	<input checked="" type="checkbox"/>		<input checked="" type="checkbox"/>
SQR Production Reporting	<input checked="" type="checkbox"/>		<input checked="" type="checkbox"/>
Financial Reporting	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>
Web Analysis	<input checked="" type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	

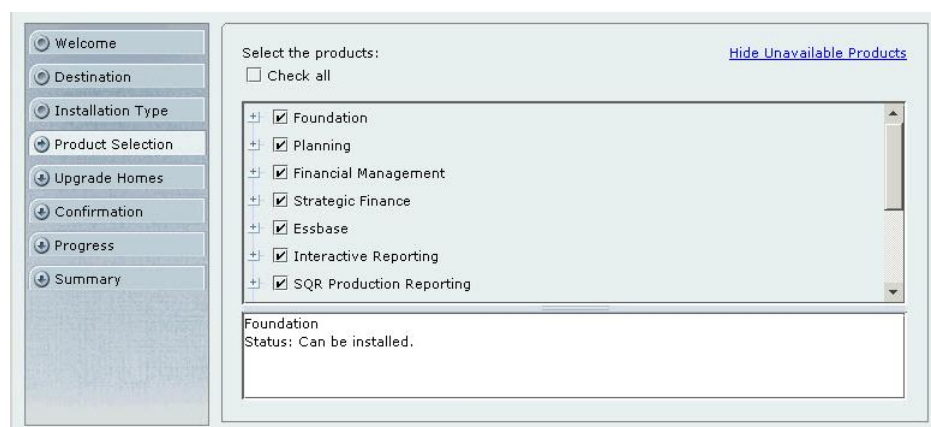
Shared Services Web Application and OpenLDAP Service  
Status: Can be installed.

次の表に、「コンポーネントを層ごとに選択」を選択した場合のオプションを示します。

表 6 「コンポーネントを層ごとに選択」のインストール・オプション

アクション	詳細
層ごとにインストールするには、インストールする層を選択します(クライアント、Web アプリケーション、またはサービス)。	EPM System Installer では、選択した層でインストール可能なすべての製品コンポーネントが自動的に選択されます。インストール・アセンブリをダウンロードし、正しい/assemblies ディレクトリに抽出している場合、コンポーネントはインストール可能になります。EPM System Installer では、選択した製品に必要なコンポーネントが自動的に選択されます。
選択した層に対してインストールしない製品は選択解除します。	<p>特定のマシンにすべての製品を一度にインストールするように選択できます。EPM System Installer により、正しい順序でインストールされます。</p> <p>依存するコンポーネントを選択する必要がある場合、EPM System Installer はそれを知らせるメッセージを表示します。</p> <p><b>注：</b> バージョン番号が付いているか、または横に「再インストール」と記載されているコンポーネントは、すでにインストールされています。コンポーネントをインストールするには、別のインストール・タイプを選択してください。</p> <p><b>ヒント：</b> セルをクリックすると、ウィンドウの下部のボックスに表示される選択内容の説明を確認できます。</p>
このマシンにインストールしない層を選択解除します。	層の選択を解除すると、EPM System Installer は、その層のすべての製品とコンポーネントの選択を解除します。
使用できない製品の表示/非表示	<p>インストール・アセンブリが使用可能な製品のみを表示するには、「使用できない製品の非表示」を選択します。</p> <p>すべての製品を表示するには、「使用できない製品の表示」を選択します。</p>

図 2 コンポーネントを個別に選択



次の表に、「コンポーネントを個別に選択」を選択した場合のオプションを示します。

表 7 「コンポーネントを個別に選択」のインストール・オプション

アクション	詳細
インストールする製品および製品コンポーネントを選択します。	エントリを展開および縮小すると、各製品およびコンポーネントに対して特定のオプションを選択または選択解除できます。



アクション	詳細
すべて選択解除/すべて選択	すべての製品を選択するには「すべて選択」、すべての製品を選択解除するには「すべて選択解除」を選択します。
使用できない製品の表示/非表示	インストール・アセンブリが使用可能な製品のみを表示するには、「使用できない製品の非表示」を選択します。 すべての製品を表示するには、「使用できない製品の表示」を選択します。

Essbase の追加インスタンスをインストールする場合は、[63 ページの「Essbase サーバーの追加インスタンスのインストール」](#)を参照してください。

## 確認

- ▶ インストールする製品の要約を確認します。必要に応じて、「戻る」をクリックして修正します。インストールを開始するには、「次へ」をクリックします。

ディスク・スペースが不十分な場合は、EPM System Installer によって警告が表示されます。

「インストール・タイプ」列には、次のいずれかが表示されます:

- これが新規インストールの場合は、「インストール」。
- この EPM System 製品の同じリリースの再インストールの場合は、「再インストール」。
- EPM System 製品のリリース 11.1.1.0、11.1.1.1、11.1.1.2 または 11.1.1.3 からリリース 11.1.1.4 へ移行するメンテナンス・インストールの場合は、「メンテナンス」。

インストールの選択内容を保存して、別のコンピュータで同じインストールを実行するかまたはサイレント・インストールの応答ファイルのベースとして使用するには、[57 ページの「インストールの選択項目の保存」](#)を参照してください。

## インストールの選択項目の保存

同じコンポーネント・セットを別のコンピュータの同じ名前の Hyperion ホーム・ディレクトリの場所にインストールする予定の場合、インストール時の選択内容をファイルに保存できます。その後、インストール時に別のコンピュータに選択項目をロードして、EPM System Installer ページの「宛先」および「製品の選択」を事前に設定できます。

- ▶ インストールの選択項目を保存するには、「保存」をクリックして場所を参照し、ファイル名を指定して「保存」をクリックします。

この手順では、サイレント・インストールの応答ファイルのベースとして使用できる編集可能ファイルが作成されます。応答ファイルの使用に関する詳細は、[60 ページの「保存した選択項目のロード」](#)を参照してください。

## 進行状況

- ▶ インストールを取り消すには、「取消し」をクリックします。

EPM System Installer により、インストールするアセンブリのリストが作成された後、進行状況のインディケータの表示が開始されます。選択した製品の数によっては、処理に数分かかる場合があります。EPM System Installer により、各アセンブリのインストールの完了を示す進行状況が表示されます。

「取消し」をクリックすると、EPM System Installer は、現在のアセンブリのインストールが完了するまで待機し、その後停止します。すでにインストール済のアセンブリのインストールは元に戻されません。インストール済のアセンブリを削除するには、EPM System アンインストールを使用します。第 10 章「EPM System のアンインストール」を参照してください。

**注：**「Oracle インベントリの作成」では、今後のサービス修正プログラムに対するインフラストラクチャを設定します。

## 要約

- ▶ インストールの要約を確認し、「構成」をクリックして EPM System コンフィグレータを起動するか、「終了」をクリックして EPM System Installer を閉じます。

EPM System Installer により、インストールが成功したかどうかを示されます。インストールが部分的に失敗している場合、EPM System Installer により、どのアセンブリのインストールが失敗しているかが記録されます。エラーの詳細はログ・ファイルを確認してください。ログ・ファイルは、HYPERION\_HOME/logs/install にあります。各アセンブリには、product-install.log という名前のログ・ファイル(例:hss-install.log)があり、インストールには、installTool-install.log というログ・ファイルがあります。

EPM System 製品の構成の詳細は、第 4 章「EPM System 製品の構成」を参照してください。

製品をインストールし、構成した後、第 5 章「EPM System 製品の開始と停止」の説明に従いサービス開始します。その後、EPM System 診断を使用して、インストールが成功し、コンポーネントが通信中であることを検証できます。第 6 章「インストールの検証」を参照してください。

## サイレント・インストールの実行

サイレント・インストールでは、各マシンでインストール設定を手動で指定せずに EPM System 製品を複数のコンピュータにインストールできるように、インストール・プロセスが自動化されます。

**注：** メンテナンス・リリースを適用する場合もサイレント・インストールを実行できます。

サイレント・インストールを有効にするには、応答ファイルにインストール設定を記録します。その後、コマンド・ラインから、応答ファイルに保存したインストール・オプションを使用して、サイレント・インストールを実行できます。

► インストール設定を記録してサイレント・インストールを実行するには:

- 1 **EPM System Installer** を含むディレクトリに移動します。
- 2 コマンド・ラインから次のコマンドを実行します:

```
installTool.cmd -record  
filename
```

Windows の場合、または

```
installTool.sh -record  
filename
```

UNIX の場合

filename には、応答ファイルの絶対パスまたはファイル名が含まれます。

ファイルは XML フォーマットで保存されますが、.xml 拡張子でファイルを保存する必要はありません。

EPM System Installer が起動します。

**ヒント：** EPM System Installer の最初のページは、他のウィンドウの背後に隠れて開く場合があります(EPM System Installer・ウィンドウから離れたり、初期状態のウィンドウの位置を変更したりした場合)。ウィザードの最初のページに切り替えるには、[Alt]を押しながら[Tab]を押します。

- 3 **EPM System Installer** の実行中、記録するオプションを指定します。インストール・オプションの追加情報については、[49 ページの「EPM System 製品のインストール」](#)を参照してください。

インストール・オプションは、XML フォーマットの応答ファイルに記録されます。応答ファイルを後で修正し、インストール・オプションを変更することができます。

これで、サイレント・モードでインストールを実行する準備ができました。

- 4 インストールを実行するマシンに応答ファイルをコピーします。また、インストールを実行するマシンからアクセスできるネットワーク・ドライブにファイルをコピーすることもできます。
- 5 コマンド・ラインから次のコマンドを入力します:

```
installtool.cmd -silent
```

filename

Windows の場合、または

```
installtool.sh -silent  
filename
```

UNIX の場合。

インストールはバックグラウンドで実行されます。

**注：** サイレント応答ファイルは、EPM System のリリース 11.1.1.0、11.1.1.1 および 11.1.1.2 間で互換性がありません。EPM System リリース 11.1.1.0 または 11.1.1.1 で使用するサイレント応答ファイルを作成した場合は、EPM System リリース 11.1.1.2 用に再作成する必要があります。リリース 11.1.1.4 に移行するメンテナンス・リリースを適用する際は、ERP Integrator をインストールする場合のみサイレント応答ファイルを再作成する必要があります。

## 保存した選択項目のロード

EPM System Installer からインストールの設定も記録できます。

- ▶ インストール時にインストールの設定を記録するには、インストールの確認ページで、「保存」をクリックして場所を参照し、ファイル名を指定して「保存」をクリックします。ファイルは、サイレント・インストール時と同じフォーマットで保存されます。
- ▶ 同じインストール先および製品コンポーネントの選択項目を使用してインストールを再現するには、EPM System Installer を開始して、インストール先ページで「ロード」をクリックし、保存した選択ファイルを参照して「開く」をクリックします。

## 応答ファイルの変更

応答ファイルを作成した後、そのファイルを変更し、特定のマシンのインストール・オプションをカスタマイズできます。たとえば、すべての製品のマスター・サイレント・ファイルを作成した後、各マシンのマスター・サイレント・ファイルを作成し、Hyperion ホーム・ディレクトリの場所を変更して、このマシンにインストールする製品コンポーネントのみを保持します。

- ▶ 応答ファイルを変更するには:
  - 1 任意のテキスト・エディタで応答ファイルを開きます。このファイルは XML フォーマットです。
  - 2 次のオプションを使用してファイルを編集します。
    - <HyperionHome> - Hyperion ホーム・ディレクトリの場所。

- <SelectedProducts> - 特定の層にインストールする製品コンポーネント。  
<Product name>、<ProductComponent name>、<InstallTier>、および  
<Component>に変更を加えます。
- <Product name> - 製品の名前。製品の名前は、XML 属性のように、引用  
符で囲みます。
- <ProductComponent> - 製品のコンポーネント。コンポーネント名は、XML  
属性のように、引用符で囲みます。
- <InstallTier> - コンポーネント・インストール用のインストール層  
(Client、Service、WebApplication)。
- <Component> - インストールするサービス。

### 3 ファイルを XML フォーマットで保存します。

## EPM System クライアントのインストール

一部の EPM System クライアントは、EPM System Installer でインストールします。  
ただし、次のクライアント製品には、それぞれ独自のインストーラがあります。

- Smart View
- Oracle Essbase Spreadsheet Add-in

ダウンロードするファイルの詳細は、[第 2 章「インストールの準備」](#)を参照して  
ください。

**ヒント：** ターミナル・サービスを使用して EPM System クライアントをインス  
トールする場合は、セッションをインストール・モードに切り替えてか  
ら、クライアント・インストーラを実行します(change user /  
install)。

## Smart View のインストール

► Smart View をインストールするには:

- 1 Microsoft Excel が「Visual Basic」オプションを使用してインストールされていること  
を確認します。
- 2 方法を選択します:
  - eDelivery から、Smart View をダウンロードします。Visual Explorer を使用  
するライセンスを保有している場合、ファイル名は smartviewHVE.exe で  
す。それ以外の場合は、smartview.exe となります。
  - EPM Workspace がインストールおよび構成されている場合、Smart View イ  
ンストーラを EPM Workspace 内から起動できます。「ツール」、「インストー  
ル」、「Smart View」の順に選択します。

- 3 インストール・ウィザードを続行し、インストールが完了したら、「終了」をクリックします。次に Microsoft Office アプリケーションを開いたとき、Smart View が表示されます。
- 4 Visual Explorer ライセンス所有者のみ: Visual Explorer をユーザーに使用可能にするには、smartviewHVE.exe を HYPERION\_HOME/common/epmstatic/wspace/SmartView にコピーし、名前を smartview.exe に変更します。

**ヒント:** この手順を実行する前に、既存の smartview.exe ファイルの名前を変更します。

管理者は、Smart View について、サイレント・インストール(設定を毎回指定する必要のないインストール)を使用可能にすることができます。インストールを自動化するために、サイレント・インストール・コマンドをスクリプトに含めることができます。

▶ サイレント・インストールを実行するには:

- 1 コマンド・ライン・プロンプトを開きます。
- 2 Smart View インストーラのあるディレクトリに移動します。
- 3 次のいずれかのコマンドを実行します:
  - デフォルトのディレクトリにインストールするには、SmartView.exe /s /v"/qn URL=http://server:19000/workspace/SmartViewProviders" を実行します。
  - 別のディレクトリにインストールするには、SmartView.exe /s /v"/qn INSTALLDIR=targetPath"を実行します。たとえば、SmartView.exe /s /v"/qn INSTALLDIR=D:¥"のようになります。
  - サイレント・インストールを実行し、インストール・シーケンスをログに記録するには、SmartView.exe /s /v" /qn /l\*c log を実行します。例:  
SmartView.exe /s /v" /qn /l\*c C:\sv\_silent\_install.log"

Visual Explorer のユーザーの場合は、コマンド・ラインで SmartView.exe を SmartViewHVE.exe に置き換えます。

## Spreadsheet Add-in のインストール

▶ Spreadsheet Add-in をインストールするには:

- 1 Microsoft Excel が「Visual Basic」オプションを使用してインストールされていることを確認します。
- 2 Essbase-ExcelAddin-11114.zip を E-Delivery からダウンロードし、このファイルを一時的な場所に解凍し、Spreadsheet Add-in.exe を起動します。

リモート・デスクトップを使用して Spreadsheet Add-in をインストールする場合、管理コンソール・セッションを使用してインストールします。(mstsc /admin または mstsc /console を使用してリモート・デスクトップを起動します。)

管理者ではなく、パワー・ユーザーとして Spreadsheet Add-in を使用している場合は、ESSBASEPATH を手動で設定する必要があります。

HYPERION\_HOME 環境変数が定義されている場合、Spreadsheet Add-in が HYPERION\_HOME/products/Essbase/EssbaseClient にデフォルトでインストールされます。HYPERION\_HOME 環境変数が定義されていない場合、Spreadsheet Add-in が HYPERION\_HOME/products/ExcelAddin にデフォルトでインストールされます。Spreadsheet Add-in インストーラにより、スタート・メニュー・アイテムが作成されます: **Oracle**、**Essbase**、**Essbase Client**。

➤ Spreadsheet Add-in のサイレント・インストールを実行するには:

- 1 コマンド・ライン・プロンプトを開きます。
- 2 Spreadsheet Add-in インストーラのあるディレクトリに移動します。
- 3 次のコマンドを実行します:

```
Spreadsheet Add-in.exe" /S /v"/qn INSTALLDIR=
targetPath
FOR_CURRENT_USER=
user
/l*v
log
"
```

ここで:

- targetPath - インストール・ディレクトリ。デフォルト値は、c:/Oracle/Middleware/EPMSysstem11R1 です。HYPERION\_HOME 環境変数が定義されている場合、この値は無視されます。
- user - Spreadsheet Add-in をすべてのユーザーに対してインストールする場合は 1、Spreadsheet Add-in を現在のユーザーのみに対してインストールする場合は 2 を指定します。デフォルト値は 1 です。
- log - ログ・ファイルのパス。

例:

```
Spreadsheet Add-in.exe" /S /v"/qn INSTALLDIR=C:\Oracle\ FOR_CURRENT_USER=1
/l*v C:\ESS_install.log"
```

## Essbase サーバーの追加インスタンスのインストール

1 つのコンピュータに Essbase サーバーの複数のインスタンスをインストールできます。追加のインスタンスは、同じ Hyperion ホーム・ディレクトリにインストールされ、同じ Shared Services が共有されます。最初のインスタンスのインストールと構成が完了してから、続行してください。



Essbase サーバーの追加インスタンスをインストールするには、EPM System Installer で「新規インストール」を選択します。インストール先のディレクトリは、-n で更新されます。たとえば、Essbase サーバーの最初のインスタンスが HYPERION\_HOME/products/essbase にインストールされている場合、2 番目のインストール・ディレクトリは、HYPERION\_HOME/products/essbase-2 になります。

**注：** 追加インストールは、Essbase サーバーの個別インストールです。したがって、同じコンピュータにある他の Essbase サーバー・インストールのセキュリティ構成やオブジェクトは共有しません。

Essbase サーバーの複数のインスタンスが 1 つのコンピュータにインストールされている場合、各インスタンスに異なるポート番号およびポート範囲を指定する必要があります。デフォルトでは、Essbase サーバーの最初のインスタンスには、EPM System コンフィグレータで指定した、ポート番号 1423 が使用されます。追加のインスタンスには、EPM System コンフィグレータで構成する際に別のポート番号およびポート範囲を指定します。100 ページの「Essbase サーバーの追加インスタンスの構成と開始」を参照してください。

## Windows Server 2008 または Windows Server 2008 R2 へのオペレーティング・システムのアップグレード

EPM System をリリース 11.1.1.4 にアップグレードした後、標準のオペレーティング・システムの手順に基づいて、Windows オペレーティング・システムを Windows Server 2008 または Windows Server 2008 R2 にアップグレードできます。一部、このプロセス中にボックスの再イメージ化をした方がよい場合があります。次の手順で、この方法を説明します。

### 手順 1: ソース・マシンのデータおよびバイナリのバックアップ

各 2003 ソース・マシンで、次を実行します:

1. すべての EPM System サービスをシャット・ダウンし、Windows タスク マネージャを使用して、プロセスがシャット・ダウンしていることを確認します。
2. EPM System データ・ファイルが存在するマシンの HYPERION\_HOME およびその他のディレクトリの内容をバックアップします。

たとえば、Essbase データベースおよびレポート定義の場所などがあります。

3. ソース・マシンに EPM System をインストールしたユーザーのホーム・ディレクトリで、.oracle.products および set\_hyphome\_1.bat をバックアップします。



4. Essbase サーバーまたは Integration Services がこのマシンに配置されている場合、ODBC データ・ソースのリストを取得します。  
データ・ソースのリストを取得するには、「コントロール・パネル」を開いて、「管理ツール」を選択し、すべての DSN を記録します。ODBC データ・ソースは、再イメージ化されたマシンで再作成する必要があります。
5. ソース・マシン内のカスタマイズされた環境変数をすべて記録します(Essbase の `ess_css_jvm_option1` または `ess_jvm_option1` など)。  
環境変数は、再イメージ化されたマシンで再作成する必要があります。

## 手順 2: マシンを Windows Server 2008 または Windows Server 2008 R2 に再イメージ化します。

次の制限が適用されます:

- ソース・オペレーティング・システムが 32 ビットの場合、新しいオペレーティング・システムも 32 ビットである必要があります。
- ソース・オペレーティング・システムが 64 ビットの場合、新しいオペレーティング・システムも 64 ビットである必要があります。
- 新しいサーバーのホスト名は、ソース・サーバーのホスト名と同じである必要があります。
- ドライブ名およびドライブのスペースは、ソースとターゲットで一致している必要があります。

## 手順 3: EPM System の配置用のマシンの準備

► EPM System の配置用のマシンを準備するには:

- 1 手順 1 でバックアップしたデータを再イメージ化されたマシンに復元します。  
データは、ソースと同じ場所に復元する必要があります。
- 2 ソース・マシンの DSN を再イメージ化されたマシンに複製し、ODBC データ・ソースを再作成します。  
Essbase または Integration Services で、DSN の形式でソース上のデータ・ソースを使用している場合、同じ DSN が再イメージ化されたマシンで使用可能で、かつ構成されている必要があります。
- 3 再イメージ化されたマシンで、手順 1 で記録した Windows 環境変数を再定義します(例: `ess_css_jvm_option1`、`ess_jvm_option1`)。
- 4 Smart View がソース・システムにインストールされていた場合、Smart View を再イメージ化されたマシンで再インストールします。

## 手順 4: 配置の修復および EPM System の再起動

▶ 次の手順を行います:

- 1 EPM System Installer を実行し、「このリリースを再インストール」を選択します。

ターゲット・サーバーにインストールされた製品の同じセットが、新しいサーバーで修復可能になります。これらすべての製品を修復する必要があります。

- 2 EPM System コンフィグレータを使用して、データベースの構成、アプリケーション・サーバーの配置など環境を再構成します。データベース・パネルのデータベースを再利用します。
- 3 EPM System を開始します。
- 4 EPM System 診断を使用して、構成を検証します。

## この章の内容

EPM System コンフィグレータについて .....	67
初期必要条件を満たす .....	68
構成順序 .....	69
製品構成タスクの要約 .....	71
EPM System コンフィグレータの使用方法 .....	74
サイレント構成の実行 .....	113
Shared Services をインストールしない Shared Services レジストリの設定 .....	114
構成中の処理 .....	115
構成のトラブルシューティング .....	115

## EPM System コンフィグレータについて

EPM System コンフィグレータは、コンピュータに初めて EPM System 製品をインストールするときにインストールされ、そのコンピュータ上にインストールされるすべての製品の構成に使用されます。EPM System 製品がインストールされる各コンピュータの EPM System コンフィグレータを使用します。(クライアント層では構成は必要ありません。)

EPM System コンフィグレータから、EPM System 製品の構成と再構成のためのこれらのタスクを実行できます。すべての製品ですべてのタスクが必要というわけではありません。

- Shared Services に対する「データベースの構成」 - Shared Services 用に構成するデータベースで、Shared Services レジストリが格納されます。
- 「共通設定」 - EPM System コンフィグレータにより、構成する各マシン上につき 1 回「共通設定」ページが表示されます。
- 「製品オプションの構成」 - ライセンス契約に準拠するように、使用権限が付与されている製品機能を選択します。
- 製品に対する「データベースの構成」 - データベースにアプリケーション・データを保管したり、データベースからアプリケーション・データを取得したりするための構成です。
- 「アプリケーション・サーバーの配置」 - Web アプリケーション・サーバーにアプリケーションを配置します。
- その製品に必要な、製品固有の構成タスク。

**注：** また、EPM System コンフィグレータは構成中に製品を Shared Services に登録します。このタスクを必要とするすべての製品は自動的に登録されるため、選択する必要はありません。

この章では、構成ワークシートを使用して、構成タスクをプランニングし、障害が起こったときの回復に備えて構成手順を文書化します。

EPM System コンフィグレータは構成後、ユーザーを作成し、プロビジョニングするために admin/password を使用して、Shared Services にログオンできるプロビジョニング済のユーザー admin を作成します。Oracle Hyperion(R) Shared Services Console でこのパスワードをただちに変更することをお勧めします。

## Shared Services レジストリについて

Shared Services レジストリは、Shared Services 用に構成するデータベースの一部です。Shared Services レジストリは、EPM System 製品を初めて構成したときに作成され、インストールする大部分の EPM System 製品に対して次の情報を保管して再利用することにより、構成を簡素化します：

- データベース設定や配置設定などの初期構成値
- 複数の統合 Hyperion 製品とそのコンポーネントの実装に使用するコンピュータ名、ポート、サーバーおよび URL
- 依存サーバー・データ

1 つの製品に対して構成を変更すると、自動的にその配置で使用されている他の製品にもその変更内容が適用されます。

Shared Services Console のライフサイクル管理を使用して、Shared Services レジストリの内容を表示および管理できます。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ライフサイクル管理ガイド』を参照してください。

## 初期必要条件を満たす

次の表に、初めて EPM System コンフィグレータを使用する場合に実行するタスクを示します。

**表 8** 構成の必要条件

タスク	リファレンス
システムおよび製品固有の必要条件を満たします。	Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System の認証マトリックス( <a href="http://www.oracle.com/technology/products/bi/hyperion-supported-platforms.html">http://www.oracle.com/technology/products/bi/hyperion-supported-platforms.html</a> )のシステム要件と『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストール概要』の「インストールのプランニング・チェックリスト」
製品の構成に必要な情報を収集します。	<a href="#">74 ページの「EPM System コンフィグレータの使用方法」</a>

タスク	リファレンス
製品によって必要である場合に Java アプリケーション・サーバーと Web サーバーをインストールします。	アプリケーション・サーバーのドキュメントおよび『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストール概要』内の補足情報
ストレージに使用するリレーショナル・データベースを準備します。	リレーショナル・データベースのドキュメントおよび『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストール概要』内の補足情報

## 構成順序

一般的に、新規インストールの場合、マシンにインストールされる製品について各マシンで同時に EPM System 製品を構成することをお勧めします。デフォルトでは、EPM System コンフィグレータによってすべての製品があらかじめ選択されます。その他の製品を正常に構成するには、Shared Services をインストールし、構成する必要があります。様々な配置シナリオの構成順序は、次の項で説明します。

**注：** デフォルトでは、EPM System コンフィグレータは同時に構成したすべての製品に同じデータベースを使用します。各製品に異なるデータベースを使用するには、各製品について「データベースの構成」タスクを個別に実行します。場合によっては、製品に個別のデータベースを構成する方がよい場合があります。

EPM Workspace をすでに構成しており、EPM Workspace の追加製品を配置する場合は、EPM System コンフィグレータを再度実行して、EPM Workspace の「Web サーバーの構成」タスクを選択する必要があります。このリリースでは、次の製品およびコンポーネントが、EPM Workspace に統合されています：

- EPM Workspace
- Financial Reporting
- Web Analysis
- Financial Management
- FDM
- Performance Scorecard
- Planning
- Performance Management Architect
- Profitability and Cost Management
- Calculation Manager
- ERP Integrator
- Oracle Business Intelligence Publisher
- Oracle Business Intelligence Enterprise Edition

**オプション:** 次の製品は EPM Workspace に組み込まれておらず、ほとんどの場合、必要ありませんが、EPM Workspace Web サーバー構成を使用して、これらの製品の Web サーバーを構成することをお勧めします。

- Shared Services
- Administration Services
- Provider Services

**注:** ドリル・スルー機能の場合は、EPM Workspace Web サーバー構成を使用して、これらの製品の Web サーバーを構成する必要があります。

これらの製品に EPM Workspace Web サーバー構成を使用しない場合は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System マニュアル配置ガイド』を参照してください。

次の 2 つのオプションの管理タスクには、必要な順序があります:

- Performance Management Architect インタフェース・データソースを構成する前に、Shared Services と Performance Management Architect を構成および配置します。Shared Services が実行されている必要があります。
- Planning クラスタを構成する(Planning タスクの「Planning クラスタ管理」を選択する)前に、Shared Services を構成および配置します。Shared Services が実行されている必要があります。

EPM System コンフィグレータを使用して全構成タスクを完了した後で次の製品を構成します:

- Data Relationship Management。『Oracle Hyperion Data Relationship Management Installation Guide』を参照してください。
- FDM。FDM では、EPM System コンフィグレータに 1 つのタスクしかありません。FDM Web サーバーを Shared Services レジストリに登録するタスクです。残りの構成は、FDM で実行されます。『Oracle Hyperion Financial Data Quality Management Configuration Guide』を参照してください。
- Oracle Hyperion(R) Data Integration Management。『Hyperion Data Integration Management Installation Guide』を参照してください。

**注:** Essbase をスタンドアロン・モードでインストールする場合(Shared Services を使用しない)場合、Shared Services のインストールをスキップできます。ただし、Shared Services レジストリを構成する必要はあります。Shared Services をインストールせずに、Shared Services レジストリを構成するには、EPM System コンフィグレータをコマンド・ラインから `-forceRegistry` オプションを使用して実行します。114 ページの「[Shared Services をインストールしない Shared Services レジストリの設定](#)」を参照してください。

## シングル・マシン環境での製品の構成

マシンにインストールされる製品について各マシンで同時に EPM System 製品を構成することをお勧めします。1つのマシンに複数の製品を同時に構成する場合、EPM System コンフィグレータによって製品が正しい順序で構成されます。その他の製品を正常に構成するには、Shared Services をインストールし、構成する必要があります。

構成を完了した後、製品に必要な構成後のタスクを実行します。第7章「構成後のタスクの実行」を参照してください。

## 分散環境での製品の構成

最初に、Shared Services をインストールしたマシンに製品を構成し、Shared Services が実行されていることを確認します。その他の製品が正常に構成されるためには、Shared Services がインストールされ構成済みであり、実行されている必要があります。次に、配置内の各マシンで、マシンにインストール済製品についてすべての EPM System 製品を一度に構成します。

構成を完了した後で、製品について必要な構成後のタスクを実行します。第7章「構成後のタスクの実行」を参照してください。

## SSL 使用可能環境での製品の構成

EPM System 製品を SSL 対応として構成する場合は、次の順序で構成します：

1. 最初に Shared Services を構成します。Shared Services を構成するには、EPM System コンフィグレータの「製品の選択」ページで、基本タスクとして「共通設定」、「データベースの構成」および「アプリケーション・サーバーへの配置」を選択します。「共通設定」ページで、「通信用 SSL の使用可能化」を選択します。
2. Shared Services を SSL 対応として設定します。  
『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System SSL 構成ガイド』を参照してください。
3. Shared Services が実行していることを確認します。
4. 残りの EPM System 製品を構成します。
5. 他の EPM System 製品を SSL 対応として設定します。  
『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System SSL 構成ガイド』を参照してください。

## 製品構成タスクの要約

次の表は、各製品の構成タスクを示しています。すべての製品は、構成中に Shared Services に自動的に登録されます。EPM System コンフィグレータによって、構成する各マシンに「共通設定」ページが 1 回表示されます。

クライアントには構成が必要ないので、次の表に含まれていません。

次の表に、Foundation Services 製品で利用できる構成オプションの要約を示します。

**表 9** Foundation Services 構成タスクの要約

	製品オプション	データベースの構成	アプリケーション・サーバーへの配置	製品固有の構成タスク	構成後のタスク
Shared Services		X	X		X(オプション)
Calculation Manager		X	X		
Performance Management Architect		X (Windows のみ)	X	X(オプション) ● インタフェース・データソース構成(Windows のみ)	X
EPM Workspace		X	X	X ● Web サーバーの構成	X(オプション)

次の表に、Essbase 製品で利用できる構成オプションの要約を示します。

**表 10** Essbase 製品の構成タスクの要約

	製品オプション	データベースの構成	アプリケーション・サーバーへの配置	製品固有の構成タスク	構成後のタスク
Essbase				X ● Essbase カスタム構成	X (UNIX では必須)
Administration Services		X (Business Rules を Planning またはログ・アナライザ機能で使用している場合は必須)	X		X
Provider Services			X		X
Smart Search Command Line Utility			X		
Essbase Studio		X (Essbase Studio カタログでは必須)			X(オプション)
Integration Services					X

次の表に、Reporting and Analysis 製品で利用できる構成オプションの要約を示します。



**表 11** Reporting and Analysis 製品の構成タスクの要約

	製品オプション	データベースの構成	アプリケーション・サーバーへの配置	製品固有の構成タスク	構成後のタスク
Reporting and Analysis		注： Reporting and Analysis データベースは EPM Workspace から構成します。	X	X <ul style="list-style-type: none"> <li>サービス構成</li> <li>Financial Reporting サーバーの構成</li> </ul>	X

次の表に、Financial Performance Management Applications 製品で利用できる構成オプションの要約を示します。

**表 12** Financial Performance Management Applications 製品の構成タスクの要約

	製品オプション	データベースの構成	アプリケーション・サーバーへの配置	製品固有の構成タスク	構成後のタスク
Financial Management (全構成タスクが Windows のみ)		X		X <ul style="list-style-type: none"> <li>DCOM の構成</li> <li>アプリケーション・サーバーの構成</li> <li>アプリケーション・クラスタの構成</li> <li>アプリケーション・サーバー/クラスタの登録</li> <li>Web サーバーの構成</li> <li>(オプション)拡張分析用データ・ソースの構成</li> </ul>	X
Performance Scorecard		X	X		X
Planning	X	X	X	X (オプション) <ul style="list-style-type: none"> <li>Planning クラスタの管理</li> </ul>	X
Profitability and Cost Management		X	X		
Strategic Finance (全構成タスクが Windows のみ)	X			X <ul style="list-style-type: none"> <li>データ・フォルダの構成</li> <li>Web サービス構成</li> </ul>	X

次の表に、データ管理製品で利用できる構成オプションの要約を示します。

表 13 データ管理製品の構成タスクの要約

	製品オプション	データベースの構成	アプリケーション・サーバーへの配置	製品固有の構成タスク	構成後のタスク
FDM (全構成タスクが Windows のみ)				X ● FDM サーバーの構成	X
ERP Integrator		X	X		X
Data Relationship Management					X

## EPM System コンフィグレータの使用方法

製品をホストしている各コンピュータで EPM System コンフィグレータを実行して、構成または再構成を実行します。

EPM System コンフィグレータを使用した構成中にサポートされる文字のリストについては、[49 ページの「インストールと構成でサポートされる文字」](#)を参照してください。

**注：** Windows マシンで、EPM System Installer および EPM System コンフィグレータを管理者として実行します。UNIX マシンで、root ユーザーを使用してインストールおよび構成を行わないでください。すべての EPM System 製品に対して同じユーザーとして、インストールおよび構成を行ってください。UNIX システムで、Oracle Application Server を使用している場合、Oracle Application Server をインストールする際に使用した同じユーザーを使用して、EPM System 製品をインストールおよび構成する必要があります。Windows 2008 を使用している場合、UAC を使用不可にしてインストールしてください([64 ページの「Windows Server 2008 または Windows Server 2008 R2 へのオペレーティング・システムのアップグレード」](#)を参照)。

► EPM System 製品を構成するには:

### 1 EPM System コンフィグレータを起動するメソッドを選択します:

- EPM System Installer の最後のページで、「構成」をクリックします。
- 「スタート」メニューで、「プログラム」、「Oracle EPM System」、「Foundation Services」、「EPM System コンフィグレータ」の順に選択します。
- HYPERION\_HOME/common/config/version\_number の configtool.bat をダブルクリックします。
- Windows コンソールで、HYPERION\_HOME/common/config/version\_number に移動し、startconfigtool.bat -console と入力します。
- サイレント構成の応答ファイルを作成します。[113 ページの「サイレント構成の実行」](#)を参照してください。

- UNIX では、HYPERION\_HOME/common/config/version\_number に移動し、./configtool.sh と入力します。
- UNIX では、HYPERION\_HOME/common/config/version\_number に移動し、./configtool.sh -console と入力します。

## 2 EPM System コンフィグレータの各ページの内容を確認して完了し、「次へ」をクリックして次のページに移動します。

次の表に、EPM System コンフィグレータの各ページの詳細が記載されているリンクを示します。

ページ	リファレンス
タスクの選択	<a href="#">76 ページの「タスクの選択」</a>
Shared Services およびレジストリ・データベース構成	データベースが開始され、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストール概要』のデータベースの準備で説明されている手順に従って、データベースが作成されていることを確認します。  <a href="#">77 ページの「Shared Services とレジストリ・データベースの構成」</a> の説明に従って情報を入力します。
EPM System の共通設定	<a href="#">80 ページの「EPM System の共通設定」</a>
個別にライセンスされている製品のオプションを使用可能にする	ライセンス契約に基づき、使用権限が付与されている製品機能を選択します。 <a href="#">79 ページの「個別にライセンスされている製品のオプションを使用可能にする」</a> および <a href="#">第 11 章「ライセンス準拠」</a> を参照してください
データベースの構成	データベースが開始され、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストール概要』のデータベースの準備で説明されている手順に従って、データベースが作成されていることを確認します。  <a href="#">81 ページの「データベース構成」</a> の説明に従って情報を入力します。
アプリケーション・サーバーの配置	<a href="#">83 ページの「アプリケーション・サーバーへの配置」</a> の説明に従って情報を入力します。  注：簡素化のために、Oracle は、インストールするすべての製品に対して、同じアプリケーション・サーバーおよびドメインまたはプロファイルを使用することをお勧めします。
製品固有の構成タスク	各製品を構成するための詳しい手順については、次の項を参照してください： <ul style="list-style-type: none"> <li>● <a href="#">92 ページの「EPM Workspace 固有のタスク」</a></li> <li>● <a href="#">95 ページの「Performance Management Architect 固有のタスク(オプション)」</a></li> <li>● <a href="#">98 ページの「Essbase 固有のタスク」</a></li> <li>● <a href="#">101 ページの「Planning 固有のタスク(オプション)」</a></li> <li>● <a href="#">103 ページの「Financial Management 固有のタスク」</a></li> <li>● <a href="#">111 ページの「Reporting and Analysis 固有のタスク」</a></li> <li>● <a href="#">112 ページの「Strategic Finance 固有のタスク」</a></li> <li>● <a href="#">113 ページの「FDM 固有の構成タスク」</a></li> </ul>

## 3 実行する構成タスクを確認し、「次へ」をクリックします。

EPM System コンフィグレータは、構成プロセスのステータスを表示します。

構成にかかる時間は、選択した製品やタスクによって異なります。進行状況は、次に記録されます:

HYPERION\_HOME/logs/config/configtool.log

構成が終了すると、各タスクのステータスが表示されます。構成の結果は、HYPERION\_HOME/logs/config/configtool\_summary.log に記録されます。

- 4 「タスク・パネル」をクリックし、「タスクの選択」ページに戻って追加の構成タスクを完了します。
- 5 オプション: このマシンのすべての製品を構成した後に、「検証」をクリックまたは選択してインストール状態を検証します。第 6 章「インストールの検証」を参照してください。

Windows マシンで「構成済コンポーネント用 Windows サービスの作成」を選択している場合は、構成が完了するとサービスが開始されます。

**注:** OpenLDAP サービス(OpenLDAP-slapd)および「Hyperion Financial Management - Management Service」は、手動で開始してください。

Essbase Studio には Windows サービスがありません。.bat ファイルを使用して、手動で開始します。

UNIX マシンでは、構成が完了すると、サービスが開始されます。

- 6 「終了」をクリックします。

構成に成功した場合、必要な構成後のタスクを実行します。第 7 章「構成後のタスクの実行」を参照してください。

特定の製品の構成が終了しても、プロセス全体は終了しません。他の製品の構成が続行されます。構成プロセスが完了した後に、EPM System コンフィグレータの要約ページにエラー・メッセージが表示されます。

エラーが表示された場合は、次のタスクを実行します:

- ログ・ファイルを確認します。
- 構成上の問題の解決については、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストールおよび構成トラブルシューティング・ガイド』を参照してください。

## タスクの選択

- このマシンに対して構成する製品とタスクを選択するか、「次へ」をクリックし、必要なすべてのタスクを選択します。

Essbase の複数のインスタンスをインストールしている場合には、構成するインスタンスを選択します。インスタンスが「タスクの選択」ページに Essbase および Essbase-n と表示されます。

タスクの選択について、次のことに注意してください:

- 新しいインストールでは、デフォルトですべての必要なタスクが選択されます。
- 後で実行するタスクは選択解除できます。
- 全タスクを簡単に選択したり選択解除したりするには、「すべて選択」または「すべて選択解除」を選択します。
- デフォルトで選択されている必須タスクの選択は解除できません。使用できない(グレー表示の)タスクが選択されている場合、そのタスクは実行され、選択は解除できません。
- EPM System コンフィグレータでは、製品のコンポーネントを最初に構成する際に、Shared Services の登録などいくつかの共通タスクが自動的に実行されます。EPM System コンフィグレータでは、Shared Services レジストリにより、Shared Services の場所を特定します。

配置をわかりやすく簡素化するために、全製品に対して 1 つのデータベースを使用できます。これは、全製品を同時に構成した場合のデフォルトです。

---

**注意** 各製品に異なるデータベースを使用するには、各製品について「データベースの構成」タスクを個別に実行します。場合によっては、製品に個別のデータベースを構成の方がよい場合があります。パフォーマンス、単一アプリケーションまたは製品に対するロールバック手順、および障害が起こったときの回復計画を考慮してください。

---

メンテナンス・リリースを適用する場合、データベースを構成する必要はなく、Shared Services への登録は実行されません。(Essbase Studio は例外です。(Essbase Studio では、メンテナンス・リリースを適用している場合データベースを構成し、「前に構成したデータベースに接続」を選択します。))

## Shared Services とレジストリ・データベースの構成

- ▶ Shared Services と Shared Services レジストリ・データベースに対して設定を指定します。

EPM System 製品を初めて構成するときに、Shared Services レジストリを含む Shared Services で使用するデータベースを構成します。

Shared Services データベースを構成する際には、EPM System コンフィグレータにより、そのデータベースにアクセスでき、そのデータベースがサポートされているデータベース・タイプであることが確認されます。データベースが検出された場合、検出されたデータベースを使用するか、データベースを作成するかを選択するように求めるメッセージが表示されます。

サポートされているデータベースのリストについては、Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System の認証マトリックス(<http://www.oracle.com/technology/products/bi/hyperion-supported-platforms.html>)を参照してください。このリリースのデータベースの前提条件については、Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストール概要を参照してください。

Microsoft SQL Server データベースを使用している場合、SQL Server 接続に Windows 認証を使用できます。[82 ページの「Microsoft SQL Server Windows 認証の設定」](#)を参照してください。

Shared Services レジストリの詳細は、[68 ページの「Shared Services レジストリについて」](#)を参照してください。

**注：** このタスクは、データベースがすでに作成済であることを前提としています。データベースをまだ作成していない場合は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストール概要』のデータベースの準備に関する項を参照してください。

EPM System 製品のリリース 11.1.1.0 または 11.1.1.1 をアンインストールした後、同じ場所に再インストールする場合は、Shared Services と Shared Services レジストリ・データベースを再利用できません。

次の表に、Shared Services とレジストリ・データベースの構成用オプションを示します。

EPM System コンフィグレータのフィールド	説明	ユーザーの情報
前に構成された Shared Services データベースに接続/ Shared Services データベースの初回構成を実行	<p>Shared Services を初めて構成する際には、「Shared Services データベースの初回構成を実行」を選択します。このデータベースには、すべての製品に共通する情報の保管に使用される Shared Services レジストリが含まれます。</p> <p>分散環境で構成する場合は、すべてのマシンで Shared Services データベースを構成する必要があります。最初で、Shared Services レジストリを設定します。後続のマシンの構成では、「前に構成された Shared Services データベースに接続」を選択します。この場合、マシンが Shared Services レジストリの場所を認識できます。</p> <p>一部の製品では、この同じデータベースを使用して製品情報を保管できます。この場合、各製品は、このデータベース内に独自のテーブルを持ちます。各製品に対応するようにデータベースを準備する方法については、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストール概要』のインストール・プランニングのチェックリストに関する項を参照してください。</p>	
データベース・タイプ	データベース・タイプを選択します。	
サーバー	Shared Services データベースを作成するデータベース・サーバーの名前を指定します。	
ポート	データベースがリスニングするサーバー・ポート番号として、デフォルト値を選択するか、カスタム Shared Services サーバー・ポート番号を指定します。	
サービス名または SID、またはデータベース名	Shared Services データベースの名前を指定します。 Oracle RAC データベースを使用している場合は、RAC サービス名を指定します。	
ユーザー名	データベース・ユーザーの名前を入力します。	

EPM System コン フィグレータの フィールド	説明	ユー ザー の情 報
パスワード	データベース・ユーザーのパスワードを入力します。 <b>注：</b> パスワードを変更する場合は、 <a href="#">第 8 章「EPM System 製品の再構成」</a> で説明されている手順に従って再構成する必要があります。	
詳細オプション(オ プション)	クリックして、追加情報を指定します。 これらのオプションの詳細は、 <a href="#">82 ページの「データベース構成の詳細設定オプション(オプション)」</a> を参照してください。 このオプションを使用して Oracle RAC を構成できます。	

**注：** 「次へ」をクリックすると、EPM System コンフィグレータにより、Shared Services データベースが構成されます。後で「戻る」をクリックする必要がある場合は、「前に構成された Shared Services データベースに接続」を選択して、Shared Services データベース情報を再入力する必要があります。

## 個別にライセンスされている製品のオプションを使用可能にする

▶ ライセンス契約で使用権限が付与されている製品機能を選択します。

一部の製品では、この手順で、購入した製品の機能のみを選択できます。使用できる機能は、購入した製品およびライセンス契約によって異なります。詳細は、[第 11 章「ライセンス準拠」](#)を参照してください。

製品オプションは次の製品に対してのみ指定します：

- **Planning。** Planning については、該当するモジュールの使用権限を付与されているかどうかにより、Capital Asset Planning または Workforce Planning を選択できます。これらのオプションを選択すると、該当のモジュールの機能が有効になります。
- **Strategic Finance。** Strategic Finance については、この使用権限を付与されている場合において Strategic Finance を選択できます。

次の表に、製品オプション構成の各オプションを示します。

EPM System コンフィグレータ	説明	ユーザーの情報
製品/オプション	使用権限が付与されている製品コンポーネントを選択します。	



## EPM System の共通設定

- Shared Services レジストリに指定されているすべてのマシン上のすべての製品の設定を指定するか、または「次へ」をクリックしてデフォルト値をそのまま使用します。

別のマシン上で構成を行い、いずれかのオプションを変更した場合は、新しい選択内容は構成されていないすべての製品およびマシンに適用されます。マシン上で再構成を行った場合、再構成した製品および今後行う構成に新しい設定が適用されます。

次の表に、共通設定の構成オプションを示します。

EPM System コンフィグ レータのフィールド	説明	ユー ザーの 情報
構成済コンポーネント 用 Windows サービスの 作成(Windows のみ)	Windows の開始時に自動的に開始する Windows サービスとして各サービスを構成します。	
通信用 SSL の使用可能 化	<p>すべての Web アプリケーションで SSL 通信を使用可能にする場合に選択します。このオプションが選択されている場合、URL は <code>https</code> の形式になります。</p> <p>SSL を使用可能にした場合は、EPM Workspace Web サーバーの構成ページで「SSL 使用可能」を選択してから、Web サーバーで使用する SSL ポートを指定する必要があります。92 ページの「EPM Workspace Web サーバーの構成」を参照してください。</p> <p>注： このオプションを選択すると、Web アプリケーション・サーバーのセキュア通信が使用可能にならず、JRE および JDK に証明書が作成およびロードされません。詳細は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System SSL 構成ガイド』を参照してください。</p> <p>SSL 使用可能の環境から SSL 使用不可の環境へ、またはその逆に変更する場合、169 ページの「SSL の再構成」を参照してください。このオプションを変更するだけでは不十分です。</p>	
SMTP メール・サー バー	標準の Simple Mail Transfer Protocol (簡易メール転送プロトコル)を使用する電子メール機能を統合する製品の場合は、送信メール(SMTP)サーバーを指定します。電子メール・アラートを使用可能にするには、SMTP サーバー名を指定する必要があります。	
管理電子メール	通知で使用する、管理者の電子メール・アドレスを指定します。	
SMTP サーバーは認証 を要求します	SMTP サーバーが認証を要求するかどうかを指定し、ユーザー名とパスワードを指定します。	
ユーザー名	SMTP サーバーのユーザー名を指定します。	
パスワード	SMTP サーバーのパスワードを指定します。	



## データベース構成

- ▶ 「タスクの選択」 ページで選択した製品に対して使用するデータベースの設定を指定します。

配置をわかりやすくかつ簡素化するために、新規のインストールで全製品に対して1つのデータベースを使用できます(全製品を同時に構成する場合のデフォルトです)。各製品に異なるデータベースを使用するには、各製品について「データベースの構成」タスクを個別に実行します。場合によっては、製品に個別のデータベースを構成の方がよい場合があります。パフォーマンス、単一アプリケーションまたは製品に対するロールバック手順、および障害が起こったときの回復計画を考慮してください。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストール概要』を参照してください。

データベースを使用するように EPM System 製品を構成する際、EPM System コンフィグレータによりデータベースが接続されており、サポートされているデータベース・タイプであることが確認されます。このリリースでサポートされているデータベースのリストについては、Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System の認証マトリックス(<http://www.oracle.com/technology/products/bi/hyperion-supported-platforms.html>)を参照してください。

データベースが、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストール概要』内のデータベースの準備に関する説明で示されているように設定されていることを確認してください。

最初に構成する際は、デフォルトのデータベース名が表示されます。すでに作成済のデータベースおよびユーザーの名前に一致するようにデフォルトを変更します。

データベース構成について次の点に注意してください:

- データベース・タイプが、選択した製品のいずれかでサポートされていない場合、そのデータベース・タイプは使用できません。この場合、この製品を個別に構成してください。各製品でサポートされているデータベースのリストについては、Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System の認証マトリックス(<http://www.oracle.com/technology/products/bi/hyperion-supported-platforms.html>)を参照してください。

次の表に、データベースの構成オプションを示します。

EPM System コンフィグレータのフィールド	説明	ユーザーの情報
次の製品のデータベース構成	データベースを構成する製品のリストを確認します。このリストの内容は、初めに構成対象として選択した製品によって異なります。  各製品に対して異なるデータベースを作成するには、一度に1つの製品のみ選択して、EPM System コンフィグレータをもう一度実行して、別の製品にデータベースを構成します。	

EPM System コンフィグレータのフィールド	説明	ユーザーの情報
前に構成したデータベースに接続/データベースの初回構成を実行	構成済データベースを選択するか、または構成する新しいデータベースの名前を指定します。 <b>注：</b> このタスクは、データベースが作成済であることを前提としています。データベースを作成していない場合は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストール概要』のデータベースの準備に関する項を参照してください。	
データベース・タイプ	データベース・タイプを選択します。	
サーバー	データベースをホストするコンピュータまたはサーバーの名前を指定します。	
ポート	デフォルト値を選択するか、データベースがリスニングするカスタム・サーバー・ポート番号を指定します。	
サービス名またはSID、またはデータベース名	データベース名を指定します。 Oracle RAC データベースを使用している場合は、RAC サービス名を指定します。	
ユーザー名	データベース・ユーザー名を入力します。	
パスワード	データベース・ユーザーのパスワードを入力します。 <b>注：</b> パスワードを変更する場合には、 <a href="#">171 ページの「リポジトリ・パスワードの変更」</a> で説明されているように再構成します。	
詳細設定オプション(オプション)	クリックして詳細情報を指定します。 <a href="#">82 ページの「データベース構成の詳細設定オプション(オプション)」</a> を参照してください。 このオプションを使用して Oracle RAC を構成できます。	

Microsoft SQL Server データベースを使用している場合、SQL Server 接続に Windows 認証を使用できます。[82 ページの「Microsoft SQL Server Windows 認証の設定」](#)を参照してください。

## Microsoft SQL Server Windows 認証の設定

► SQL Server 接続用に Windows 認証を設定するには:

- 1 Windows 認証を使用するように SQL Server を構成します。
- 2 Windows アカウントに、データベースへの適切なアクセス権を付与します。
- 3 構成タスク・リストから「データベースの構成」を選択します。
- 4 データベース・リストから、「SQL Server」を選択します。
- 5 「ユーザー名」と「パスワード」以外の全データベース情報を指定します。

## データベース構成の詳細設定オプション(オプション)

次の表に、データベース構成の詳細設定オプションを示します。

EPM System コンフィグレータのフィールド	説明	ユーザーの情報
JDBC URL	<p>接続の追加属性を入力します。詳細は、<a href="#">付録 D「JDBC URL 属性」</a>を参照してください。</p> <p>JDBC URL を入力すると、データベースの構成ページで入力した値を上書きします。</p>	
Oracle に対する追加構成		
データ・テーブルスペース	<p>テーブル・データの保管に使用する既存のテーブルスペースの名前を入力します。データ・テーブルスペースは、テーブル・データのストレージの割当てに使用されるデータベースの論理ポーションです。</p>	
Financial Management に対する追加構成		
データベース接続リンク (UDL)	<p>デフォルト値を使用するか、別の UDL ファイルを指定します。</p> <p>データベース接続リンク (UDL) は、Financial Management アプリケーションのデータベース接続情報を定義します。EPM System コンフィグレータにより、Financial Management で使用するデフォルトの UDL ファイルが提供されます。</p>	
プール済 DB 接続数	<p>アプリケーションのデータベース接続のプール数を入力するか、デフォルト (40) のままにしておきます。</p> <p>Financial Management は、アプリケーションごとに約 25 のリレーショナル・データベース接続を必要とします。</p> <p>プール済データベース接続の詳細は、<a href="#">付録 E「Financial Management のデータベース情報」</a>を参照してください。</p>	
UDL の暗号化	<p>UDL ファイルを暗号化するかどうかを指定します。UDL ファイルは暗号化することをお勧めします。</p> <p><a href="#">225 ページの「UDL ファイルの暗号化」</a>を参照してください。</p>	

## アプリケーション・サーバーへの配置

► アプリケーション・サーバーと配置タイプを選択します。

配置について次の点に注意してください:

- 1 つのプロファイル (WebSphere) またはドメイン (Oracle WebLogic Server) 内の 1 つのアプリケーション・サーバーに複数の製品を配置できます。
- 簡素化のために、同じアプリケーション・サーバー、およびドメインまたはプロファイルを使用することをお勧めします。
- Web アプリケーション・サーバーが、選択した製品のいずれかでサポートされていない場合、その Web アプリケーション・サーバーは使用できません。この場合、この製品を個別に構成してください。各製品でサポートされているデータベースのリストについては、Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System の認証マトリックス (<http://www.oracle.com/technology/products/bi/hyperion-supported-platforms.html>) を参照してください。
- 統合する EPM Workspace とアプリケーションは、同じ Web アプリケーション・サーバー・タイプに配置されている必要があります。たとえば、EPM

Workspace が Oracle Application Server に配置される場合、Performance Management Architect も Oracle Application Server に配置される必要があります。統合するアプリケーションが EPM Workspace Web アプリケーション・サーバーをサポートしていない場合、EPM Workspace を一般的にサポートされている Web アプリケーション・サーバー(WebLogic Server)に再配置するか、個別の配置を実行できます。

- カスタム認証モジュールを実装する場合、その Java アーカイブ(.jar)を EPM 製品のクラスパスに含める必要があります。カスタム認証モジュール Java アーカイブを J2EE Web アプリケーションのクラスパスに追加する最も信頼できる方法は、Java アーカイブをアプリケーションのエンタープライズまたは Web アーカイブ(.ear または .war)のクラスパスに配置前に追加する方法です。EPM System コンフィグレータを実行する前に行う手順の詳細は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System セキュリティ管理ガイド』を参照してください。

自動配置について次の点に注意してください:

- 自動配置では 32 ビット・アプリケーション・サーバーのみがサポートされています。32 ビット・アプリケーション・サーバーをサポートしている製品を 64 ビットアプリケーション・サーバーに配置する場合には、その製品の 64 ビット・バイナリを EPM System Installer で「コンポーネントを個別に選択」オプションを使用してインストールして、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System マニュアル配置ガイド』の手動配置手順に従う必要があります。

手動配置について次の点に注意してください:

- 各アプリケーション・サーバー・マシン上で EPM System コンフィグレータを実行します。
- Web アプリケーション・サーバーの配置ページで「手動」オプションを選択します。Shared Services レジストリを更新し、.ear および .war ファイルを配置するには、この手順を実行する必要があります。
- 正しいホスト名とポート情報を指定します。
- 必要に応じて、詳細設定オプションを使用して、論理アドレスを使用したアクセスを構成します。

各アプリケーション・サーバーと製品に対する配置手順については、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System マニュアル配置ガイド』を参照してください。

次の表に、アプリケーション・サーバー配置の構成オプションを示します。

EPM System コンフィグレータのフィールド	説明	ユーザーの情報
サーバーの選択: 自動/手動	<p>インストールした Web アプリケーション・サーバーを選択し、自動または手動で配置するかどうかを指定します。</p> <p>「Embedded Java コンテナ」を選択する場合は、自動配置のみが可能です。</p> <p>製品を 1 つのアプリケーション・サーバーに配置している場合は、次のいずれかの配置オプションを選択します:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 自動 - すべてのファイルをアプリケーション・サーバーに配置します。ほとんどの場合、他の配置タスクは必要ありません。</li> <li>● 手動 - EPM System コンフィグレータが、必要な Web アーカイブ(EAR または WAR)を後で手動配置できるようにディレクトリに配置します。</li> </ul> <p>「手動」を選択する場合は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System マニュアル配置ガイド』を参照してください。</p>	

**注：** アプリケーション・サーバーの準備については、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストール概要』を参照してください。

## アプリケーション・サーバーの配置: Oracle Application Server

▶ アプリケーション・サーバーのオプションを指定するか、「次へ」をクリックして、デフォルトのエントリをそのまま使用します。

EPM System コンフィグレータは、各配置済 Web アプリケーションのグループを、サーバーと同じ名前で作成します。

次の表に、Oracle Application Server の配置の構成オプションを示します。

EPM System コンフィグレータのフィールド	説明	ユーザーの情報
場所	<p>アプリケーション・サーバーのインストール・ディレクトリのパスを入力します。</p> <p>例:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● Windows - C:/Oracle/product/OracleAS</li> <li>● UNIX/Linux - /opt/app/oracle/product/OracleAS</li> </ul>	
EAR/WAR	配置するコンポーネントを選択します。	
名前	サーバー名が表示されます。	

EPM System コンフィグレータのフィールド	説明	ユーザーの情報
詳細設定	<p>クラスタを設定している場合、または設定する予定の場合には、「設定」をクリックします。<a href="#">91 ページの「クラスタ設定」</a>を参照してください。</p> <p>「設定」を選択しない場合、EPM System コンフィグレータにより、この配置は Default という名前のデフォルト・クラスタに追加されます。</p> <p>クラスタリングの詳細は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System 高可用性ガイド』を参照してください。Shared Services のクラスタリングの詳細は、<a href="http://www.oracle.com/technology/products/bi/resource-library.html">http://www.oracle.com/technology/products/bi/resource-library.html</a>にあるホワイト・ペーパーを参照してください。</p>	

## 配置中の処理: Oracle

EPM System コンフィグレータはアプリケーションを次の場所に配置します:

HYPERION\_HOME/deployments/AppServNameAndVersion

このディレクトリの下に bin/ディレクトリには、すべての配置済アプリケーションの開始および終了スクリプトが含まれます。アプリケーションごとに、setCustomParamsProduct.bat ファイル(UNIX 用には.sh 拡張子)もあり、開始スクリプトを使用する際に JAVA\_OPTIONS を変更できます。

## アプリケーション・サーバーの配置: Oracle | BEA WebLogic

- ▶ アプリケーション・サーバーのオプションを指定するか、「次へ」をクリックして、デフォルトのエントリをそのまま使用します。

WebLogic Server では、hyperion のデフォルト・ユーザー名およびパスワードにより、ドメインが管理されます。このログイン情報は配置後に手動で変更できます。次の表に、WebLogic アプリケーション・サーバー配置の構成オプションを示します。

EPM System コンフィグレータのフィールド	説明	ユーザーの情報
場所	<p>アプリケーション・サーバーのインストール・ディレクトリのパスを入力します。例:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● Windows - c:/bea/weblogic92</li> <li>● UNIX - /opt/bea/weblogic92</li> </ul>	
ドメイン	<p>アプリケーションにアクセスするドメインのデフォルト名が表示されます。すべてのアプリケーションは、同じドメインに配置されます。ドメイン名を変更するには、<a href="#">88 ページの「配置中の処理: WebLogic Server」</a>を参照してください。</p>	

EPM System コンフィ グレータ のフィ ールド	説明	ユー ザー の情 報
EAR/WAR	配置するコンポーネントを選択します。	
名前	サーバー名が表示されます。	
ポート	<p>デフォルト・ポートを使用するか、または、マシン上にインストールされている他のアプリケーションと競合しないポート番号を入力して、デフォルト値を変更します。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストール概要』のポートに関する項を参照してください。</p> <p>注意: このポートをデフォルト以外のポートに変更した場合、EPM Workspace Web アプリケーションを再配置する必要があります。</p>	
SSL ポート	<p>デフォルト・ポートを使用するか、自動配置に使用する SSL ポートを指定します。このポートを指定すると、Java アプリケーション・サーバーのデフォルトの証明書を使用して SSL が設定されます。有効な証明書による Java アプリケーション・サーバーの更新に関する推奨事項については、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System SSL 構成ガイド』を参照してください。</p> <p>SSL を使用する場合は、安全な通信を確保するために、構成後、Java アプリケーション・サーバーから非 SSL ポートを消去する必要があります。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System マニュアル配置ガイド』を参照してください。</p>	
詳細設定	<p>クラスタを設定済である、または設定する予定である場合、「設定」をクリックします。91 ページの「クラスタ設定」を参照してください。</p> <p>「設定」を選択しない場合、EPM System コンフィグレータにより、この配置は Default という名前のデフォルト・クラスタに追加されます。</p> <p>クラスタリングの詳細は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System 高可用性ガイド』を参照してください。Shared Services のクラスタリングの詳細は、<a href="http://www.oracle.com/technology/products/bi/resource-library.html">http://www.oracle.com/technology/products/bi/resource-library.html</a> にあるホワイト・ペーパーを参照してください。</p>	

## 考慮事項

- WebLogic Server の管理サーバー・ポートがデフォルト・ポート以外に変更されている場合、EPM System コンフィグレータを使用して Web アプリケーションを配置できません。EPM System コンフィグレータを使用して配置するには、管理サーバー・ポートを 7001 に変更して再配置します。
- リリース 11.1.1.3 からリリース 11.1.1.4 へのメンテナンス・リリースを適用する場合、構成を実行する前に WebLogic のバージョンを WebLogic 9.2MP4 にアップグレードする必要があります。WebLogic 9.2MP4 にアップグレードした後、次の手順を実行します:
  1. WebLogic、JDK および JRockit の新しい場所で `HYPERION_HOME/deployments/WebLogic9/bin/setDomainEnv.cmd[sh]` を更新します。
  2. 次の WebLogic temp および precompiled の JPS をクリーンにします:

```
HYPERION_HOME/deployments/temp
HYPERION_HOME/deployments/WebLogic9/precompiled
```



- リリース 11.1.1.4 のメンテナンス・リリースをインストールし、WebLogic 9.2MP4 で構成します。

## 配置中の処理: WebLogic Server

EPM System コンフィグレータは、各アプリケーションを同じ WebLogic Server ドメインに配置します。最初の実行が完了する際にドメインが作成されます。各アプリケーションは、個別の JVM で実行されます。

EPM System コンフィグレータはアプリケーションを次の場所に配置します

`HYPERION_HOME/deployments/AppServNameAndVersion`

このディレクトリの下に `bin` ディレクトリには、すべての配置済アプリケーションの開始および終了スクリプトが含まれます。アプリケーションごとに、`setCustomParamsProduct.bat` ファイル (UNIX 用には `.sh` 拡張子) もあり、開始スクリプトを使用する際に `JAVA_OPTIONS` を変更できます。

デフォルトのプロファイル・ディレクトリを変更するには、次の場所にある `weblogic.properties` 内の配置ディレクトリ・パラメータを変更します:

`HYPERION_HOME/common/config/9.5.0.0/resources/AppServName/resources`

**注:** このファイル内の他のパラメータは変更しないことをお勧めします。

## アプリケーション・サーバーの配置: WebSphere

- アプリケーション・サーバーのオプションを指定するか、「次へ」をクリックして、デフォルトのエントリをそのまま使用します。

次の表に、WebSphere アプリケーション・サーバー配置の構成オプションを示します。

EPM System コンフィグレータのフィールド	説明	ユーザーの情報
場所	<p>アプリケーション・サーバーのインストール・ディレクトリのパスを入力します。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>例: WebSphere Base:<ul style="list-style-type: none"><li>Windows - <code>c:/WebSphere/AppServer</code></li><li>UNIX - <code>/opt/WebSphere/AppServer</code></li></ul></li><li>例: WebSphere Express:<ul style="list-style-type: none"><li>Windows - <code>c:/IBM/WebSphere/Express61/AppServer</code></li><li>UNIX - <code>/opt/IBM/WebSphere/Express61/AppServer</code></li></ul></li></ul> <p>ディスク・スペースが不十分な場合、EPM System コンフィグレータは <code>java.io.tmpdir</code> を <code>HYPERION_HOME/temp</code> に配置します。配置後、<code>temp</code> ディレクトリが削除されます。</p>	



EPM System コンフィグレータのフィールド	説明	ユーザーの情報
プロファイル	アプリケーションにアクセスするプロファイルの名前が表示されます。デフォルトでは、すべてのアプリケーションが同じプロファイルに配置されます。プロファイル名を変更するには、 <a href="#">89 ページの「配置中の処理: WebSphere」</a> を参照してください。	
EAR/WAR	配置するコンポーネントを選択します。	
名前	サーバー名が表示されます。	
ポート	デフォルト・ポートを使用するか、または、マシン上にインストールされている他のアプリケーションと競合しないポート番号を入力して、デフォルト値を変更します。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストール概要』のポートに関する項を参照してください。 <b>注：</b> デフォルトを変更する場合	
SSL ポート	デフォルト・ポートを使用するか、自動配置に使用する SSL ポートを指定します。このポートを指定すると、Java アプリケーション・サーバーのデフォルトの証明書を使用して SSL が設定されます。有効な証明書による Java アプリケーション・サーバーの更新に関する推奨事項については、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System SSL 構成ガイド』を参照してください。 SSL を使用する場合は、安全な通信を確保するために、構成後、Java アプリケーション・サーバーから非 SSL ポートを消去する必要があります。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System マニュアル配置ガイド』を参照してください。	
詳細設定	クラスタを設定している場合、または設定する予定の場合には、「設定」をクリックします。 <a href="#">91 ページの「クラスタ設定」</a> を参照してください。 「設定」を選択しない場合、EPM System コンフィグレータにより、この配置は Default という名前のデフォルト・クラスタに追加されます。 クラスタリングの詳細は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System 高可用性ガイド』を参照してください。Shared Services のクラスタリングの詳細は、 <a href="http://www.oracle.com/technology/products/bi/resource-library.html">http://www.oracle.com/technology/products/bi/resource-library.html</a> から入手できるホワイト・ペーパーを参照してください。	

## 配置中の処理: WebSphere

EPM System コンフィグレータは、各アプリケーションを同じ WebSphere プロファイルに配置します。最初のアプリケーションが配置される際にプロファイルが作成されます。各アプリケーションは、個別の JVM で実行されます。

EPM System コンフィグレータはアプリケーションを次の場所に配置します

HYPERION\_HOME/deployments/AppServNameAndVersion

このディレクトリの下 bin/ディレクトリには、すべての配置済アプリケーションの開始および終了スクリプトが含まれます。アプリケーションごとに、setCustomParamsProduct.bat ファイル(UNIX 用には.sh 拡張子)もあり、開始スクリプトを使用する際に JAVA\_OPTIONS を変更できます。

デフォルトのプロファイル・ディレクトリを変更するには、次の場所にある websphere.properties 内の配置ディレクトリ・パラメータを変更します。

**注：** このファイル内の他のパラメータは変更しないことをお勧めします。

## Web サーバー・プラグイン・ディレクトリ

- ▶ 要求された場合、Web サーバー・プラグインのインストール・ディレクトリを指定します。

EPM System コンフィグレータは、プラグインが見つからない場合のみ、このページを表示します。

## アプリケーション・サーバーの配置: Embedded Java コンテナ

- ▶ アプリケーション・サーバーのオプションを指定するか、「次へ」をクリックして、デフォルトのエントリをそのまま使用します。

次の表に、Embedded Java コンテナ・アプリケーション・サーバーの配置構成を示します。

EPM System コンフィグ レータの フィールド	説明	ユー ザー の情 報
EAR/WAR	配置するコンポーネントを選択します。	
名前	サーバー名が表示されます。	
ポート	デフォルト・ポートを使用するか、または、マシン上にインストールされている他のアプリケーションと競合しないポート番号を入力して、デフォルト値を変更します。 『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストール概要』のポートに関する説明を参照してください。	
SSL ポート	デフォルト・ポートを使用するか、自動配置に使用する SSL ポートを指定します。このポートを指定すると、Java アプリケーション・サーバーのデフォルトの証明書を使用して SSL が設定されます。有効な証明書による Java アプリケーション・サーバーの更新に関する推奨事項については、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System SSL 構成ガイド』を参照してください。手動で配置する場合は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System SSL 構成ガイド』を参照してください。  SSL を使用する場合は、安全な通信を確保するために、構成後、Java アプリケーション・サーバーから非 SSL ポートを消去する必要があります。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System マニュアル配置ガイド』を参照してください。	

EPM System コンフィグ レータの フィールド	説明	ユー ザー の情 報
詳細設定	<p>クラスタを設定している場合、または設定する予定の場合には、「設定」をクリックします。<a href="#">91 ページの「クラスタ設定」</a>を参照してください。</p> <p>「設定」を選択しない場合、EPM System コンフィグレータにより、この配置は Default という名前のデフォルト・クラスタに追加されます。</p> <p>クラスタリングの詳細は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System 高可用性ガイド』を参照してください。Shared Services のクラスタリングの詳細は、<a href="http://www.oracle.com/technology/products/bi/resource-library.html">http://www.oracle.com/technology/products/bi/resource-library.html</a> から入手できるホワイト・ペーパーを参照してください。</p>	

## 配置中の処理: Embedded Java コンテナ

EPM System コンフィグレータはアプリケーションを次の場所に配置します:

HYPERION\_HOME/deployments/AppServNameAndVersion

このディレクトリの下 bin/ディレクトリには、すべての配置済アプリケーションの開始および終了スクリプトが含まれます。アプリケーションごとに、setCustomParamsProduct.bat ファイル(UNIX 用には.sh 拡張子)もあり、開始スクリプトを使用する際に JAVA\_OPTIONS を変更できます。

## クラスタ設定

► 「設定」を選択した場合は、次のことを指定します:

次の表に、クラスタ設定の構成に関するオプションを示します。

EPM System コン フィグレータの フィールド	説明	ユー ザー の情 報
「デフォルト・クラスタを編集します」	<p>デフォルトで使用するクラスタの新規 URL を指定します。(この URL の指定では、クラスタは作成されません。)</p> <p>クラスタは、Shared Services、EPM Workspace、Performance Management Architect、Reporting and Analysis、Calculation Manager および ERP Integrator に対して 1 つのみにする必要があります。EPM System コンフィグレータにより、これらの製品に対するクラスタが作成され、デフォルト・クラスタとして使用されます。これらの製品に対して新しいクラスタは定義できません。</p>	
「新規クラスタを定義します」	<p>作成するクラスタのデフォルトとして使用する URL を指定します。(この URL の指定では、クラスタは作成されません。) 論理アドレスまたは物理アドレスのみを指定してください。</p> <p>「共通設定」ページで「通信用 SSL の使用可能化」を選択した場合は、上書きするクラスタ URL が SSL ポートを使用することを確認してください。</p>	
既存のクラスタに追加します	<p>クラスタに追加するための URL を指定してください。Web アプリケーションに関連付けられる論理アドレスまたは物理アドレスのみを指定します。</p>	

Planning のクラスタを EPM System コンフィグレータで管理するには、Planning のタスクの選択パネルの「Planning クラスタの管理(オプション)」を選択します。

EPM System 製品のクラスタリングの詳細は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System 高可用性ガイド』を参照してください。Shared Services のクラスタリングの詳細は、<http://www.oracle.com/technology/products/bi/resource-library.html> にあるホワイト・ペーパーを参照してください。

## EPM Workspace 固有のタスク

### EPM Workspace サービスの構成

- 次の EPM Workspace サービス情報を指定するか、「次へ」をクリックして、デフォルト値をそのまま使用します:

次の表に、EPM Workspace サービスの構成オプションを示します。

EPM System コンフィグレータのフィールド	説明	ユーザーの情報
リポジトリ・ディレクトリ	Reporting and Analysis リポジトリ・データが保管されるディレクトリを、次のように指定します: <code>HYPERION_HOME/products/Foundation/workspace/data/directoryName</code> 。  リポジトリを複製している場合には、書き込み可能な共有ドライブを指定します。	
ポートの範囲	EPM Workspace サービス用に使用するポートの範囲を指定します。	

### EPM Workspace Web サーバーの構成

- EPM Workspace Web サーバーを指定するか、「次へ」をクリックして、デフォルト値を使用します。

このページの情報は、Shared Services レジストリに記録されている配置済アプリケーションと、この構成順序で配置中のアプリケーションから取得された情報です。

EPM Workspace 内の追加製品を後で配置する場合は、EPM System コンフィグレータを再度実行するか、EPM Workspace Web サーバーの構成タスクを選択します。

次の製品のコンポーネントがリストされます:

- EPM Workspace
- Financial Reporting
- Web Analysis
- Financial Management
- FDM

- Performance Scorecard
- Planning
- Performance Management Architect
- Profitability and Cost Management
- Calculation Manager
- ERP Integrator
- BI Publisher

BI Publisher は、前提条件を満たしている場合のみこのリストに含まれます。  
[95 ページの「BI Publisher の EPM Workspace への統合」](#)を参照してください。

- Oracle BI EE

Oracle BI EE は、前提条件の手順を完了している場合のみこのリストに含まれます。  
[95 ページの「Oracle BI EE の EPM Workspace への統合」](#)を参照してください。

**オプション:** 次の製品は EPM Workspace に組み込まれておらず、ほとんどの場合、必要ありませんが、EPM Workspace Web サーバー構成を使用して、これらの製品の Web サーバーを構成することをお勧めします。

- Shared Services
- Administration Services
- Provider Services

**注:** ドリル・スルー機能の場合は、EPM Workspace Web サーバー構成を使用して、これらの製品の Web サーバーを構成する必要があります。

これらの製品に EPM Workspace Web サーバー構成を使用しない場合は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System マニュアル配置ガイド』を参照してください。

次の表に、EPM Workspace Web サーバーの構成用オプションを示します。

EPM System コンフィグ レータの フィールド	説明	ユー ザー の情 報
Web サー バーの選択	Web サーバーを選択します。	

EPM System コンフィグ レータの フィールド	説明	ユー ザー の情 報
ポート	<p>Web サーバーのポートを指定します。SSL を有効にした場合、入力するポート番号がセキュア・ポートであることを確認してください。</p> <p>UNIX 環境で SSL を使用する場合は、デフォルトの EPM System のポート番号ではなく、SSL 対応の Apache のポート番号を指定します。<a href="#">48 ページの「インストールの前提条件」</a>を参照してください。</p> <p><b>注：</b> WebSphere に限り、デフォルト(8080)以外のポートを指定した場合、EPM Workspace Web アプリケーションを再配置する必要があります。</p>	
SSL 使用可能	SSL を使用可能にするかどうかを選択します。	
Web サー バーの場所	<p>Web サーバーの場所を指定または参照します。</p> <p>このフィールドは、IIS を使用する場合には必須ではありません。</p> <p>UNIX 環境で SSL を使用する場合は、デフォルトの EPM System ではなく、インストール済の SSL 対応の Apache を選択してください。<a href="#">48 ページの「インストールの前提条件」</a>を参照してください。</p>	
コンポーネ ント	EPM Workspace に統合する各モジュールの隣のチェック・ボックスを選択します。	
ホスト	使用可能なモジュールごとに、この Web サーバーがプロキシ要求を行うホスト名を確認します。	
コンテキス ト	<p>コンテキスト・パスを確認してください。コンテキスト・パスは、配置済 Web アプリケーションにアクセスする URL の一部です。たとえば、次の URL では、workspace がコンテキスト・パスです：</p> <p><code>http://webserverhost.example.com:19000/workspace</code></p>	
ポート	アプリケーションのアプリケーション・サーバー・リスニング・ポートのポート番号を確認してください。ここでのポートは、配置済アプリケーションのリスニング・ポートに一致する必要があります。Embedded Java コンテナの場合、このポートは AJP リスニング・ポートであり、HTTP リスニング・ポートではありません。	

**注：** すべてのエントリに完全修飾ホスト名を使用してください。たとえば、`webserverhost.example.com` と指定します。

Reporting and Analysis Web アプリケーションが 2 つ以上のマシン間で分散されている場合、または Web サーバーを、アプリケーション・サーバーがインストールされているマシン以外のマシンで構成する場合には、次の項目を指定する必要があります：

- 正しいアプリケーション・サーバー・ホスト名 - EPM System コンフィグレータの一部としてマシン名とポートを指定します。
- Web サーバー・プラグイン・ポート - Web サーバー・プラグイン構成ファイル内にこの情報を手動で入力します。

必要な手動構成の詳細は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System マニュアル配置ガイド』を参照してください。

## BI Publisher の EPM Workspace への統合

BI Publisher を EPM Workspace に統合するには、『Oracle Business Intelligence Publisher 管理者および開発者ガイド』で説明する必須手順を実行しておく必要があります。

プロセスの概要は次のとおりです:

➤ BI Publisher を EPM Workspace に統合するには:

- 1 BI Publisher サーバーを EPM Workspace と Shared Services に統合します。
- 2 BI Publisher サーバーを、CSS セキュリティ・モデルを使用するように構成します。
- 3 EPM System コンフィグレータを使用して、Oracle Business Intelligence Publisher サーバーに対してプロキシするように EPM Workspace Web サーバーを構成します。「タスクの選択」ページで、EPM Workspace Web サーバーの構成タスクを選択します。  
[92 ページの「EPM Workspace Web サーバーの構成」](#)を参照してください。

## Oracle BI EE の EPM Workspace への統合

Oracle BI EE を EPM Workspace に統合するには、事前に行っておく手順があります。

Oracle BI EE を EPM Workspace と統合するために必要な手順については、『Oracle Business Intelligence 新機能ガイド』を参照してください。

これらの前提条件の手順を完了した後、EPM System コンフィグレータを使用して、Oracle Business Intelligence Enterprise Edition サーバーに対してプロキシするように EPM Workspace Web サーバーを構成します。「タスクの選択」ページで、EPM Workspace Web サーバーの構成タスクを選択します。[92 ページの「EPM Workspace Web サーバーの構成」](#)を参照してください。

## Performance Management Architect 固有のタスク(オプション)

Performance Management Architect でインタフェース・テーブルを使用する場合、インタフェース・データソースを作成する必要があります。インタフェース・テーブルでは、メタデータおよび外部システムのデータを次元ライブラリにインポートできるようにするデータベース・インタフェースが提供されます。ただし、このタスクは、初期構成では必要ありません。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Architect 管理者ガイド』を参照してください。インポート・プロファイルの作成およびデータの同期中に使用できるデータ・ソース・リンクを作成することで、テーブルを構成します。



## インタフェース・データソース構成(オプション)

▶ データソース・リンクを作成、編集、または削除するかどうかを指定します。

インタフェース・データ・ソース構成は、次元サーバーがインストールされているマシン上でのみ使用できます。このタスクを実行するには、Shared Services に登録する必要があります。

**注：** インタフェース・データソースには、リポジトリ・データベース以外のデータベースを使用するようにしてください。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストール概要』のデータベースの準備に関する項を参照してください。

次の表に、Performance Management Architect インタフェース・データソース構成のオプションを示します。

EPM System コンフィグレータのフィールド	説明	ユーザーの情報
新規データソース・リンクの作成	「新規データソース・リンクの作成」を選択し、「次へ」をクリックし、次のことを行います： <ol style="list-style-type: none"><li>データベース・タイプを選択します。97 ページの「<a href="#">インタフェース・データソースのデータベース・タイプ(オプション)</a>」を参照してください。</li><li>インタフェース・データソースのデータベース・プロパティを指定します。97 ページの「<a href="#">インタフェース・データソースの詳細(オプション)</a>」を参照してください。</li></ol>	
既存データソース・リンクの編集	「既存データソース・リンクの編集」を選択し、「次へ」をクリックし、次のことを行います： <ol style="list-style-type: none"><li>編集するデータソースを選択します。97 ページの「<a href="#">編集または削除するデータソースの選択(オプション)</a>」を参照してください。</li><li>データソース・プロパティを変更してください。97 ページの「<a href="#">インタフェース・データソースの詳細(オプション)</a>」を参照してください。</li></ol>	
データソース・リンクの削除	「データソース・リンクの削除」を選択し、「次へ」をクリックして、削除するインスタンスを選択します。97 ページの「 <a href="#">編集または削除するデータソースの選択(オプション)</a> 」を参照してください。	



## インタフェース・データソースのデータベース・タイプ(オプション)

- ▶ 特定のデータベース・タイプ(Oracle、SQL、DB2)を選択し、「次へ」をクリックします。

## インタフェース・データソースの詳細(オプション)

- ▶ インタフェース・データソースを作成または編集するには、データベースの詳細を指定します。

次の表に、Performance Management Architect インタフェース・データソース詳細構成のオプションを示します。

EPM System コンフィグ レータのフィールド	説明	ユー ザーの 情報
データベース・タイプ	データベース・タイプを表示します。	
データソース名	デフォルト名をそのまま使用するか、データ・ソース名を入力します。	
サーバー	データベースをホストするサーバーのデフォルト名をそのまま使用するか、サーバー名を入力します。(デフォルトはデータベース・タイプに基づいて表示されます。)	
ポート	データベースをホストするサーバーのデフォルトのポート番号をそのまま使用するか、サーバーのポート番号を入力します。(デフォルトはデータベース・タイプに基づいて表示されます。)	
SID (Oracle)またはデータベース(MS SQL Server または IBM DB2)	インタフェース・データ・ソースとして使用するデータベース名を入力します。	
ユーザー	インタフェース・データ・ソースとして使用するデータベースのユーザー名を入力します。	
パスワード	インタフェース・データ・ソースとして使用するデータベースのパスワードを入力します。	
インタフェース・テーブルを作成してください	データベースにインタフェース・テーブルを作成することを選択します。このオプションを選択することをお勧めします。	

## 編集または削除するデータソースの選択(オプション)

- ▶ 「既存データソース・リンクを編集してください」または「データソース・リンクを削除してください」を選択する場合は、編集または削除するデータソースを選択します。

**オプション:** データソースを削除する場合は、「インタフェース・テーブルを削除してください」を選択し、データベース・テーブルを削除してください。

## Essbase 固有のタスク

「タスクの選択」 ページで選択した Essbase サーバーのインスタンスを構成します。

### Essbase サーバー構成

- Essbase サーバーの構成情報を指定するか、または「次へ」をクリックして、デフォルト設定をそのまま使用します。一般的に、デフォルト設定をそのまま使用することをお勧めします。

EPM System コンフィグレータは、「タスクの選択」 ページで選択した Essbase のインスタンスを構成します。Essbase サーバーの追加インスタンスをインストール済の場合、そのインスタンスは「タスクの選択」 ページに Essbase-n と表示されます。Essbase サーバーの追加インスタンスの構成の詳細は、[100 ページの「Essbase サーバーの追加インスタンスの構成と開始」](#)を参照してください。

構成中、スタンドアロン・モードでの Essbase を選択しない場合、EPM System コンフィグレータにより Essbase が Shared Services に自動的に登録され、Shared Services 接続情報が `essbase.cfg` に書き込まれます。さらに、Essbase サーバーの起動に使用するファイルに環境変数が指定されます。環境変数の詳細は、[付録 B「Essbase 製品のオプションの手動構成」](#)を参照してください。

次の表に、Essbase サーバーのオプションの構成を示します。

表 14 Essbase サーバー構成

EPM System コンフィグレータのフィールド	説明	ユーザーの情報
エージェント・ポート番号	Essbase サーバーがクライアント要求をリスニングするデフォルトのポート番号をそのまま使用します。デフォルト値を変更する場合は、他のプログラムで使用していないポート番号を必ず入力してください。  ポート値は <code>essbase.cfg</code> に保管されます。	
開始ポート	Essbase サーバーが接続を行うために最初に使用するポート番号。	
終了ポート	Essbase サーバーが接続を行うために使用できる最大のポート番号。  Essbase では、各アプリケーションで少なくとも 2 つのポートが使用されます。大規模なアプリケーションでは、より広いポート範囲が必要です。	
アプリケーションの場所へのフル・パス (ARBORPATH)	アプリケーションの場所。  注： 前のバージョンの Essbase は、ARBORPATH を使用してインストールの場所を参照しました。	

EPM System コンフィグ レータのフィールド	説明	ユー ザ ー の 情 報
Essbase で使用される言語を設定してください (ESSLANG)	<p>ESSLANG 変数は、ロケール定義です。たとえば、アメリカ英語をサポートするには、ESSLANG を English_UnitedStates.Latin1@Binary に設定できます。</p> <p>コンピュータ上のオペレーティング・システム・ロケールの設定を確認し、一致する ESSLANG 値を選択します。コンピュータの ESSLANG 設定は、コンピュータのオペレーティング・システムのロケール設定に一致する必要があります。</p> <p>また、Windows マシンでは、ESSLANG 値とシステム・ロケールがオフラインで使用する Planning アプリケーションの言語と一致する必要があります。</p> <p>Essbase 製品が正常に起動するには、正しい ESSLANG 設定を選択する必要があります。ESSLANG 設定は、アプリケーションおよびデータベースの機能に影響を及ぼす場合があります。</p> <p>Windows では、ESSLANG がすでにコンピュータに設定されている場合(たとえば、すでに Essbase をインストール済である場合)、デフォルトでは現在の値が選択されます。</p> <p>UNIX プラットフォームでは、オペレーティング・システムの設定とは無関係に、ESSLANG 設定はデフォルトで English (Latin I) に設定されます。</p> <p>ESSLANG の詳細は、99 ページの「ESSLANG 変数」を参照してください。</p> <p>サポートされる ESSLANG 値の完全なリストは、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』を参照してください。</p>	
スタンドアロン・モードで Essbase を配置してください	<p>Shared Services セキュリティではなく、Essbase サーバーの従来のセキュリティを選択します。</p> <p>-forceRegistry オプションを使用して EPM System コンフィグレータを開始した場合は、このオプションを使用できません。</p>	

## ESSLANG 変数

各 Essbase サーバーのインストールでは、ESSLANG 値を設定する必要があります。『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』のファイル・エンコードの管理についてのトピックを参照してください。

ESSLANG のデフォルト値は、English (Latin1) です。英語以外の言語の ESSLANG 値の例については、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』の Unicode モード・アプリケーションのトピック内にあるサポートされているロケール・リストを参照してください。

構成中、EPM System コンフィグレータが、Shared Services レジストリと Essbase の開始に使用する起動ファイルに、指定した ESSLANG 値を書き込みます。

Administration Services および Provider Services の場合、ESSLANG 値を指定するプロンプトはなく、デフォルト値の"English\_UnitedStates.Latin1@Binary"に設定されます。Administration Services の場合、ESSLANG 値は、HYPERION\_HOME/products/essbase/eas/server/OlapAdmin.properties に保管され、Provider Services の場合、HYPERION\_HOME/products/Essbase/aps/bin/Essbase.properties に保管されます。

## ESSLANG 設定の管理

Essbase サーバー・コンピュータ上の ESSLANG 環境変数は、使用するアプリケーションのロケール値を保持する必要があります。

**注：** Essbase サーバー・コンピュータ上でアプリケーションを作成した後で ESSLANG 変数を変更した場合、そのアプリケーションは開始できなくなります。

クライアントもロケールを使用します。クライアントでは、ESSLANG 変数はオプションです。ESSLANG がクライアントで定義されていない場合、オペレーティング・システムで指定されているロケールが使用されます。非 Unicode モードのクライアントおよびアプリケーションでは、クライアントと Essbase のロケールは同じである必要があります。Unicode モードのアプリケーションでは、クライアントと Essbase のロケール値は異なっても構いません。

データベースが破損される可能性をなくすために、次の場合には、クライアントと Essbase サーバーで ESSLANG ロケール値が同じである必要があります：

- クライアントが Unicode に対応していません
- Unicode 対応のクライアントが、Unicode に対応していないバージョンの Essbase サーバーにある既存のアウトラインの上にアウトラインを保存します
- Unicode 対応のクライアントが、Unicode 対応の Essbase サーバーにある非 Unicode アプリケーションにアウトラインを保存します

Unicode 対応のクライアントが Unicode モードのアプリケーションに属するアウトラインを表示および更新する場合は、クライアント・コンピュータと Essbase サーバー・コンピュータとで ESSLANG ロケールの指定が異なってもかまいません。

英語以外の環境で Essbase RTC を使用する製品に対しては、クライアント上で ESSLANG を手動で設定する必要があります。

## Essbase サーバーの追加インスタンスの構成と開始

► Windows で Essbase サーバーの追加インスタンスを構成するには：

- 1 EPM System コンフィグレータによる構成時は、「タスク選択」パネルで Essbase-n を選択します。ここで n は、構成するインスタンスです。
- 2 「Essbase サーバー構成」ページで、Essbase サーバーの追加インスタンスの一意のエージェント・ポートおよびポート範囲を指定します。ある Essbase サーバー・インスタンスで使用されるポート範囲は、別のインスタンスまたは別の製品によって使用されるポート範囲とは重複できません。

Essbase サーバーの追加インスタンスのポート番号は、このインストール内の `essbase.cfg` ファイルに保管されます。加えて、InstanceID 設定がこのインストール用の `essbase.cfg` ファイルに作成され、Essbase サーバーの各インスタンスが独自のログ・ファイル・ディレクトリを持つようにします。

Essbase サーバーの各インスタンスには、独自の起動スクリプトがあります。Essbase サーバーの追加インスタンスを開始するには、このインストール用の startEssbase.cmd | .sh スクリプトを使用してください。

## Planning 固有のタスク(オプション)

デフォルト・クラスタが Planning データベースの構成時に作成されるため、Planning のクラスタの作成は、オプションです。Shared Services を構成し配置した後に、Planning クラスタを構成してください。Shared Services が実行されている必要があります。

## Planning クラスタの管理(オプション)

- ▶ クラスタの作成、編集、削除、アクティブ化、または再関連付けを行うかどうかを選択します。

クラスタは、Planning アプリケーションのグループの名前であり、1 つまたは多くのアプリケーションを含むことができます。各アプリケーションは、アプリケーションの作成時に、クラスタに関連付けられます。

クラスタは、クラスタの作成中またはその他いつでも EPM System コンフィグレータの「Planning クラスタの管理」を選択することによってアクティブ・クラスタとして指定できます。

クラスタを作成または編集する前に、データベースを構成する必要があります。デフォルト・クラスタは、その他のすべての Planning 構成タスクを完了した後に作成されます。

新しい Planning サーバーを既存構成に追加するには、各 Planning サーバー・マシンから「クラスタのアクティブ化」タスクを実行します。

次の表に、Planning クラスタ構成用オプションを示します。

EPM System コンフィグレータのフィールド	説明	ユーザーの情報
クラスタの作成	「クラスタの作成」を選択して、「次へ」をクリックし、クラスタ・プロパティを指定します。102 ページの「 <a href="#">Planning クラスタの管理 - クラスタのプロパティ(オプション)</a> 」を参照してください。	
クラスタの編集	「クラスタの編集」を選択し、「次へ」をクリックして、編集するクラスタを選択し、クラスタのプロパティを変更します。103 ページの「 <a href="#">Planning クラスタの編集(オプション)</a> 」を参照してください。	
クラスタの削除	「クラスタの削除」を選択して、「次へ」をクリックし、削除するクラスタを選択します。102 ページの「 <a href="#">Planning クラスタの管理 - クラスタのプロパティ(オプション)</a> 」を参照してください。	

EPM System コンフィグレータのフィールド	説明	ユーザーの情報
クラスタのアクティブ化	<p>「クラスタのアクティブ化」を選択して、「次へ」をクリックし、アクティブ化するクラスタを選択します。102 ページの「<a href="#">Planning クラスタの管理 - クラスタのプロパティ(オプション)</a>」を参照してください。</p> <p>クラスタをアクティブ化する際、そのクラスタに関連付けられているアプリケーションのみが EPM Workspace に表示されます。</p>	
クラスタとアプリケーションの再関連付け	<p>「クラスタとアプリケーションの再関連付け」を選択して、「次へ」をクリックし、関連付けるクラスタとアプリケーションを選択します。102 ページの「<a href="#">Planning クラスタの管理 - クラスタのプロパティ(オプション)</a>」を参照してください。</p> <p>アプリケーションは作成時にクラスタに関連付けられますが、この関連付けは、「クラスタとアプリケーションの再関連付け」を選択することにより、変更できます。これは、アプリケーションを別のサーバーに関連付けたい場合などに便利です。</p>	

## Planning クラスタの管理 - クラスタのプロパティ(オプション)

► 「Planning クラスタの管理」 ページでの選択内容に応じて、次のオプションを選択します:

- 「クラスタの作成」を選択した場合は、次のオプションを指定します:

次の表に、Planning クラスタの作成用オプションを示します。

EPM System コンフィグレータのフィールド	説明	ユーザーの情報
クラスタ名	クラスタの名前を指定するか、デフォルト名をそのまま使用します。	
Web 層ホスト名	<p>Planning Web サーバー・コンポーネントをインストールしたマシンのフル・ネームを入力します。</p> <p><b>注:</b> マルチサーバー環境では、このマシンはロード・バランサである必要があります。シングル・サーバー環境では、Planning サーバーと同じマシンになります。</p>	
サーバー・ポート	デフォルト・サーバー・ポートをそのまま使用するか、必要に応じて変更します。ポート番号は、アプリケーション・サーバーの配置用に使用されるポートである必要があります。	
クラスタのアクティブ化	このクラスタに関連付けられているアプリケーションのみを EPM Workspace に表示する場合に、このオプションを選択します。すべてのアプリケーションを EPM Workspace に表示するには、このチェック・ボックスを選択しないでください。	

- 「クラスタの編集」を選択した場合は、編集するクラスタを選択し、「次へ」をクリックして、クラスタのプロパティを編集します。103 ページの「[Planning クラスタの編集\(オプション\)](#)」を参照してください。
- 「クラスタの削除」を選択した場合は、削除するクラスタを選択します。
- 「クラスタのアクティブ化」を選択した場合は、アクティブ化するクラスタを選択します。

- 「クラスタとアプリケーションの再関連付け」を選択した場合は、クラスタ名を選択してから、関連付けるアプリケーションを選択します。

## Planning クラスタの編集(オプション)

- ▶ 既存クラスタのオプションを編集します。

次の表に、Planning クラスタの編集用オプションを示します。

EPM System コンフィグレータのフィールド	説明	ユーザーの情報
Web 層ホスト名	Planning Web サーバー・コンポーネントをインストールしたマシンのフル・ネームを入力します。  <b>注：</b> マルチサーバー環境では、このマシンはロード・バランサである必要があります。シングル・サーバー環境の場合は、Planning サーバーと同じマシンになります。	
サーバー・ポート	デフォルトのサーバー・ポートをそのまま使用するか、必要に応じてこれを変更します。ポート番号は、アプリケーション・サーバーの配置用に使用されるポートである必要があります。	
SSL	SSL(セキュア・ソケット・レイヤー)を使用可能にします。	
アクティブ・クラスタとしてアクティブ化	このクラスタと関連付けられているアプリケーションのみ EPM Workspace に表示します。	

## Financial Management 固有のタスク

EPM System コンフィグレータを管理者として実行し、Financial Management を構成する必要があります。

### Financial Management DCOM の構成

- ▶ 分散型コンポーネント・オブジェクト・モデル(DCOM)のアカウント情報を指定して、DCOM セキュリティを構成します。

Windows 管理者を指定する必要があります、このアイデンティティの元でアプリケーション・サーバー・プロセスが起動されます。このタスクは、Financial Management Web サーバー層およびサービス層をホストするマシンで実行します。

**注：** DCOM ユーザーを構成するグループ・ポリシー権限を持つドメインまたはローカル管理者として実行する必要があります。

Financial Management のアプリケーション・サーバーの全プロセスは管理者 ID(Windows の管理ユーザー)で実行されるため、他の管理者がアプリケーション・



サーバーにログオンしてアプリケーション・サーバーのプロセスを開始する必要はありません。

次の表に、Financial Management DCOM の構成オプションを示します。

EPM System コンフィグ レータの フィールド	説明	ユー ザー の情 報
ドメイン・ ユーザー	<p>ユーザー名を指定します。</p> <p>デフォルトでは、EPM System コンフィグレータにログインし、コンフィグレータを実行しているユーザーのユーザー名が EPM System コンフィグレータに表示されます。</p> <p>ドメインとユーザー名については次の制約事項に注意してください:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● ユーザー名は、管理対象のコンピュータのその他のユーザー名またはグループ名と重複できません。ユーザー名には、最大 20 文字の大文字および小文字を使用できます。ユーザー名は、ピリオド(.)およびスペースのみで構成することはできず、また、次の特殊文字を含めることはできません: " ' / \ [ ] : ;   = , + * ? &lt; &gt; &amp;</li> <li>● ユーザー名に一重引用符( ' )を使用しないでください。ユーザー名に一重引用符が含まれているユーザーは、Financial Management にログオンできません。</li> <li>● ユーザー・アカウントを構成するときに、IP アドレスをドメイン名としては使用できません。</li> </ul>	
パスワード	<p>パスワードを入力します。パスワードには最大 14 文字使用できます。大文字と小文字は区別されます。パスワードはシステムによって検証されないため、使用するパスワードが有効であることを確認してください。</p> <p><b>注：</b> システムのローカル・セキュリティ・ポリシーを変更した場合は、一旦ログオフしてからログオンしなおして、変更を適用する必要があります。</p>	
パスワード の再入力	<p>確認のためパスワードを再度入力します。</p>	
このマシン での DCOM の使用可能 化	<p>このマシン上で DCOM を使用可能にします。</p> <p>このオプションは、アプリケーション・サービスと Financial Management の Web 層インストールに対して使用できます。DCOM がすでにコンピュータ上で使用可能な場合、このオプションは使用できません。</p> <p>このオプションは、コンピュータ全体の DCOM を使用可能にします。DCOM を使用可能にすると、マシンのリモート・クライアントによるサーバーの起動およびオブジェクトへの接続が可能になります。また、コンピュータの DCOM デフォルト認証レベルが、なしに設定されます。DCOM の使用可能化の手順は、Financial Management アプリケーション・サーバーが別のコンピュータにある場合に、Financial Management クライアントのコンポーネントが、アプリケーション・サーバーのコンポーネントと通信する際に必要です。また、これにより、Financial Management クライアントとアプリケーション・サーバー・コンピュータが別のドメインに存在することが可能になります。</p>	

Windows 管理者情報を入力すると、EPM System コンフィグレータが次の手順を実行します:

- Windows 管理ユーザー(DCOM ユーザー)がローカル・マシン上にない場合、これを作成します。
- ユーザーをローカルの管理者グループに追加します。Financial Management 管理者ユーザーまたはそのグループは、各アプリケーション・サーバー上のローカル管理者グループのメンバーである必要があります。



- 次のローカル・セキュリティ・ポリシーを管理ユーザーに割り当てます:「オペレーティング・システムの一部として機能」、「バッチ・ジョブとしてログオン」。これらのローカル・セキュリティ権限は、各 Financial Management アプリケーション・サーバー上のユーザーに対して使用可能にする必要があります。
- 全 Financial Management アプリケーション・プロセスに対して DCOM を実行するユーザーの ID を設定します。
- ユーザーに DCOM を起動する権限を設定します。

DCOM ユーザー・パスワードを変更する場合、または別の DCOM ユーザー名とパスワードを使用する場合には、ユーザー設定が有効で機能することを確認し、EPM System コンフィグレータを使用して DCOM ユーザー名とパスワードを再入力します。このタスクは、Financial Management の Web 層およびサービス層で実行します。

## Financial Management アプリケーション・サーバーの構成

- ▶ アプリケーション・サーバー情報を指定するか、「次へ」をクリックしてデフォルト値を使用します。

次の表に、Financial Management アプリケーション・サーバーの構成オプションを示します。

EPM System コンフィグ レータの フィールド	説明	ユー ザー の情 報
作業用フォルダ	<p>デフォルト値をそのまま使用するか、サーバー作業用フォルダのパスを入力または参照します。</p> <p>サーバー作業用フォルダには、レポートなどシステムで生成されたファイルが保管されます。デフォルトのサーバー作業用フォルダの場所は、<code>HYPERION_HOME/products/FinancialManagement/Server Working Folder</code> です。</p> <p>注： 複数のアプリケーション・サーバーを使用している場合、各サーバーには独自の作業用フォルダが必要です。アプリケーション・サーバーでは、一時ファイルが上書きされる可能性があるため、作業用フォルダは共有できません。</p>	
アプリケーション・サーバーの最大遅延	デフォルト値をそのまま使用するか、アプリケーションが変更されてから、別のアプリケーション・サーバーからアプリケーションにアクセスするユーザーにその変更が表示されるまでの間の秒数を入力します。	
データ同期の最大遅延	デフォルト値をそのまま使用するか、データを変更してから、別のアプリケーション・サーバーからそのデータにアクセスするユーザーにその変更が表示されるまでの間の秒数を入力します。	
作成者グループ	<p>デフォルト値をそのまま使用するか、作成者グループ名を入力します。</p> <p>アプリケーション作成者グループ内のユーザーのみ、Financial Management アプリケーションを作成できます。</p>	

EPM System コンフィグ レータの フィールド	説明	ユー ザー の情 報
管理者グ ループ	<p>デフォルト値をそのまま使用するか、管理者グループ名を入力します。</p> <p>管理者グループのユーザーのみが、管理タスクにアクセスできます。管理者グループは、Shared Services で定義されているグループである必要があります。</p> <p>管理者グループを指定しない場合、DCOM ユーザーはシステム管理タスクにアクセスできるようになります。</p>	

## Financial Management サーバー/クライアントの構成

► クラスタに追加するアプリケーション・サーバーの名前を指定します。

アプリケーション・サーバー・クラスタは、同じアプリケーションを実行するアプリケーション・サーバーのセットです。クラスタ化されたアプリケーション・サーバーは、負荷分散機能とフェイルオーバー機能を提供し、アプリケーションはユーザーに対して使用可能な状態であり続けながら、サーバーの保守を透過的に行えます。

次の表に、Financial Management サーバー/クラスタの構成オプションを示します。

EPM System コン フィグレータの フィールド	説明	ユー ザーの 情報
定義済クラスタ	<p>サーバーを指定するクラスタを選択します。</p> <p>このリストには、インストールに含まれるすべてのマシンで指定されている全クラスタが表示されます。</p> <p>クラスタは追加、編集または除去もできます。</p> <p>デフォルト・クラスタがない場合には、EPM System によって作成されます。</p>	
クラスタ内の サーバー	<p>このリストには、現在選択されているクラスタ内の全サーバーが表示されます。サーバーをリストから削除するには、サーバーを選択して「削除」をクリックします。</p>	
使用可能なサー バー	<p>クラスタに追加するサーバーを選択して、「追加」をクリックします。</p> <p>リストには、使用可能なサーバーがすべて表示されます。サーバーが1つしかない場合、ここに表示されます。クラスタにすでに含まれるサーバーは使用不可であり、リストされません。</p>	

1つのデータベース・サーバーに接続する複数のアプリケーション・サーバーを使用している場合には、アプリケーション・サーバー上のシステム・クロックが同期化されていることを確認します。クロックが同期化されていない場合、表示されているデータが最新ではない可能性があります。

**注：** Financial Management アプリケーション・サーバー間の同期は、システム時刻に基づきます。クロックを変更すると、この同期に影響を及ぼす可能性があります。夏時間のため時刻を変更する場合、時刻変更の前にサーバーを停止し、変更後再起動することをお勧めします。

## Financial Management サーバー/クラスタの登録

- アプリケーションにアクセスする前に、サーバーまたはクラスタを登録します。

インストールに含まれる各マシンでこのタスクを実行できます。この Web アプリケーションと通信するサーバーまたはクラスタを指定します。

次の表に、Financial Management サーバーまたはクラスタの登録オプションを示します。

EPM System コンフィグレータのフィールド	説明	ユーザーの情報
使用可能なサーバー/クラスタ	登録するサーバーまたはクラスタを選択し、「追加」をクリックします。 このリストには、すべての定義済クラスタと個々のサーバーが表示されます。	
登録済サーバー/クラスタ	この登録リストからサーバーまたはクラスタを除去するには、これを選択し、「削除」をクリックします。 このリストには、登録済のサーバーまたはクラスタが表示されます。	

## Financial Management Web サーバーの構成

- IIS の Web アプリケーションとして使用可能にするコンポーネントを選択するか、「次へ」をクリックして、デフォルト値を使用します。

次の表に、Financial Management Web サーバーの構成オプションを示します。

EPM System コンフィグレータのフィールド	説明	ユーザーの情報
Financial Management Web アプリケーション用 IIS の構成	Financial Management を IIS の Web アプリケーションとして使用可能にするかどうか選択し、Financial Management Web サーバー用のオプションを指定します。 <a href="#">108 ページの「Financial Management Web アプリケーションの構成」</a> を参照してください。	
IIS を構成して Smart View Provider の使用可能化	IIS の Web アプリケーションとして Smart View を使用可能にするかどうかを選択し、Smart View Web サーバー用のオプションを指定します。 <a href="#">109 ページの「Financial Management による Smart View プロバイダの使用可能化」</a> を参照してください。	
IIS を構成してライフサイクル管理の使用可能化	IIS の Web アプリケーションとしてライフサイクル管理を使用可能にするかどうかを選択します。	

## Financial Management Web アプリケーションの構成

- Financial Management 用 Web サーバーを構成するか、「次へ」をクリックしてデフォルト値をそのまま使用します。

次の表に、Financial Management Web アプリケーションの構成オプションを示します。

EPM System コンフィグレータのフィールド	説明	ユーザーの情報
Web サーバーのインストール・ディレクトリ	デフォルト値をそのまま使用するか、Financial Management Web インストール・ディレクトリのパスを入力または参照します。 注： デフォルトの場所は、Web コンポーネントのインストール・ディレクトリ(HYPERION_HOME/products/FinancialManagement/Web/HFM など)です。	
仮想ディレクトリ名	デフォルト値をそのまま使用するか、HFM など、仮想ディレクトリ名を入力します。	
Web セッションのタイムアウト	デフォルト値をそのまま使用するか、タイムアウトを分単位で指定します。	
詳細設定オプション	Web サーバー構成の詳細オプションを指定するには、「詳細設定オプション」をクリックします。 <a href="#">108 ページの「Financial Management Web アプリケーションの詳細設定オプション」</a> を参照してください。	

## Financial Management Web アプリケーションの詳細設定オプション

- Financial Management Web アプリケーション・サーバーに対する追加オプションを指定します。

次の表に、Financial Management Web アプリケーション構成の詳細設定オプションを示します。

EPM System コンフィグレータのフィールド	説明	ユーザーの情報
ファイル転送ディレクトリ	ロード、抽出、およびログ・ファイル用のディレクトリ・パスを参照するか、デフォルトの場所を使用します。例: HYPERION_HOME/products/FinancialManagement/Web/HFM/FileTransfer  ファイル転送ディレクトリは、仮想ディレクトリの外に配置する必要があります。仮想ディレクトリ内に配置する場合には、ファイル転送ディレクトリに実行権限を設定しないようにしてください。  ログ・ファイルと一時ファイルのロードと抽出用にファイル転送ディレクトリを作成する必要があります。ファイル転送ディレクトリを指定すると、次の手順がシステムにより実行されます: <ul style="list-style-type: none"><li>● ファイル転送用のディレクトリが存在しない場合は作成します。</li><li>● IIS ユーザーに読取り、書込み、実行の Windows 権限を割り当てます。</li></ul>	

EPM System コンフィグレータのフィールド	説明	ユーザーの情報
アップロード・ファイルの最大サイズ	<p>ロードする Web ファイルの最大サイズを入力します。</p> <p>IIS 6.0 を使用する場合、Web 上でファイルをロードおよび抽出する際の ASP ファイル・サイズ・プロパティを設定できます。ロードおよび抽出中に問題が発生する場合以外は、デフォルトのファイル・サイズ・プロパティを使用することをお勧めします。ただし、大規模なファイルをロードまたは抽出し、ブラウザに大量のデータを送信してエラーが発生する場合は、ファイル・サイズの設定を変更できます。</p> <p>たとえば、大規模なファイルをロードする場合、最大アップロード・ファイル・サイズが小さく設定されすぎていると 403 エラー・メッセージが表示される場合があります。この場合、最大ファイル・サイズを増やす必要があります。ファイル・サイズはバイトで入力するため、たとえば 200 メガバイトのファイルをロードする場合は、最大アップロード・ファイル・サイズの設定を 200,000,000 バイトに変更します。</p>	
応答バッファ・サイズ	抽出する Web ファイルの最大サイズを入力します。	

Windows 2003 上の IIS 6.0 で IIS 5.0 分離モードを実行する場合は、Web ディレクトリを作成し、ASP プロパティを設定した後、アプリケーション保護および認証レベルに対して 2 つの追加 IIS プロパティを手動で設定する必要があります。[164 ページの「IIS 5.0 分離モードの設定の構成\(オプション\)」](#)を参照してください。

## Financial Management による Smart View プロバイダの使用可能化

➤ Smart View 用に Web サーバーを構成します。

次の表に、Financial Management Smart View プロバイダの構成オプションを示します。

EPM System コンフィグレータのフィールド	説明	ユーザーの情報
Web サーバーのインストール・ディレクトリ	<p>Smart View がインストールされている場所を入力するか、デフォルトの場所を使用します。</p> <p><b>注：</b> デフォルトの場所は <code>HYPERION_HOME/products/FinancialManagement/Web/HFMOOfficeProvider</code> です。</p>	
仮想ディレクトリ名	<p>Smart View 用の仮想ディレクトリ名を入力するか、デフォルトの仮想ディレクトリを使用します。</p> <p>デフォルトのディレクトリ名は <code>HFMOOfficeProvider</code> です。</p>	
Web セッションのタイムアウト	<p>デフォルト値を受け入れるか、Web セッションのタイムアウト値を秒単位で入力します。</p> <p><b>注：</b> デフォルトのセッション・タイムアウトは 360 秒です。タイムアウト・オプションは、Smart View セッションに適した時間に設定してください。</p>	

EPM System コンフィグレータのフィールド	説明	ユーザーの情報
詳細設定オプション	クリックして、Smart View 構成の詳細設定オプションを指定します。 <a href="#">110 ページの「Smart View Web サーバー構成の詳細設定オプション」</a> を参照してください。	

## Smart View Web サーバー構成の詳細設定オプション

► Smart View Web サーバー構成の補足オプションを指定します。

次の表に、Smart View Web サーバー構成の詳細設定オプションを示します。

EPM System コンフィグレータのフィールド	説明	ユーザーの情報
HTTP 圧縮の使用可能化	Web ブラウザと Web アプリケーション間の通信の圧縮を使用可能にするかどうかを指定します。 デフォルトでは、使用可能になっています。	
プロキシ・サーバー接続の継続活動の使用可能化	Web サーバーとクライアントの間でプロキシ・サーバーを使用している場合は、このオプションを選択して、接続の間隔を秒数で指定します。	
継続活動間隔(秒)	Web サーバーとクライアントの間でプロキシ・サーバーを使用している場合は、このオプションを選択して、接続の間隔を秒数で指定します。	
クライアント・バージョンの方が新しい場合は常に警告	新しいアドイン・バージョンに対して警告が発生されるようにします。	

## 拡張分析用 Financial Management データ・ソースの構成

► オプション: 拡張分析用の DSN 情報を指定します。

拡張分析用のデータ・ソース名(DSN)情報を指定しない場合は、このタスクをスキップしてください。

このタスクは、Financial Management のサービス層インストールに対して実行できます。

拡張分析機能により、Essbase を使用して、データを分析し、レポートを作成できます。データ・ソース名(DSN)を使用して、拡張分析のためのリレーショナル・データベースの宛先を指定します。

次の表に、Financial Management 拡張分析構成用のオプションを示します。

EPM System コンフィグレータのフィールド	説明	ユーザーの情報
DSN 名	データ・ソース名を入力します。 (UDL がすでに作成されていることが必要です。)	
DSN パス	データ・ソース・パスを入力または参照します。 DSN パスは、拡張分析用の UDL です。この UDL ファイルはすでに作成済である必要があります。UDL ファイルの名前を拡張子 <code>.hfmudl</code> で指定している場合、この UDL ファイルを暗号化できます。 <a href="#">225 ページの「UDL ファイルの暗号化」</a> を参照してください。	
インデックス・テーブルスペース	<b>オプション:</b> Financial Management データ・テーブルとインデックスが作成されたデータベース・テーブルスペースを指定するには、インデックスの場所を選択します。  <b>注:</b> Oracle および IBM DB2 SMS では、データ・テーブルスペースのみを指定します。インデックス・テーブルスペースは使用しません。	
データ・テーブルスペース	<b>オプション:</b> Financial Management データ・テーブルとインデックスが作成されたデータベース・テーブルスペースを指定するには、データ・テーブルの場所を選択します。	

初期構成の後で別の UDL ファイルを選択する場合には、EPM System コンフィグレータに戻り、「拡張分析用 Financial Management の構成」を選択し、新しい DSN を指定します。

リレーショナル・データベースと、Financial Management アプリケーションで使用する拡張分析用 UDL ファイルは使用しないでください。エクスポートされるスター・スキーマおよびデータ用のデータベース、ならびにデータベースをポイントする UDL ファイルを作成する必要があります。

**注:** 複数のサーバーで拡張分析機能を使用する場合は、各アプリケーション・サーバーで、クロック設定、データ・ソースおよび UDL ファイルが同じになるように設定する必要があります。

## Reporting and Analysis 固有のタスク

Reporting and Analysis サービスを構成します。

### Reporting and Analysis サービスの構成

- ▶ Reporting and Analysis サービスを構成するための次のオプションを指定するか、「次へ」をクリックしてデフォルト値を使用します。

次の表に、Reporting and Analysis サービスの構成オプションを示します。



EPM System コンフィグ レータのフィールド	説明	ユーザー の情報
サービス名/ポート範囲	リスト内の各 Reporting and Analysis Interactive Reporting サービスについて、使用するポート範囲を指定するか、「次へ」をクリックしてデフォルト・ポート範囲をそのまま使用します。	

## Strategic Finance 固有のタスク

構成中に、EPM System コンフィグレータは Strategic Finance のデフォルトのインスタンスを作成します。

### Strategic Finance の構成

- ▶ Strategic Finance データ・ディレクトリの場所を指定するか、「次へ」をクリックしてデフォルト値を使用します。

次の表に、Strategic Finance の構成オプションを示します。

EPM System コンフィグレータのフィールド	説明	ユーザーの情報
データ・ディレクトリ	Strategic Finance データの場所。	

サーバー・データ・ファイルのディレクトリを要求された場合には、リモート・サーバー上のファイル共有ディレクトリまたは NAS (Network Attached Storage) 領域内の Strategic Finance データ・ディレクトリを指定しないでください。ローカルのハード・ドライブまたは SAN (Storage Area Network 配列) のデータ・ディレクトリを指定してください。

### Strategic Finance Web サーバーの構成

- ▶ Strategic Finance Web サーバーを構成するためには次のオプションを指定します:

次の表に、Strategic Finance Web サーバーの構成オプションを示します。

EPM System コンフィグ レータのフィールド	説明	ユーザーの 情報
Web サービスの使用可能化	Web 用に Strategic Finance Web サービスのアプリケーション・プログラミング・インタフェースをアクティブ化するために選択します。これは、FDM へのインタフェースが機能するために使用可能にする必要があります。	
Strategic Finance サーバーの選択	デフォルト値をそのまま使用するか、関連付けられている Strategic Finance サーバーを指定します。	



## FDM 固有の構成タスク

このタスクでは、FDM に関する情報で Shared Services レジストリが更新され、FDM が Shared Services に登録されますが、ページは表示されないなので、情報を入力する必要はありません。FDM の構成に関する詳細については、『Oracle Hyperion Financial Data Quality Management Configuration Guide』を参照してください。

### FDM サーバーの構成

- ▶ 「タスクの選択」 ページで「FDM サーバーの構成」を選択して、EPM System コンフィグレータを実行します。

## サイレント構成の実行

サイレント構成では、構成プロセスが自動化され、各マシンに構成設定を手動で指定することなく、複数のコンピュータ上に EPM System 製品を構成できます。

サイレント構成を有効にするには、応答ファイルに構成設定を記録します。その後、コマンド・ラインから、応答ファイルに保存した構成オプションを使用して、サイレント構成を実行できます。

- ▶ 構成設定を記録してサイレント構成を実行するには:

- 1 EPM System コンフィグレータを含むディレクトリに移動します。デフォルトでは、ディレクトリは `HYPERION_HOME/common/config/9.5.0.0` です。
- 2 コマンド・ライン・プロンプトから、`configtool.bat -recordfilename` または `./configtool.sh -record filename` と入力します。filename は、絶対パスかファイル名になります。

ファイルは XML フォーマットで保存されますが、`.xml` 拡張子でファイルを保存する必要はありません。

EPM System コンフィグレータが起動します。

ファイル名を指定しない場合は、EPM System コンフィグレータが自動的にファイルを作成します: `HYPERION_HOME/common/config/9.5.0.0/configResp`。

- 3 EPM System コンフィグレータの実行中、記録するオプションを指定します。

**注：** サイレント構成を記録する場合、EPM System コンフィグレータを 1 回のみ実行できます。(「製品の選択」パネルに戻り、他の構成タスクを続行することはできません。)「タスクの選択」パネルに戻ると、応答ファイルが再記録されます。

構成オプションは XML フォーマットの応答ファイルに記録されます。パスワードは、応答ファイルに暗号化されたフォーマットで保存されます。

これで、サイレント・モードで製品を構成する準備が整いました。

- 4 製品を構成するマシンに応答ファイルをコピーします。また、構成するマシンからアクセスできるネットワーク・ドライブにファイルをコピーすることもできます。
- 5 コマンド・ラインから次のコマンドを入力します:

```
configtool.bat -silent filename または ./configtool.sh -silent filename。
```

構成がバックグラウンドで実行されます。

**注：** サイレント応答ファイルは、EPM System のリリース 11.1.1.0、11.1.1.1 および 11.1.1.2 間で互換性がありません。EPM System リリース 11.1.1.0 または 11.1.1.1 で使用するサイレント応答ファイルを作成した場合は、EPM System リリース 11.1.1.2 用に再作成する必要があります。リリース 11.1.1.4 に移行するメンテナンス・リリースを適用する際は、ERP Integrator をインストールする場合のみサイレント応答ファイルを再作成する必要があります。

構成オプションを変更するため、応答ファイルを後で変更できます。

**ヒント：** 後でパスワードを変更するには、テキスト・エディタで応答ファイルを開き、平文でパスワードを入力して、<encrypted>パラメータを false に変更します。この応答ファイルを使用してサイレント構成を次に実行したとき、EPM System コンフィグレータによってパスワードが暗号化され、<encrypted>パラメータが TRUE に戻されます。

## Shared Services をインストールしない Shared Services レジストリの設定

Essbase をスタンドアロン・モードでインストールする場合(Shared Services を使用しない)場合、Shared Services のインストールをスキップできます。ただし、Shared Services レジストリ・データベースを構成する必要があります。Shared Services をインストールせずに、Shared Services レジストリ・データベースを構成するには、EPM System コンフィグレータをコマンド・ラインから -forceRegistry オプションを使用して実行します。このオプションにより、構成中に「Shared Services およびレジストリ・データベース構成」ページが表示されるため、Shared Services レジストリのデータベース詳細を入力できます。EPM System コンフィグレータにより、データベースに Shared Services レジストリ用のテーブルが移入されますが、Shared Services 用のテーブルは移入されません。

► Shared Services をインストールしないで Shared Services レジストリを構成するには:

- 1 コマンド・ラインから -forceRegistry オプションを使用して、EPM System コンフィグレータを開始します:

- Windows コンソールから、HYPERION\_HOME/common/config/version\_number に移動し、configtool.bat -forceRegistry と入力します。
- UNIX では、HYPERION\_HOME/common/config/version\_number に移動し、./configtool.sh -forceRegistry と入力します。

-forceRegistry オプションは、EPM System コンフィグレータのサイレント・モードとコンソール・モードでも動作します。例:

```
configtool.bat|.sh -forceRegistry -record
```

```
configtool.bat|.sh -forceRegistry -silent
```

```
configtool.bat|.sh -forceRegistry -console
```

- 2 **Shared Services** レジストリのデータベース詳細情報を入力して、構成を続行します。

## 構成中の処理

製品の構成中、EPM System コンフィグレータは次のアクションを行います:

- 選択された構成タスクを実行します。
- EPM Workspace 内の製品のヘルプを構成します。
- このマシン上の全サービスを開始します。
- 構成中に「共通設定」ページでこのオプションを選択した場合、各製品を Windows サービスの一部として開始されるように構成します。Integration Services は例外で、インストール中に Windows サービスとして開始するように構成されています。
- Shared Services を構成する際、ネイティブ・ディレクトリにデフォルトの Shared Services 管理者役割を作成します。これは、プロビジョニングされる前のユーザーの作成にすぎません。その後、EPM System コンフィグレータを使用して、製品を Shared Services に登録する際、Shared Services 管理者役割が、製品の管理者役割にプロビジョニングされます。Shared Service Console でこのパスワードをただちに変更してください。

## 構成のトラブルシューティング

構成上の警告とエラーは、すべて次のように記録されます:

HYPERION\_HOME/logs/config

エラーが発生した場合は、次のタスクを行います:

- 製品を個別に構成します。
- 構成の確認、ログを使用したデバッグ、トラブルシューティング、および構成上の共通の問題の解決策については、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストールおよび構成トラブルシューティング・ガイド』を参照してください。



---

## この章の内容

単一スクリプトを使用したサービスの開始 .....	117
サービスおよびプロセスの要約リスト .....	118
サービスおよびプロセス .....	119
クライアントの起動 .....	138

この章は、EPM System 製品を開始する方法について説明し、推奨する開始順序を示します。また、この章では、EPM System 製品のデフォルト URL も示します。

サービスまたはプロセスを開始する前に、リポジトリとして使用されるすべてのデータベースを開始します。

**注：** サービスまたはプロセスによっては開始に時間がかかるものがあります。起動時間はコンピュータによって異なります。

EPM System Installer は、ローカル・システム・アカウントを使用して Windows サービスを作成します。サービスを開始する前に、適切なドメイン・アカウントを使用するように変更してください。

## 単一スクリプトを使用したサービスの開始

EPM System Installer は、start.bat|sh という単一開始スクリプトを HYPERION\_HOME/products/bin にインストールします。EPM System 配置内のマシンで単一の開始スクリプトを実行すると、そのマシンにインストールされているすべての EPM System サービスが開始されます。

**注：** Hyperion Financial Management - Management Service は、手動で開始する必要があります。

単一開始スクリプトは、各製品の個別の開始スクリプトを推奨される開始順序で呼び出すことで機能します。この順序は、[118 ページの「サービスおよびプロセスの要約リスト」](#)で指定されています。このリストにあるサービスを使用するには、リスト内で先行するサービスが開始されている必要があります。単一開始スクリプトを使用する場合、一部のサービスは、依存先のサービスが開始する前に開始する場合があります(起動時間が異なるためです)。これが発生した場合、一

部のサービスの使用を他のサービスの初期化が終了するまで待機する必要があります。

単一開始スクリプトを実行した後、EPM System 診断を実行してマシン上でどのサービスが実行されているかを特定できます。第 6 章「インストールの検証」を参照してください。単一開始スクリプトを実行した後、サービスが開始されるまで少なくとも 2 分間待機してから、EPM System 診断を実行してください。

単一停止スクリプトである `stop.bat|sh` も、`HYPERION_HOME/products/bin` にインストールされます。EPM System 配置内のマシンで停止スクリプトを実行すると、そのマシン上のすべての EPM System 製品が停止します。

**注：** WebLogic Server では、バッチ・ファイルの拡張子は `.bat` でなく `.cmd` になります。

## サービスおよびプロセスの要約リスト

次のリストには、お薦めする起動順で EPM System 製品のサービスおよびプロセスが並んでいます。

1. リポジトリのデータベース。
2. Shared Services で使用するために構成する企業ユーザー・ディレクトリ。
3. Shared Services OpenLDAP、または Oracle Internet Directory。どちらを Shared Services のネイティブ・ディレクトリとして使用するかで決まります。
4. Shared Services アプリケーション・サーバー
5. Oracle Hyperion(R)リモート構成モジュール
6. EPM Workspace エージェント(CMC エージェント)
7. EPM Workspace Web サーバー
8. Performance Management Architect サービス
9. Essbase サーバー
10. Administration Services アプリケーション・サーバー
11. Smart Search Command Line Utility アプリケーション・サーバー
12. Integration Services サーバー
13. Essbase Studio サーバー
14. Provider Services アプリケーション・サーバー
15. Reporting and Analysis(任意の順序):
  1. Financial Reporting サービス
  2. Web Analysis アプリケーション・サーバー
16. その他のサービスまたはプロセス(任意の順序):
  - Performance Management Architect アプリケーション・サーバー
  - Performance Management Architect データ・シンクロナイズ・アプリケーション・サーバー

- Financial Reporting アプリケーション・サーバー
- Calculation Manager アプリケーション・サーバー
- Planning アプリケーション・サーバー
- Financial Management サービス
- Strategic Finance サービス
- Performance Scorecard アプリケーション・サーバー
- Performance Scorecard Alerter アプリケーション・サーバー
- Profitability and Cost Management アプリケーション・サーバー
- Data Relationship Management サービス
- FDM タスク・マネージャ・サービス
- Hyperion ERPI - Web アプリケーション

17. EPM Workspace アプリケーション・サーバー

## サービスおよびプロセス

このトピックで扱われるサービスおよびプロセスは、Oracle がお薦めする開始順に並んでいます。

## リポジトリのデータベース

リポジトリのデータベース。

## 企業ユーザー・ディレクトリ

Shared Services で使用するために構成する企業ユーザー・ディレクトリ。起動手順については、ベンダーのドキュメントを参照してください。

## Shared Services OpenLDAP または Oracle Internet Directory

**注：** 詳細は、Oracle Internet Directory のドキュメントを参照してください。

次の表に、Shared Services OpenLDAP のサービスおよびプロセスを示します。

**表 15** Shared Services OpenLDAP のサービス/プロセス

情報タイプ	詳細
Windows 「スタート」メニュー・コマンド	NA
登録サービス名	OpenLDAP-slapd

情報タイプ	詳細
Windows サービス・コントロール・パネルでの表示名	Hyperion Foundation OpenLDAP
説明	Shared Services OpenLDAP リポジトリにアクセスできるようにします。
Windows 起動スクリプト	HYPERION_HOME/products/Foundation/openLDAP/startService.bat
UNIX 起動スクリプト	HYPERION_HOME/products/Foundation/openLDAP/startOpenLDAP.sh
Windows 終了スクリプト	HYPERION_HOME/products/Foundation/openLDAP/stopService.bat
UNIX 終了スクリプト	HYPERION_HOME/products/Foundation/openLDAP/stopOpenLDAP.sh

## Shared Services アプリケーション・サーバー

次の表に、Shared Services アプリケーション・サーバーのサービスおよびプロセスを示します。

**表 16** Shared Services アプリケーション・サーバーのサービスおよびプロセス

情報タイプ	詳細
Windows 「スタート」メニュー・コマンド	「スタート」、「プログラム」、「Oracle EPM System」、「Foundation Services」、「Shared Services の開始」の順に選択します。
登録サービス名	HyS9Shared Services
Windows サービス・コントロール・パネルでの表示名	Hyperion Foundation Shared Services - Web アプリケーション
説明	認証、ユーザー・プロビジョニング、タスクフロー管理、データおよびメタデータの同期化などの Hyperion アプリケーションをサポートしている Hyperion Shared Services
Windows 起動スクリプト	HYPERION_HOME/deployments/APP_SERVER_NAME_AND_VERSION/bin/startSharedServices9.bat
UNIX 起動スクリプト	HYPERION_HOME/deployments/APP_SERVER_NAME_AND_VERSION/bin/startSharedServices9.sh
Windows 終了スクリプト	HYPERION_HOME/deployments/APP_SERVER_NAME_AND_VERSION/bin/stopSharedServices9.bat
UNIX 終了スクリプト	HYPERION_HOME/deployments/APP_SERVER_NAME_AND_VERSION/bin/stopSharedServices9.sh



## WebLogic Server 上の Shared Services の停止

WebLogic Server で FORCESHUTDOWN コマンドの使用を薦めるメッセージが表示された場合は、次の手順で FORCESHUTDOWN コマンドを使用して Shared Services サーバーを停止します。

- ▶ FORCESHUTDOWN コマンドを使用して WebLogic Server 上の Shared Services を停止するには:
  - 1 テキスト・エディタで、停止スクリプトを開きます。
  - 2 ファイルの中で SHUTDOWN がある場所を探して、それを FORCESHUTDOWN で置換します。
  - 3 ファイルを保存して、実行します。

## リモート構成モジュールの開始と停止

認証に NTLM を使用している場合は、UNIX 環境でリモート構成モジュールを使用します。

リモート構成モジュールを開始および停止するには、HYPERION\_HOME/products/Foundation/server/scripts で startHRAM.bat|sh と stopHRAM.bat|sh を使用します。

## EPM Workspace エージェント(CMC エージェント)

次の表に、EPM Workspace エージェントのサービスおよびプロセスを示します。

表 17 EPM Workspace エージェント: 構成と監視コンソール

情報タイプ	詳細
Windows 「スタート」メニュー・コマンド	「スタート」、「プログラム」、「Oracle EPM System」、「Workspace」、「Workspace エージェント・サービスの開始」の順に選択します。
登録サービス名	HyS9Core1
Windows サービス・コントロール・パネルでの表示名	Hyperion Workspace - エージェント・サービス
説明	HyS9Core1、サービスをローカルで実行するためのサービス・インフラストラクチャを提供します。
Windows 起動スクリプト	HYPERION_HOME/common/workspacert/9.5.0.0/bin/startAgent.bat
UNIX 起動スクリプト	HYPERION_HOME/common/workspacert/9.5.0.0/bin/startAgent.sh
Windows 終了スクリプト	HYPERION_HOME/common/workspacert/9.5.0.0/bin/stopAgent.bat
UNIX 終了スクリプト	HYPERION_HOME/common/workspacert/9.5.0.0/bin/stopAgent.sh

## EPM Workspace エージェントで開始されるサービスとプロセス

EPM Workspace エージェントが開始すると、次の付加的サービスおよびプロセスが次の順序で開始します:

1. EPM Workspace の共通プロセスおよび Interactive Reporting プロセス。
2. 注釈サービス

次の表に、注釈サービスのサービスおよびプロセスを示します。

表 18 注釈サービス

情報タイプ	詳細
登録サービス名	HyS9Annotation
Windows サービス・コントロール・パネルでの表示名	Hyperion Annotation Server
説明	HyS9Annotation - Hyperion 製品の Annotation サービスを提供します。

## EPM Workspace UI(CMC UI)

次の表に、EPM Workspace ユーザー・インターフェースのサービスおよびプロセスを示します。

表 19 EPM Workspace UI: 構成と監視コンソール

情報タイプ	詳細
Windows 「スタート」メニュー・コマンド	「スタート」、「プログラム」、「Oracle EPM System」、「Workspace」、「ユーティリティおよび管理」、「Workspace エージェント UI の開始」の順に選択します。
Windows 起動スクリプト	HYPERION_HOME/common/workspacert/9.5.0.0/bin/startUI.bat
Windows 終了スクリプト	HYPERION_HOME/common/workspacert/9.5.0.0/bin/stopUI.bat
UNIX 起動スクリプト	HYPERION_HOME/common/workspacert/9.5.0.0/bin/startUI.sh
UNIX 起動スクリプト	HYPERION_HOME/common/workspacert/9.5.0.0/bin/startUI.sh
UNIX 終了スクリプト	HYPERION_HOME/common/workspacert/9.5.0.0/bin/stopUI.sh

## EPM Workspace Web サーバー

次の表に、EPM Workspace Web サーバーのサービスおよびプロセスを示します。

表 20 EPM Workspace Web サーバーのサービスおよびプロセス

情報タイプ	詳細
登録サービス名	<ul style="list-style-type: none"> <li>Embedded Java コンテナ: HyS9Apache2</li> <li>IIS: IISADMIN</li> <li>IHS 6.1: IBMHTTP Server6.1</li> </ul>
Windows サービス・コントロール・パネルでの表示名	<ul style="list-style-type: none"> <li>Embedded Java コンテナ: Hyperion Apache 2.0</li> <li>IIS: IIS Admin Service</li> <li>IHS 6.1: IBM HTTP Server 6.1</li> </ul>
説明	<ul style="list-style-type: none"> <li>Embedded Java コンテナ: Apache</li> <li>IIS: このサーバーで、Web および FTP サービスを管理できるようにします。このサービスが停止していると、サーバーは Web、FTP、NNTP または SMTP サイトの実行、または IIS の構成を行えません。このサービスが使用不可の場合、そのサービスに明示的に依存しているすべてのサービスは開始に失敗します。</li> <li>IHS 6.1: IBM_HTTP_Server</li> </ul>
Windows 起動スクリプト(Embedded Java コンテナのみ)	HYPERION_HOME/common/httpServers/Apache/2.0.59/bin/Apache.exe
UNIX 起動スクリプト(Embedded Java コンテナのみ)	HYPERION_HOME/common/httpServers/Apache/2.0.59/bin/apachectl {start restart}
Windows 終了スクリプト(Embedded Java コンテナのみ)	NA
UNIX 終了スクリプト(Embedded Java コンテナのみ)	HYPERION_HOME/common/httpServers/Apache/2.0.59/bin/apachectl stop

## Performance Management Architect サービス

次の表に、Performance Management Architect サービスのサービスおよびプロセスを示します。

表 21 Performance Management Architect サービス

情報タイプ	詳細
Windows 「スタート」メニュー・コマンド	「スタート」、「プログラム」、「Oracle EPM System」、「Foundation Services」、「Performance Management Architect」、「次元サーバーの開始」の順に選択します。
登録サービス名	<p>プロセス・マネージャ: HyS9BPMA_ProcessManager</p> <p>プロセス・マネージャにより次のサービスが自動的に開始されます:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>エンジン・マネージャ: HyS9BPMA_EngineManager</li> <li>ジョブ・マネージャ: HyS9BPMA_JobManager</li> <li>イベント・マネージャ: HyS9BPMA_EventManager</li> <li>.NET JNI Bridge: HyS9BPMA_NetUNIBridge</li> </ul>

情報タイプ	詳細
Windows サービス・コントロール・パネルでの表示名	<p>プロセス・マネージャ: Hyperion EPM Architect - プロセス・マネージャ</p> <p>プロセス・マネージャにより次のサービスが自動的に開始されます:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● エンジン・マネージャ: Hyperion EPM Architect - エンジン・マネージャ</li> <li>● ジョブ・マネージャ: Hyperion BPM Architect - ジョブ・マネージャ</li> <li>● イベント・マネージャ: Hyperion BPM Architect - イベント・マネージャ</li> <li>● .NET JNI Bridge: Hyperion EPM Architect - .NET JNI Bridge</li> </ul>
説明	<ul style="list-style-type: none"> <li>● プロセス・マネージャ: EPM Architect 次元サーバーのすべてのインスタンスを管理します。EPM Architect プロセス・マネージャのインスタンスは、EPM Architect のインストールごとに 1 つです。</li> <li>● エンジン・マネージャ: EPM Architect プロセス・マネージャから要求された場合に、EPM Architect 次元サーバーのインスタンスを開始および終了します。(マシンごとに 1 つある)同じ EPM Architect インスタンスに複数の EPM Architect エンジン・マネージャが存在できます。</li> <li>● ジョブ・マネージャ: EPM Architect が実行する、処理に時間を要するタスクを管理します。</li> <li>● イベント・マネージャ: EPM Architect の様々なサーバー・プロセス間のイベント・メッセージを配信します。</li> <li>● .NET JNI Bridge: .NET プロセスと CSS の間でブリッジとして機能します。</li> </ul>
Windows 起動スクリプト	NA
UNIX 起動スクリプト	NA
Windows 終了スクリプト	NA
UNIX 終了スクリプト	NA

その他の Performance Management Architect サービスについては、[130 ページの「Performance Management Architect アプリケーション・サーバー」](#)および[131 ページの「Performance Management Architect データ・シンクロナイザ・アプリケーション・サーバー」](#)を参照してください。

次の表に、Performance Management Architect Web サービスのサービスおよびプロセスを示します。

**表 22 Performance Management Architect Web サービス**

情報タイプ	詳細
登録サービス名	IISAdmin
Windows サービス・コントロール・パネルでの表示名	IIS Admin Service
説明	このサーバーで、Web および FTP サービスを管理できるようにします。このサービスが停止していると、サーバーは Web、FTP、NNTP または SMTP サイトの実行、または IIS の構成を行えません。このサービスが使用不可の場合、そのサービスに明示的に依存しているすべてのサービスは開始に失敗します。

## Essbase サーバー

次の表に、Essbase サーバー・サービスのサービスおよびプロセスを示します。

表 23 Essbase サーバーのサービスおよびプロセス

情報タイプ	詳細
Windows 「スタート」メニュー・コマンド	「スタート」、「プログラム」、「Oracle EPM System」、「Essbase」、「Essbase サーバー」、「Essbase」の順に選択します。  このコマンドは、startEssbase.cmd を起動します。
登録サービス名	Hys9ESBAgent11.1.1_servername
Windows サービス・コントロール・パネルでの表示名	Hyperion Essbase Services 11.1.1 - ServiceName
説明	Essbase サーバーのサービス
Windows 起動スクリプト	<ul style="list-style-type: none"><li>● Essbase サーバー - ESSBASEPATH/bin/startEssbase.cmd</li><li>● ESSCMD - ESSBASEPATH/bin/startEsscmd.cmd</li><li>● essmsh - ESSBASEPATH/bin/startMaxl.cmd</li></ul> <p>すべてのスクリプトは、開始前に setEssbaseEnv.cmd を呼び出して、ESSBASEPATH、ARBORPATH、PATH を設定します。</p> <p>Essbase サーバーの各インスタンスには、独自の起動スクリプトがあります。</p>
UNIX 起動スクリプト	<ul style="list-style-type: none"><li>● Essbase サーバー - ESSBASEPATH/bin/startEssbase.sh</li><li>● ESSCMD - ESSBASEPATH/bin/startEsscmd.sh</li><li>● essmsh - ESSBASEPATH/bin/startMaxl.sh</li></ul> <p>すべてのスクリプトは、開始前に hyperionenv.doc を呼び出して、ESSBASEPATH、ARBORPATH、PATH を設定します。</p> <p>Essbase サーバーの各インスタンスには、独自の起動スクリプトがあります。</p>
Windows 終了スクリプト	NA
UNIX 終了スクリプト	NA

「スタート」メニュー・コマンドまたは startEssbase.cmd を使用して Essbase サーバーを開始し、環境変数が設定されていることを確認します。

Essbase を最初に開始する際は、会社名、ユーザー名およびパスワードを入力する必要があります。その後の起動では、パスワードは不要です。

**注：** Essbase の追加インスタンスをインストールした場合、startEssbase.sh は HYPERION\_HOME/products/Essbase-n/EssbaseServer/bin に置かれます。Essbase のこのインスタンスを起動するには、この場所から開始スクリプトを開始します。

Essbase サーバーの複数のインスタンスが 1 つのコンピュータにインストールされている場合、各インスタンスに一意のポート番号を指定する必要があります。デ

フォルトでは、Essbase サーバーの最初のインスタンスには、ポート番号 1423 が使用されます。このポート番号は、EPM System コンフィグレータで指定されます。2 番目のインスタンスには、EPM System コンフィグレータで構成する際に別のポート番号を指定します。接続時にマシン名とエージェント・ポート番号を `machineName:agentPort` の形式で指定することで、後続のインストールに接続されます。

Essbase サーバーの停止は、サーバー上で実行している Essbase アプリケーションの数に応じて、多少時間がかかる場合があります。Essbase サーバーを停止するには、管理者権限が必要です。次のいずれの方法も使用できます:

- 管理サービス・コンソール: エンタープライズ・ビューで、「Essbase」サーバー・ノードを右クリックして、「停止」を選択します。
- MaxL: `alter system shutdown;` コマンドを使用します。
- Agent: Agent をフォアグラウンドで開始した場合は、`quit` コマンドを使用できます。
- ESSCMD: `SHUTDOWNSERVER` コマンドを使用します。

---

**注意** Essbase サーバーを Windows サービスとして実行している場合は、Windows サービス・コントロール・パネルからサービスを停止しないでください。

---

Essbase サーバーの停止については、『Oracle Essbase データベース管理者ガイド』および『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』を参照してください。

## Administration Services アプリケーション・サーバー

次の表に、Administration Services アプリケーション・サーバーのサービスおよびプロセスを示します。

表 24 Administration Services アプリケーション・サーバーのサービス/プロセス

情報タイプ	詳細
Windows 「スタート」メニュー・コマンド	「スタート」、「プログラム」、「Oracle EPM System」、「Essbase」、「Administration Services」、「Administration Services サーバーの開始」の順に選択します。
登録サービス名	Hys9eas
Windows サービス・コントロール・パネルでの表示名	Hyperion Administration Services - Web アプリケーション
説明	アプリケーション・サーバーの実行を制御します。
Windows 起動スクリプト	<code>HYPERION_HOME/deployments/APP_SERVER_NAME_AND_VERSION/bin/starteas.bat</code>
UNIX 起動スクリプト	<code>HYPERION_HOME/deployments/APP_SERVER_NAME_AND_VERSION/bin/starteas.sh</code>

情報タイプ	詳細
Windows 終了スクリプト	HYPERION_HOME/deployments/APP_SERVER_NAME_AND_VERSION/bin/stopeas.bat
UNIX 終了スクリプト	HYPERION_HOME/deployments/APP_SERVER_NAME_AND_VERSION/bin/stopeas.sh

**注：** 管理サーバーの起動時、ARBORPATH が EAS\_HOME/server に内部的に設定されます。この内部設定は、ARBORPATH システム環境変数の値が同じコンピュータに設定されている場合、その値を上書きします(置換はしません)。EAS\_HOME は、Administration Services のインストール先のディレクトリです。

## Integration Services サーバー

次の表に、Integration Services サーバーのサービスおよびプロセスを示します。

表 25 Integration Services サーバーのサービス/プロセス

情報タイプ	詳細
Windows 「スタート」メニュー・コマンド	「スタート」、「プログラム」、「Oracle EPM System」、「Essbase」、「Integration Services」、「サーバー」の順に選択します。 <sup>1</sup>
登録サービス名	Hyperion Integration Services
Windows サービス・コントロール・パネルでの表示名	Hyperion Integration Services
説明	Hyperion Integration Services
Windows 起動スクリプト	HYPERION_HOME/products/Essbase/eis/server/bin/startup.bat
UNIX 起動スクリプト	\$HOME/Hyperion/products/Essbase/eis/server/ais_start <b>注：</b> ais_start を実行すると、is.sh が呼び出されて環境変数が自動的に構成され、Integration Services が開始します。
Windows 終了スクリプト	HYPERION_HOME/products/Essbase/eis/server/bin/shutdownEIS.bat
UNIX 終了スクリプト	\$HOME/Hyperion/products/Essbase/eis/server/ais_stop

<sup>1</sup> コマンド・ラインから、olapisvr コマンドのその他の起動スイッチから、または ais.cfg ファイルを使用して、Integration Services サーバーを開始および停止する方法の詳細は、『Essbase Integration Services システム管理者ガイド』を参照してください。

## Essbase Studio サーバー

次の表に、Essbase Studio サーバーのサービスおよびプロセスを示します。

表 26 Essbase Studio サーバー

情報タイプ	詳細
Windows 「スタート」メニュー・コマンド	「スタート」、「プログラム」、「Oracle EPM System」、「Essbase」、「Essbase Studio」、「サーバーの開始」の順に選択します。
登録サービス名	NA
Windows サービス・コントロール・パネルでの表示名	NA
説明	NA
Windows 起動スクリプト	HYPERION_HOME/products/Essbase/EssbaseStudio/Server/startServer.bat
UNIX 起動スクリプト	HYPERION_HOME/products/Essbase/EssbaseStudio/Server/startServer.sh
Windows 終了スクリプト	HYPERION_HOME/products/Essbase/EssbaseStudio/Server/stopServer.bat
UNIX 終了スクリプト	HYPERION_HOME/products/Essbase/EssbaseStudio/Server/stopServer.sh

## Provider Services アプリケーション・サーバー

次の表に、Provider Services アプリケーション・サーバーのサービスおよびプロセスを示します。

表 27 Provider Services アプリケーション・サーバーのサービスおよびプロセス

情報タイプ	詳細
Windows 「スタート」メニュー・コマンド	「スタート」、「プログラム」、「Oracle EPM System」、「Essbase」、「Provider Services」、「Provider Services の開始」の順に選択します。
登録サービス名	HyS9aps
Windows サービス・コントロール・パネルでの表示名	Hyperion Provider Services - Web アプリケーション
説明	アプリケーション・サーバーの実行を制御します。
Windows 起動スクリプト	HYPERION_HOME/deployments/APP_SERVER_NAME_AND_VERSION/bin/startaps.bat
UNIX 起動スクリプト	HYPERION_HOME/deployments/APP_SERVER_NAME_AND_VERSION/bin/startaps.sh
Windows 終了スクリプト	HYPERION_HOME/deployments/APP_SERVER_NAME_AND_VERSION/bin/stopaps.bat
UNIX 終了スクリプト	HYPERION_HOME/deployments/APP_SERVER_NAME_AND_VERSION/bin/stopaps.sh



# Reporting and Analysis のサービスおよびプロセス

## Financial Reporting

次の表に、Financial Reporting のサービスおよびプロセスを示します。

表 28 Financial Reporting のサービスおよびプロセス

情報タイプ	詳細
Windows 「スタート」メニュー・コマンド	「スタート」、「プログラム」、「Oracle EPM System」、「Reporting and Analysis」、「Financial Reporting の開始」の順に選択します。
登録サービス名	<ul style="list-style-type: none"><li>● Hyperion Financial Reporting Java RMI レジストリ: HyS9FRRMI</li><li>● Hyperion Financial Reporting 印刷サーバー: HyS9FRPrint</li><li>● Hyperion Financial Reporting レポート・サーバー: HyS9FRReport</li><li>● Hyperion Financial Reporting スケジューラ・サーバー: HyS9FRSched</li></ul>
Windows サービス・コントロール・パネルでの表示名	<ul style="list-style-type: none"><li>● Hyperion Financial Reporting - Java RMI レジストリ</li><li>● Hyperion Financial Reporting - 印刷サーバー</li><li>● Hyperion Financial Reporting - レポート・サーバー</li><li>● Hyperion Financial Reporting - スケジューラ・サーバー</li></ul>
説明	<ul style="list-style-type: none"><li>● Hyperion Financial Reporting RMI レジストリ・サービス: HyS9FRRMI - Financial Reporting の Java RMI レジストリを提供します。</li><li>● Hyperion Financial Reporting 印刷サーバー: HyS9FRPrint - Financial Reporting の PDF、バッチ、およびスケジュール済ジョブの出力を生成します。</li><li>● Hyperion Financial Reporting レポート・サーバー: HyS9FRReport - Financial Reporting 用に指定された計算を含め、レポートおよびブックを生成してフォーマットします。</li><li>● Hyperion Financial Reporting スケジューラ・サーバー: HyS9FRSched - Financial Reporting のスケジュール済バッチ要求に応答します。</li></ul>
Windows 起動スクリプト	HYPERION_HOME/deployments/AppServerNameAndVersion/bin/startFinancialReporting.bat
UNIX 起動スクリプト	HYPERION_HOME/products/biplus/bin/freporting start
Windows 終了スクリプト	HYPERION_HOME/deployments/AppServerNameAndVersion/bin/stopFinancialReporting.bat
UNIX 終了スクリプト	HYPERION_HOME/products/biplus/bin/freporting stop

## Web Analysis アプリケーション・サーバー

次の表に、Web Analysis アプリケーション・サーバーのサービスとプロセスを示します。

表 29 Web Analysis アプリケーション・サーバーのサービスおよびプロセス

情報タイプ	詳細
Windows 「スタート」メニュー・コマンド	「スタート」、「プログラム」、「Oracle EPM System」の順に選択し、次に「Reporting and Analysis」、「Web Analysis の開始」の順に選択します。
登録サービス名	HyS9WebAnalysis
Windows コントロール・パネルの表示名	Hyperion Web Analysis - Web アプリケーション
説明	HyS9WebAnalysis - Hyperion Web Analysis - Web Application(AppServerNameAndVersion 用 Web アプリケーション)
Windows 起動スクリプト	HYPERION_HOME/deployments/APP_SERVER_NAME_AND_VERSION/bin/startWebAnalysis.bat
UNIX 起動スクリプト	HYPERION_HOME/deployments/APP_SERVER_NAME_AND_VERSION/bin/startWebAnalysis.sh
Windows 終了スクリプト	HYPERION_HOME/deployments/APP_SERVER_NAME_AND_VERSION/bin/stopWebAnalysis.bat
UNIX 終了スクリプト	HYPERION_HOME/deployments/APP_SERVER_NAME_AND_VERSION/bin/stopWebAnalysis.sh

## その他のサービスまたはプロセス

次のアプリケーション・サーバー・サービスまたはプロセスは任意の順序で開始できます。

## Performance Management Architect アプリケーション・サーバー

次の表に、Performance Management Architect アプリケーション・サーバーのサービスとプロセスを示します。

表 30 Performance Management Architect アプリケーション・サーバーのサービスおよびプロセス

情報タイプ	詳細
Windows 「スタート」メニュー・コマンド	「スタート」、「プログラム」、「Oracle EPM System」の順に選択し、次に「Foundation Services」、「Performance Management Architect」、「Performance Management Architect Web の開始」の順に選択します。
登録サービス名	HyS9EPMAWebTier
Windows サービス・コントロール・パネルでの表示名	Hyperion EPM Architect - Web アプリケーション
説明	Hyperion EPM Architect Web
Windows 起動スクリプト	HYPERION_HOME/deployments/APP_SERVER_NAME_AND_VERSION/bin/startEPMAWebServer.bat
UNIX 起動スクリプト	HYPERION_HOME/deployments/APP_SERVER_NAME_AND_VERSION/bin/startEPMAWebServer.sh

情報タイプ	詳細
Windows 終了スクリプト	HYPERION_HOME/deployments/APP_SERVER_NAME_AND_VERSION/bin/stopEPMAWebServer.bat
UNIX 終了スクリプト	HYPERION_HOME/deployments/APP_SERVER_NAME_AND_VERSION/bin/stopEPMAWebServer.sh

## Performance Management Architect データ・シンクロナイザ・アプリケーション・サーバー

次の表に、Performance Management Architect データ・シンクロナイザ・アプリケーション・サーバーのサービスとプロセスを示します。

表 31 Performance Management Architect データ・シンクロナイザ・アプリケーション・サーバーのサービス

情報タイプ	詳細
Windows 「スタート」メニュー・コマンド	「スタート」、「プログラム」、「Oracle EPM System」の順に選択し、次に「Foundation Services」、「Performance Management Architect」、「データ・シンクロナイザの開始」の順に選択します。
登録サービス名	HyS9EPMDataSynchronizer
Windows サービス・コントロール・パネルでの表示名	Hyperion EPM Architect データ・シンクロナイザ - Web アプリケーション
説明	Hyperion EPM Architect データ・シンクロナイザのエンジン
Windows 起動スクリプト	HYPERION_HOME/deployments/APP_SERVER_NAME_AND_VERSION/bin/startEPMDataSynchronizer.bat
UNIX 起動スクリプト	HYPERION_HOME/deployments/APP_SERVER_NAME_AND_VERSION/bin/startEPMDataSynchronizer.sh
Windows 終了スクリプト	HYPERION_HOME/deployments/APP_SERVER_NAME_AND_VERSION/bin/stopEPMDataSynchronizer.bat
UNIX 終了スクリプト	HYPERION_HOME/deployments/APP_SERVER_NAME_AND_VERSION/bin/stopEPMDataSynchronizer.sh

## Financial Reporting アプリケーション・サーバー

次の表に、Financial Reporting アプリケーション・サーバーのサービスとプロセスを示します。

表 32 Financial Reporting アプリケーション・サーバーのサービスおよびプロセス

情報タイプ	詳細
Windows 「スタート」メニュー・コマンド	「スタート」、「プログラム」、「Oracle EPM System」、「Reporting and Analysis」、「Financial Reporting の開始」の順に選択します。
登録サービス名	HyS9FRWeb

情報タイプ	詳細
Windows サービス・コントロール・パネルでの表示名	Hyperion Financial Reporting - Web アプリケーション
説明	HyS9FRWeb - Financial Reporting の Workspace モジュールを提供します。
Windows 起動スクリプト	HYPERION_HOME/deployments/APP_SERVER_NAME_AND_VERSION/bin/startFinancialReporting.bat
UNIX 起動スクリプト	HYPERION_HOME/deployments/APP_SERVER_NAME_AND_VERSION/bin/startFinancialReporting.sh
Windows 終了スクリプト	HYPERION_HOME/deployments/APP_SERVER_NAME_AND_VERSION/bin/stopFinancialReporting.bat
UNIX 終了スクリプト	HYPERION_HOME/deployments/APP_SERVER_NAME_AND_VERSION/bin/stopFinancialReporting.sh

## Calculation Manager

次の表に、Calculation Manager のサービスおよびプロセスを示します。

表 33 Calculation Manager のサービスおよびプロセス

情報タイプ	詳細
Windows 「スタート」メニュー・コマンド	「スタート」、「プログラム」、「Oracle EPM System」、「Calculation Manager」、「CALC の開始」の順に選択します。
登録サービス名	HyS9CALC
Windows サービス・コントロール・パネルでの表示名	Hyperion CALC Manager - Web アプリケーション
説明	CALC Manager Web サーバーへのアクセス・サービスを提供します。
Windows 起動スクリプト	HYPERION_HOME/deployments/APP_SERVER_NAME_AND_VERSION/bin/startcalcmgr.bat
UNIX 起動スクリプト	HYPERION_HOME/deployments/APP_SERVER_NAME_AND_VERSION/bin/startcalcmgr.sh
Windows 終了スクリプト	HYPERION_HOME/deployments/APP_SERVER_NAME_AND_VERSION/bin/stopcalcmgr.bat
UNIX 終了スクリプト	HYPERION_HOME/deployments/APP_SERVER_NAME_AND_VERSION/bin/stopcalcmgr.sh

## Planning アプリケーション・サーバー

次の表に、Planning アプリケーション・サーバーのサービスおよびプロセスを示します。

表 34 Planning アプリケーション・サーバーのサービスおよびプロセス

情報タイプ	詳細
Windows 「スタート」メニュー・コマンド	「スタート」、「プログラム」、「Oracle EPM System」、「Planning」、「Planning の開始」の順に選択します。
登録サービス名	HyS9Planning
Windows サービス・コントロール・パネルでの表示名	Hyperion Planning - Web アプリケーション
説明	Planning Web サーバーのアクセスをサポートします。
Windows 起動スクリプト	HYPERION_HOME/deployments/APP_SERVER_NAME_AND_VERSION/bin/startHyperionPlanning.bat
UNIX 起動スクリプト	HYPERION_HOME/deployments/APP_SERVER_NAME_AND_VERSION/bin/startHyperionPlanning.sh
Windows 終了スクリプト	HYPERION_HOME/deployments/APP_SERVER_NAME_AND_VERSION/bin/stopHyperionPlanning.bat
UNIX 終了スクリプト	HYPERION_HOME/deployments/APP_SERVER_NAME_AND_VERSION/bin/stopHyperionPlanning.sh

## Financial Management

次の表に、Financial Management のサービスおよびプロセスを示します。

表 35 Financial Management のサービスおよびプロセス

情報タイプ	詳細
Windows 「スタート」メニュー・コマンド	「スタート」、「プログラム」、「Oracle EPM System」、「Financial Management」、「Financial Management」の順に選択します。
登録サービス名	<ul style="list-style-type: none"> <li>Hyperion Financial Management サービス: Hyperion S9 Financial Management サービス</li> <li>Hyperion Financial Management DME リスナー: Hyperion S9 Financial Management DME リスナー</li> <li>Hyperion Financial Management Web サービス・マネージャ: HFMWebServiceManager</li> </ul>
Windows サービス・コントロール・パネルでの表示名	<ul style="list-style-type: none"> <li>Hyperion Financial Management サービス: Hyperion Financial Management - 管理サービス</li> <li>Hyperion Financial Management DME リスナー: Hyperion Financial Management - DME リスナー</li> <li>Hyperion Financial Management Web サービス・マネージャ: Hyperion Financial Management - Web サービス・マネージャ</li> </ul>
説明	<ul style="list-style-type: none"> <li>Hyperion Financial Management サービス: ログインのパフォーマンスを最適化するために、アプリケーション・インスタンスを永続化するサービス</li> <li>Hyperion Financial Management DME リスナー: Hyperion Data Movement Engine と通信するための Hyperion Financial Management IP リスナー。このサービスが停止していると、DME Web サービスは、このサーバーのすべての HFM インスタンスと通信できません。</li> <li>Hyperion Financial Management Web サービス・マネージャ: Financial Management Web サーバーでの接続に関するセッション情報を管理します。</li> </ul>

情報タイプ	詳細
Windows 起動スクリプト	HYPERION_HOME/products/FinancialManagement/Client/HFM.exe
UNIX 起動スクリプト	NA
Windows 終了スクリプト	NA
UNIX 終了スクリプト	NA

**注：** Financial Management アプリケーション・サーバー間の同期は、システム時刻に基づきます。クロックを変更すると、この同期に影響を及ぼす可能性があります。夏時間のため時刻を変更する場合、時刻変更の前にサーバーを停止し、変更後再起動することをお勧めします。

## Strategic Finance

次の表に、Strategic Finance のサービスおよびプロセスを示します。

**表 36** Strategic Finance のサービスおよびプロセス

情報タイプ	詳細
Windows 「スタート」メニュー・コマンド	「スタート」、「プログラム」、「Oracle EPM System」、「Strategic Finance」、「サーバー」、「Strategic Finance サービスの開始」の順に選択します。
登録サービス名	HyHSFSrv
Windows サービス・コントロール・パネルでの表示名	Hyperion Strategic Finance Service
説明	エンティティ・リポジトリ管理や認証、アクセス管理、集計、データおよびメタデータ管理などの Oracle Hyperion Strategic Finance, Fusion Edition サービスを提供します。
Windows 起動スクリプト	HYPERION_HOME/products/hsf/server/StartHSFService.bat
UNIX 起動スクリプト	NA
Windows 終了スクリプト	HYPERION_HOME/products/hsf/server/StopHSFService.bat
UNIX 終了スクリプト	NA

## Performance Scorecard アプリケーション・サーバー

次の表に、Performance Scorecard アプリケーション・サーバーのサービスとプロセスを示します。

表 37 Performance Scorecard アプリケーション・サーバーのサービスおよびプロセス

情報タイプ	詳細
Windows 「スタート」メニュー・コマンド	「スタート」、「プログラム」、「Oracle EPM System」の順に選択し、次に「スコアカード」、「スコアカードの開始」の順に選択します。
登録サービス名	HyS9HPSWebReports
Windows サービス・コントロール・パネルでの表示名	Hyperion Performance Scorecard Web レポート - Web アプリケーション
説明	ビジネス・パフォーマンスの測定と監視にスコアカード・メソッドを使用します。
Windows 起動スクリプト	HYPERION_HOME/deployments/APP_SERVER_NAME_AND_VERSION/bin/startHPSWebReports.bat
UNIX 起動スクリプト	HYPERION_HOME/deployments/APP_SERVER_NAME_AND_VERSION/bin/startHPSWebReports.sh
Windows 終了スクリプト	HYPERION_HOME/deployments/APP_SERVER_NAME_AND_VERSION/bin/stopHPSWebReports.bat
UNIX 終了スクリプト	HYPERION_HOME/deployments/APP_SERVER_NAME_AND_VERSION/bin/stopHPSWebReports.sh

## Performance Scorecard Alerter アプリケーション・サーバー

次の表に、Performance Scorecard Alerter アプリケーション・サーバーのサービスとプロセスを示します。

表 38 Performance Scorecard Alerter アプリケーション・サーバーのサービスおよびプロセス

情報タイプ	詳細
Windows 「スタート」メニュー・コマンド	「スタート」、「プログラム」、「Oracle EPM System」の順に選択し、次に「スコアカード」、「Alerter サービスの開始」の順に選択します。
登録サービス名	HyS9HPSAlerter
Windows サービス・コントロール・パネルでの表示名	Hyperion Performance Scorecard Alerter - Web アプリケーション
説明	キー・メジャー、スコアカードまたはその他の必須情報のポイントのパフォーマンスが許容範囲外になった場合に、登録者に電子メールで通知します。
Windows 起動スクリプト	HYPERION_HOME/deployments/APP_SERVER_NAME_AND_VERSION/bin/startHPSAlerter.bat
UNIX 起動スクリプト	HYPERION_HOME/deployments/APP_SERVER_NAME_AND_VERSION/bin/startHPSAlerter.sh
Windows 終了スクリプト	HYPERION_HOME/deployments/APP_SERVER_NAME_AND_VERSION/bin/stopHPSAlerter.bat
UNIX 終了スクリプト	HYPERION_HOME/deployments/APP_SERVER_NAME_AND_VERSION/bin/stopHPSAlerter.sh

## Profitability and Cost Management

次の表に、Profitability and Cost Management のサービスとプロセスを示します。

表 39 Profitability and Cost Management のサービスおよびプロセス

情報タイプ	詳細
Windows 「スタート」メニュー・コマンド	「スタート」、「プログラム」、「Oracle EPM System」の順に選択し、次に「Profitability」、「Profitability の開始」の順に選択します。
登録サービス名	HyS9PftWeb
Windows サービス・コントロール・パネルでの表示名	Hyperion Profitability - Web アプリケーション
説明	Profitability の Workspace モジュールを提供します。
Windows 起動スクリプト	HYPERION_HOME/deployments/APP_SERVER_NAME_AND_VERSION/bin/startProfitability.bat
UNIX 起動スクリプト	HYPERION_HOME/deployments/APP_SERVER_NAME_AND_VERSION/bin/startProfitability.sh
Windows 終了スクリプト	HYPERION_HOME/deployments/APP_SERVER_NAME_AND_VERSION/bin/stopProfitability.bat
UNIX 終了スクリプト	HYPERION_HOME/deployments/APP_SERVER_NAME_AND_VERSION/bin/stopProfitability.sh

## Data Relationship Management

次の表に、Data Relationship Management のサービスとプロセスを示します。

表 40 Data Relationship Management のサービスおよびプロセス

情報タイプ	詳細
Windows 「スタート」メニュー・コマンド	<ul style="list-style-type: none"><li>サービス: 「スタート」、「プログラム」、「Oracle EPM System」の順に選択し、次に「Data Relationship Management」、「Data Relationship Management コンソール」の順に選択します。</li><li>Web Publishing: 「スタート」、「プログラム」、「Oracle EPM System」の順に選択し、次に「Data Relationship Management」、「Web Publishing」、「Web Publishing コンソール」の順に選択します。</li></ul>
登録サービス名	<ul style="list-style-type: none"><li>サービス: HyS9MDMSvc</li><li>Web Publishing: HyS9MDMWebPubSvc</li></ul>
Windows サービス・コントロール・パネルでの表示名	<ul style="list-style-type: none"><li>サービス: Oracle Hyperion Data Relationship Management</li><li>Web Publishing: Oracle Hyperion Data Relationship Management Web Publishing</li></ul>
説明	<ul style="list-style-type: none"><li>サービス: HyS9MDMSvc - Oracle Hyperion Data Relationship Management Services</li><li>Web Publishing: HyS9MDMWebPubSvc - Oracle Hyperion Data Relationship Management Web Publishing</li></ul>
Windows 起動スクリプト	NA



情報タイプ	詳細
UNIX 起動スクリプト	NA
Windows 終了スクリプト	NA
UNIX 停止スクリプト:	NA

## FDM

次の表に、FDM のサービスとプロセスを示します。

表 41 FDM タスク・マネージャのサービスおよびプロセス

情報タイプ	詳細
Windows 「スタート」メニュー・コマンド	「スタート」、「プログラム」、「Oracle EPM System」の順に選択し、次に「Financial Data Quality Management」、「タスク・マネージャ」、「タスク・マネージャ」の順に選択します。
登録サービス名	HyS9FDMTaskManagerSrv
Windows サービス・コントロール・パネルでの表示名	Hyperion Financial Data Quality Management - タスク・マネージャ
説明	Hyperion Financial Data Quality Management のタスクをスケジュール設定できるようにします。
Windows 起動スクリプト	NA
UNIX 起動スクリプト	NA
Windows 終了スクリプト	NA
UNIX 終了スクリプト	NA

## ERP Integrator

次の表に、ERP Integrator のサービスおよびプロセスを示します。

表 42 ERP Integrator のサービスおよびプロセス

情報タイプ	詳細
Windows 「スタート」メニュー・コマンド	「スタート」、「プログラム」、「Oracle EPM System」、「Performance Management インテグレータ」、aif の開始の順に選択します。
登録サービス名	HyS9aifWeb
Windows サービス・コントロール・パネルでの表示名	Hyperion ERPI - Web アプリケーション
説明	ERPI の Workspace モジュールを提供します。
Windows 起動スクリプト	HYPERION_HOME/deployments/APP_SERVER_NAME_AND_VERSION/bin/starterERPIntegrator.cmd

情報タイプ	詳細
UNIX 起動スクリプト	HYPERION_HOME/deployments/APP_SERVER_NAME_AND_VERSION/bin/startERPIntegrator.sh
Windows 終了スクリプト	HYPERION_HOME/deployments/APP_SERVER_NAME_AND_VERSION/bin/stopERPIntegrator.cmd
UNIX 終了スクリプト	HYPERION_HOME/deployments/APP_SERVER_NAME_AND_VERSION/bin/stopERPIntegrator.sh

## EPM Workspace アプリケーション・サーバー

EPM Workspace アプリケーション・サーバーを最後に起動します。次の表に、EPM Workspace アプリケーション・サーバーのサービスおよびプロセスを示します。

表 43 EPM Workspace アプリケーション・サーバーのサービスおよびプロセス

情報タイプ	詳細
Windows 「スタート」メニュー・コマンド	「スタート」、「プログラム」、「Oracle EPM System」、「Workspace」、「Workspace の開始」の順に選択します。
登録サービス名	HyS9Workspace
Windows サービス・コントロール・パネルでの表示名	Hyperion Workspace - Web アプリケーション
説明	HyS9Workspace - Hyperion Workspace - Web アプリケーション、APP_SERVER APP_VERSION の Web アプリケーション
Windows 起動スクリプト	HYPERION_HOME/deployments/APP_SERVER_NAME_AND_VERSION/bin/startWorkspace.bat
UNIX 起動スクリプト	HYPERION_HOME/deployments/APP_SERVER_NAME_AND_VERSION/bin/startWorkspace.sh
Windows 終了スクリプト	HYPERION_HOME/deployments/APP_SERVER_NAME_AND_VERSION/bin/stopWorkspace.bat
UNIX 終了スクリプト	HYPERION_HOME/deployments/APP_SERVER_NAME_AND_VERSION/bin/stopWorkspace.sh

## クライアントの起動

この項では、EPM System クライアントの起動方法を説明します。デフォルトの URL および必要に応じてスクリプト名をリストします。ほとんどのクライアントは、Windows の「スタート」メニューを使用して起動することもできます。

次の表に、EPM System クライアントを起動するための URL とスクリプトを示します。

表 44 クライアントの起動

クライアント	URL	スクリプトまたはその他の起動メソッド
Shared Services Console	http:// Server:Port/ interop/	NA
EPM Workspace  EPM Workspace から、次の製品に アクセスできます:  <ul style="list-style-type: none"> <li>● Financial Management</li> <li>● Planning</li> <li>● Performance Management Architect</li> <li>● Calculation Manager</li> <li>● Performance Scorecard</li> <li>● Profitability and Cost Management</li> <li>● Reporting and Analysis</li> <li>● ERP Integrator</li> </ul>	http:// Server:Port/ workspace/	「スタート」メニューから「プログラム」、「Oracle EPM System」、「Workspace」、「Workspace URL」の順に選択します。
Smart View	NA	Microsoft Excel、Microsoft Word、Microsoft PowerPoint の「Hyperion」メニュー、または「Hyperion」リボンを使用します。
管理サービス・コンソール	http:// server:port/ easconsole/ console.html	HYPERION_HOME/products/Essbase/eas/console/ bin/admincon.exe
Integration Services コンソール	NA	HYPERION_HOME/products/Essbase/eis/console/ bin/startclient.bat
Essbase Studio コンソール	NA	HYPERION_HOME/products/Essbase/ EssbaseStudio/Console/startStudio.bat
Smart Search Command Line Utility コンソール	NA	HYPERION_HOME/products/Essbase/SmartSearch/ StartSmartSearchProvider.bat
Strategic Finance クライアント	NA	HYPERION_HOME/products/hsf/Client/HSF.exe
Data Relationship Management クラ イアント	NA	HYPERION_HOME/master data management/mdm_ ntier_client_http.exe
Data Relationship Management Web Publishing クライアント	http://Server_ Name/mdm_web	NA
FDM コンソール	http:// WebServerName/ HyperionFDM	NA



## この章の内容

EPM System 診断について .....	141
前提条件 .....	141
EPM System 診断の使用方法 .....	141
Foundation Services 診断 .....	142
Essbase 診断 .....	144
Reporting and Analysis 診断 .....	145
Financial Performance Management アプリケーション診断 .....	146
データ管理診断 .....	147

## EPM System 診断について

EPM System 診断は、インストールされて構成された EPM System コンポーネントの接続性をテストします。配置内の各マシンで EPM System 診断を実行します。テストの結果は、HTML フォーマットで保存されます。

## 前提条件

EPM System 診断を使用する前に、次の前提条件を整えます:

- EPM System 製品をインストールします。第 3 章「EPM System 製品のインストール」を参照してください。
- EPM System コンフィグレータを使用して、各製品に必要なすべての構成タスクを実行します。第 4 章「EPM System 製品の構成」を参照してください。

## EPM System 診断の使用方法

▶ EPM System 診断を実行するには:

### 1 方法を選択します:

- (Windows) HYPERION\_HOME/common/validation/version number で、validate.bat をダブルクリックします。
- EPM System コンフィグレータの最後のページから EPM System 診断を起動します。

- 「スタート」メニューから、「プログラム」、「Oracle EPM System」、「Foundation Services」、「EPM System 診断」の順に選択します。
- (UNIX)コンソールで、`HYPERION_HOME/common/validation/version number` に移動して、`validate.sh` を入力します。

コマンド・ウィンドウに進行状況が表示されます。

**2** 結果を表示するには、`HYPERION_HOME/common/validation/version number/reports` に移動して、`validation_report_date_time.html` を開きます。

**3** 失敗したテストを探し、問題を診断して修正します。

EPM System 診断では、便宜上 `HYPERION_HOME/logszips` にすべてのログの ZIP ファイルが作成されます。

ログの詳細は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストールおよび構成トラブルシューティング・ガイド』を参照してください。

**4** EPM System 診断をもう一度実行し、レポートを表示して問題が解決されたことを確認します。

**注：** ブラウザのリフレッシュ・ボタンをクリックしてもレポート出力はリフレッシュされません。

レポートには、次の情報が取り込まれます：

- テストの日付と時刻
- テスト・ステータス: 各テストの成功または失敗
- サービス: 各テストのテスト・タイプ
- テストの説明: 各テストの詳しい説明
- 時間: 各テストの所要時間
- テストの開始時刻
- テストの終了時刻
- テスト時間の合計

## Foundation Services 診断

次の表に、Foundation Services 製品に対して実行する EPM System 診断テストを示します。

製品/コンポーネント	テスト・タイプ	実行するテスト
Shared Services	CFG: 構成	すべての構成タスクが完了したかどうかを確認します
	DB: データベース	データベース <code>host:port;databaseName</code> への接続を確認します
	EXT: 外部認証	ネイティブ・ディレクトリ外部認証プロバイダ構成を確認します
	OPN: OpenLDAP	グローバルな役割の数が 16 個以上かどうかを確認します

製品/コンポーネント	テスト・タイプ	実行するテスト
	OPN: OpenLDAP	OpenLDAP への接続を確認します
	SSO	Shared Services へのログインの可用性を確認します
	WEB: Web アプリケーション	host:port における Web アプリケーション interop の可用性を確認します
EPM Workspace	CFG: 構成	すべての構成タスクが完了したかどうかを確認します
	DB: データベース	データベース host:port;databaseName への接続を確認します
	EXT: 外部認証	外部認証プロバイダ構成を確認します
	HSS: Shared Services	Shared Services の可用性を確認します
	HTTP: http	EPM Workspace Web サーバー構成を使用する EPM Workspace に登録された製品の HTTP コンテキストの可用性を確認します:
	LOG: ログイン	EPM Workspace に登録されているアプリケーションにアクセスできることを確認します
	SSO	EPM Workspace へのログインの可用性を確認します
	REG: レジストリ	EPM Workspace で配置されたアプリケーションごとに、Shared Services レジストリに有効な Web サーバー・エントリがあることを確認します
	SDKC: SDK チェック	EPM Workspace サービスの実行および次のサービスとの通信を検証します: <ul style="list-style-type: none"> <li>● GSM サービス</li> <li>● リポジトリ・サービス</li> <li>● Interactive Reporting サービス</li> </ul>
	HTTP: http (Windows のみ)	HYPERION_HOME/common/httpServers/Apache/2.0.59/conf/httpd.conf 内の文字列 LoadModule jk_module modules/mod_jk を確認します
	WEB: Web アプリケーション	host:port における Web アプリケーション workspace の可用性を確認します
Performance Management Architect	CFG: 構成	すべての構成タスクが完了したかどうかを確認します
	DB: データベース	データベース host:port;databaseName への接続を確認します
	DSC: EPMA 次元サーバー構成	次元サーバー・サービスを開始しているかどうかを確認します
	PMAE: EPMA サービス	イベント・マネージャ・サービスが使用可能かどうかを確認します
	PMAJ: EPMA サービス	ジョブ・マネージャ・サービスが使用可能かどうかを確認します
	PMAP: EPMA サービス	プロセス・マネージャ・サービスが使用可能かどうかを確認します
	EXT: 外部認証	外部認証プロバイダ構成を確認します

製品/コンポーネント	テスト・タイプ	実行するテスト
	HSS: Shared Services	Shared Services の可用性を確認します
	WEB: Web アプリケーション	host:port における Web アプリケーション awb の可用性を確認します
	WEB: Web アプリケーション	host:port における Web アプリケーション DataSync の可用性を確認します
Calculation Manager	CFG: 構成	すべての構成タスクが完了したかどうかを確認します
	DB: データベース	データベース host:port;databaseName への接続を確認します
	EXT: 外部認証	ネイティブ・ディレクトリ外部認証プロバイダ構成を確認します
	HSS: Shared Services	Shared Services の可用性を確認します
	WEB: Web アプリケーション	host:port における Web アプリケーション calcmgr の可用性を確認します

## Essbase 診断

次の表に、Essbase 製品に対して実行する EPM System 診断テストを示します。

製品/コンポーネント	テスト・タイプ	実行するテスト
Essbase	CFG: 構成	すべての構成タスクが完了したかどうかを確認します
	EAS: Essbase サーバー	Essbase サーバーが host:port で実行されているかどうかを確認します
	EAS: Essbase サーバー	MAXL を使用した Essbase サーバーへの接続を確認します
	SVR: Essbase Java API	Essbase Java API を使用する Essbase への接続を確認します
	EXT: 外部認証	ネイティブ・ディレクトリ外部認証プロバイダ構成を確認します
	HSS: Shared Services	Shared Services の可用性を確認します
Provider Services	CFG: 構成	すべての構成タスクが完了したかどうかを確認します
	EXT: 外部認証	ネイティブ・ディレクトリ外部認証プロバイダ構成を確認します
	HSS: Shared Services	Shared Services の可用性を確認します
	WEB: Web アプリケーション	host:port における Web アプリケーション aps の可用性を確認します
Administration Services	CFG: 構成	すべての構成タスクが完了したかどうかを確認します
	DB: データベース	データベース host:port;databaseName への接続を確認します



製品/コンポーネント	テスト・タイプ	実行するテスト
	EXT: 外部認証	ネイティブ・ディレクトリ外部認証プロバイダ構成を確認します
	HSS: Shared Services	Shared Services の可用性を確認します
	Web アプリケーション	host:port における Web アプリケーション eas の可用性を確認します
	Web アプリケーション	host:port における Web アプリケーション hbrlauncher の可用性を確認します
	DB: データベース	データベース host:port;databaseName への接続を確認します
Essbase Studio	CFG: 構成	すべての構成タスクが完了したかどうかを確認します
	DB: データベース	データベース host:port;databaseName への接続を確認します
	ESS: Essbase Studio サーバー	Essbase Studio サーバーが host:port で実行されているかどうかを確認します
	EXT: 外部認証	ネイティブ・ディレクトリ外部認証プロバイダ構成を確認します
	HSS: Shared Services	Shared Services の可用性を確認します
Smart Search Command Line Utility	CFG: 構成	すべての構成タスクが完了したかどうかを確認します
	WEB: Web アプリケーション	host:port における Web アプリケーション EssbaseSearch の可用性を確認します
Essbase クライアント	WR: Windows レジストリ	EQD Excel アドインが Excel に登録されているかどうかを確認します。

## Reporting and Analysis 診断

次の表に、Reporting and Analysis 製品に対して実行する EPM System 診断テストを示します。

コンポーネント	テスト・タイプ	実行するテスト
Reporting and Analysis	CFG: 構成	すべての構成タスクが完了したかどうかを確認します
	SVR: Essbase Java API	Essbase Java API を使用する Essbase への接続を確認します
Financial Reporting	WEB: Web アプリケーション	host:port における Web アプリケーション hr の可用性を確認します
Web Analysis	WEB: Web アプリケーション	host:port における Web アプリケーション WebAnalysis の可用性を確認します

# Financial Performance Management アプリケーション診断

次の表に、Financial Performance Management アプリケーション製品に対して実行する EPM System 診断テストを示します。

製品/コンポーネント	テスト・タイプ	実行するテスト
Planning	CFG: 構成	すべての構成タスクが完了したかどうかを確認します
	DB: データベース	データベース <code>host:port;databaseName</code> への接続を確認します
	EXT: 外部認証	ネイティブ・ディレクトリ外部認証プロバイダ構成を確認します
	HSS: Shared Services	Shared Services の可用性を確認します
	WEB: Web アプリケーション	<code>host:port</code> における Web アプリケーション <code>HyperionPlanning</code> の可用性を確認します
Financial Management	CFG: 構成	すべての構成タスクが完了したかどうかを確認します
	DB: データベース	データベース <code>host:port;databaseName</code> への接続を確認します
	EXT: 外部認証	ネイティブ・ディレクトリ外部認証プロバイダ構成を確認します
	CCFG: HFM クラスタ構成	Financial Management クラスタの登録が正常に終了したかどうかを確認します
	SVR: サーバーの登録	Financial Management サーバーの登録が正常に終了したかどうかを確認します
	SVR: HFM サービスの検証	Financial Management サービスが動作しているかどうかを確認します
	WSVR: HFM Web サーバー	Financial Management Web サーバーが正常に起動したかどうかを確認します
	ASC: HFM アプリケーション・サーバー構成	アプリケーション・サーバーが開始されているかどうかを確認します
	HSS: Shared Services	Shared Services の可用性を確認します
	LCM: ライフサイクル管理サーバー	LCM サーバーが正常に起動したかどうかを確認します
	SVCS: Smart View サーバー	Smart View Web サーバーが正常に起動したかどうかを確認します
Performance Scorecard	CFG: 構成	すべての構成タスクが完了したかどうかを確認します
	DB: データベース	データベース <code>host:port;databaseName</code> への接続を確認します
	EXT: 外部認証	ネイティブ・ディレクトリ外部認証プロバイダ構成を確認します
	HSS: Shared Services	Shared Services の可用性を確認します

製品/コンポーネント	テスト・タイプ	実行するテスト
	WEB: Web アプリケーション	host:port における Web アプリケーション HPSWebReports の可用性を確認します
	WEB: Web アプリケーション	host:port における Web アプリケーション HPSAlerter の可用性を確認します
Strategic Finance	CFG: 構成	すべての構成タスクが完了したかどうかを確認します
	EXT: 外部認証	ネイティブ・ディレクトリ外部認証プロバイダ構成を確認します
	HSS: Shared Services	Shared Services の可用性を確認します
	WEB: Strategic Finance Web サービス	Strategic Finance Web サービスの可用性を確認します
Profitability and Cost Management	CFG: 構成	すべての構成タスクが完了したかどうかを確認します
	DB: データベース	データベース host:port;databaseName への接続を確認します
	EXT: 外部認証	ネイティブ・ディレクトリ外部認証プロバイダ構成を確認します
	HSS: Shared Services	Shared Services の可用性を確認します
	WEB: Web アプリケーション	host:port における Web アプリケーション profitability の可用性を確認します

## データ管理診断

次の表に、データ管理製品に対して実行する EPM System 診断テストを示します。

コンポーネント	テスト・タイプ	実行するテスト
FDM	CFG: 構成	すべての構成タスクが完了したかどうかを確認します
	EXT: 外部認証	ネイティブ・ディレクトリ外部認証プロバイダ構成を確認します
	HSS: Shared Services	Shared Services の可用性を確認します
ERP Integrator	CFG: 構成	すべての構成タスクが完了したかどうかを確認します
	DB: データベース	データベース host:port;databaseName への接続を確認します
	EXT: 外部認証	ネイティブ・ディレクトリ外部認証プロバイダ構成を確認します
	HSS: Shared Services	Shared Services の可用性を確認します
	WEB: Web アプリケーション	host:port における Web アプリケーション aif の可用性を確認します



## この章の内容

一般的な構成後のタスク .....	149
Shared Services 構成後のタスク .....	150
Performance Management Architect 構成後のタスク .....	150
EPM Workspace 構成後のタスク .....	151
Essbase 構成後のタスク .....	151
Integration Services 構成後のタスク .....	152
Administration Services 構成後のタスク .....	153
Provider Services 構成後のタスク .....	154
Essbase Studio 構成後のタスク .....	154
Reporting and Analysis 構成後のタスク .....	155
Planning 構成後のタスク .....	162
Financial Management 構成後のタスク .....	164
Strategic Finance 構成後のタスク .....	165
Performance Scorecard 構成後のタスク .....	165
FDM 構成後のタスク .....	166
ERP Integrator 構成後のタスク .....	166
Data Relationship Management 構成後のタスク .....	167

製品によっては構成後に追加手順が必要な製品もあります。

## 一般的な構成後のタスク

次の表に、EPM System 製品の一般的な構成後のタスクを示します。

**表 45** 一般的な構成後のタスク

タスク	参照
<b>オプション:</b> Web アプリケーション・サーバーの JVM メモリー割当てを増大します。	<a href="#">150 ページの「JVM メモリー割当ての増大」</a>
<b>オプション:</b> EPM System 製品のセキュリティを強化します。	Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System セキュリティ管理ガイド

## JVM メモリー割当ての増大

各自の環境の規模によっては、パフォーマンスを最適化するために、Web アプリケーション・サーバーのヒープ・サイズを増やす必要がある場合があります。テスト環境(単一サーバー・タイプ構成)ではデフォルト値を使用できますが、ヒープ・サイズは実稼働環境(複数のサーバー)に備えて大きくする必要があります。

Windows サービスのヒープ・サイズを増やすには、regedit を使用して、Windows サービスの Windows レジストリを更新します。HKEY\_LOCAL\_MACHINE¥SOFTWARE¥Hyperion Solutions¥Product Component¥ServiceName の場合は、値が-Xmx で始まる JVMOptionX(X は 1、2、...)を更新します。

▶ JVM メモリー割当てを大きくするには:

### 1 開始スクリプトを編集して必要なヒープ・サイズを指定します。

最大設定 1024 をお勧めします。(サイズは MB です。)

たとえば、カスタムの起動スクリプトを変更できます。Shared Services の場合、HYPERION\_HOME/deployments/app\_server/bin/setCustomParamsSharedServices.bat|.sh を開き、-Xms128m -Xmx1024m エントリーを変更できます。

### 2 製品の Windows サービスまたはスクリプトを再起動します。

## Shared Services 構成後のタスク

次の表に、Shared Services 構成後のタスクを示します。

表 46 Shared Services 構成後のタスク

タスク	参照
(オプション)EPM System アプリケーション・ソフトウェアがインストールされているコンピュータで NTLM プロバイダおよび UNIX を使用してセキュリティを実装している場合は、リモート認証モジュールを使用可能にします。(リモート認証モジュールは、Oracle Hyperion(R) Foundation Services とともにインストールされます。)	『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System セキュリティ管理ガイド』の NTLM の構成に関する説明
<b>オプション:</b> デフォルトでインストールして使用される OpenLDAP ではなく、Oracle Internet Directory をネイティブ・ディレクトリとして使用するよう Shared Services を設定できます。	Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System セキュリティ管理ガイド

## Performance Management Architect 構成後のタスク

次の表に、Performance Management Architect 構成後のタスクを示します。

表 47 Performance Management Architect 構成後のタスク

タスク	参照
<p><b>(WebLogic Server のみ)</b> 環境に応じて Performance Management Architect を配置したら、<code>StuckThreadMaxTime</code> 属性値で定義したアプリケーション・サーバーの最大スレッド実行時間を大きくする必要があります。</p> <p>この値を大きくすると、長いプロセスが途中で終了することがなくなります。</p>	WebLogic Server アプリケーション・サーバーのドキュメント
<p><b>オプション:</b> サーバー管理タスクを実行します。</p>	『Hyperion Enterprise Performance Management Architect 管理者ガイド』のサーバーの管理に関する説明
<p><b>オプション:</b> <code>bpma_server_config.xml</code> ファイルの設定を編集します。</p> <p><code>BPMA_Server_Config.xml</code> ファイルには、2 つの主要要素である、<code>DimensionServer</code> と <code>log4net</code> があります。<code>DimensionServer</code> セクションには、次元サーバーおよびその他の関連プロセスの内部作業に固有の設定が含まれます。<code>log4net</code> セクションには、警告、エラーなどの記録に使用される <code>log4net</code> モジュールが使用する設定が含まれます。</p>	Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Architect 管理者ガイド

## EPM Workspace 構成後のタスク

次の表に、EPM Workspace 構成後のタスクを示します。

表 48 EPM Workspace 構成後のタスク

タスク	参照
<p><b>オプション:</b> Oracle Business Intelligence Suite Enterprise Edition を使用する場合は、それを EPM Workspace と連動するように構成します。</p>	『Oracle Business Intelligence 新機能ガイド』
<p><b>オプション:</b> 構成と監視コンソール(CMC)を使用して、EPM Workspace サービス、Reporting and Analysis サービス、注釈サービス、EPM Workspace Web アプリケーション(プロパティのみ)、および Web Analysis Web アプリケーション(プロパティのみ)の構成をカスタマイズします。</p> <p>EPM System コンフィグレータでの構成中に、EPM System コンフィグレータは、サービスのデフォルト値を設定します。サービスをカスタマイズするには、構成と監視コンソールを使用します。</p>	『Oracle Enterprise Performance Management Workspace 管理者ガイド』

## Essbase 構成後のタスク

次の表に、Essbase 構成後のタスクを示します。

表 49 Essbase 構成後のタスク

タスク	参照
<p><b>オプション:</b> 手動で Essbase を構成します。</p>	付録 B 「Essbase 製品のオプションの手動構成」

タスク	参照
(UNIX)64 ビット AIX のユーザー制限を設定します。	152 ページの「64 ビット AIX でのユーザー制限の設定」
Essbase クライアントと Integration Services をどちらもインストールした場合、PATH 環境変数を編集し、Essbase クライアントの bin パスが Integration Services の bin パスの前にあるようにします。例: HYPERION_HOME/products/Essbase/EssbaseClient/bin は、HYPERION_HOME/products/Essbase/eis/server/bin の前にある必要があります。	
管理者ではなく、パワー・ユーザーとして Spreadsheet Add-in を使用している場合は、ESSBASEPATH を手動で設定する必要があります。	

## 64 ビット AIX でのユーザー制限の設定

64 ビット AIX プラットフォームで Essbase サーバーを実行している場合、ユーザー制限を変更して、データ・セグメントのサイズを増やす必要があります。次の表は、推奨値を示しています:

ユーザー制限	値
時間(秒)	無制限
ファイル(ブロック)	2097151
データ(KB)	無制限
スタック(KB)	64 ビットの場合は 128MB 以下、32 ビットの場合は 64MB 以下
メモリー(KB)	無制限
コアダンプ(ブロック)	2097151
ファイルなし(記述子)	無制限

## Integration Services 構成後のタスク

次の表に、Integration Services 構成後のタスクを示します。

**表 50** Integration Services 構成後のタスク

タスク	参照
<b>オプション:</b> 手動で環境を更新します。	付録 B 「Essbase 製品のオプションの手動構成」
データ・ソースを構成します。 OLAP モデルの作成またはメタアウトラインの構築を行うには、Integration Services を、メタデータを含むデータベース(OLAP メタデータ・カタログ・データベース)と、必要なユーザーのデータが保管されたデータベース(データ・ソース・データベース)に接続する必要があります。	『Oracle Essbase Integration Services システム管理者ガイド』のデータ・ソースの構成に関する説明



タスク	参照
OLAP メタデータ・カタログの作成	『Oracle Essbase Integration Services システム管理者ガイド』の「OLAP メタデータ・カタログの作成、更新、削除」
サーバー・コンポーネントおよびデータ・ソースへの接続	『Oracle Essbase Integration Services システム管理者ガイド』の「サーバー・コンポーネントおよびデータ・ソースへの接続」
XML インポート/エクスポート機能を使用している場合は、JDBC データ・ソースをマップします。	『Oracle Essbase Integration Services システム管理者ガイド』の「JDBC データ・ソースのマッピング (Teradata および Oracle ユーザーのみ)」
オプション: サンプル・アプリケーションを設定します。	『Oracle Essbase Integration Services システム管理者ガイド』の「サンプル・アプリケーションの設定」

## Administration Services 構成後のタスク

次の表に、Administration Services 構成後のタスクを示します。

**表 51** Administration Services 構成後のタスク

タスク	リファレンス
Administration Services が、タイムアウトになったために Shared Services に接続できない場合は、 <code>HYPERION_HOME/deployments/AppServerNameAndVersion/bin/setCustomParamseas.bat</code> の <code>EAS_HSS_RETRY_COUNT</code> を編集して値を大きくします。  例: <code>HYPERION_HOME/deployments/Tomcat5/bin/setCustomParamseas.bat</code> の <code>JAVA_OPTS</code> で、 <code>-DEAS_HSS_RETRY_COUNT=n</code> の追加または編集を行います。n は、1 秒おきに再試行する回数です。	
HTTP プロキシを介して Oracle Application Server を使用しており、管理サービス・コンソールが HTTP サーバーまたは Administration Services サーバーと同じマシンにインストールされている場合は、 <code>admincon.lax</code> の <code>lax.nl.java.option.additional</code> 引数に次のパラメータを追加します:  <code>-DCLIENT_SERVER_DIFF_MC=true</code>	
クラスタ環境で Administration Services を使用している場合は、Administration Services が配置されるマシンの <code>ORACLE_HOME/opmn/conf/opmn.xml</code> の Java オプションに次のパラメータを追加します:  <code>"-DCLIENT_SERVER_DIFF_MC=true"</code>	
Administration Services のリバース・プロキシとして動作するように Web サーバーを構成したとき、Web サーバーが Administration Services と同じマシンにインストールされている場合は、Administration Service の開始に使用したスクリプトに Java 引数 <code>DCLIENT_SERVER_DIFF_MC=true</code> を含めるか、 <code>admincon.lax</code> の <code>lax.nl.java.option.additional</code> 引数にパラメータを追加する必要があります。	

タスク	リファレンス
UNIX 上で Administration Services および Oracle Application Server を使用している場合は、Oracle Application Server アプリケーション・サーバー・コンソールで環境変数を設定します。	<a href="#">210 ページの「Administration Services のオプションの手動構成(UNIX)」</a>
<b>オプション:</b> SAP R/3 をデータ・ソースとして使用している場合は、SAP/R3 をインストールして構成します。	Administration Services オンライン・ヘルプ

## Provider Services 構成後のタスク

次の表に、Provider Services 構成後のタスクを示します。

**表 52** Provider Services 構成後のタスク

タスク	リファレンス
UNIX 上で Oracle Application Server とともに Provider Services を使用する場合は、Oracle Application Server アプリケーション・サーバー・コンソールで環境変数を設定します。	<a href="#">211 ページの「Provider Services のオプションの手動構成(UNIX)」</a>

## Essbase Studio 構成後のタスク

次の表に、Essbase Studio 構成後のタスクを示します。

**表 53** Essbase Studio 構成後のタスク

タスク	参照
<b>オプション:</b> Essbase Studio <code>server.properties</code> ファイルをカスタマイズするか、管理サービス・コンソール起動ファイルを構成します。	『Oracle Essbase Studio ユーザー・ガイド』
「メンテナンス・リリースの適用」オプションを使用して Essbase Studio リリース 11.1.1 または 11.1.1.1 をこのリリースに移行した場合、Essbase Studio カタログを更新する必要があります。	<a href="#">154 ページの「Essbase Studio カタログの更新」</a>

## Essbase Studio カタログの更新

「メンテナンス・リリースの適用」オプションを使用して Essbase Studio リリース 11.1.1 または 11.1.1.1 をこのリリースに移行した場合、インストールおよび構成後に Essbase Studio カタログを更新する必要があります。

Essbase Studio コマンド・ライン・クライアントで `reinit` コマンドを発行して、カタログを更新します。これにより、最新のリリース手順でカタログが更新されます。

► Essbase Studio カタログを更新するには:

- 1 Essbase Studio サーバーが実行されていることを確認します。

- 2 HYPERION\_HOME/products/essbase/EssbaseStudio/Server ディレクトリから、次のスクリプトのいずれかを実行します:

Windows:

```
startCommandLineClient.bat
```

UNIX

```
startCommandLineClient.sh
```

CPL シェルと呼ばれるコマンド・ウィンドウが表示されます。

- 3 プロンプトが表示されたら、有効な管理者ユーザー名とパスワードを入力します。

**注:** `reinit` コマンドを使用するには、Essbase Studio 管理者権限が必要です。

- 4 プロンプトで、次のコマンドを入力します:

```
reinit
```

- 5 `exit` と入力して、CPL シェルを閉じます。

Essbase Studio カタログは現在使用できる状態にあります。

## Reporting and Analysis 構成後のタスク

次の表に、Reporting and Analysis 構成後のタスクを示します。

表 54 Reporting and Analysis 構成後のタスク

タスク	参照
<b>オプション:</b> <code>fr_repserver.properties</code> を編集して Financial Reporting の初期ユーザー・プリファレンスをカスタマイズします。	『Oracle Hyperion Financial Reporting Studio ユーザー・ガイド』
Financial Reporting の印刷サーバーを準備します。印刷サーバーは、Microsoft Windows でのみ実行されます。	156 ページの「Financial Reporting 印刷サーバーの準備」
(UNIX) Financial Reporting および Web Analysis の Web アプリケーション・サーバー・コンポーネントに X11 を構成します。	157 ページの「Financial Reporting および Web Analysis の Web アプリケーション・サーバー・コンポーネント用の X11 の構成(UNIX)」
SAP JAVA Connector(SAP JCo)データ・ソースにアクセスして必要に応じて SAP サーバーに対してユーザーを認証するよう Reporting and Analysis を構成するには、各 Reporting and Analysis コンポーネント・マシンに SAP JCo ファイルをインストールします。	157 ページの「SAP Data Source Access および認証の構成」
(UNIX)英語以外の文字用に Financial Reporting および Web Analysis の環境変数を設定します。	158 ページの「英語以外の文字に備えた Financial Reporting および Web Analysis の環境変数の設定(UNIX)」

タスク	参照
Web Analysis の場合: RDBMS をデータ・ソースまたはリレーショナル・ドリル・スルーとして使用している場合は、必要なドライバを追加します。	
(UNIX) Production Reporting の環境変数を設定します。	<a href="#">159 ページの「Production Reporting の環境変数の設定(UNIX)」</a>
印刷用に Oracle Hyperion(R) Interactive Reporting を準備します。	<a href="#">160 ページの「Interactive Reporting での印刷の準備(UNIX)」</a>
<b>オプション:</b> UNIX システムのフォントを構成します。	<a href="#">160 ページの「フォントの構成(UNIX)」</a>
Provider Services を使用して高可用性(HA)を使用可能にするには、Financial Reporting の Provider Services ドライバ・サポートを使用可能にします。	<a href="#">161 ページの「Financial Reporting 構成 - Provider Services ドライバを使用可能にする」</a>
<b>オプション:</b> (UNIX)Production Reporting の実行可能ファイルを再作成します。	<a href="#">162 ページの「実行可能ファイルの再作成(Production Reporting のみ)(UNIX)」</a>

## Financial Reporting 印刷サーバーの準備

セル・ドキュメントを印刷するには、印刷サーバー・コンピュータの対応するアプリケーション(Microsoft Word、Excel、PowerPoint)が、次の条件を備えている必要があります:

- 正しくインストールされている
- コンピュータのレジストリに、印刷用として正しく登録されている
- "SYSTEM"アカウントを使用できる
- Financial Reporting (HRPrinter1-5)によってインストールされたプリンタにアクセスし印刷できる。SYSTEM アカウントですべての印刷要求を実行するので、アプリケーションから印刷サーバーのプリンタを使用して印刷できることが重要です。

印刷サーバーを最適化するには、次のアイテムを使用不可にします:

- Microsoft Office アプリケーションのすべてのアドイン(Oracle Hyperion アドインを含む) - 使用不可にすると、アプリケーションの起動時間が短縮され、システム・リソースの消費が少なくなります。使用可能にすると、ユーザー入力を必要とする UI コンポーネントが表示される場合があります。
- SmartTags(Office 2002 以降) - 使用不可にすると、パフォーマンスが向上します。
- "Office アシスタント" - Office アシスタントはユーザーに入力を求め、印刷を停止させます。

**ヒント:** 印刷サーバー専用のコンピュータを指定して、アドインが使用されないようにします。

# Financial Reporting および Web Analysis の Web アプリケーション・サーバー・コンポーネント用の X11 の構成 (UNIX)

チャート生成を実行するには、Reporting and Analysis Web アプリケーション・サーバー・コンポーネントが、グラフィック表示デバイスに実質的にまたは仮想的にアクセスする必要があります。ハードウェアのグラフィック表示デバイスではなく、X 仮想フレーム・バッファ (Xvfb) を使用することをお勧めします。これは、Xvfb はメモリ内ですべての操作を実行し、画面または入力デバイスをマシンに接続する必要がないためです。Xvfb を使用可能にするための詳細は、[付録 F 「Financial Reporting と Web Analysis に対して X 仮想フレーム・バッファを使用可能にする」](#) を参照してください。

## SAP Data Source Access および認証の構成

SAP JAVA Connector (SAP JCo) データ・ソースにアクセスして必要に応じて SAP サーバーに対してユーザーを認証するよう Reporting and Analysis を構成するには、各 Reporting and Analysis コンポーネント・マシンに SAP JCo ファイルをインストールします。

➤ SAP をデータ・ソースとして、また必要に応じて認証プロバイダとして使用するよう Reporting and Analysis を構成するには:

### 1 次の場所から SAP JCo ファイルを取得します:

- SAP の配布元。
- SAP Web サイト <https://service.sap.com/connectors> から登録済のユーザーとしてダウンロードします。

### 2 (Windows) Reporting and Analysis のインストール後:

1. SAP JCo バイナリを `HYPERION_HOME/common/SAP/bin` に配置します。
2. SAP JCo Java アーカイブ (JAR ファイル) を `HYPERION_HOME/common/SAP/lib` に配置します。
3. 適切なユーティリティを使用して、次の場所に JAR ファイルを展開します。

```
HYPERION_HOME  
/common/SAP/lib/explodejarUsingJRE.bat | sh
```

### 3 UNIX: Reporting and Analysis のインストール後に、SAP JCo バイナリを `HYPERION_HOME/common/SAP/bin` に配置します。SAP JCo Java アーカイブ (.jar ファイル) を `HYPERION_HOME/common/SAP/lib` に配置します

### 4 「オプション」: SAP を認証プロバイダとして使用するよう Reporting and Analysis を構成するには:

1. SAP Enterprise Portal EP60 SP2 以降から、次のファイルをダウンロードします:

- `com.sap.security.core.jar`
- `com.sap.security.api.jar`
- `sap.logging.jar`
- `iaik_jce.jar`
- `iaik_jce_export.jar`(IAIK-JCE ライブラリのエクスポート・バージョンを使用する場合)。ダウンロード先は、次のとおりです。

```
HYPERION_HOME
/common/SAP/lib
```

2. インストール後、適切なユーティリティを使用して、次の場所に JAR ファイルを展開します。

```
HYPERION_HOME
/common/SAP/lib/explodejarUsingJRE.bat | sh
```

## 英語以外の文字に備えた Financial Reporting および Web Analysis の環境変数の設定(UNIX)

英語以外の文字を使用するメタデータが含まれている Financial Reporting または Web Analysis オブジェクトを実行するために、次の環境変数を正しく初期化する必要があります:

- `LANG` (UNIX)
- `LC_ALL` (UNIX)
- `ESSLANG`(Essbase をデータ・ソースとして使用する場合)(UNIX および Windows)

▶ 初期化するには、ログイン・スクリプトを使用するか、次のように編集します:

- `LANG, LC_ALL` (UNIX):
  - Financial Reporting の場合:

```
HYPERION_HOME
/products/biplus/bin/freporting.env
```

および

```
HYPERION_HOME
/deployments/
vendor
/bin/setCustomParamsFinancialReporting.sh
```

- Web Analysis の場合:

```
HYPERION_HOME  
/products/biplus/InstallableApps/config/wa_env.sh
```

- ESSLANG (UNIX および Windows):

- Financial Reporting の場合:

```
HYPERION_HOME  
/products/biplus/lib/fr.env
```

- Web Analysis の場合:

```
(UNIX)  
HYPERION_HOME  
/products/biplus/InstallableApps/config/wa_env.sh
```

または

```
(Windows)  
HYPERION_HOME  
/products/biplus/InstallableApps/config/WebAnalysis.env
```

**注：** Web Analysis では、EPM System コンフィグレータは、すでに設定されている場合は既存の ESSLANG 環境変数を使用し、それを Web Analysis 環境設定スクリプトに追加します。ただし、Web Analysis を配置する際に ESSLANG が指定されていない場合、適切な環境設定スクリプトで指定する必要があります。

**注：** UNIX 上で Oracle Application Server を使用し、スクリプトを使用して環境変数を設定する場合は、Oracle Application Server アプリケーション・サーバー・コンソールで環境変数を指定する必要があります。この環境変数を指定するには、OC4J インスタンスのサーバー・プロパティを設定します。

## Production Reporting の環境変数の設定(UNIX)

スクリプトを実行して、環境変数を設定します。スクリプトは、指定されたデータベース・ディレクトリ内にあります。

▶ 環境変数を構成するには、次のディレクトリにある環境変数スクリプトを見つけてみます:

```
HYPERION_HOME  
/products/biplus/bin/SQR/Server/db_name/bin
```

または、64 ビット・バージョンの場合:

```
HYPERION_HOME  
/products/biplus/bin/SQR/Server/db_name/bin64
```

ここでは、db\_name は、データベースの名前です。サポートしているデータベースは、Oracle、Sybase、Informix、DB2、ODBC、DDO および Teradata です。

- 次のスクリプトによって、すべてのデータベースで基本環境変数が構成されます:
  - C シェルの場合: `source setenv.csh`
  - Bourne シェルまたは Korn シェルの場合: `setenv.sh`
- DDO データベースの場合は、次のスクリプトによって追加の環境変数が構成されます:
  - C シェルの場合: `source setjre.csh`
  - Bourne シェルまたは Korn シェルの場合: `setjre.sh`

さらに、チャートを伴うジョブの場合は、付録 F「[Financial Reporting と Web Analysis](#) に対して X 仮想フレーム・バッファを使用可能にする」の説明に従って X11 ディスプレイを構成します。

## Interactive Reporting での印刷の準備(UNIX)

► Interactive Reporting での印刷を準備するには:

- 1 Acrobat Reader がインストールされていることを確認します。
- 2 PATH に Acrobat Reader のインストール場所がない場合は、新規環境変数 `PATH_TO_ACROREAD` を設定します。このパスが、Acrobat Reader のインストール場所になります。

## フォントの構成(UNIX)

見栄えのよいフォントが必要な場合は、次の手順を実行します。

Interactive Reporting Service は、EPM Workspace の BQY ドキュメントが Web クライアントで一貫したルック・アンド・フィールになるように適切なフォントで構成する必要があります。Type1、TrueType または OpenType フォントを Interactive Reporting Service に対して使用可能にしてください。構成されたフォントは、すべての目的の言語の文字をサポートする必要があります。

EPM System Installer は、Andale WT フォントを `HYPERION_HOME/products/biplus/fonts` ディレクトリにインストールし、そのフォントを使用するように Interactive Reporting Service を構成します。このフォントは、西ヨーロッパ言語の他、中国語、日本語および韓国語のほとんどの文字をサポートします。

ユーザーは、使用方法に適したフォントを使用する必要があります。たとえば、西ヨーロッパ言語を使用して、Windows 型のルック・アンド・フィールを求める



場合は、Microsoft の TrueType Web フォントをダウンロードして次のように構成できます:

➤ EPM Workspace で Microsoft の TrueType Web フォントを使用できるようにするには:

1 Microsoft TrueType Web のフォントを、次のサイトからダウンロードします:

<http://sourceforge.net/projects/corefonts/>または他のソース。

2 フォント・ファイルを保管するディレクトリを作成します。

3 ダウンロードした Microsoft のフォントを使用する場合は、INSTALL\_HOME/bin/にある cabextract ユーティリティを使用して、各ファイル(\*.exe)を新しく作成したディレクトリに抽出します:

```
BIPLUS_HOME  
/bin/cabextract -d directory CAB file
```

4 ttmkfdir ユーティリティを使用して、フォント・ファイルが格納されているディレクトリに fonts.dir ファイルを作成します。ttmkfdir ユーティリティは、次の URL からダウンロードできます:

<http://packages.qa.debian.org/t/ttmkfdir.html>

5 fonts.dir ディレクトリを環境変数 FONT\_PATH に追加するか、BIPLUS\_HOME/bin/services.sh 内の BQ\_FONT\_PATH 環境変数に追加します。

6 Interactive Reporting Service を再起動します。

## Financial Reporting 構成 - Provider Services ドライバを使用可能にする

Provider Services を使用して高可用性(HA)を使用可能にするには、Financial Reporting の Provider Services ドライバ・サポートを使用可能にする必要があります。

Financial Reporting の場合:

次の 1 つ以上がインストールされている各コンピュータで操作を実行します:

- Financial Reporting レポート・サーバー
- Financial Reporting スケジューラ
- Financial Reporting Web アプリケーション
- Financial Reporting Studio

操作:

1. HYPERION\_HOME/products/biplus/lib/fr\_global.properties を編集します。
2. UseEssbaseEDS=0 を UseEssbaseEDS=1 に変更します。

3. EssbaseEDSServer=のコメントを解除(ハッシュを除去)し、それに APS サーバー・ホスト名を割り当てます。

## 実行可能ファイルの再作成(Production Reporting のみ)(UNIX)

Sybase、Oracle、Informix、DB2 および Teradata 用の Production Reporting の場合、Production Reporting と同じマシンに適切なクライアント・ソフトウェアがインストールされていることを確認してください。ODBC および DDO 用の Production Reporting では、追加のライブラリは必要ありません。

独自のユーザー定義関数があり、データベース・ライブラリの新しいバージョンが使用可能になった場合や、OS レベルのパッチを適用する場合は、この項の説明に従って製品を再リンクする必要があります。Oracle Hyperion(R) SQR(R) Production Reporting スクリプトは、各データベースの標準の環境変数を使用し、ライブラリの場所を識別します。

オペレーティング・システムまたはデータベース・クライアント・ソフトウェアのバージョンが、元の実行可能ファイルを作成したときと異なっている場合は、実行可能ファイルを再作成する必要があります。次のコマンド・ライン・フラグを使用して、バージョンを検出します:

```
-id
```

- ▶ 実行可能ファイルを再作成するには、次のコマンドをシェルから入力します:

```
cd
HYPERION_HOME
/products/biplus/bin/SQR/Server/
db_name
/lib

./sqrmake
```

db\_name は、データベース名 Oracle、Informix、DB2、Sybase、ODBC、DDO、または Teradata のいずれかです。

実行ファイルを再作成するには、HYPERION\_HOME および SQRDIR が必要です。SQRDIR は、HYPERION\_HOME/products/biplus/bin/SQR/Server/db\_name/bin に設定されている必要があります。

## Planning 構成後のタスク

次の表に、Planning 構成後のタスクを示します。

表 55 Planning 構成後のタスク

タスク	参照
オフライン・プランニングを使用している場合は、構成後のタスクを実行します。	163 ページの「オフライン・プランニングの構成」と『Oracle Hyperion Planning 管理者ガイド』
Redhat または Oracle Enterprise Linux 環境で Planning を使用し、簡体字中国語を使用する場合は、次のいずれかの方法で <code>LANG=zh_CN.utf8</code> ではなく、 <code>LANG=zh_CN.GB18030</code> を指定する必要があります:	
<ul style="list-style-type: none"> <li>Planning をインストールして構成する前に、OS システム・ロケール変数で指定する(まだこの変数を設定していない場合)</li> <li>Planning をインストールして構成した後に、<code>setCustomParamsHyperionPlanning.sh</code> で指定する</li> </ul>	
(UNIX)英語以外の UNIX 環境について Planning ロケールを構成します。	163 ページの「(UNIX)英語以外の環境で使用する Planning ロケールの構成」

## オフライン・プランニングの構成

▶ オフライン・プランニングを構成するには:

- 1 オフライン・プランニング・プロバイダは、適切なアクセス権のないユーザーがフォームをオフラインにすると終了するため、ユーザーに次の権限を与える必要があります:
  - 次のディレクトリおよびサブディレクトリに対する読取り権限および書込み権限: `HYPERION_HOME/products/Planning/Offline/myanalytics` and `HYPERION_HOME/products/Planning/offline/offlinedata`
  - `c:/windows/system32/msvcr71.dll` に対する読取り権限および実行権限
- 2 Smart View をインストールします。
- 3 フォームのオフラインでの使用を有効にし、適切な役割を割り当てます。『Oracle Hyperion Planning 管理者ガイド』を参照してください。

## (UNIX)英語以外の環境で使用する Planning ロケールの構成

▶ 英語以外の UNIX 環境で使用する Planning ロケールを構成するには:

- 1 `HYPERION_HOME/deployments/AppServerNameAndVersion/bin` で、次のアイテムを含めるよう `setCustomParamsHyperionPlanning.sh` を編集します:
  - 適切な `ESSLANG` 値
  - 適切な `LANG` 値
  - 適切な `LC_CTYPE`

ESSLANG、LANG および LC\_TYPE には同じロケールを割り当てる必要があります。

簡体字中国語の場合の例:

```
ESSLANG=SimplifiedChinese_China.UTF-8@Binary; export ESSLANG
```

```
LANG=zh_CN.UTF-8; export LANG
```

```
LC_CTYPE=zh_CN.UTF-8; export LC_CTYPE
```

- 2 setCustomParamsHyperionPlanning.sh で設定した ESSLANG 値は、Essbase サーバーについて設定した ESSLANG 値(EPM System コンフィグレータを使用して設定、または HYPERION\_HOME/products/Essbase/EssbaseServer/hyperionenv.doc を編集して設定)と一致する必要があります。

## Financial Management 構成後のタスク

次の表に、Financial Management 構成後のタスクを示します。

表 56 Financial Management 構成後のタスク

タスク	参照
Financial Management Win32 クライアントを使用する場合、または Financial Reporting および Web Analysis を操作するためにインストール時に ADM クライアント・コンポーネントを選択した場合は、サーバーおよびクラスタを登録し、HFMRCluster ユーティリティを使用して DCOM を使用可能にする必要があります。	『Oracle Hyperion Financial Management 管理者ガイド』
Financial Management Web アプリケーションを構成した場合は、Internet Information Services(IIS)マネージャを使用して、Web サービス拡張 Active Server Pages に「許可」を設定します。	
リリース 11.1.1.2 からリリース 11.1.1.4 に移行するためにメンテナンス・リリースを適用した場合、スキーマ・アップグレード・ユーティリティを実行する必要があります。	
オプション: IIS 5.0 分離モードの設定の構成	164 ページの「IIS 5.0 分離モードの設定の構成(オプション)」

## IIS 5.0 分離モードの設定の構成(オプション)

Financial Management をインストールする前に、IIS をインストールし構成します。ただし、Windows 2003 の IIS 6.0 で IIS 5.0 分離モードを実行する場合は、EPM System コンフィグレータを実行して Web ディレクトリを作成した後に、アプリケーション保護および認証レベルのための 2 つの IIS プロパティをさらに手動で設定する必要があります。

➤ IIS 5.0 分離モードのプロパティを設定するには:

- 1 「スタート」、「プログラム」、「管理ツール」、「インターネット・サービス・マネージャ」の順に選択します。
- 2 「インターネット・インフォメーション・サービス」とそのサブディレクトリを展開し、Financial Management の仮想ディレクトリ(HFM など)を右クリックして、「プロパティ」を選択します。
- 3 「仮想ディレクトリ」タブで、「アプリケーション保護」リストの設定を「高(分離プロセス)」に変更します。
- 4 インターネット・サービス・マネージャを閉じます。
- 5 「スタート」、「プログラム」、「管理ツール」、「コンポーネント サービス」の順に選択します。
- 6 ディレクトリを展開して「COM+ アプリケーション」を選択します。
- 7 IIS(デフォルトの Web サイト//Root/HFM)など、Financial Management の Web サイトを選択します。
- 8 Web サイトを右クリックして、「プロパティ」を選択します。
- 9 「セキュリティ」タブで、「呼び出しの認証レベル」リストの設定を、「なし」に変更します。

## Strategic Finance 構成後のタスク

次の表に、Strategic Finance 構成後のタスクを示します。

表 57 Strategic Finance 構成後のタスク

タスク	参照
サーバーとデータベースを設定します。	『Hyperion Strategic Finance 管理者ガイド』の第 2 章 「サーバー関連タスクの実行」および第 3 章 「データベースの操作」
Strategic Finance クライアントをサーバーに接続します。	『Hyperion Strategic Finance ユーザー・ガイド』の Strategic Finance サーバーのエンティティの管理に 関する項
Strategic Finance Web サービスを構成した場合は、Internet Information Services(IIS)マネージャを使用して、Web サービス拡張 Active Server Pages に「許可」を設定します。	

## Performance Scorecard 構成後のタスク

次の表に、Performance Scorecard 構成後のタスクを示します。

表 58 Performance Scorecard 構成後のタスク

タスク	参照
<p>構成時に、EPM System コンフィグレータは、Performance Scorecard を EPM Workspace Web サーバー構成のデフォルトのポート(19000)に登録します。別のポートまたはプロトコルを使用している場合、配置後、構成時に作成される <code>.instance</code> ファイルを編集する必要があります。</p> <p><code>.instance</code> ファイルを編集するには、ライフサイクル管理を使用して Hyperion Performance Scorecard 登録アーチファクトをファイル・システムにエクスポートし、テキスト・エディタを使用してファイル・システムのインスタンス・ファイルの "context id" および "lcmCallBack" パラメータを編集して保存します。次に、ライフサイクル管理を使用して、Hyperion Performance Scorecard 登録アーチファクトをアプリケーションにインポートします。</p> <p><b>注：</b> インスタンス・ファイルは、ライフサイクル管理のアーチファクトとみなされます。インスタンス・ファイル・アーチファクトは、Shared Services Console 内の配置メタデータ・ノードの下のライフサイクル管理アーチファクト・リストに表示されます。Oracle Hyperion(R) Shared Services Console の「ビュー・ペイン」で「アプリケーション・グループ」、「Foundation」、「配置メタデータ」を展開します。次に、アーチファクト・リストで、「登録」、「アプリケーション」、Hyperion Performance Scorecard を展開します。</p>	Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ライフサイクル管理ガイド

## FDM 構成後のタスク

次の表に、FDM 構成後のタスクを示します。

表 59 FDM 構成後のタスク

タスク	参照
FDM を構成し、FDM アプリケーションを作成します。EPM System コンフィグレータは、FDM の Shared Services への登録のみを行います。残りの構成は、FDM で実行されます。	『Oracle Hyperion Financial Data Quality Management Configuration Guide』
リリース 11.1.1.3 からリリース 11.1.1.4 に移行するためにメンテナンス・リリースを適用した場合、スキーマ更新ユーティリティを実行する必要があります。	『Oracle Hyperion Financial Data Quality Management Configuration Guide』

## ERP Integrator 構成後のタスク

次の表に、ERP Integrator 構成後のタスクを示します。

表 60 ERP Integrator 構成後のタスク

タスク	参照
ERP Integrator を Microsoft SQL Server とともに使用している場合、手動で手順を実行してください。	<a href="#">167 ページの「Microsoft SQL Server とともに使用するための ERP Integrator の準備」</a>
ERP Integrator を使用する Oracle Data Integrator を構成します。	『Oracle Hyperion Financial Data Quality Management ERP Integration Adapter for Oracle Applications 管理者ガイド』

## Microsoft SQL Server とともに使用するための ERP Integrator の準備

ERP Integrator を Microsoft SQL Server とともに使用している場合、データベースへの参照を更新するための追加手順を実行する必要があります。

► Microsoft SQL Server とともに使用するために ERP Integrator を準備するには:

1 ERP Integrator Web アプリケーションの次の配置フォルダに移動します。

```
HYPERION_HOME  
/deployments/  
AppServerNameAndVersion  
/ERPIntegrator/webapps/aif
```

2 次のファイルをテキスト・エディタで開きます:

```
WEB-INF/classes/com/hyperion/aif/gl/common/setup/userinterface/  
DataBindings.cpx
```

3 大/小文字の一致検索オプションを使用して、\_Oracle のすべてのインスタンスを検索して次に置き換えます:

- \_SQLServer: Microsoft SQL Server を使用している場合。

4 ファイルを保存します。

5 ERP Integrator Web サービスを再起動します。

## Data Relationship Management 構成後のタスク

次の表に、Data Relationship Management 構成後のタスクを示します。

表 61 Data Relationship Management 構成後のタスク

タスク	参照
Data Relationship Management をインストールして構成します。	『Oracle Hyperion Data Relationship Management Installation Guide』





---

## この章の内容

SSL の再構成.....	169
別の Web アプリケーション・サーバー・タイプへの再配置.....	170
リポジトリ・パスワードの変更 .....	171
ポートの再構成 .....	174

EPM System コンフィグレータを使用すると、製品を再構成し、環境に変更を組み込むことができます。

再構成するには、製品をホストしているコンピュータ上で EPM System コンフィグレータを起動し、第 4 章「EPM System 製品の構成」の手順に従います。

再構成では次の点に注意する必要があります：

- Shared Services のアプリケーション・サーバーを再構成する場合は、リレーショナル・データベースも再構成する必要があります。
- データベースを再構成した場合は、後で Web アプリケーション・サーバーを再起動します。
- 再構成してポートまたはサーバーを変更する場合は、EPM Workspace Web サーバーも再構成して、EPM Workspace Web アプリケーションを再起動する必要があります。

## SSL の再構成

SSL 使用可能の環境から SSL 使用不可の環境へ、またはその逆に変更する場合、EPM System コンフィグレータを使用して、すべての EPM System 製品を再構成し、次の構成タスクを選択します：

- 共通設定 – 「通信用 SSL の使用可能化」オプションを変更します
- アプリケーション・サーバーへの配置 – すべての Web アプリケーションを再配置します
- Web サーバーの構成 – Web サーバーを再構成します

# 別の Web アプリケーション・サーバー・タイプへの再配置

すでに EPM System 製品をインストールして構成し、アプリケーションを Web アプリケーション・サーバーに配置していて、別の Web アプリケーション・サーバー・タイプに配置する場合は、次の手順を行います。EPM System コンフィグレータを実行し、配置の新しい Web アプリケーション・サーバー・タイプを選択することで、メンテナンス・リリースを適用するとき、または任意の時点で再配置できます。

**注：** EPM System の単一インストール内に、複数の Web アプリケーション・サーバー・タイプを混合して配置できません。Web アプリケーション・サーバー・タイプを変更する場合、同じ Web アプリケーション・サーバー・タイプにすべての Web アプリケーションを再配置する必要があります。

## Embedded Java コンテナまたは WebSphere から WebLogic Server への再配置

すでに製品を Embedded Java コンテナまたは WebSphere に配置している場合、EPM System コンフィグレータでの構成中に WebLogic Server に再配置できます。

- ▶ EPM System 製品の配置を Embedded Java コンテナまたは WebSphere から WebLogic Server に移行するには:
  - 1 EPM System 製品および Web アプリケーション・サーバー(Hyperion Apache 2.0 サービスまたは WebSphere サービス)のすべてのサービスを停止します。
  - 2 `HYPERION_HOME/common/httpServers/Apache/2.0.59/conf/`に移動し、テキスト・エディタで `httpd.conf` を開きます。
  - 3 ファイルの最後にスクロールし、使用する Web アプリケーション・サーバーに応じて次の編集を行います。
    - Embedded Java コンテナの場合、`Include conf/HYSLTomcat-autogenerated.conf` で始まる行を除去します(これらのディレクティブの数は構成したコンポーネントの数に応じて異なります)。
    - WebSphere の場合、`Include conf/WebSphereautogenerated.conf` で始まる行を除去します(これらのディレクティブの数は構成したコンポーネントの数に応じて異なります)。
  - 4 EPM System コンフィグレータを開始し、現在配置しているすべてのアプリケーションについて「アプリケーション・サーバーへの配置」タスクを選択します。構成中に、WebLogic Server を選択します。
  - 5 最後に、EPM Workspace Web サーバーを構成します。

EPM Workspace の Web サーバー構成タスクを完了し、最後にすべての製品が EPM Workspace とともに使用できるように構成されていることを確認します。

# Oracle Application Server から WebLogic Server へのアプリケーションの再配置

➤ Oracle Application Server から WebLogic Server にアプリケーションを再配置するには:

- 1 EPM System 製品のすべての Web アプリケーションとサービスを停止し、すべての Oracle Application Server OPMN サービスを停止します。
- 2 EPM System コンフィグレータを開始し、現在配置しているすべてのアプリケーションについて「アプリケーション・サーバーへの配置」タスクを選択します。構成中に、WebLogic Server を選択します。
- 3 最後に、EPM Workspace Web サーバーを構成します。

EPM Workspace の Web サーバー構成タスクを完了し、最後にすべての製品が EPM Workspace とともに使用できるように構成されていることを確認します。

## リポジトリ・パスワードの変更

データベース・リポジトリを必要とする EPM System 製品の場合は、製品の配置後にリポジトリ・パスワードを変更できます。

データベース・リポジトリのパスワードを変更したら、[第 5 章「EPM System 製品の開始と停止」](#)の説明に従って、EPM System 製品を再起動します。

## Shared Services とレジストリ・リポジトリのパスワードの変更

分散環境で作業している場合は、配置内の各マシンでこの手順を繰り返します。

➤ Shared Services およびレジストリ・リポジトリのパスワードを変更するには:

- 1 データベース管理コンソールを使用して、Shared Services データベースの構成に使用したユーザー・アカウントのパスワードを変更します。
- 2 EPM System Web アプリケーション、サービスおよびプロセスを停止します。
- 3 EPM System コンフィグレータを起動し、Foundation タスクの下にある「データベースの構成」を選択します。
- 4 「Shared Services およびレジストリ・データベース構成」ページで、「前に構成された Shared Services データベースに接続」を選択します。
- 5 既存のデータベースとユーザーはそのまま、Shared Services データベースの構成に使用したユーザー・アカウントの新パスワードを入力します。
- 6 構成を続行し、完了したら「終了」をクリックします。
- 7 Web アプリケーション、サービスおよびプロセスを再起動します。

## EPM System 製品のリポジトリのパスワードの変更

- ▶ Shared Services 以外の EPM System 製品のリポジトリのパスワードを変更するには:
- 1 データベース管理コンソールを使用して、EPM System 製品データベースの構成に使用したユーザー・アカウントのパスワードを変更します。
- 2 EPM System Web アプリケーション、サービスおよびプロセスを停止します。
- 3 EPM System コンフィグレータを開始し、構成する製品の下にある「データベースの構成」を選択します。
- 4 「データベースの構成」ページで、「データベースの初回構成を実行」を選択します。
- 5 既存のデータベースとユーザーを指定し、EPM System 製品データベースの構成に使用したユーザー・アカウントの新パスワードを入力します。
- 6 「テーブルを削除して再作成する」か、「既存のデータベースを再使用する」かを選択するメッセージが表示されたら、「既存のデータベースを再使用します」を選択します。
- 7 構成を続行し、完了したら「終了」をクリックします。
- 8 Web アプリケーション、サービスおよびプロセスを再起動します。

## Planning アプリケーション・リポジトリのパスワードの変更

従来の Planning アプリケーション・ウィザードでデータソースの編集を使用して、アプリケーション・リポジトリのパスワードを変更します。『Oracle Hyperion Planning 管理者ガイド』を参照してください。

## Performance Management Architect インタフェース・データソース・パスワードの変更

Performance Management Architect アプリケーションでインタフェース・データ・ソース構成を使用している場合は、次の手順を実行します。

- ▶ Performance Management Architect インタフェース・データ・ソース・パスワードを変更するには:
- 1 データベースでパスワードを変更します。
- 2 EPM System コンフィグレータを実行します。
- 3 「タスクの選択」ページの Performance Management Architect 領域で、「インタフェース・データソース構成」を選択します。
- 4 「既存データソース・リンクを編集してください」を選択し、データソース・リンクを選択します。

- 5 データベースの構成詳細ページで、新しいパスワードを入力します。「インターフェース・テーブルの作成」が選択されている場合は、選択を解除します。
- 6 構成を続行し、完了したら「終了」をクリックします。

## FDM リポジトリ・パスワードの変更

▶ FDM ワークベンチを使用して FDM リポジトリ・パスワードを変更するには:

- 1 データベースでパスワードを変更します。
- 2 FDM ワークベンチから、「アプリケーションの追加」を選択してログインします。
- 3 リポジトリを変更するアプリケーションを選択し、「変更」を選択します。
- 4 「データベース」タブを選択し、現在のパスワードを新パスワードに変更します。
- 5 「OK」をクリックします。
- 6 「アプリケーション」画面で「OK」をクリックします。
- 7 アプリケーションにログインできることを確認します。

▶ FDM Web を使用して FDM リポジトリ・パスワードを変更するには:

- 1 データベースでパスワードを変更します。
- 2 FDM Web ログオン画面から、「アプリケーションの追加」を選択してログインします。
- 3 リポジトリ・パスワードを変更するアプリケーションを選択し、「変更」を選択します。
- 4 「OK」をクリックします。
- 5 「閉じる」をクリックします。
- 6 アプリケーションにログインできることを確認します。

## Data Relationship Management リポジトリ・パスワードの変更

▶ Data Relationship Management リポジトリ・パスワードを変更するには:

- 1 Data Relationship Management を停止します。
- 2 データベースでパスワードを変更します。
- 3 Data Relationship Management コンソールを開きます。
- 4 「データベースの設定」に進みます。
- 5 「データベースへのログイン」で新パスワードを入力します。
- 6 新パスワードをテストするには、「接続」をクリックします。
- 7 パスワードを再び入力して、「OK」をクリックします。

「データベースに正常に接続しました」というメッセージが表示されます。

8 Data Relationship Management を再起動します。

## ポートの再構成

ポート、ポート番号およびポートの構成方法については、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストール概要』のポートに関する章を参照してください。

## この章の内容

分散環境の考慮事項 .....	175
Financial Management 配置へのサーバーの追加.....	176

## 分散環境の考慮事項

分散環境を使用している場合は、製品インストールの際に次の点に注意してください:

- 1 台のコンピュータに Essbase サーバーの複数のインスタンスをインストールする場合は、63 ページの「Essbase サーバーの追加インスタンスのインストール」を参照してください。
- EPM System 製品は、1 つの Shared Services インスタンスしかサポートしません。製品の単一インスタンスは、2 番目の Shared Services インスタンスを認識しません。配置内には、1 つの Shared Services インスタンスしか持てません。
- EPM Workspace で EPM System コンフィグレータを使用するには、Web サーバーと Web アプリケーション・サーバーを同じマシン(EPM Workspace をインストールするマシン)にインストールする必要があります。Web サーバーと Web アプリケーション・サーバーを別のマシンに配置する場合、手動の構成手順を実行する必要があります。詳細は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System マニュアル配置ガイド』を参照してください。
- Financial Management および EPM Workspace を IIS と併用する場合は、Financial Management Web アプリケーションと EPM Workspace を同じボックスにインストールする必要があります。
- FDM および EPM Workspace を IIS と併用する場合は、FDM Web アプリケーションと EPM Workspace を同じボックスにインストールする必要があります。
- 統合する EPM Workspace とアプリケーションは、同じ Web アプリケーション・サーバー・タイプに配置されている必要があります。たとえば、EPM Workspace が Oracle Application Server に配置される場合、Performance Management Architect も Oracle Application Server に配置される必要があります。統合するアプリケーションが EPM Workspace Web アプリケーション・サーバーをサポートしていない場合、EPM Workspace を一般的にサポートされている Web アプリケーション・サーバー(Oracle WebLogic Server)に再配置します。
- パフォーマンス上の理由によって Financial Management をデータ・ソースとして使用する場合は、Windows プラットフォームで Reporting and Analysis および Financial Management の両方を実行することをお勧めします。Financial

Management と Reporting and Analysis を、Windows と UNIX が混在する環境に配置すると、十分なパフォーマンスを得られない場合があります。

- 1つの環境では Financial Reporting スケジューラ・サービスの1つのインスタンスのみを実行できます。

## Financial Management 配置へのサーバーの追加

次の手順は、サーバーを Financial Management 環境に追加し、クラスタを定義し、サーバーをクラスタに追加するための推奨プロセスの概要を示します。

➤ サーバーを Financial Management 環境に追加するには:

- 1 Financial Management を1つ以上の新規サーバーにインストールした後、EPM System コンフィグレータをすべての新規サーバーで実行し、「アプリケーション・サーバーの構成」タスクを選択します。
- 2 EPM System コンフィグレータを任意の1つのアプリケーション・サーバーで実行し、「アプリケーション・クラスタの構成」タスクを選択してクラスタを定義し、サーバーをクラスタに追加するか、またはクラスタからサーバーを除去します。
- 3 任意のアプリケーションまたは Web サーバーで EPM System コンフィグレータを実行し、「アプリケーション・サーバー/クラスタの登録」タスクを選択します。
- 4 EPM Workspace サービスを再起動します。
- 5 EPM Workspace で、各アプリケーションを目的のクラスタに登録します。『Oracle Enterprise Performance Management Workspace 管理者ガイド』を参照してください。



## この章の内容

EPM System 製品のアンインストール .....	177
サイレント・アンインストールの実行.....	179

EPM System アンインストーラを使用して EPM System 製品のこのリリースをアンインストールできます。サイレント・アンインストールを実行することもできます。

EPM System 製品をアンインストールする際、EPM System アンインストーラは次のことを行います:

- インストールされているサービスを停止および除去する。
- インストールされている Web アプリケーションの配置解除を行う。
- デスクトップ・アイコンとスタート・メニューのアイコンを除去する。
- 製品インストール・ディレクトリの全ファイルを消去する。
- Windows レジストリから該当するエントリを除去する。
- Oracle Hyperion Shared Services レジストリから適切なエントリを削除します。
- IIS から該当するエントリ(仮想ディレクトリなど)を除去する。
- OUI インベントリ(パッチ目的で使用する Oracle インストール・ファイル)から該当するエントリを除去する。

**注意** EPM System 製品をアンインストールすると、EPM System アンインストーラにより、インストール・ディレクトリからすべて削除されます。アンインストールする前に、HYPERION\_HOME 内の保持したいファイルをすべてバックアップしてください。ファイルのバックアップの詳細は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System バックアップおよびリカバリ・ガイド』を参照してください。EPM System アンインストーラでは、Essbase /app ディレクトリ、セキュリティ・ファイル(essbase.sec)および構成ファイル(essbase.cfg)が保持されます。

## EPM System 製品のアンインストール

➤ EPM System 製品をアンインストールするには:

1 方法を選択します:

- (Windows) HYPERION\_HOME/uninstall 内の uninstall.cmd をダブルクリックします。
- (Windows) Windows コントロール・パネルで、「プログラムの追加と削除」を選択し、「Hyperion EPM System」を選択し、「変更と削除」をクリックします。
- (Windows) Windows コンソールから、HYPERION\_HOME/uninstall/に移動し、uninstall.cmd と入力します。
- 「スタート」メニューから、「プログラム」、「Oracle EPM System」、「Foundation Services」、「EPM System のアンインストール」の順に選択します。
- (UNIX) HYPERION\_HOME/uninstall ディレクトリに移動し、./uninstall.sh と入力します。
- (UNIX) HYPERION\_HOME/uninstall ディレクトリに移動し、./uninstall.sh -console と入力します。

**2** その他のプログラムを終了してから、「次へ」をクリックします。

**3** アンインストールする製品を選択して、「次へ」をクリックします。選択した製品の全コンポーネントがアンインストールされます。

たとえば、任意の Essbase コンポーネントをアンインストールする場合、EPM System アンインストーラによって、すべての Essbase コンポーネントがアンインストールされます。

デフォルトでは、インストールされているすべての製品が選択されています。「すべての製品の選択解除」を選択し、全製品に対する選択を解除してから、アンインストールする製品のみ選択します。

Essbase サーバーの複数のバージョンがインストールされている場合は、アンインストールするインスタンスを選択します。「場所」列に示されているインストール場所を確認して、インスタンスを選択します。

任意の Reporting and Analysis コンポーネントをアンインストールすると、その他のすべての Reporting and Analysis コンポーネントが使用不可になります。

**4** Hyperion ホーム・ディレクトリ内のすべてのファイルとディレクトリを削除するかどうかを指定します。

このオプションを選択すると、データ・ファイルやカスタマイズしたファイルも削除されます。

**5** アンインストールする製品を確認し、「次へ」をクリックします。

EPM System のアンインストーラにより、各アセンブリのアンインストールが完了するたびに進行状況の表示が更新されます。

**注：** アンインストールを取り消すには、「取消し」をクリックします。「取消し」をクリックすると、EPM System アンインストーラは、現在のアセンブリのアンインストールを停止し、そのアセンブリをインストール済の状態にロール・バックします。すでにアンインストール済のアセンブリのアンインストールは元に戻されません。

EPM System アンインストーラにより、アンインストールが成功したかどうかが表示されます。アンインストールが部分的に失敗している場合、EPM System アンインストーラにより、どのアセンブリのアンインストールが失敗しているかが記録されます。エラーの詳細はログ・ファイルを確認してください。ログ・ファイルは、HYPERION\_HOME/logs/install にあります。各アセンブリには、product-install.log という名前のログ・ファイルがあります(例: hss-install.log)。

## 6 「終了」をクリックし、EPM System のアンインストーラを閉じます。

**注：** Windows 2008 では、EPM System 製品のアンインストール後、再起動する必要があります。

# サイレント・アンインストールの実行

サイレント・アンインストールを使用すると、アンインストール・プロセスが自動化され、各コンピュータ上でアンインストール設定を手動で指定しなくても複数のコンピュータ上の EPM System 製品をアンインストールできるようになります。

同じアンインストール・オプションを使用して、複数のコンピュータにある EPM System 製品をアンインストールするには、インストール中に応答ファイルを記録します。次に、応答ファイルに保存されているオプションを使用して、コマンド・ラインからサイレント・アンインストールを実行できます。

▶ サイレント・アンインストールを実行するには:

- 1 インストール時に作成した応答ファイルをアンインストールを実行するマシンにコピーします。また、アンインストールを実行するマシンからアクセスできるネットワーク・ドライブにファイルをコピーすることもできます。

インストール時に応答ファイルを記録する方法については、[58 ページの「サイレント・インストールの実行」](#)を参照してください。

- 2 コマンド・ラインから次のコマンドを入力します:

```
uninstall.cmd -silent  
filename
```

Windows の場合、または

```
uninstall.sh -silent  
filename
```

UNIX の場合。

バックグラウンドでアンインストールが実行されます。



## この章の内容

ライセンス準拠を確実にする .....	181
製品機能のアクティブ化と非アクティブ化 .....	181
使用状況の監査 .....	181

この章では、EPM System 製品の新しいインストールのライセンス準拠要件を説明します。

## ライセンス準拠を確実にする

ライセンス契約の準拠を確実にするために、次をお薦めします:

- ライセンス契約に従って、機能をアクティブ化または非アクティブ化します。  
[181 ページの「製品機能のアクティブ化と非アクティブ化」](#)を参照してください。
- 使用状況を監査します。[181 ページの「使用状況の監査」](#)を参照してください。

## 製品機能のアクティブ化と非アクティブ化

EPM System コンフィグレータでの製品構成中に、一部の製品については、「製品オプション」ページでライセンス契約に従って機能をアクティブまたは非アクティブにする必要があります。[第4章「EPM System 製品の構成」](#)を参照し、ライセンス契約を確認して使用する権限のある機能を特定してください。

アクティブにしたオプションを表示する方法については、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストールおよび構成トラブルシューティング・ガイド』を参照してください。

## 使用状況の監査

ライセンス契約およびソフトウェアのコピーおよび使用のスケジュールに従って、サービスとユーザーの監査を行う必要があります。

監査ユーザーに対して、プロビジョニング・レポートを作成します。『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System セキュリティ管理ガイド』のプロビジョニング・レポートの生成に関する項を参照してください。プロビジョニ

ング・レポートは、各アプリケーションにプロビジョニングされたユーザーのリストを、直接またはグループの形式で示します。

# A

## インストール中の処理

### この付録の内容

Shared Services のインストール中の処理 .....	183
EPM Workspace のインストール中の処理 .....	186
Performance Management Architect のインストール中の処理 .....	187
Calculation Manager のインストール中の処理 .....	188
Smart View のインストール中の処理 .....	189
Essbase のインストール中の処理 .....	189
Essbase Studio のインストール中の処理 .....	191
Integration Services のインストール中の処理 .....	192
Administration Services のインストール中の処理 .....	194
Provider Services のインストール中の処理 .....	196
Smart Search Command Line Utility のインストール中に行われる処理 .....	196
Reporting and Analysis のインストール中の処理 .....	197
Planning のインストール中の処理 .....	198
Financial Management のインストール中の処理 .....	198
Performance Scorecard のインストール中の処理 .....	200
Strategic Finance のインストール中の処理 .....	200
Profitability and Cost Management のインストールの内容 .....	201
FDM のインストール中の処理 .....	201
Data Relationship Management のインストール中の処理 .....	202

インストール中、EPM System Installer は、選択した製品のコンポーネントとサービスをインストールし、「すべてのユーザー」の下に「開始」メニュー・アイテムを作成します。

## Shared Services のインストール中の処理

標準インストールでは、EPM System Installer は次の操作を行います:

- EPM System の共通コンポーネントを、HYPERION\_HOME/common にインストールします。

HYPERION\_HOME の詳細および作成されるディレクトリのリストは、[184 ページの「HYPERION\\_HOME ディレクトリにインストールされる共通ファイル」](#)を参照してください。

- 次のコンポーネントがインストールされます:

- OpenLDAP データベース(セキュリティ・サービス関連のデータを保管)
- Shared Services サーバー
- Shared Services ヘルプ
- Oracle Hyperion(R)リモート構成モジュール
- ショートカットを「スタート」メニューに追加します。

## Foundation ディレクトリにインストールされるファイル

Shared Services のファイルは、HYPERION\_HOME/products/Foundation にインストールされます。

次の表に、/Foundation ディレクトリにインストールされるファイルとフォルダを示します。

**表 62** Foundation インストール・ディレクトリ

ディレクトリ	コンテンツ
_uninst	Shared Services をアンインストールするためのファイル
AppServer	InstallableApps-アプリケーションを配置するために必要な war ファイルと ear ファイル、スクリプト、およびその他のファイル。war ファイルまたは ear ファイルを配置するための準備の一部です。war ファイルをここでアンパックして一部のファイルを変更してから、war ファイルまたは ear ファイルを配置用に再パックできます。
bin	Shared Services の開始スクリプトと終了スクリプト
BPMA	Performance Management Architect のファイル
CALC	Calculation Manager のファイル
openLDAP	OpenLDAP データベース・ファイル
server	Shared Services の実行ファイル、デフォルトのリレーショナル・データベース・ファイル、Java クラス・ファイル、サーバー・ロケール・ファイル
SmartView	Smart View ファイル
temp	一時ファイルの場所
workspace	EPM Workspace ファイル

## HYPERION\_HOME ディレクトリにインストールされる共通ファイル

各種ファイルは、Shared Services のデフォルトのインストールでは HYPERION\_HOME/common ディレクトリにインストールされます。一部の共通コンポーネントおよび一部のファイルとディレクトリはオプションであり、インストールされない場合があります。



次の表に、HYPERION\_HOME/common ディレクトリにインストールされるファイルとフォルダを示します。

**表 63** 共通ディレクトリに作成される共通コンポーネントのディレクトリ

ディレクトリ	コンテンツ
ADM	分析データ・モデルのファイル
appServers	アプリケーション・サーバー・ファイル
Axis	Web サーバーのコンポーネント
calc-client-sdk	
CLS、CLS-64	ライセンス・サービスの API
config	EPM System コンフィグレータのファイル
CSS	EPM System の外部認証をサポートするファイル
docs	製品ドキュメント・ファイル
epmstage	OUI インベントリをサポートするファイル
EssbaseJavaAPI	他のアプリケーションに Essbase を埋め込むときに使用する Java ドライバ
EssbaseRTC、EssbaseRTC-64	他のアプリケーションに Essbase を埋め込むときに使用する Essbase ランタイム・クライアント
httpServers	インストールに含まれるバッテリー用の Web サーバー・ファイル
HyperionLookAndFeel	インストーラのユーザー・インタフェース・ファイル
import_export	LifeCycle 管理ファイル
JakartaCommons	共通の開発ライブラリ・ファイル
JavaMail	Java を使用した電子メール送信のサポート用ファイル
JCE	暗号化、キー生成と同意、および MAC 用の JCE ファイル
JDBC	JDBC ファイル
JRE、JRE-64	Java Runtime Environment ファイル
loggers	外部認証ロギング・ファイル
Microsoft.NETFramework (Windows のみ)	Microsoft .NET ファイル
MSXML (Windows のみ)	Microsoft XML パーサー
Naming	JNDI ファイル
ODBC、ODBC-64	ODBC ドライバ
pma-client-sdk	Performance Management Architect の SDK 共通ライブラリ

ディレクトリ	コンテンツ
RMI	RMI ファイル
SAP, SAP-64	コピーされる SAP ファイルのプレースホルダ・ディレクトリ
Search	Smart Search Command Line Utility の共通ファイル
SharedServices	Shared Services のサポート・ファイル
utilities	EPM System Home の場所の変更、プロビジョニング・データのエクスポートとインポート、または検証のためのユーティリティ
validation	EPM System 診断のサポート・ファイル
Velocity	EPM System 診断のサポート・ファイル
VisualCRedistributable	仮想 C 実行時ライブラリ・ファイル
workspacert	EPM Workspace エージェント・サービス
XML	共通の XML コンポーネント

次の表に、HYPERION\_HOME ディレクトリにインストールされる、その他のファイルとフォルダを示します。

**表 64** その他の共通ディレクトリ

ディレクトリ	コンテンツ
deployments	各製品の Java アプリケーション・サーバーに固有のファイルをまとめて保管する場所
logs	<p>ログ・ファイルを保管する各製品のディレクトリ。ログ・ファイルの詳細は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストールおよび構成トラブルシューティング・ガイド』を参照してください。</p> <p>ほとんどの Hyperion 製品に属しているログ・ファイルは、HYPERION_HOME/logs に作成されます。ログ・ファイルは、製品固有のディレクトリに作成されます。たとえば、Shared Services ログは、HYPERION_HOME/logs/SharedServices9 に作成されます。</p> <p>各製品のインストール・ログは、HYPERION_HOME/logs/install/product のすべての製品のインストール・ログにあります。</p> <p>Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System 診断を初めて実行するときに、logszip が作成されます。</p>
Opatch	Oracle のパッチ・ツール・ファイル
oui	Oracle のインストール・ファイル
products	各製品の製品ファイルのディレクトリ。各製品のディレクトリ構造は、この章の後半で説明します。
uninstall	アンインストール・プロセスのサポート・ファイル

## EPM Workspace のインストール中の処理

EPM Workspace のファイルは、HYPERION\_HOME/products/Foundation/workspace にインストールされます。

# EPM Workspace のディレクトリにインストールされるファイル

次の表に、/workspace ディレクトリにインストールされるファイルとフォルダを示します。

表 65 EPM Workspace のインストール・ディレクトリ

ディレクトリ	コンテンツ
_uninst	EPM Workspace をアンインストールするためのファイル
AppServer	EPM Workspace および Web Analysis の静的コンテンツ(オンライン・ヘルプ)
bin	EPM Workspace ユーティリティ、開始スクリプト、終了スクリプト
common	EPM Workspace 構成の共通ファイル
data	EPM Workspace サービスの物理的な場所
database	データベース・スクリプトは、データベース・リポジトリ・スキーマを作成するために EPM System コンフィグレータで使します。
docs	サンプル・ファイル
install	注釈スクリプト
InstallableApps	EPM Workspace の war/ear ファイル
lib	EPM Workspace の共通ライブラリ・ファイル
logs	EPM Workspace のログ・ファイル
MigrationUtility	前のリリースから移行するためのユーティリティ
SDK	SDK ファイル
syncCSSId	

## Performance Management Architect のインストール中の処理

Performance Management Architect のインストール時に、EPM System Installer はデフォルトで次の操作を行います:

- ソフトウェア・ファイルを Performance Management Architect のインストール・ディレクトリにコピーし、IIS に仮想ディレクトリを作成します。.NET Framework 2.0 がインストールされていない場合は、これをインストールして、C++ランタイム・ライブラリをインストールします。
- いくつかのサービスをインストールします。(サービスのリストについては、[123 ページの「Performance Management Architect サービス」](#)を参照) 構成中に追加サービスがインストールされますが、サービスは EPM System コンフィグレータで構成されるまで開始されません。

- 次元サーバーの IIS に仮想ディレクトリを設定します。

## Performance Management Architect ディレクトリにインストールされるファイル

Performance Management Architect のファイルは、HYPERION\_HOME/products/Foundation/BPMA にインストールされます。

次の表に、/BPMA ディレクトリにインストールされるファイルとフォルダを示します。

**表 66** Performance Management Architect のインストール・ディレクトリ

ディレクトリ	コンテンツ
_uninst	Performance Management Architect をアンインストールするためのファイル
AppServer	次元サーバーおよびデータ同期サーバーの Java アプリケーション・サーバーの配置に必要なファイル
Common	Performance Management Architect の共有ライブラリ
EPMABatchClient	Performance Management Architect にアクセスするためのコマンド・ライン・ツールを提供する、Performance Management Architect バッチ・クライアントを使用するためのファイル。
EPMAFileGenerator (Windows のみ)	ADS ファイル生成ツールのファイル
Server (Windows のみ)	リレーショナル・データベース構成に必要な SQL ファイル
temp	

## Calculation Manager のインストール中の処理

Calculation Manager のコンポーネントは、HYPERION\_HOME/products/Foundation/CALC にインストールされます。

## Calculation Manager のディレクトリにインストールされるファイル

次の表に、/CALC ディレクトリにインストールされるファイルとフォルダを示します。

**表 67** Calculation Manager のインストール・ディレクトリ

ディレクトリ	コンテンツ
_uninst	Calculation Manager をアンインストールするためのファイル
AppServer	アプリケーション・サーバー・ファイル配置ファイル

ディレクトリ	コンテンツ
config	構成ファイル
lib	Hyperion Calculation Manager のライブラリ・ファイルとユーティリティ

## Smart View のインストール中の処理

EPM System Installer を使用して Smart View をインストールすると、Smart View のファイルは `HYPERION_HOME/products/Foundation/SmartView`、または `HYPERION_HOME/products/Essbase/SmartView` にインストールされます。

スタンドアロンの実行ファイルを使用して Smart View をインストールすると、ファイルは `HYPERION_HOME/Smartview` にインストールされます。詳細は、『Oracle Hyperion Smart View for Office ユーザー・ガイド』を参照してください。

## Smart View のディレクトリにインストールされるファイル

次の表に、`/SmartView` ディレクトリにインストールされるファイルとフォルダを示します。

表 68 Smart View のインストール・ディレクトリ

ディレクトリ	コンテンツ
bin	<ul style="list-style-type: none"> <li>Smart View の DLL</li> <li>Oracle Crystal Ball, Fusion Edition の <code>BIPLusConnector.dll</code></li> <li><code>HSTbar.xla</code>、Smart View ツールバー</li> <li><code>smartview.bas</code> (VBA 関数の宣言を含む)</li> <li><code>hve.exe</code>、Visual Explorer の実行ファイル</li> </ul>
cfg	Smart View の構成プロパティ・ファイル( <code>properties.xml</code> )。Smart View の起動時にデフォルトで使用する Provider Services の URL の場所が記述されています。
Docs	Smart View のドキュメント

## Essbase のインストール中の処理

Essbase のインストール時に、EPM System Installer はデフォルトで次の操作を行います。

- Essbase サーバーのソフトウェア・ファイルを、`HYPERION_HOME/products/Essbase/EssbaseServer` ディレクトリにインストールします。
- Essbase サーバーの追加インスタンスを同じコンピュータにインストールすると、`HYPERION_HOME/products/Essbase-n/EssbaseServer` にインストールされます。

- Windows インストールの環境変数を保管するためのファイル `setEssbaseEnv.cmd` を作成します。
- UNIX インストールのパラメータを保管するためのファイル `hyperionenv.doc` を作成します。
- 適切なバージョンの Java Runtime Environment (JRE) を `HYPERION_HOME/common/JRE` ディレクトリにインストールし、`essbase.cfg` ファイルの `JVMMODULELOCATION` 変数を設定します。

プログラムをコンパイルするために API に付属のファイルや同じく API に必要なファイルについては、『Oracle Essbase API リファレンス』を参照してください。

Essbase サーバーの複数のインスタンスをインストールおよび構成する場合の内容の詳細は、[100 ページの「Essbase サーバーの追加インスタンスの構成と開始」](#)を参照してください。

## Essbase サーバー・ディレクトリにインストールされるファイル

次の表に、`/EssbaseServer` ディレクトリにインストールされるファイルとフォルダを示します。

**表 69** Essbase のインストール・ディレクトリ

ディレクトリ	コンテンツ
api	MaxL の使用に必要なライブラリとヘッダー・ファイル。MaxL を使用するために API をインストールまたは使用する必要はありませんが、MaxL が機能するためのディレクトリが作成されます。
app	Essbase のアプリケーション・ファイル(ファイルの作成時)。 Essbase のサンプル・アプリケーションおよび関連するデータベース。
bin	Essbase サーバー・ファイル
java	Essbase の Java ベース機能をサポートするための Java ソフトウェア
locale	Essbase でサポートされる言語に必要な NLS ファイル。 Essbase サーバーのインストール時に <code>ESSLANG</code> 環境変数の値を選択します。この値は、英語を含むすべての言語に適用されます。
localized	ローカライズされたファイル
perlmod	MaxL Perl モジュール( <code>essbase.pm</code> )を追加するために必要なファイルで、これによって MaxL ステートメントを Perl プログラム埋め込むことができます。Perl をインストールする必要があります。このディレクトリ内のドキュメント、および『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』の MaxL に関する項を参照してください。

# Essbase クライアントのディレクトリにインストールされるファイル

Essbase クライアントをインストールすると、次の表に示す一部またはすべてのディレクトリが、HYPERION\_HOME/products/Essbase/EssbaseClient ディレクトリに作成されます:

Essbase クライアントのインストール中、EPM System Installer は ESSBASEPATH をクライアントのインストール場所に設定します。Windows の場合はユーザー変数として設定し、Unix の場合は hyperionenv.doc に設定します。前のバージョンの Essbase では、ARBORPATH を使用して、インストール場所を参照していました。

次の表に、/EssbaseClient ディレクトリにインストールされるファイルとフォルダを示します。

表 70 Essbase クライアントのインストール・ディレクトリ

ディレクトリ	コンテンツ
api	Essbase の API ファイル
bin	Oracle Essbase Spreadsheet Add-in を実行するための Essbase プログラム・ファイル Excel で正しい bin ディレクトリを参照するように、インストール・プログラムによって Excel に essexcln.xll が追加されます。
hve	Visual Explorer のファイル。
JavaAPI	Oracle Essbase Visual Explorer のヘルプ・ファイル
locale	Essbase サーバーでサポートする言語に必要な文字セット・ファイル
localized	ローカライズされたファイル
perlmod	MaxL Perl モジュール(essbase.pm)を追加するために必要なファイルで、これによって MaxL ステートメントを Perl プログラム埋め込むことができます。Perl をインストールする必要があります。このディレクトリ内のドキュメント、および『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』の MaxL に関する項を参照してください。

## Essbase Studio のインストール中の処理

Essbase Studio をインストールする場合、EPM System Installer は、デフォルトで次の操作を行います:

- Essbase Studio ファイルを HYPERION\_HOME/products/essbase/EssbaseStudio にインストールします。
- 共通コンポーネントを HYPERION\_HOME/common ディレクトリにインストールします。
- Essbase Studio サービスをインストールします。このサービスは、EPM System コンフィグレータの構成時に開始するよう選択できます。

# Essbase Studio のディレクトリにインストールされるファイル

次の表に、/EssbaseStudio ディレクトリにインストールされるファイルとフォルダを示します。

表 71 Essbase Studio のインストール・ディレクトリ

ディレクトリ	コンテンツ
console	Essbase Studio コンソールの実行可能ファイル、EssbaseStudio.exe。  Eclipse に固有のサブディレクトリ、configuration、features、plugins、storage、workspace も含まれています。
console/eas	EASLaunch.properties ファイル
Server	Essbase Studio サーバーの起動ファイル、startServer.bat。  server.properties ファイルも含まれます。一部の設定は、インストールおよび構成後に手動で構成できます。詳細は、『Oracle Essbase Studio ユーザー・ガイド』または『Oracle Essbase Studio オンライン・ヘルプ』を参照してください。
Server/ database	Essbase Studio リポジトリを作成するための SQL ファイル
Server/ datafiles	Essbase Studio サーバーのデータ・ソースとしての役割を果たすフラット・ファイルを保管するデフォルトのディレクトリ。
Server/ess_ japihome	Java API クラス  <b>注：</b> server/ess_japihome/bin の essbase.properties ファイルは編集しないでください。
Server/ sqlscripts	Essbase Studio カタログ・データベースの作成に使用できる SQL スクリプト。スクリプトは、サポートされている RDBMS に含まれています。

## Integration Services のインストール中の処理

Integration Services のファイルは、HYPERION\_HOME/products/Essbase/eis にインストールされます。

Integration Services ソフトウェアのインストール時に、EPM System Installer は次の処理を行います：

- 指定した場所にディレクトリを作成して、プログラム・ファイル、スクリプト、およびヘルプ・ファイルをコピーします。
- Integration Services について Windows レジストリにエントリを追加します。

コンピュータに加えられる変更は、オペレーティング・システムの種類、サーバー・ソフトウェアとクライアント・ソフトウェアのどちらをインストールするか、および Integration Services のどのコンポーネントをインストールするかによって異なります。

Integration Services サーバー・ソフトウェアを UNIX コンピュータにインストールする場合、EPM System Installer は次の処理を行います：



- ローカル・ドライブ上に作成したディレクトリに、プログラム・ファイル、スクリプトおよびヘルプをコピーします。
- esslib ディレクトリに共有ライブラリ・ファイルをコピーします。
- UNIX 環境を更新するための is.csh および is.sh シェル・スクリプト・ファイルを作成して、インストール時に作成したディレクトリにインストールします。
- ODBC のリレーショナル・データ・ソースの構成で使用するサンプルの odbc.ini を、ODBC/Merant/6.1 ディレクトリに作成します。

## Integration Services ディレクトリにインストールされるファイル

次の表に、/eis ディレクトリにインストールされるファイルとフォルダを示します。

**表 72** Integration Services のインストール・ディレクトリ

ディレクトリ	コンテンツ
console/bin	Integration Services コンソール・ソフトウェア
console/docs	
console/locale	各国語サポート・ファイル
console/localized	ローカライズされたファイル
server/batch	空です。batch ディレクトリには、ユーザーが作成するバッチ・ジョブのスケジューラ・スクリプトが後で保管されます。
server/bin	Integration Services ソフトウェア
server/esscript	空です。esscript ディレクトリには、ユーザーが作成する ESSCMD スクリプトが後で含まれます。
server/lib	Integration Services のメタデータのインポートおよびエクスポートで使用するファイル
server/loadinfo	空です。loadinfo ディレクトリには、セッション ID を表すディレクトリが後で含まれます。これらのディレクトリには、メンバー・ロードおよびデータ・ロード中に作成された拒否ファイルが含まれます。
server/locale	各国語サポート・ファイル
console/localized	ローカライズされたファイル
server/log	Integration Services の最初の実行時に作成される、サーバー・ログ・ファイルが含まれます。
server/ocscript	サポートされる各データベースの OLAP メタデータ・カタログのテーブルを作成、ドロップ、およびアップグレードするための SQL スクリプト・ファイル。たとえば、oc_create_db2.sql を使用して、OLAP メタデータ・カタログのテーブルを DB2 データベースに作成できます。

ディレクトリ	コンテンツ
(UNIX のみ) HYPERION_HOME/ common/ODBC/ Merant/6.1 または HYPERION_HOME/ common/ODBC-64/ Merant/6.1	odbc.ini が含まれます。DataDirect ODBC のインストール・ディレクトリとファイル、および DataDirect ODBC の最新情報を記載した readme ファイルも含まれています。 DataDirect ODBC の PDF ドキュメントは、Merant/6.1/docs にあります。
server/samples	次の 3 つのサブディレクトリ: <ul style="list-style-type: none"> <li>● samples/spreadsheets</li> <li>● samples/tbcdbase</li> <li>● samples/tbcmodel</li> </ul>
server/samples/ spreadsheets	Excel フォーマットのサンプルの Essbase スプレッドシート
server/samples/ tbcdbase	<p>標準の TBC サンプル・アプリケーション・データベースおよびハイブリッド分析対応の TBC サンプル・アプリケーション・データベースにテーブルを作成し、データをロードするための SQL スクリプト・ファイルおよびバッチ・ファイル。</p> <p>サンプル・アプリケーションの TBC_MD OLAP メタデータ・カタログ・データベースに標準の OLAP モデル(TBC Model)とメタアウトライン(TBC Metaoutline)、およびハイブリッド分析対応の OLAP モデル(HA TBC Model)とメタアウトライン(HA TBC Metaoutline)のデータをロードするための SQL スクリプト・ファイルおよびバッチ・ファイル。</p> <p>サンプル・アプリケーションの TBC_MD_U OLAP メタデータ・カタログ・データベースに Unicode OLAP モデル(Sample_unicode)およびメタアウトライン(Sample_unicode_meta)のデータをロードするための SQL スクリプト・ファイル。</p> <p>手動でサンプル・アプリケーションを設定する場合に、ocscript ディレクトリ内の SQL スクリプト・ファイルを使用して TBC_MD および TBC_MD_U のテーブルを作成します。</p>
server/samples/ tbcmodel	<p>サンプル・アプリケーションの TBC_MD OLAP メタデータ・カタログ・データベースに標準の OLAP モデル(TBC Model)とメタアウトライン(TBC Metaoutline)、およびハイブリッド分析対応の OLAP モデル(HA TBC Model)とメタアウトライン(HA TBC Metaoutline)のデータをロードするための XML ファイル。</p> <p>(Oracle のみ)サンプル・アプリケーションの TBC_MD_U OLAP メタデータ・カタログ・データベースに Unicode OLAP モデル(Sample_unicode)およびメタアウトライン(Sample_unicode_meta)のデータをロードするための XML ファイル。</p>
server/temp	一時ファイル

## Administration Services のインストール中の処理

Administration Services のデフォルトのインストール・ディレクトリは、HYPERION\_HOME/products/Essbase/eas です。

EPM System Installer は、Administration Services のインストール時に次の操作を行います:

- Windows の場合は、EAS\_HOME 環境変数をシステム上に作成します。

- Administration Services のインストール中に、Embedded Java コンテナをインストールして構成します。
- ショートカットを「スタート」メニューに追加します。
- Business Rules のソフトウェアとドキュメントをインストールして構成します。

## Administration Services のディレクトリにインストールされるファイル

次の表に、/eas ディレクトリにインストールされるファイルとフォルダを示します。

**表 73** Administration Services のインストール・ディレクトリ

ディレクトリ	コンテンツ
bin	配置された Web アプリケーション・サーバーの起動スクリプト。ただし、Administration Services は、「スタート」メニューまたは <code>HYPERION_HOME/deployments/AppServer/bin/starteas.bat</code> から起動することをお勧めします。
console	管理サービス・コンソールの実行可能ファイル、Java クラス・ファイル、Business Rules のプラグイン・ファイル、およびコンソールのインストールで作成された一時ファイル
console/bin	管理サービス・コンソールの起動スクリプトおよび実行可能ファイル
console/lib	管理サービス・コンソールの Java ライブラリ
console/temp	管理サービス・コンソールの一時ディレクトリ
server	Administration Services の実行可能ファイル、デフォルトのリレーショナル・データベース・ファイル、Java クラス・ファイル、Business Rules サーバー・ファイル、およびサーバーのロケール・ファイル
server/ AppServer	配置を行うために EPM System コンフィグレータに必要なファイル
server/bin	Administration Services サーバーのバイナリ
server/lib	Administration Services サーバーの jar ファイル
server/locale	Essbase RTC のロケール・ファイル
server/ localized	ローカライズしたドキュメント用のドキュメント起動ファイル
storage	

**注：** SAP R/3 をデータ・ソースとして使用している場合は、SAP/R3 を使用するよう Administration Services を構成します。SAP/R3 のインストールおよび構成の方法については、Administration Services のオンライン・ヘルプを参照してください。

## Provider Services のインストール中の処理

Provider Services のファイルは、HYPERION\_HOME/products/Essbase/aps にインストールされます。

EPM System Installer は、Provider Services のインストール時に次の操作を行います:

- EPM System の共通コンポーネントを、HYPERION\_HOME/common ディレクトリにインストールします。
- デフォルトで、Embedded Java コンテナ・アプリケーション・サーバーをインストールします。
- Windows では、ショートカットを「スタート」メニューに追加します。
- Windows では、Provider Services のインストール・パスが含まれる環境変数 APS\_HOME を作成します。

## Provider Services のディレクトリにインストールされるファイル

次の表に、/aps ディレクトリにインストールされるファイルとフォルダを示します。

表 74 Provider Services のインストール・ディレクトリ

ディレクトリ	コンテンツ
Appserver	EPM System コンフィグレータによって構成されるアプリケーション・サーバー・ファイル
bin	Provider Services の実行可能プログラム・ファイルとサーバー設定ファイル
data	ユーザー名、サーバー名、その他のドメイン情報を保管するために、Provider Services がデフォルトで使用するデータベース・ファイル
devtools	Java API のインタフェース・ソース
docs	ヘルプ・ファイル
external	サードパーティ製のライブラリ
lib	EPM System コンフィグレータで使用する essconfiguration.jar ファイル
redist	Smart View クライアントのインストール実行可能ファイル
samples	Provider Services ソフトウェアのテスト、およびクライアント・プログラムの開発の起点として使用できるサンプル・プログラム

## Smart Search Command Line Utility のインストール中に行われる処理

Smart Search Command Line Utility のファイルは、HYPERION\_HOME/products/Essbase/SmartSearch にインストールされています。

## Smart Search Command Line Utility ディレクトリにインストールされるファイル

次の表に、/SmartSearch ディレクトリにインストールされるファイルとフォルダを示します。

表 75 Smart Search Command Line Utility のインストール・ディレクトリ

ディレクトリ	コンテンツ
AppServer	Smart Search Command Line Utility の Java アプリケーション・サーバーの配置に必要なファイル
hysl	検索結果を表示するための、Smart Search Command Line Utility の構成ファイルとテンプレート。
lib	Oracle Hyperion Smart Search Command Line Utility の実行に必要な Jar ファイル

## Reporting and Analysis のインストール中の処理

Reporting and Analysis のファイルは、HYPERION\_HOME/products/biplus にインストールされます。

## Reporting and Analysis ディレクトリにインストールされるファイル

次の表に、/biplus ディレクトリにインストールされるファイルとフォルダを示します。

表 76 Reporting and Analysis のインストール・ディレクトリ

ディレクトリ	コンテンツ
_uninst	Reporting and Analysis をアンインストールするためのファイル
appsinfo	Web Analysis ファイル
bin	製品のバイナリ、および開始スクリプトと終了スクリプト
common	共通アイテムのサブディレクトリ
data	製品の一時データのサブディレクトリ
DDS	テンプレートやスクリプトなど、Architect and Studio 製品固有のファイルを設計します。
docs	ヘルプ、サンプル
fonts	フォント・ファイル
install	インストールおよび構成中に構築されて使用されるファイル
InstallableApps	.war ファイルと .ear ファイル、および .war-準備スクリプトと .ear-準備スクリプト
lib	.jar ファイル

ディレクトリ	コンテンツ
logs	ログ・ファイル
temp	一時ファイル・ストレージ

## Planning のインストール中の処理

Planning のファイルは、HYPERION\_HOME/products/Planning にインストールされます。

EPM System Installer はデフォルトで、次の操作を行います:

- Planning ソフトウェアのファイルをインストール・ディレクトリにコピーします。
- 指定した HYPERION\_HOME ディレクトリに、共通コンポーネントをコピーします。
- 適切なバージョンの Java Run-time Environment (JRE)をインストールします。
- HyperionRMIRegistry と呼ばれる、Planning や Oracle Hyperion(R) Business Rules などの製品に共通する RMI レジストリを作成するためのファイルをコピーします。

## Planning のディレクトリにインストールされるファイル

次の表に、/Planning ディレクトリにインストールされるファイルとフォルダを示します。

表 77 Planning のインストール・ディレクトリ

ディレクトリ	コンテンツ
_uninst	Planning のアンインストール・ファイル
AppServer	Planning の Java アプリケーション・サーバーの配置に必要なファイル
bin	Planning ユーティリティを含む、実行可能ファイル、bat ファイル、sh ファイルおよび cmd ファイル。また、Smartview.exe と Offline.exe も含まれています。
config	Planning のプロパティ・ファイルおよび ico ファイル
lib/lib64	Planning を実行するために必要な Jar ファイル
Offline	オフライン Oracle Hyperion Planning, Fusion Edition の実行に必要なファイル

## Financial Management のインストール中の処理

Financial Management のファイルは、HYPERION\_HOME/products/FinancialManagement にインストールされます。

Financial Management のインストール時に、EPM System Installer はデフォルトで次の操作を行います:

- 共通コンポーネントを、指定した HYPERION\_HOME ディレクトリにコピーします。
- Java Runtime Environment (JRE)バージョンをインストールします。
- ADM ドライバの HsvADMDriver.dll を、HYPERION\_HOME/products/FinancialManagement/client にインストールします。

アプリケーション・サーバーに Microsoft Data Access Component (MDAC)にインストールしていない場合、EPM System Installer によってインストールされます。MDAC のインストール・プロセスには、時間がかかる場合があります、コンピュータの再起動が必要になります。

## Financial Management ディレクトリにインストールされるファイル

次の表に、/FinancialManagement ディレクトリにインストールされるファイルとフォルダを示します。

**表 78** Financial Management のインストール・ディレクトリ

ディレクトリ	コンテンツ
_uninst	Financial Management のアンインストール・ファイル
bin	アップグレードを円滑に実行するためのファイル
Client	Win32 クライアントおよび Web 層クライアントの dll と実行可能ファイル
Common	アプリケーション層と Web 層の間で共有される dll
Consultant Utilities	エラー・ログを表示するためのユーティリティ
Documentation	ヘルプ・ファイル
HAL70AdapterInstall	Oracle Hyperion(R) Application Link 7.0 Adapter をインストールするためのファイル
Install	Smart View プロバイダをインストールおよび構成するためのファイル
Sample Apps	サンプル・アプリケーション、およびサンプル・ファイルをロードする手順
Server	アプリケーション・サーバー層の dll
Server Working Folder	レポートのスタイル・シートとテンプレート
Web	Smart View プロバイダ、Web ページおよび Web ヘルプ・ファイル
Web Server	Web サーバーを実行するために必要な dll
Web Services	Web サービス・マネージャの実行可能ファイル

# Performance Scorecard のインストール中の処理

Performance Scorecard のファイルは、HYPERION\_HOME/products/PerformanceScorecard にインストールされます。

## Performance Scorecard ディレクトリにインストールされるファイル

次の表に、/PerformanceScorecard ディレクトリにインストールされるファイルとフォルダを示します。

表 79 Performance Scorecard のインストール・ディレクトリ

ディレクトリ	コンテンツ
_uninst	Performance Scorecard をアンインストールするために必要なファイル
AppServer	Performance Scorecard の Java アプリケーション・サーバーの配置に必要なファイル
bin	HPSWebReports および HPSAlerter を開始および停止するためのスクリプト
db	新規の Oracle Hyperion Performance Scorecard, Fusion Edition データベースを作成するための初期化スクリプト、または既存のデータベースをアップグレードするためのアップグレード・スクリプトで、構成時の選択内容によって決まります
tools	ETL インポート/エクスポート・ユーティリティを使用してデータのロード/抽出を可能にするファイル

## Strategic Finance のインストール中の処理

Strategic Finance のファイルは、HYPERION\_HOME/products/hsf にインストールされます。

## Strategic Finance ディレクトリにインストールされるファイル

次の表に、/hsf ディレクトリにインストールされるファイルとフォルダを示します。

表 80 Strategic Finance のインストール・ディレクトリ

ディレクトリ	コンテンツ
bin	Strategic Finance を開始および停止するためのバッチ・ファイル
Client	Strategic Finance クライアントを実行するための実行ファイルとファイル
HSFData	サーバー・エンティティ、アクセス・コントロール、マップ、バッチ、サーバー集計データ、およびその他の Strategic Finance サーバーのデータベース情報
Server	Strategic Finance サーバーおよび管理ユーティリティの実行ファイル



ディレクトリ	コンテンツ
uninstall	Strategic Finance をアンインストールするためのファイル
ValidationLibs	
WebServer	Oracle Hyperion Strategic Finance, Fusion Edition Web サービス・コンポーネント

## Profitability and Cost Management のインストールの内容

Profitability and Cost Management のソフトウェア・コンポーネントは、  
HYPERION\_HOME/products/Profitability にインストールされます。

## Profitability and Cost Management ディレクトリにインストールされるファイル

次の表に、/Profitability ディレクトリにインストールされるファイルとフォルダを示します。

**表 81** Profitability and Cost Management のインストール・ディレクトリ

ディレクトリ	コンテンツ
_uninst	Profitability and Cost Management をアンインストールするためのファイル
AppServer	Profitability and Cost Management の Java アプリケーション・サーバーの配置に必要なファイル
bin	Profitability and Cost Management を開始および終了するためのバッチ・ファイル
database	プロダクション・データベースを作成するために必要な SQL スクリプト
lib	ユーザー・インタフェースの構成で使用するファイル
samples	サンプル・データ・ファイル。Oracle Hyperion EPM Architect, Fusion Edition で Profitability and Cost Management アプリケーションを作成するためのメタデータ xml ファイルや、モデル・データを Oracle Hyperion Profitability and Cost Management, Fusion Edition アプリケーションにインポートするためのステージング・ダンプ・ファイルが含まれています。

## FDM のインストール中の処理

FDM ファイルは、HYPERION\_HOME/products/FinancialDataQuality にインストールされます。ERP Integrator ファイルも、この場所にインストールされます。

# FDM のディレクトリにインストールされるファイル

次の表に、/FinancialDataQuality ディレクトリにインストールされるファイルとフォルダを示します。

表 82

ディレクトリ	コンテンツ
_uninst	Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Fusion Edition をアンインストールするためのファイル
ApplicationServer	アプリケーション構成の実行可能ファイルおよびアプリケーション・サーバーの dll ファイル
AppServer	Oracle Hyperion Financial Data Quality Management ERP Integration Adapter for Oracle Applications の Java アプリケーション・サーバーの配置に必要なファイル
bin	Hyperion ERPI - Web アプリケーション(HyS9aifWeb)を開始および停止するためのスクリプト
common	Shared Services との登録に必要なファイル
database	データベース・オブジェクトを作成するスクリプト
InstallScripts	インストール・プロセス中に使用されるスクリプト・ファイル
lib	EPM System コンフィグレータを使用した構成に必要なファイル
LoadBalanceManager	ロード・バランス・マネージャの構成実行可能ファイルとロード・バランス・マネージャの dll ファイル
odi	<ul style="list-style-type: none"><li>¥scenarios には、Oracle Data Integrator との連携のシナリオが格納されます</li><li>¥topology は Oracle Data Integrator に関連する論理スキーマを保管します。</li></ul>
SharedComponents	Web クライアント、Workbench、構成ツール、アプリケーション・サーバー、およびタスク・マネージャで共有されるコンポーネント
TaskManager	構成可能ファイルおよびタスク・マネージャの dll ファイル
WebServerComponents	Web 構成の実行可能ファイル、Web 構成の dll ファイル、Web サイトの設定、dll ファイル、および html ファイル

## Data Relationship Management のインストール中の処理

Oracle Hyperion Data Relationship Management, Fusion Edition のインストールの詳細は、『Oracle Hyperion Data Relationship Management Installation Guide』を参照してください。



# Essbase製品のオプションの手動構成

## この付録の内容

Essbase サーバー環境の手動による構成(UNIX) .....	203
Essbase サーバー環境の手動による構成(Windows).....	211

## Essbase サーバー環境の手動による構成(UNIX)

インストール中、EPM System Installer は次のタスクを行います:

- Hyperion ホームのディレクトリを定義する `.hyperion.'hostname'` を作成します。
- Essbase の開始時のデフォルト・パラメータを指定する `hyperionenv.doc` を作成します。
- Korn シェルに開始スクリプトを提供します。

各 Hyperion ホームのディレクトリには、独自の `hyperionenv.doc` ファイルと `startEssbase.sh` ファイルがあります。

構成中、EPM System コンフィグレータは次の処理を行います:

- 指定された値がデフォルト値と異なる場合は、指定された値で `hyperionenv.doc` を更新します。
- 指定したポート値で `essbase.cfg` を更新します。`essbase.cfg` については、『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』を参照してください。
- JRE のインストール場所を指定する `JVMMODULELOCATION` 設定で `essbase.cfg` を更新します。JRE の個別のインスタンスを指定する方法については、[207 ページの「JvmModuleLocation の変更\(UNIX\)」](#)を参照してください。

EPM System コンフィグレータによって、`.cshrc` 環境ファイルまたは `.profile` 環境ファイルは更新されません。

Essbase を開始するために、スクリプト `startEssbase.sh` が提供されています。このスクリプトは、必要なパラメータを設定する `hyperionenv.doc` を呼び出して Essbase を開始します。

デフォルトでは、EPM System コンフィグレータを使用して Essbase を構成しない場合、`hyperionenv.doc` にはデフォルト値が移入されるため、`startEssbase.sh` を使用して、Shared Services による認証なしで Essbase をスタンドアロン・モードで開始できます。

手動で構成するか、後で構成を変更するか、または別のシェルのためのスクリプトを更新する場合は、次の情報を使用できます。(Korn シェルのためのスクリプトが提供されています。)

**注：** 環境のインストールと更新の後で、変更内容を有効にするには、サーバーからいったんログアウトしてから再びログインする必要があります。

**注：** Essbase の追加インスタンスをインストールした場合、HYPERION\_HOME/products/essbase-n にインストールされます。このインスタンスには、hyperionenv.doc、essbase.cfg および startEssbase.sh の独自のコピーがあります。

## hyperionenv.doc でのパラメータの指定

hyperionenv.doc ファイルは、Korn シェルに書き込まれます。別のシェルを使用している場合は、必ずそれぞれに適した構文を使用してください。

次の表に、hyperionenv.doc の変数を示します:

パラメータ	説明	デフォルト値
ARBORPATH	アプリケーションとデータの場所	HYPERION_HOME/products/ Essbase/EssbaseServer/app
PATH	Essbase サーバーのコンポーネントにより迅速にアクセスするには、PATH に \$ESSBASEPATH/bin を追加します。	\$ESSBASEPATH/bin
HYPERION_HOME	すべての EPM System 製品のインストール場所	
LD_LIBRARY_PATH	システム・ライブラリ・パス。使用しているオペレーティング・システムに適した内容にライブラリ・パス変数を更新します。 <ul style="list-style-type: none"><li>● HP-UX - SHLIB_PATH</li><li>● IBM AIX - LIBPATH</li><li>● Linux - LD_LIBRARY_PATH</li><li>● Solaris - LD_LIBRARY_PATH</li></ul>	HYPERION_HOME/products/ Essbase/EssbaseServer/
ESSBASEPATH	Essbase クライアントのインストール場所	HYPERION_HOME/products/ Essbase/EssbaseServer
ESSLANG	場所の定義	English_UnitedStates. Latin1@Binary
ODBCINI	odbc.ini の場所	HYPERION_HOME/common/ODBC/ Merant/6.1/odbc.ini

パラメータ	説明	デフォルト値
LD_PRELOAD(HPUX RISC のみ)	<p>HPUX RISC では、環境変数 LD_PRELOAD を設定する必要があります。</p> <p><b>注意</b> HPUX RISC プラットフォームで LD_PRELOAD の設定に失敗すると、Essbase が異常終了する場合があります。 .profile などの UNIX 環境のスクリプトで LD_PRELOAD を設定すると、予期しない結果が発生する場合がありますためお勧めしません。</p>	<pre>export LD_PRELOAD=     HYPERION_HOME     /common/JRE/1.5. 0/lib/      PA_RISC2.0/ server/libjvm.sl</pre>

## ESS\_JVM\_OPTION および ESS\_CSS\_JVM\_OPTION の変更

環境変数 ESS\_JVM\_OPTION#(0 から 9)および ESS\_CSS\_JVM\_OPTION#(0 から 9)を使用すると、JVM で必要な任意のプラットフォーム・オプションおよび JRE バージョン固有のオプションに対応できます。

こうした設定が必要な環境の場合は、インストール時に、hyperionenv.doc ファイルに設定が書き込まれます。

Solaris で JRE 1.5.0 を実行している場合は、ESS\_JVM\_OPTION 環境変数および ESS\_CSS\_JVM\_OPTION 環境変数が必要です:

- ESS\_JVM\_OPTION1 - カスタム定義関数、カスタム定義マクロ、データ・マイニング、トリガー、または Oracle の対応している外部認証で JVM を使用する場合。
- ESS\_CSS\_JVM\_OPTION1 - Oracle のセキュリティ・プラットフォームを使用する場合。

特殊な Java 引数である -Xusealtsigs を使用するために、こうした環境変数を設定する必要があります。-Xusealtsigs は、このリリースで必須の唯一の設定です。

➤ ESS\_JVM\_OPTION1 および ESS\_CSS\_JVM\_OPTION1 を設定するには:

システムに適したファイルおよびフォーマットで、環境設定を追加します。

次の表に、環境設定の例を示します。

シェル	環境ファイル	変数および文字列
C	.cshrc	<pre> ESS_JVM_OPTION1:          setenv ESS_JVM_OPTION1 "-Xusealtsigs"  ESS_CSS_JVM_OPTION1:          setenv ESS_CSS_JVM_OPTION1 "- Xusealtsigs" </pre>
Bourne また は Korn シェル	.profile	<pre> ESS_JVM_OPTION1:          ESS_JVM_OPTION1=-Xusealtsigs; export ESS_JVM_OPTION1;  ESS_CSS_JVM_OPTION1:          ESS_JVM_CSS_OPTION1=-Xusealtsigs; export ESS_CSS_JVM_OPTION1; </pre>

## Shared Services ログ・ファイルの場所の変更(オプション)

Shared Services 構成ログ・ファイルの場所を変更する場合、この情報を使用します。Shared Services 構成ログ・ファイルのデフォルトの場所は、Shared Services が配置されるアプリケーション・サーバーによって異なります。

ログ・ファイルが書き込まれる場所を変更するには、ESS\_CSS\_JVM\_OPTION#環境変数を使用します。各自の環境で使用されている他の ESS\_CSS\_JVM\_OPTION 変数と競合しない#を使用してください。

► ESS\_CSS\_JVM\_OPTION2 を設定するには:

- 1 (UNIX)システムに適したファイルおよびフォーマットで環境変数を追加します。

次の表に、環境設定の例を示します。

シェル	環境ファイル	変数および文字列
C	.cshrc	<pre>         setenv ESS_CSS_JVM_OPTION2 "- Djava.io.tmpdir= location " </pre>

シェル	環境ファイル	変数および文字列
Bourne または Korn シェル	.profile	<pre> ESS_CSS_JVM_OPTION2=" - Djava.io.tmpdir=     location " export ESS_CSS_JVM_OPTION2;</pre>

この場合、location はフルパスです。たとえば、/vol11/server/csslog となります。

または

## 2 (Windows)コマンド・プロンプトで次のように入力します:

```
set ESS_CSS_JVM_OPTION2= -Djava.io.tmpdir=
location
```

例:

```
set ESS_CSS_JVM_OPTION2= -Djava.io.tmpdir=c:/csslog
```

## JvmModuleLocation の変更(UNIX)

essbase.cfg ファイルで JVMMODULELOCATION を設定すると、Essbase 用の JRE インストールを詳細に指定できます。この設定は、データ・マイニング、Shared Services、カスタム定義関数、トリガー、および外部認証を使用可能にする場合に必要です。

この設定は、Essbase サーバー・コンピュータ上に複数のバージョンの Java がインストールされている場合に特に有効です。

Essbase サーバーの構成時に、JVMODULELOCATION の正しい設定が essbase.cfg に自動的に追加されます。

JVMODULELOCATION パラメータを変更するには、Java 仮想マシン(JVM)ライブラリのフル・パスおよびファイル名を指定する必要があります。次の表に示すように、ライブラリの場所および名前は、使用している JRE バージョンおよびオペレーティング・システムによって異なります。

**注：** 64 ビット・オペレーティング・システムで 64 ビット Essbase を実行するには、64 ビット JVM が必要です。

次の表に、様々なオペレーティング・システムの JVM ライブラリ・ファイルの場所と名前を示します。

プラットフォーム(JRE のバージョン)	JVM ライブラリ・ファイルの場所と名前
Solaris 32 ビット(JRE 1.5.0)	\$HYPERION_HOME/common/JRE/Sun/1.5.0/lib/ sparc/server/libjvm.so
Solaris 64 ビット(JRE 1.5.0_05)	\$HYPERION_HOME/common/JRE-64/Sun/1.5.0/lib/ sparcv9/server/libjvm.so
Linux(JRE 1.5.0_05)	\$HYPERION_HOME/common/JRE/Sun/1.5.0/lib/i386/ server/libjvm.so
Linux(JRE-64 1.5.0)	\$HYPERION_HOME/common/JRE-64/Sun/1.5.0/lib/ amd64/server/libjvm.so
IBM AIX 32 ビット(JRE 1.5.0)	\$HYPERION_HOME/common/JRE/IBM/1.5.0/jre/bin/ j9vm/libjvm.so
IBM AIX 64 ビット(JRE 1.5.0)	\$HYPERION_HOME/common/JRE-64/IBM/1.5.0/jre/ bin/j9vm/libjvm.so
HP-UX 32 ビット(JRE 1.5.1_01)	\$HYPERION_HOME/common/JRE/HP/1.5.0/lib/ PA_RISC2.0W/server/libjvm.sl
HP-UX 64 ビット(JRE 1.5.1_01)	\$HYPERION_HOME/common/JRE-IA64/HP/1.5.0/lib/ IA64W/server/libjvm.so

## JvmModuleLocation を使用したメモリの管理

データ・マイニング、Shared Services、カスタム定義関数、トリガーまたは外部認証を使用しない場合、使用するメモリの量を減らすには、essbase.cfg を編集し、JvmModuleLocation を NULL(空)に設定します。

これらの機能を使用し、使用するメモリの量を減らす必要がある場合は、次の環境変数を設定すると JVM ヒープ・サイズを減らせます:

```
ESS_JVM_OPTION3=-Xms16m
```



ESS\_JVM\_OPTION4=-Xmx16m

JVM ヒープ・サイズのデフォルトの最小値および最大値は、プラットフォームおよびバージョンごとに異なるため、使用している環境に対して正しい値を設定する必要があります。たとえば、[http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/wasinfo/v4r0/index.jsp?topic=/com.ibm.support.was.doc/html/Java\\_SDK/1132680.html](http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/wasinfo/v4r0/index.jsp?topic=/com.ibm.support.was.doc/html/Java_SDK/1132680.html)などを参考にしてください。

## Integration Services のオプションの手動構成(UNIX)

EPM System コンフィグレータには、環境変数の更新用の構成スクリプト `is.csh` および `is.sh` が用意されています。必要に応じて、シェルのスクリプトを更新します。いずれのシェル・スクリプトも、次の環境変数を設定します:

次の表に、UNIX の Integration Services の環境変数を示します。

表 83 UNIX の Integration Services に必要な環境変数

名前	目的およびデフォルト設定
ISHOME	Integration Services ソフトウェアのインストール先ディレクトリを指定します。
HYPERION_HOME	Hyperion の共通コンポーネントがインストールされているディレクトリを指定します。  \$HOME/Hyperion
ARBORPATH	Essbase アプリケーションの場所を指定します。  \$ISHOME
ESSBASEPATH	Essbase クライアントの場所
ISLOADINFO	メンバー・ロードまたはデータ・ロードの際に作成されるリジェクト・ファイル用のディレクトリの場所を指定します。  \$ISHOME/loadinfo
ISODBC	%HYPERION_HOME%/common/Merant/ODBC/6.1
ODBCINI	オプションです。ODBC の DSN 構成が格納されているファイルの場所および名前を指定します。  \$HYPERION_HOME/common/ODBC/Merant/6.1/odbc.ini
TEMP	一時ファイル用のディレクトリを指定します。  /tmp
JAVA_HOME	JRE の場所を指定します。たとえば、64 ビット AIX の場合、JRE の場所は\$HYPERION_HOME/common/JRE-64/IBM/1.5.0 です。

名前	目的およびデフォルト設定
ライブラリ・パス (プラットフォーム): <ul style="list-style-type: none"> <li>● LIBPATH(AIX)</li> <li>● SHLIB_PATH(HP-UX)</li> <li>● LD_LIBRARY_PATH(Solaris)</li> <li>● LD_LIBRARY_PATH(Linux)</li> </ul>	ソフトウェア・ライブラリを検索するディレクトリのリストを指定します。 デフォルト設定は、現在のライブラリ・パス・リストの最後に次のエントリを追加したものです:  <code>\$ISHOME/bin;</code>  <code>\$ISHOME/esslib</code>  <code>\$HYPERION_HOME/ODBC/Merant/6.1/lib;</code>
CLASSPATH	<code>\$HYPERION_HOME/common/CSS/9.5.0.0/lib/css-9_5_0.jar</code>
PATH	ソフトウェア・プログラムおよびライブラリを検索するためのディレクトリのリストを指定します。 デフォルト設定は、現在の PATH リストの最後に次のエントリを追加したものです:  <code>\$ISHOME/bin:</code>

Integration Services ソフトウェアを実行するユーザーのログイン・スクリプトに `is.csh` または `is.sh` を追加して、UNIX 環境を更新します。

➤ `is.csh` または `is.sh` スクリプトをログイン・スクリプトに追加するには:

1 テキスト・エディタで、Integration Services を実行するユーザー(通常は、hyperion)のログイン・スクリプト・ファイルを開きます。

2 ファイルに新しい行を追加します。

- Korn シェルを使用する場合は、次のように入力します:

```
. /full_path_to_directory/is.sh
```

- C シェルを使用する場合は、次のように入力します:

```
source /full_path_to_directory/is.csh
```

## Administration Services のオプションの手動構成 (UNIX)

Administration Services を開始するために、スクリプト `starteas.sh` が提供されています。このスクリプトは、必要なパラメータを設定する `setCustomParamseas.sh` を呼び出して Administration Services を開始します。

UNIX 上で Oracle Application Server を使用している場合、`setCustomParamseas.sh` は提供されません。Oracle Application Server アプリケーション・サーバー・コンソールで環境変数を指定する必要があります。この環境変数を指定するには、OC4J インスタンスのサーバー・プロパティを設定します。

次の表に、UNIX の Administration Services 用の環境変数を示します。

表 84 UNIX の Administration Services に必要な環境変数

パラメータ名	デフォルト値
EASHOME	HYPERION_HOME/products/Essbase/eas
ARBORPATH	HYPERION_HOME/products/Essbase/eas/server
ESSBASEPATH	HYPERION_HOME/products/Essbase/eas/server
PATH	HYPERION_HOME/products/Essbase/eas/server/bin:\$PATH

さらに、マシンに ESSLANG 値が設定されていない場合は、それを指定します。

## Provider Services のオプションの手動構成(UNIX)

Provider Services を開始するために、スクリプト startaps.sh が提供されています。このスクリプトは、必要なパラメータを設定する setCustomParamsaps.sh を呼び出して Provider Services を開始します。

UNIX 上で Oracle Application Server を使用している場合、setCustomParamsaps.sh は提供されません。OC4J インスタンスのサーバー・プロパティを設定して、Oracle Application Server アプリケーション・サーバー・コンソールで環境変数を指定する必要があります。

次の表に、UNIX の Provider Services 用の環境変数を示します。

表 85 UNIX の Provider Services に必要な環境変数

パラメータ名	デフォルト値
ESS_ES_HOME	HYPERION_HOME/products/Essbase/aps
PATH	%ESS_ES_HOME%/bin;%ARBORPATH%/bin;%PATH%

## Essbase サーバー環境の手動による構成 (Windows)

Essbase クライアントのインストール中に、EPM System Installer は次の処理を行います:

- Essbase クライアントのインストール場所に ESSBASEPATH をユーザー変数として設定し(Windows)、PATH に追加します。

これは新しい変数です。Essbase の前のバージョンは、ARBORPATH を使用してインストール場所を参照していました。現在、ARBORPATH はアプリケーションの場所を参照します。

- ARBORPATH をユーザー変数として設定します(Windows)。

Essbase Server のインストール中、EPM System Installer では、環境変数は設定されません。かわりに、Essbase (startEssbase.cmd)、ESSCMD (startEsscmd.cmd) および essmsh (startMax1.cmd) を開始するバッチ・ファイルが提供されています。すべてのスクリプトは、開始する前に setEssbaseEnv.cmd を呼び出し、ESSBASEPATH、ARBORPATH および PATH を設定します。Essbase サーバーの複数のインスタンスをインストールしている場合、各インスタンスには独自の起動スクリプトがあります。

Essbase サーバーの構成中に、EPM System コンフィグレータは次の処理を行います:

- Essbase を起動するために使用するファイルで、環境変数 ESSLANG と ARBORPATH を指定します。
- 指定したポート値で essbase.cfg を更新します。essbase.cfg については、『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』を参照してください。
- JRE のインストール場所を指定する JVMODULELOCATION 設定で essbase.cfg を更新します。JRE の個別のインスタンスを指定する方法については、[212 ページの「JVMODULELOCATION の設定\(Windows\)」](#)を参照してください。

手動で構成するか、後で構成を変更する場合は、次の情報を使用できます。

## Essbase サーバーに対する手動での環境更新

Essbase サーバーでは、setEssbaseEnv.cmd に設定されている変数が使用されます。Essbase サーバーを実行するには、setEssbaseEnv.cmd を呼び出す startEssbase.cmd を使用します。

次の環境変数が適切に設定されていることを確認します:

- ESSBASEPATH
- ARBORPATH
- ESSLANG
- PATH

## JVMODULELOCATION の設定(Windows)

essbase.cfg ファイルで JVMODULELOCATION を設定すると、Essbase 用の JRE インストールを詳細に指定できます。この設定は、データ・マイニング、Oracle Hyperion(R) Shared Services、カスタム定義関数、トリガー、および外部認証を使用可能にする場合に必要です。

この設定は、Essbase サーバー・コンピュータ上に複数のバージョンの Java がインストールされている場合に特に有効です。

Essbase サーバーの構成時に、JVMODULELOCATION の正しい設定が essbase.cfg に自動的に追加されます。

JVMODULELOCATION パラメータを変更するには、Java 仮想マシン(JVM)ライブラリのフル・パスおよびファイル名を指定する必要があります。ライブラリの場所

および名前は、使用している JRE バージョンおよびオペレーティング・システムによって異なります。

**注：** 64 ビット・オペレーティング・システムで 64 ビット Essbase を実行するには、64 ビット JVM が必要です。

次の表に、JRE ファイルおよび jvm.dll ファイルのインストール場所を示します：

プラットフォーム(JRE のバージョン)	JRE および JVM.DLL の場所
32 ビット Windows: JRE JVM.DLL	 HYPERION_HOME /common/jre/sun/1.5.0 HYPERION_HOME /common/jre/sun/1.5.0/bin/server/jvm.dll
64 ビット Windows(Itanium): JRE JVM.DLL	 HYPERION_HOME /common/JRE-IA64/Sun/1.4.2 HYPERION_HOME /common/JRE-IA64/Sun/1.4.2/bin/server/jvm.dll
AMD Opteron および Intel Xeon 上の 64 ビット Windows: JRE JVM.DLL	 HYPERION_HOME /common/JRE-AMD64/Sun/1.5.0 HYPERION_HOME /common/JRE-AMD64/Sun/1.5.0bin/server/jvm.dll

## 64 ビット Windows プラットフォーム上での 32 ビット・ランタイム・クライアントの構成

32 ビット・クライアント・アプリケーションと 64 ビット・クライアント・アプリケーションを同じマシン上で使用し、アプリケーションの再コンパイルを行わない場合、次の手順を実行します。

- ▶ 32 ビット・ランタイム・クライアントを 64 ビット Microsoft Windows コンピュータにインストールして使用するには:
  - 1 HYPERION\_HOME システム環境変数の値を記録します。
  - 2 コマンド・プロンプトから、または HYPERION\_HOME 値が既存の Essbase 64 ビット・クライアントまたはサーバーのインストールと競合しないシェル・ウィンドウから、32 ビット・クライアントをインストールします。
  - 3 32 ビット・クライアントのインストールが完了したら、システム変数 HYPERION\_HOME を手順 1 で書き留めた値に戻します。
  - 4 64 ビット・マシン上で、コマンド・プロンプトから、または ARBORPATH および ESSBASEPATH が 32 ビット・ランタイム・クライアントのインストール・ディレクトリに設定され、PATH が ARBORPATH ディレクトリ内の bin サブディレクトリを含むように設定されているシェル・ウィンドウから、再コンパイルした 32 ビット・クライアント・プログラムを実行します。

アプリケーション・プログラミング・インタフェースとランタイム・クライアントについては、『Oracle Essbase API リファレンス』を参照してください。

## Integration Services のオプションの手動構成 (Windows)

インストール中に、EPM System Installer は、Oracle Essbase Integration Services を開始する開始スクリプト(HYPERION\_HOME/products/Essbase/eis/server/bin/startup.bat(サーバー用)と HYPERION\_HOME/products/Essbase/eis/console/bin/startclient.bat(コンソール用))で Integration Services 用の環境変数を指定します。

起動スクリプトでは、次の環境変数を設定します:

- ARBORPATH
- ISHOME
- ESSBASEPATH

## Administration Services のオプションの手動構成 (Windows)

Oracle Essbase Administration Services には、次の環境変数が必要です:

- ESSLANG
- ESSBASEPATH
- EAS\_HOME

コンソールは、admincon.lax によりファイルを検出し、サーバーは、setCustomParamseas.bat を使用して変数を設定します。EPM System Installer が admincon.lax をインストールし、EPM System コンフィグレータが、Web アプリケーション・サーバーに配置するときに setCustomParamseas.bat を作成します。

## Essbase Studio のオプションの手動構成(Windows)

インストール中、Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System Installer, Fusion Edition は、Essbase Studio – HYPERION\_HOME/products/Essbase/EssbaseStudio/Server/startServer.bat を起動するための Essbase Studio の環境変数を開始ファイルで指定します。

追加のカスタマイズについては、『Oracle Essbase Studio ユーザー・ガイド』のサーバー・プロパティ・ファイルの構成および管理サービス・コンソール起動ファイルの構成に関する説明を参照してください。

## Provider Services のオプションの手動構成(Windows)

次の変数が適切に設定されていることを確認します:

- APS\_HOME - APS\_HOME は、インストールと構成の後に環境変数として設定されます。
- ESS\_ES\_HOME - HYPERION\_HOME/products/Essbase/aps/bin/startcmd.cmd の ESS\_ES\_HOME を APS\_HOME をポイントするように設定します。Provider Services のコマンド・ライン管理ユーティリティを起動するには、ESS\_ES\_HOME が必要です。
- JAVA\_HOME - HYPERION\_HOME/products/Essbase/aps/bin/startcmd.cmd の JAVA\_HOME を設定します。API サンプルを実行するには、JAVA\_HOME が必要です。
- ESSLANG - ESSLANG 値が HYPERION\_HOME/products/Essbase/aps/bin/essbase.properties に指定されているロケールに対して正しいことを確認します。デフォルトでは、ESSLANG はアメリカ英語に設定されます。

HYPERION\_HOME/products/Essbase/aps/bin/essbase.properties を編集すると、追加の構成タスクを実行できます。『Oracle Hyperion Provider Services Administration Guide』を参照してください。







# Essbase 32ビットおよび64ビットの互換性

## この付録の内容

Essbase と 32 ビットおよび 64 ビットのクライアントおよびサーバーとの互換性 .....	217
32 ビットおよび 64 ビットのプラットフォームでの Essbase API の互換性 .....	218

## Essbase と 32 ビットおよび 64 ビットのクライアントおよびサーバーとの互換性

次の表に、32 ビットと 64 ビットのクライアントおよびサーバーの Essbase サーバーとの互換性を示します:

クライアント	サーバー	Essbase サーバー: クライアントが接続できるプラットフォーム
32 ビット Essbase 管理サービス・コンソール	32 ビット管理サーバー	32 ビット、64 ビット
32 ビット Essbase 管理サービス・コンソール	64 ビット管理サーバー	32 ビット、64 ビット
64 ビット Essbase 管理サービス・コンソール	64 ビット管理サーバー	64 ビット
32 ビット Essbase Studio コンソール	32 ビット Essbase Studio サーバー	32 ビット、64 ビット
32 ビット Essbase Studio コンソール	64 ビット Essbase Studio サーバー	32 ビット、64 ビット
64 ビット Essbase Studio コンソール	64 ビット Oracle Essbase Studio サーバー	64 ビット
32 ビット Essbase Integration Services コンソール	32 ビット Essbase Integration Server	32 ビット、64 ビット
32 ビット Essbase Integration Services コンソール	64 ビット Essbase Integration Server	32 ビット、64 ビット
32 ビット Smart View	32 ビット Provider Services	32 ビット、64 ビット
32 ビット Oracle Hyperion Smart View for Office, Fusion Edition	64 ビット Provider Services	64 ビット
32 ビット Essbase 管理サービス・コンソール	32 ビット Provider Services	32 ビット、64 ビット

クライアント	サーバー	Essbase サーバー: クライアントが接続できるプラットフォーム
64 ビット Essbase 管理サービス・コンソール	64 ビット Provider Services	64 ビット
32 ビット Java API または XMLA クライアント・アプリケーション	32 ビット Provider Services	32 ビット、64 ビット
64 ビット Java API または XMLA クライアント・アプリケーション	64 ビット Provider Services	64 ビット

## 32 ビットおよび 64 ビットのプラットフォームでの Essbase API の互換性

Essbase では、32 ビット・プラットフォーム用と 64 ビット・プラットフォーム用に API が提供されるので、いずれのプラットフォームでも、Essbase サーバーに接続するインタフェースを持つクライアント・プログラムを作成したり、コンパイルしたりできます。

- Essbase の CAPI または Visual Basic API を使用して、32 ビット・プラットフォームで開発されたクライアント・プログラムは、32 ビット・プラットフォームで実行でき、32 ビットまたは 64 ビットのいずれの Essbase サーバーにも接続できます。
- 32 ビットの Essbase Visual Basic API を使用して開発され、プリコンパイルされたクライアント・プログラムは、64 ビット Essbase サーバーに接続する 64 ビット Windows プラットフォームで動作します。ただし、ドキュメントに記載された方法に従って 32 ビットの実行時環境が設定されている必要があります。
- Essbase C API を使用して 64 ビット・プラットフォーム用に開発されたクライアント・プログラム:
  - 64 ビットで実行し、32 ビットまたは 64 ビットの Essbase サーバーに接続できます。
  - 32 ビット・プラットフォームでは実行できません。

**注意** 64 ビット・プラットフォーム用に開発されたクライアント・プログラムでは、バイト整列に `#pragma` ディレクティブは必要ありません。

- Essbase Visual Basic API を使用して、64 ビット Windows 用のクライアント・プログラムは開発できません。

次の表に、Oracle Essbase の一連の API で開発されたクライアント・プログラムの互換性をまとめます:

クライアント開発: API のバージョンとプラットフォーム	クライアントが実行可能なプラットフォーム	Essbase サーバー: クライアントが接続できるプラットフォーム
32 ビット C API/ランタイム・クライアント	32 ビット	32 ビット、64 ビット

クライアント開発: API のバージョンとプラットフォーム	クライアントが実行可能なプラットフォーム	Essbase サーバー: クライアントが接続できるプラットフォーム
32 ビット VB API/ランタイム・クライアント	32 ビット Windows	32 ビット、64 ビット
	64 ビット Windows	64 ビット
32 ビット Java API または XMLA クライアント・アプリケーション	32 ビット Provider Services サーバー	32 ビット、64 ビット
32-bit Embedded Java (API クライアント・アプリケーション)		32 ビット、64 ビット
64 ビット C API/ランタイム・クライアント	64 ビット	32 ビット、64 ビット
64 ビット Java (API または XMLA クライアント・アプリケーション)	64 ビット Oracle Hyperion Provider Services サーバー	64 ビット
64-bit Embedded Java (API クライアント・アプリケーション)		64 ビット

32 ビットおよび 64 ビットの Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System クライアントおよびサーバーと Essbase サーバーの互換性の詳細は、[217 ページの「Essbase と 32 ビットおよび 64 ビットのクライアントおよびサーバーとの互換性」](#)を参照してください。





# JDBC URL属性

構成中、「データベースの構成」ページで「詳細」をクリックして、Hyperion JDBC ドライバがデータベースに接続するために使用する追加 JDBC パラメータを指定できます。

次の表に、パラメータの入力に使用するフォーマットを示します:

データベース	フォーマット
Oracle Database	<code>jdbc:hyperion:oracle://host:port;property1=value1;property2=value2;... propertyN=valueN</code>
SQL Server	<code>jdbc:hyperion:sqlserver://host:port;property1=value1;property2=value2;... propertyN=valueN</code>
DB2	<code>jdbc:hyperion:db2://host:port;property1=value1;property2=value2;... propertyN=valueN</code>

次のパラメータ情報を使用してください。パラメータの詳細は、`HYPERION_HOME/common/JDBC/DataDirect/3.7/help/help.htm` の DataDirect Connect(R) for JDBC のヘルプを参照してください。

次の表に、パラメータの追加情報を示します:

プロパティ	Oracle Database	SQL Server	DB2
SERVICENAME <sup>1</sup>	はい		
SID <sup>2</sup>	はい		
LOADLIBRARYPATH	はい	はい	はい
MAXPOOLEDSTATEMENTS	はい	はい	はい
ALTERNATESERVERS	はい	はい	はい
CONNECTIONRETRYCOUNT	はい	はい	はい
CONNECTIONRETRYDELAY	はい	はい	はい
LOADBALANCING	はい	はい	はい
DYNAMICSECTIONS			はい
CREATEDFAULTPACKAGE			はい
REPLACEPACKAGE			はい

プロパティ	Oracle Database	SQL Server	DB2
DATABASENAME <sup>3</sup>		はい	はい

<sup>1</sup>Oracle Database には、SERVICE\_NAME または SID のいずれかを指定する必要があります。

<sup>2</sup>Oracle Database には、SERVICE\_NAME または SID のいずれかを指定する必要があります。

<sup>3</sup>DB2 と SQL Server では必須

Oracle RAC 対応のクライアント側のフェイルオーバー機能と負荷分散機能を提供するには、次の属性を使用します:

- AlternateServers
- ConnectionRetryCount
- LoadBalancing

たとえば、Oracle RAC を構成するには、`jdbc:hyperion:oracle://hssrac-1-vip:1521;ServiceName=hssrac;AlternateServers=hssrac-2-vip:1521` の形式で、URL を入力します。



# Financial Managementのデータベース情報

## この付録の内容

データベース接続のプール.....	223
UDL ファイルの暗号化.....	225

## データベース接続のプール

Financial Management 構成中に、各アプリケーションで使用されるリレーショナル・データベース接続の最大数を指定します。Financial Management では、データベースとの通信に接続プールが使用されます。接続プールにより、データベースがより効率よく使用され、各ユーザーはリレーショナル・リポジトリを設定する必要がなくなります。

構成中、EPM System コンフィグレータを使用して、プール済データベース接続の数を指定できます。構成ユーティリティで指定する接続数は、アプリケーションで使用されるプール済接続の最大数です。プールの最初の接続数は 8 です。特定の試行回数の後、プールが追加接続の要求を処理できなくなると、8 つの接続が追加されます。ユーティリティで定義されている最大接続数に達するまで、8 つの接続ブロックが引き続き追加されます。この制限を超えて追加の接続が必要な場合、要求を処理するために一時的な接続が作成されます。この接続は、タスクが完了すると閉じられます。

システムの使用のために予約され、ユーザーのアクティビティには使用されない追加の接続プールも作成されます。システム使用のプールは、2 つの接続タイプに分けられます:

- システムのアクティビティに使用される、アプリケーションごとに 9 つの接続のプール。
- エラー処理に使用される、アプリケーションごとに 8 つの接続のプール。
- アプリケーション・サーバー当たり 8 つの接続を含むプールが、ユーザーのログオン・アクティビティに対して作成されます。ユーザー・ログオン・プールは、システムで定義された最大値である 16 接続に達するまで 4 つずつ増やせます。最大値を超えて必要となる接続は、一時的な接続になります。

全般的に、システムレベルのアクティビティには 25 接続が割り当てられます。各アプリケーション・サーバーに 8 接続が予約され、各アプリケーションに 17 接続が予約されます。

接続の使用は、アクティビティ・タイプに依存します。アプリケーションのほとんどのユーザーが該当する、読取りアクセス権を持つユーザーは、一般的に、1 つの接続を使用するか、接続を使用しないかのいずれかです。書込みアクセス権

を持つユーザーは、データへの書き込みを行う際に複数の接続を使用できます。書き込みアクセス権を持つユーザーが使用する接続数(たとえば、連結)は、アプリケーション・サーバー・ハードウェアおよび書き込み中のデータ量に依存します。通常、書き込み権限を持つユーザーは、5 から 10 の接続を使用できます。

Financial Management は、アプリケーションが最初にかれるときに、定義された数の接続を開きます。この接続は、システムの後続のユーザーが使用できます。ユーザー・プロセスが接続を要求した際にすべての接続が使用中の場合、接続プールが短時間ポーリングされ、接続が使用可能になるのを待機します。接続が使用可能にならない場合、8 つの接続が作成され、プールに追加されます。接続プールは、構成ユーティリティで定義した合計数に制限されます。

接続はアプリケーションに固有です。デフォルト・プールは、アプリケーションが開かれた後にのみ作成されます。ただし、接続は、アプリケーション・ベースでリリースされず、アプリケーション・サーバー・ベースでリリースされます。したがって、すべての接続は、アプリケーションにアクセスする Financial Management ユーザーがアプリケーション・サーバーになくなるまでリリースされません。

Financial Management は、拡張分析もサポートします。拡張分析では、Analytic Services など他のシステムでデータを使用できるように、データをリレーショナル・データベースに抽出できます。抽出プロセスには、スター・スキーマの作成時に作成される専用の接続プールがあります。デフォルト・プールは、処理の完了時に破棄される 16 の一時接続です。

## 例 1

1 つのアプリケーション・サーバーに 3 つのアプリケーション、デフォルトの最大接続プール数が使用(40 接続)されている場合

- アプリケーション A がログオン: 8 接続(およびシステム)
- アプリケーション B がログオン: 8 接続(およびシステム)
- アプリケーション C がログオン: 8 接続(およびシステム)
- システム接続: 59(8 接続とアプリケーションごとに 17 接続)
- 合計接続数: 83

**注：** 合計接続数は、アプリケーションの接続プールが Configuration Utility で定義したシステムの最大数まで拡張されると、最大 96 接続まで増やせます(デフォルトは 40)。

- アプリケーション B がログオフ(ユーザーなし)
- 合計接続数: 83
- すべてのユーザーがすべてのアプリケーションをログオフ
- 合計接続数: 0



## 例 2

2つのアプリケーション・サーバーに1つのアプリケーション、デフォルトの最大接続プール数が使用(40 接続)されている場合

- アプリケーション A がログオン(サーバー 1): 8 接続(およびシステム)
- アプリケーション A がログオン(サーバー 2): 8 接続(およびシステム)
- システム接続: 50(アプリケーション・サーバーごとに、8+アプリケーションごとに 17)
- 合計接続数: 66
- アプリケーション A(サーバー 2)がログオフ(ユーザーなし)
- 合計接続数: 33
- すべてのユーザーがすべてのアプリケーションをログオフ
- 合計接続数: 0

アプリケーション・サーバーとデータベース・サーバー間の接続性は、ネットワーク問題などによって消失することがあります。接続が有効でないことが検出された場合、接続の再作成が試行されます。

アプリケーションの削除では、プール接続のデフォルト数も使用されます。Financial Management は、アプリケーションを削除する前に、接続のデフォルト数を使用してセキュリティ・アクセスを確認するためにアプリケーションを開きます。セキュリティが検証された後、アプリケーションが削除されます。

## UDL ファイルの暗号化

Financial Management の構成中に、EPM System コンフィグレータは、デフォルトで暗号化されていない UDL ファイルを作成します。詳細データベース・オプション・ページで、ファイルを暗号化するかどうかを選択できます。

Financial Management は、アプリケーション・サーバーがデータベースと通信する際に使用される UDL ファイルを構成時に暗号化しないように選択している場合に、UDL ファイルを暗号化するユーティリティを提供します。UDL ファイルの拡張子に基づいて、Oracle Hyperion Financial Management, Fusion Edition は、ファイルが暗号化されているかどうかを検出します。ファイルの拡張子が .UDL の場合、このファイルは暗号化されていないと見なされます。ファイルの拡張子が .HFMUDL の場合、ファイルは暗号化されていると見なされます。

UDL ファイルを暗号化するには、FinancialManagement/Server ディレクトリの EncryptHFMUDL ユーティリティを使用できます。使用方法は、EncryptHFMUDL MyUDL.UDL MyUDL.HFMUDL です。

**注：** Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System コンフィグレータを使用して、構成中に UDL ファイルを暗号化できます。[82 ページの「データベース構成の詳細設定オプション\(オプション\)」](#)を参照してください。

- ▶ UDL ファイルを暗号化するには、MS-DOS コマンド・プロンプトで、  
EncryptHFMUDL MyUDL.UDL MyUDL.HFMUDL と入力します。ここで、  
MyUDL.UDL は、元の UDL ファイルの場所と名前、MyUDL.HFMUDL は、  
暗号化される UDL ファイルの場所です。

**注：** 暗号化された UDL ファイルの拡張子は、.HFMUDL にしてください。暗号化  
されていない元のファイルは、暗号化した後に削除できます。

- ▶ UDL ファイルを復号化するには、MS-DOS コマンド・プロンプトで  
EncryptHFMUDL MyUDL.HFMUDL MyUDL.UDL /u と入力します。ここで、  
MyUDL.HFMUDL は暗号化された UDL ファイルの場所で、MyUDL.UDL は復  
号化された UDL ファイルの場所と名前です。



# Financial ReportingとWeb Analysisに対してX仮想フレーム・バッファを使用可能にする

## この付録の内容

AIX 5L の Xvfb を使用可能にする.....	227
Solaris 9 の Xvfb を使用可能にする.....	228
Solaris 10 の Xvfb を使用可能にする .....	228
Oracle Enterprise Linux/Red Hat Enterprise Linux の Xvfb を使用可能にする.....	228
HP-UX の Xvfb を使用可能にする.....	229
DISPLAY 変数の設定 .....	230

## AIX 5L の Xvfb を使用可能にする

➤ Xvfb を使用可能にするには:

- 1 Reporting and Analysis Web アプリケーション・サーバー・コンポーネントを実行するコンピュータに root ユーザーとしてログオンします。
- 2 次のコマンドを発行し、コンピュータで仮想フレーム・バッファを使用できるかどうかを調べます:

```
lslpp -l X11.vfb
```

- 3 X11.vfb がインストールされていない場合、AIX インストール・メディアからインストールしてください。パッケージをインストールした後、最新の PTF を次から適用してください:

<http://techsupport.services.ibm.com>

- 4 Xvfb を開始します:

```
/usr/bin/X11/X -force -vfb :1
```

ここで、:1 は使用されていないディスプレイの番号です。

## Solaris 9 の Xvfb を使用可能にする

► Xvfb を使用可能にするには:

- 1 Reporting and Analysis Web アプリケーション・サーバー・コンポーネントを実行するコンピュータに root ユーザーとしてログオンします。

- 2 X11R6 ソース・ディストリビューションを

ftp://x.org から入手してコンパイルするか、ftp://www.ferret.noaa.gov/special\_request/xvfb/solaris から配布用のバイナリ・ファイル入手してインストールします。

- 3 Xvfb を開始します:

```
/usr/X11R6/bin/Xvfb :1 -screen 0 1152x900x8 &
```

ここで、:1 は使用されていないディスプレイの番号です。

## Solaris 10 の Xvfb を使用可能にする

► Xvfb を使用可能にするには:

- 1 Reporting and Analysis Web アプリケーション・サーバー・コンポーネントを実行するコンピュータに root ユーザーとしてログオンします。

- 2 次のコマンドを発行し、コンピュータで仮想フレーム・バッファを使用できるかどうかを調べます:

```
pkgchk -l SUNWxwsrv
```

- 3 SUNWxwsrv がインストールされていない場合は、Solaris のインストール・メディアからインストールします。

- 4 Xvfb を開始します:

```
/usr/openwin/bin/Xvfb :1 > /dev/null 2>&1 &
```

ここで、:1 は使用されていないディスプレイの番号です。

## Oracle Enterprise Linux/Red Hat Enterprise Linux の Xvfb を使用可能にする

► Xvfb を使用可能にするには:

- 1 Reporting and Analysis Web アプリケーション・サーバー・コンポーネントを実行するコンピュータに root ユーザーとしてログオンします。

- 2 次のコマンドを発行し、コンピュータで仮想フレーム・バッファを使用できるかどうかを調べます:

```
rpm -aq | grep -i 'vfb'
```

**注：** Xvfb がインストールされていない場合は、インストール・メディア、RHN、または ULN Web サイトから Xvfb をインストールします。

### 3 Xvfb を開始します:

```
/usr/X11R6/bin/Xvfb :1 -screen 0 1152x900x8 &
```

ここで、:1 は使用されていないディスプレイの番号です。

## HP-UX の Xvfb を使用可能にする

► Xvfb を使用可能にするには:

- 1 Reporting and Analysis Web アプリケーション・サーバー・コンポーネントを実行するコンピュータに root ユーザーとしてログオンします。
- 2 次のコマンドを発行し、コンピュータで仮想フレーム・バッファを使用できるかどうかを調べます:

```
swlist -l product | grep 'Xserver cumulative patch'
```

- 3 システムにインストールされているパッチが、HP の推奨するレベル(現時点では PHSS\_31293)に対応していることを確認します。
- 4 /etc/X11/X0screens to /etc/X11/X1screens をコピーします。ここで、1 は使用されていないディスプレイの番号です。次に例を示します:

```
cp /etc/X11/X0screens /etc/X11/X1screens
```

- 5 このファイルの最後に次の行を追加して、/etc/X11/X1screens を編集します:

```
ServerOptions
```

```
ServerMode Xvfb
```

- 6 Xvfb を開始します:

```
nohup /usr/bin/X11/Xvfb :1 -screen 0 1024x800x8 \  
-pn -fp /usr/lib/X11/fonts/misc -sp /etc/X11/SecurityPolicy &
```

ここで、:1 は使用されていないディスプレイの番号です。

# DISPLAY 変数の設定

Reporting and Analysis Web アプリケーション・サーバー・コンポーネントを UNIX 上で開始する前に、次のように DISPLAY 環境変数に、使用可能な物理または仮想 (Xvfb) グラフィック・デバイスのアドレスを設定します:

```
DISPLAY=  
hostname  
:0.0 ; export DISPLAY
```

便宜上、DISPLAY が自動的に初期化されるように Reporting and Analysis Web アプリケーション・サーバー・コンポーネントの開始スクリプトを編集することをお勧めします。

**注：** Financial Reporting および Web Analysis の Oracle Hyperion Reporting and Analysis Web アプリケーション・サーバー・コンポーネントにのみ、DISPLAY を設定する必要があります。Oracle Enterprise Performance Management Workspace, Fusion Edition コンポーネントでは、X11 へのアクセスを必要としません。

**ヒント：** Oracle Hyperion Financial Reporting, Fusion Edition および Oracle Hyperion(R) Web Analysis のディスプレイを設定するには、  
HYPERION\_HOME/deployments/AppServer/bin の  
setCustomParamsFinancialReporting.sh および  
setCustomParamsWebAnalysis.sh を編集します。

**注：** UNIX 上で Oracle Application Server を使用し、スクリプトを使用して環境変数を設定する場合は、Oracle Application Server アプリケーション・サーバー・コンソールで DISPLAY 環境変数を指定する必要があります。この環境変数を指定するには、OC4J インスタンスのサーバー・プロパティを設定します。

# 索引

## A - Z

### Administration Services

UNIX の環境変数, 210

Windows の環境変数, 214

アプリケーション・サーバー

UNIX 起動スクリプト, 126

Windows サービス名, 126

インストール・フォルダ, 194

開始, 126

構成後のタスク, 153

ais.cfg ファイル, 127

ARBORPATH, 98, 211

### Calculation Manager

EPM Workspace からの起動, 139

UNIX 起動スクリプト, 132

Windows 起動スクリプト, 132

Windows サービス名, 132

インストール・フォルダ, 188

開始, 132

Capital Asset Planning, 79

### Data Relationship Management

Windows サービス名, 136

インストール・フォルダ, 202

開始, 136

構成後のタスク, 167

デフォルトの URL, 138

リポジトリ・パスワード, 173

DCOM, 103

DISPLAY 変数, 230

DSN, 110

E-Delivery, 19

eas\_home, 214

### Embedded Java コンテナ

配置, 90

### EPM System 製品

概要, 13

### EPM Workspace

アプリケーション・サーバー

UNIX 起動スクリプト, 138

Windows サービス名, 138

インストール・フォルダ, 186

開始, 122

構成, 92

構成後のタスク, 151

デフォルトの URL, 138

### EPM Workspace Web サーバー

UNIX 起動スクリプト, 122

Windows サービス名, 122

### ERP Integrator

インストール・フォルダ, 201

### ERP Integrator

Windows サービス名, 137

開始, 137

構成後のタスク, 166

ESS\_CSS\_JVM\_OPTION, 205

ESS\_JVM\_OPTION, 205

### Essbase

インストール・アセンブリ, 26

構成後のタスク, 151

診断, 144

essbase.cfg ファイル, 98, 203, 211, 212

### Essbase Studio

UNIX 起動スクリプト, 127

Windows 起動スクリプト, 127

インストール・フォルダ, 191

開始, 127

環境変数, 214

構成後のタスク, 154

ESSBASEPATH, 211

### Essbase サーバー

UNIX 起動スクリプト, 125

UNIX での手動による構成, 203

Windows サービス名, 125

Windows 上での手動構成, 212

Windows の環境変数, 211

インストール・フォルダ, 189

- 開始, [125](#)
- 構成, [98](#)
- 従来のセキュリティ, [99](#)
- 複数のインスタンス, [63](#)
- 複数のインスタンスのインストール, [63](#)
- 複数のインスタンスの開始, [100](#)
- 複数のインスタンスの構成, [100](#)
- Essbase サーバーの複数のインスタンス, [63](#)
- ESSLANG , [99](#), [100](#)
- FDM
  - Windows サービス名, [137](#)
  - インストール・フォルダ, [201](#)
  - 開始, [137](#)
  - 構成, [113](#)
  - 構成後のタスク, [166](#)
  - デフォルトの URL, [138](#)
  - リポジトリ・パスワード, [173](#)
- Financial Management
  - DCOM の構成, [103](#)
  - DSN 構成, [110](#)
  - EPM Workspace からの起動, [139](#)
  - UDL ファイルの暗号化, [225](#)
  - Windows サービス名, [133](#)
  - インストール・フォルダ, [198](#)
  - 開始, [133](#)
  - 構成, [103](#)
  - 構成後のタスク, [164](#)
  - データベース接続のプール, [223](#)
- Financial Performance Management アプリケーション
  - インストール・アセンブリ, [36](#)
  - 診断, [146](#)
- Financial Reporting
  - UNIX 起動スクリプト, [129](#)
  - Windows サービス名, [129](#)
  - アプリケーション・サーバー
    - UNIX 起動スクリプト, [131](#)
    - Windows サービス名, [131](#)
- Financial Reporting 構成
  - 高可用性ドライバ, [161](#)
- Foundation Services
  - インストール・アセンブリ, [21](#)
  - 診断, [142](#)
- hyperionenv.doc, [189](#), [203](#), [204](#)
- Hyperion ホームのディレクトリ, [16](#), [52](#), [184](#)
- IBM AIX
  - 64 ビット・プラットフォームでのユーザー制限の設定, [152](#)
- Integration Services
  - UNIX 起動スクリプト, [127](#)
  - UNIX の環境変数, [209](#)
  - Windows サービス名, [127](#)
  - インストール・フォルダ, [192](#)
  - 開始, [127](#)
  - 環境変数, [214](#)
  - 構成後のタスク, [152](#)
- Interactive Reporting
  - サービスの開始と停止, [122](#)
- JDBC URL, [83](#)
- JDBC URL 属性, [221](#)
- JVMODULELOCATION, [207](#), [212](#)
- Microsoft SQL Server Windows 認証, [82](#)
- OpenLDAP
  - UNIX 起動スクリプト, [119](#)
  - Windows サービス名, [119](#)
- Oracle Application Server
  - 配置, [85](#)
- Oracle Internet Directory, [119](#)
- Oracle RAC, [82](#), [221](#)
- Performance Management Architect
  - EPM Workspace からの起動, [139](#)
  - Web サービス
    - Windows サービス名, [124](#)
  - Windows サービス名, [123](#)
  - アプリケーション・サーバー
    - Windows サービス名, [130](#)
  - インストール・フォルダ, [187](#)
  - インタフェース・データソース・パスワード, [172](#)
  - 開始, [123](#)
  - 構成, [95](#)
  - 構成後のタスク, [150](#)
  - データ・シンクロナイザ・アプリケーション・サーバー
    - Windows サービス名, [131](#)
- Performance Scorecard
  - EPM Workspace からの起動, [139](#)
  - アプリケーション・サーバー
    - UNIX 起動スクリプト, [134](#)
    - Windows サービス名, [134](#)
  - インストール・フォルダ, [200](#)
  - 開始, [134](#)
  - 構成後のタスク, [165](#)



- デフォルトの URL, 138
- Performance Scorecard Alerter
  - アプリケーション・サーバー
    - UNIX 起動スクリプト, 135
    - Windows サービス名, 135
- Planning
  - EPM Workspace からの起動, 139
  - アプリケーション・サーバー
    - UNIX 起動スクリプト, 132
    - Windows サービス名, 132
  - アプリケーションのパスワード, 172
  - インストール・フォルダ, 198
  - 開始, 132
  - クラスタリング, 101, 102, 103
  - 構成, 101
  - 構成後のタスク, 162
- Profitability and Cost Management
  - EPM Workspace からの起動, 139
  - UNIX 起動スクリプト, 136
  - Windows 起動スクリプト, 136
  - Windows サービス名, 136
  - インストール・フォルダ, 201
  - 開始, 136
- Provider Services
  - UNIX での手動による構成, 211
  - UNIX の環境変数, 211
  - Windows 上での手動構成, 215
  - アプリケーション・サーバー
    - UNIX 起動スクリプト, 128
    - Windows サービス名, 128
  - インストール・フォルダ, 196
  - 開始, 128
  - 環境変数, 215
  - 構成後のタスク, 154
- RAC, 82, 221
- Reporting and Analysis
  - EPM Workspace からの起動, 139
  - インストール・アセンブリ, 33
  - インストール・フォルダ, 197
  - 開始, 129
  - 構成, 111
  - 構成後のタスク, 155
  - 診断, 145
- setEssbaseEnv.cmd, 189, 212
- Shared Services
  - OpenLDAP
    - UNIX 起動スクリプト, 119
  - Windows サービス名, 119
  - アプリケーション・サーバー
    - UNIX 起動スクリプト, 120
    - Windows サービス名, 120
  - インストール・フォルダ, 183
  - 開始, 120
  - 構成後のタスク, 150
  - ログ・ファイルの場所の変更, 206
- 登録、Shared Services, 77
- Shared Services Console
  - デフォルトの URL, 138
- Shared Services レジストリ, 68, 77
- Smart Search Command Line Utility
  - インストール・フォルダ, 196
- Smart View
  - インストール, 61
  - インストール・フォルダ, 189
- Spreadsheet Add-in
  - インストール, 62
- SSL, 94。「SSL ポート」も参照
  - Workspace Web サーバーを使用可能にする, 94
  - 構成, 80
  - 構成順序, 71
  - 再構成, 169
  - 使用可能にする, 80
- SSL ポート
  - Embedded Java コンテナ, 90
  - WebLogic, 87
  - WebSphere, 89
- start.bat ファイル, 117
- startEssbase.cmd ファイル, 101
- startEssbase.sh ファイル, 203
- stop.bat ファイル, 117
- Strategic Finance
  - Windows サービス名, 134
  - インストール・フォルダ, 200
  - 開始, 134
  - 構成, 112
  - 構成後のタスク, 165
- Strategic Finance for Banking, 79
- UDL ファイル, 83
  - 暗号化と復号化, 225
- UNIX 起動スクリプト, 117
  - Administration Services アプリケーション・サーバー, 126
  - Calculation Manager, 132

- EPM Workspace Web サーバー, [122](#)
- EPM Workspace アプリケーション・サーバー, [138](#)
- Essbase Studio サーバー, [127](#)
- Essbase サーバー, [125](#)
- Financial Reporting , [129](#)
- Financial Reporting アプリケーション・サーバー, [131](#)
- Integration Services , [127](#)
- Performance Scorecard Alerter アプリケーション・サーバー, [135](#)
- Performance Scorecard アプリケーション・サーバー, [134](#)
- Planning アプリケーション・サーバー, [132](#)
- Profitability and Cost Management , [136](#)
- Provider Services アプリケーション・サーバー, [128](#)
- Shared Services OpenLDAP, [119](#)
- Shared Services アプリケーション・サーバー, [120](#)
- Web Analysis アプリケーション・サーバー, [129](#)
- URL、デフォルト, [138](#)
- Web Analysis
  - アプリケーション・サーバー
  - UNIX 起動スクリプト, [129](#)
  - Windows サービス名, [129](#)
- WebLogic
  - シングル・ドメイン, [88](#)
  - 配置, [86](#)
- WebSphere
  - シングル・プロファイル, [89](#)
  - 配置, [88](#)
- Web アプリケーション・サーバー
  - クラスタリング, [91](#)
  - 再配置, [169](#)
- Windows 2008, [64](#)
- Windows 起動スクリプト
  - Administration Services , [126](#)
  - Calculation Manager , [132](#)
  - EPM Workspace , [121](#), [122](#), [138](#)
  - Essbase Studio サーバー, [127](#)
  - Essbase サーバー, [125](#)
  - Integration Services , [127](#)
  - Profitability and Cost Management , [136](#)
  - Provider Services , [128](#)
  - Reporting and Analysis , [129](#)
  - Shared Services , [120](#)
  - Windows サービス名, [117](#)
  - Administration Services アプリケーション・サーバー, [126](#)
  - Calculation Manager , [132](#)
  - Data Relationship Management , [136](#)
  - EPM Workspace Web サーバー, [122](#)
  - EPM Workspace アプリケーション・サーバー, [138](#)
  - ERP Integrator , [137](#)
  - Essbase サーバー, [125](#)
  - FDM , [137](#)
  - Financial Management , [133](#)
  - Financial Reporting , [129](#)
  - Financial Reporting アプリケーション・サーバー, [131](#)
  - Integration Services , [127](#)
  - Performance Management Architect , [123](#)
  - Performance Management Architect Web サービス, [124](#)
  - Performance Management Architect アプリケーション・サーバー, [130](#)
  - Performance Management Architect データ・シンクロナイズ・アプリケーション・サーバー, [131](#)
  - Performance Scorecard Alerter アプリケーション・サーバー, [135](#)
  - Performance Scorecard アプリケーション・サーバー, [134](#)
  - Planning アプリケーション・サーバー, [132](#)
  - Profitability and Cost Management , [136](#)
  - Provider Services アプリケーション・サーバー, [128](#)
  - Shared Services OpenLDAP, [119](#)
  - Shared Services アプリケーション・サーバー, [120](#)
  - Strategic Finance , [134](#)
  - Web Analysis アプリケーション・サーバー, [129](#)
  - Workforce Planning , [79](#)
- Xvfb
  - AIX 5L 用, [227](#)
  - Enterprise Linux 用, [228](#)
  - HP-UX 用, [229](#)
  - Solaris 10 用, [228](#)
  - Solaris 9 用, [228](#)
  - ディスプレイの設定, [230](#)

zip ファイル, 21  
ダウンロード, 19

## あ行

アセンブリ, 19, 21。「インストール・アセンブリ」も参照  
アップグレード, 53  
手順, 49  
アプリケーション・サーバーの配置  
Embedded Java コンテナ, 90  
Oracle Application Server, 85  
WebLogic, 86  
WebSphere, 88  
再配置, 169  
時間変更, 106  
全般情報, 83  
アンインストール, 177  
サイレント, 179  
暗号化  
UDL ファイル, 225  
インスタンス。「クラスタリング」を参照  
インストール, 63  
Smart View, 61  
Spreadsheet Add-in, 62  
宛先, 52  
コンポーネントごと, 53, 54  
サイレント, 57, 58, 60  
順序, 47  
層ごと, 53, 54  
タイプ, 53  
手順, 49  
取消し, 58  
場所, 16  
分散環境, 16  
ログ, 58  
インストール・アセンブリ, 19  
Essbase, 26  
Financial Performance Management アプリケーション, 36  
Foundation Services, 21  
Reporting and Analysis, 33  
ダウンロード, 19  
データ管理, 41  
インストール・チェックリスト, 14  
インストール・ドキュメント, 17  
インストール・ファイル、準備, 19  
インストール・フォルダ

Administration Services, 194  
Calculation Manager, 188  
Data Relationship Management, 202  
EPM Workspace, 186  
ERP Integrator, 201  
Essbase, 189  
Essbase Studio, 191  
FDM, 201  
Financial Management, 198  
Integration Services, 192  
Performance Management Architect, 187  
Performance Scorecard, 200  
Planning, 198  
Profitability and Cost Management, 201  
Provider Services, 196  
Reporting and Analysis, 197  
Shared Services, 183  
Smart Search Command Line Utility, 196  
Smart View, 189  
Strategic Finance, 200  
インタフェース・データソース, 95  
パスワードの変更, 172  
エラー・ログ  
アンインストール, 179  
インストール, 58, 186  
構成, 76  
診断, 142  
トラブルシューティング, 115  
応答ファイル  
サイレント・インストール, 58, 60  
サイレント構成, 113

## か行

開始スクリプト, 117  
環境変数  
UNIX 上の Administration Services, 210  
Windows 上の Administration Services, 214  
Essbase Studio, 214  
UNIX の Integration Services, 209  
Windows 上の Integration Services, 214  
UNIX 上の Provider Services, 211  
Windows 上の Provider Services, 215  
UNIX 上の Essbase サーバー, 203  
Windows 上の Essbase サーバー, 211  
企業ユーザー・ディレクトリ, 119  
起動依存, 117  
共通設定, 80

クライアント/サーバーの互換性、Essbase, 217  
 クラスタリング, 91  
   Planning, 101  
 構成, 91, 149, 169。「構成後のタスク」も参照。  
   「再構成」も参照  
   Embedded Java コンテナの配置, 90  
   EPM Workspace, 92  
   Essbase, 98  
   Essbase の複数のインスタンス, 100  
   FDM, 113  
   Financial Management, 103  
   Oracle Application Server の配置, 85  
   Performance Management Architect, 95  
   Planning, 101  
   Planning のクラスタ, 101  
   Reporting and Analysis, 111  
   Shared Services への登録, 77  
   SSL, 80  
   Strategic Finance, 112  
   WebLogic の配置, 86  
   WebSphere の配置, 88  
   アプリケーション・サーバーの配置, 83  
   概要, 67  
   共通設定, 80  
   コマンド・ライン, 113  
   サイレント, 113  
   順序, 69  
   製品オプション, 79  
   前提条件, 68  
   タスクの選択, 76  
   タスクの要約, 71  
   手順, 74  
   データベース, 81, 82  
   トラブルシューティング, 115  
   ログ, 115  
 構成後のタスク, 149  
   Administration Services, 153  
   Data Relationship Management, 167  
   EPM Workspace, 151  
   ERP Integrator, 166  
   Essbase, 151  
   Essbase Studio, 154  
   FDM アダプタ, 166  
   Financial Management, 164  
   Integration Services, 152  
   Performance Management Architect, 150  
   Performance Scorecard, 165

Planning, 162  
 Provider Services, 154  
 Reporting and Analysis, 155  
 Shared Services, 150  
 Strategic Finance, 165  
   一般的なタスク, 149  
 構成順序  
   SSL, 71  
   概要, 69  
   シングル・マシン, 71  
   分散環境, 71

## さ行

再インストール, 53  
   手順, 49  
 再構成, 169  
   SSL, 169  
   Web アプリケーション・サーバー, 170  
   パスワード, 171  
   ポート, 174  
 再配置, 169  
 サイレント・アンインストール, 179  
 サイレント・インストール, 58, 60  
   応答ファイル, 57  
 サイレント構成, 113  
   応答ファイル, 113  
 サポートされるパス, 14  
 サーバー/クライアントの互換性、Essbase, 217  
 サービス名。「Windows サービス名」を参照  
 終了スクリプト, 117  
 手動配置, 85。「アプリケーション・サーバーの  
   配置」も参照  
 新規インストール, 53  
 診断, 141  
   Essbase, 144  
   Financial Performance Management アプリケー  
     ション, 146  
   Foundation Services, 142  
   Reporting and Analysis, 145  
   データ管理, 147  
 自動配置, 85。「アプリケーション・サーバーの  
   配置」も参照  
 従来のセキュリティ、Essbase サーバー, 99  
 順序  
   インストール, 47  
   構成, 69  
   製品オプション, 79

製品の開始

開始順序, 118

スクリプト, 117

製品の停止, 117

セキュリティ

強化, 149

接続のプール, 223

前提条件, 19

インストールと構成, 13

## た行

タスクの選択、構成, 76

ダウンロード

インストール・ファイル, 19

ドキュメント, 17

チェックリスト

インストール, 14

デフォルトの URL, 138

データ管理

インストール・アセンブリ, 41

診断, 147

データベース構成, 81

Shared Services, 77

詳細設定オプション, 82

データベース接続のプール, 223

トラブルシューティング, 115, 141

ドキュメント, 17

## は行

配置, 83

Embedded Java コンテナ, 90

Oracle Application Server, 85

WebLogic, 86

WebSphere, 88

配置解除, 177

配置シナリオ, 175

パスワード

変更, 171

フェイルオーバー

Oracle RAC, 222

負荷分散

Oracle RAC, 222

分散インストール, 16

ポート, 174。「SSL ポート」も参照

再構成, 174

## ま行

メンテナンス・リリース, 53

## や行

ユーザー制限

64 ビット AIX, 152

## ら行

ライセンス準拠, 181

ライセンス準拠の監査, 181

リポジトリのデータベース

開始, 119

リポジトリ・パスワード、変更, 171

レジストリ。「Shared Services レジストリ」を参照

ログ

アンインストール, 179

インストール, 58, 186

構成, 76, 115

診断, 142

